

京都府遺跡調査概報

第 53 冊

1. 細谷古墳群第2次
2. 算用田遺跡
3. 長岡京跡右京第411次
4. 大 切 遺 跡
5. 今 城 跡
6. 燈籠寺遺跡第6次
7. 丹後あじわいの郷関係遺跡
 - (1) 分布調査
 - (2) 桐谷古墳群
 - (3) ニゴレ遺跡

1 9 9 3

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

巻頭図版 算用田遺跡



調査区全景（西から）



SD12 遺物出土状況（南から）

序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターは、発足以来はや10年余を経過し、さらに新しい10年に向かって踏み出そうとしています。この間、当センターの業務遂行にあたりましては、皆様方のご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

過去10年をふりかえってみますと、公共事業は年々増大し、それに伴う発掘調査も単に件数の増加だけでなく、とみに大規模化の傾向にあります。当センターでは、こうした状況に対応するため、徐々にではありますが、組織・体制の強化を進め、調査・研究の充実に図ってまいりました。このような発掘調査の成果については、『京都府遺跡調査報告書』をはじめ、『京都府遺跡調査概報』・『京都府埋蔵文化財情報』等の各種印刷物を逐次刊行し公表するとともに、毎年、展覧会や研修会等を開催し、発掘調査で出土した遺物や調査の概要を広く府民に紹介して、一般への普及・啓発活動にも意を注いでいるところであります。

本書は、平成2年度に実施した発掘調査のうち、(社)京都府農業開発公社、郵政省近畿郵政局、京都府乙訓土木事務所、京都府土木建築部、京都府教育委員会、京都府農林水産部の依頼を受けて、細谷古墳群跡、算用田遺跡、長岡京跡右京第411次、大切遺跡、今城跡、燈籠寺遺跡、丹後あじわいの郷関係遺跡に関する発掘調査概要を収めたものであります。本書が学術研究の資料として、また、埋蔵文化財への関心と理解を深める上で、何ごしかの役に立てば幸いです。

おわりに、発掘調査を依頼された各機関をはじめ、京都府教育委員会・綾部市教育委員会・長岡京市教育委員会・田辺町教育委員会・山城町教育委員会・木津町教育委員会・弥栄町教育委員会などの関係諸機関、ならびに調査に直接参加・協力いただいた多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成5年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
理事長 福山敏男

凡 例

1. 本書に収めた概要は、下記のとおりである。

1. 細谷古墳群第2次 2. 算用田遺跡 3. 長岡京跡右京第411次 4. 大切遺跡
5. 今 城 跡 6. 燈籠寺遺跡第6次 7. 丹後あじわいの郷関係遺跡

2. 各遺跡の所在地、調査期間、経費負担者及び概要の執筆者は下表のとおりである。

遺跡名	所在地	調査期間	経費負担者	執筆者
1. 細谷古墳群第2次	綾部市位田町細谷	平4.5.18～ 7.4	(社)京都府農業開発公社	小池 寛
2. 算用田遺跡	乙訓郡大山崎町円明寺宝本	平4.5.21～ 平5.1.31	郵政省近畿郵政局	中川和哉
3. 長岡京跡右京第411次	長岡京市天神一丁目45-3	平4.9.24～ 11.20	京都府乙訓土木事務所	石尾政信
4. 大切遺跡	綴喜郡田辺町草内大切	平4.5.18～ 7.5	京都府土木建築部	有井広幸
5. 今城跡	相楽郡山城町北河原北谷	平4.5.6～ 6.12	京都府土木建築部	森正哲次
6. 燈籠寺遺跡第6次	相楽郡木津町木津内田山	平4.6.3～ 9.4	京都府教育委員会	石井清司 小池 寛
7. 丹後あじわいの郷関係遺跡 (1)分布調査 (2)桐谷古墳群 (3)ニゴレ遺跡	竹野郡弥栄町鳥取・木橋 竹野郡弥栄町鳥取・木橋 竹野郡弥栄町鳥取・木橋	平4.9.24～ 平5.2.26	京都府農林水産部	岡崎研一 岡崎研一 岡崎研一

3. 本書の編集は、調査第1課資料係が当った。

目 次

1.	細谷遺跡第2次発掘調査概要-----	1
2.	算用田遺跡発掘調査概要-----	13
3.	長岡京跡右京第411次発掘調査概要-----	69
4.	大切遺跡発掘調査概要-----	81
5.	今城跡発掘調査概要-----	107
6.	燈籠寺遺跡第6次発掘調査概要-----	113
7.	丹後あじわいの郷関係遺跡平成4年度発掘調査概要-----	135
	(1) 分布調査の成果について-----	138
	(2) 桐谷古墳群-----	142
	(3) ニゴレ遺跡-----	145

挿 図 目 次

1. 細谷古墳群第2次

第1図	細谷古墳群位置図(1/50,000)	1
第2図	細谷古墳群地形測量図(1/2,000)	3
第3図	2・9号墳墳丘測量図(1/120)	4
第4図	2・9号墳墳丘断面実測図(1/80)	5
第5図	2号墳石室実測図(1/60)	6
第6図	2号墳出土土器実測図	7
第7図	7号墳石室実測図(1/40)	8
第8図	7号墳出土土器実測図	9
第9図	9号墳墳丘測量図(1/80)	10
第10図	9号墳出土土器実測図	11

2. 算用田遺跡

第11図	調査地及び周辺遺跡分布図	15
第12図	試掘トレンチ配置図	16
第13図	試掘トレンチ模式柱状断面図	17
第14図	上層検出遺構	18
第15図	試掘トレンチ出土遺物実測図	19
第16図	算用田遺跡土層柱状図	20
第17図	遺構図	21
第18図	包含層内検出遺構	22
第19図	S H02平・断面図	23
第20図	S D12断面位置図	24
第21図	S D12断面・遺物出土レベル	24
第22図	S H09平・断面図	26
第23図	S H16・S K60平面・断面図及びS H16竈拡大図	27
第24図	S H18平・断面図	28
第25図	S H18竈周辺平・断面図	29

第26図	S K15平・断面図	30
第27図	S K53・54・57平・断面図	31
第28図	S X13平・断面図	31
第29図	S H10平・断面図	32
第30図	S B82平・断面図	33
第31図	S K11・75・76平・断面図	33
第32図	S K11遺物出土状況	34
第33図	S K19平・断面図	35
第34図	S X24平・断面図	37
第35図	S D12出土土器(1)	38
第36図	S D12出土土器(2)	39
第37図	S D12出土土器(3)	40
第38図	S D12出土土器(4)	41
第39図	S D12出土土器(5)	42
第40図	S D12出土土器(6)	43
第41図	弥生・古墳時代遺構出土遺物(1)	44
第42図	弥生・古墳時代遺構出土土器(2)	45
第43図	遺構出土遺物	46
第44図	包含層出土土器	48
第45図	土錘実測図	49
第46図	S K11出土木製品	49

3. 長岡京跡右京第411次

第47図	調査地及び周辺遺跡位置図(1/25,000)	69
第48図	調査地平面図	70
第49図	Cトレンチ土層断面図	71
第50図	Cトレンチ遺構平面図	72
第51図	Aトレンチ遺構平面図	73
第52図	井戸跡S E41110実測図	74
第53図	出土遺物実測図・拓影(1)	76
第54図	出土遺物実測図(2)	77
第55図	出土遺物実測図・拓影(3)	78
第56図	出土遺物実測図(4)	79

4. 大切遺跡

第57図	調査地位置図(1/25,000)	82
第58図	調査地周辺図(1)(1/10,000)	83
第59図	調査地周辺図(2)(1/1,000)	84
第60図	遺構配置図(1/150)	86
第61図	調査地北壁土層断面図(1/80)	87
第62図	S D56平・断面図(1/80)	88
第63図	S D56出土遺物実測図(1/6)	89
第64図	S D01遺物出土状況図(1/40)	92
第65図	S D01出土遺物実測図(1)(1/4)	93
第66図	S D01出土遺物実測図(2)(1/4)	94
第67図	S D01出土遺物実測図(3)(1/4)	95
第68図	S D01出土遺物実測図(4)(1/4)	96
第69図	S D01出土遺物実測図(5)(1/4)	97
第70図	S K02平・断面図(1/40)	98
第71図	S D03・04、S K02、S B21・31出土遺物実測図(1/4)	99
第72図	S B07平・断面図(1/80)	99
第73図	S B31平・断面図(1/80)	100
第74図	包含層出土遺物実測図(1/4)	101

5. 今城跡

第75図	調査地位置図(1/25,000)	107
第76図	トレンチ配置図	108
第77図	A・Bトレンチ断ち割り断面図	109
第78図	出土遺物実測図	111

6. 燈籠寺遺跡第6次

第79図	調査地位置図	114
第80図	年度別トレンチ配置図	115
第81図	Aトレンチ遺構配置図	117
第82図	S H02遺構図	118
第83図	S H03遺構図	119
第84図	S H06遺構図	120
第85図	AトレンチS K09遺構図	121

第86図	Bトレンチ遺構配置図-----	122
第87図	C～Gトレンチ配置図-----	124
第88図	Gトレンチ遺構配置図-----	124
第89図	出土遺物(1)-----	126
第90図	出土遺物(2)-----	127
第91図	出土遺物(3)-----	128
第92図	出土遺物(4)-----	130
第93図	出土遺物(5)-----	131

7. 丹後あじわいの郷関係遺跡

第94図	調査地位置図及び周辺遺跡分布図-----	137
第95図	「丹後あじわいの郷」造成予定地内遺跡分布図-----	139
第96図	桐谷古墳群地形測量図-----	142
第97図	桐谷1・2号墳主体部実測図-----	143
第98図	試掘トレンチ・拡張区配置図-----	146
第99図	A拡張区遺構配置略図-----	149
第100図	A拡張区主要遺構実測図-----	151

付 表 目 次

付表1	重鉍物組成表(1)-----	52
付表2	重鉍物組成表(2)-----	53
付表3	重鉍物組成表(3)-----	54
付表4	遺物観察表-----	60
付表5	「丹後あじわいの郷」造成予定地内遺跡一覧表-----	140
付表6	試掘成果一覧表-----	147
付表7	拡張区検出遺構一覧表-----	150

図版目次

1. 細谷古墳群 2次

- 図版第1 (1) 2・9号墳遠景(南から) (2) 2号墳墳丘西側列石検出状況(西から)
- 図版第2 (1) 2号墳墳丘西側列石検出状況(北西から)
(2) 2号墳石室羨道部閉塞石検出状況(北から)
- 図版第3 (1) 2号墳石室全景(南から) (2) 7号墳石室全景(南から)
- 図版第4 (1) 9号墳墳丘西側列石検出状況(西から)
(2) 9号墳石室・墳丘列石全景(南から)
- 図版第5 出土遺物(1)
- 図版第6 出土遺物(2)

2. 算用田遺跡

- 図版第7 (1) 調査前全景(南から) (2) 調査地周辺風景(西から)
- 図版第8 (1) トレンチ(南から) (2) トレンチ
- 図版第9 (1) トレンチ調査風景(南から) (2) トレンチ遺構検出状態(北から)
- 図版第10 (1) 遺構検出状態全景(西南から) (2) 遺構検出状態(西から)
- 図版第11 (1) トレンチ北西部(西南から) (2) トレンチ南部(西から)
- 図版第12 (1) トレンチ西部(西から) (2) S H02(西から)
- 図版第13 (1) S H02(北から) (2) S D12(北から)
- 図版第14 (1) S D12 1区遺物出土状態(南西から)
(2) S D12 1区遺物出土状態(西から)
- 図版第15 (1) S D12 2区遺物出土状態(北から)
(2) S D12 4・5区遺物出土状態(北から)
- 図版第16 (1) S K15(北から) (2) S H16、S K60(西から)
- 図版第17 (1) S K60(西から) (2) S D22東端(西から)
- 図版第18 (1) S H18(南西から) (2) S H18竈周辺(東から)
- 図版第19 (1) S H10(北から) (2) S X26(南から)
- 図版第20 (1) S B82柱穴 (2) S B82柱穴
- 図版第21 (1) S K11遺物出土状態(北から) (2) S K19(東から)

図版第22 (1) S K 11・75・76(東から) (2) 拡張区全景(東から)

図版第23 (1) 遺構完掘状態(北から) (2) 深掘り(北から)

図版第24 出土遺物(1)

図版第25 出土遺物(2)

図版第26 出土遺物(3)

図版第27 出土遺物(4)

図版第28 出土遺物(5)

3. 長岡京跡右京第411次

図版第29 (1) Cトレンチ調査前風景(北から) (2) Cトレンチ全景(北から)

図版第30 (1) 土坑 S K 41101(南から) (2) Cトレンチ中央の柱跡群(南から)

(3) 溝 S D 41108、柵列跡 S A 41113(南方から)

(4) 柵列跡 S A 41113、溝 S D 41108(北から)

図版第31 (1) A・Bトレンチ調査前風景(南から)

(2) Bトレンチ全景(南から)

図版第32 (1) Aトレンチ全景(東から) (2) 井戸跡 S E 41110の実測風景(南から)

図版第33 出土遺物(1)

図版第34 出土遺物(2)

4. 大切遺跡

図版第35 (1) 調査前風景(西から) (2) 調査地断面(北壁)

図版第36 (1) 調査風景(S D 01南側) (2) 調査地全景(南から)

図版第37 (1) S D 01(南から) (2) S D 01遺物出土状況(北側)

図版第38 (1) S D 01断面(北から) (2) S D 56(南から)

図版第39 (1) S B 07(南から) (2) S B 31(東から)

図版第40 出土遺物(1)

図版第41 出土遺物(2)

図版第42 出土遺物(3)

5. 今城跡

図版第43 (1) 調査地全景(調査前南から) (2) Bトレンチ全景(南西から)

図版第44 (1) Eトレンチ北壁 (2) Gトレンチ(北西から)

図版第45 出土遺物(1)

図版第46 出土遺物(2)

6. 燈籠寺遺跡第6次

- 図版第47 (1)調査地全景(北西から) (2)調査地全景
- 図版第48 (1)Aトレンチ調査前(北西から) (2)Aトレンチ全景(南西から)
- 図版第49 (1)AトレンチSH02全景(北東から)
(2)AトレンチSH06全景(南西から)
- 図版第50 (1)AトレンチSH03調査風景(北西から)
(2)AトレンチSH03全景(北西から)
- 図版第51 (1)AトレンチSH06遺物出土状態(1)
(2)AトレンチSH06遺物出土状態(2)
(3)AトレンチSH06遺物出土状態(3)
(4)AトレンチSH03遺物出土状態
- 図版第52 (1)Bトレンチ全景(北から) (2)Bトレンチ全景(東から)
- 図版第53 (1)BトレンチSD01・SK06遺物出土状態(南から)
(2)Bトレンチ土器溜まり1、遺物出土状態(西から)
- 図版第54 (1)AトレンチSK09遺物出土状態(北から)
(2)BトレンチSK06遺物出土状態(東から)
- 図版第55 (1)D・Eトレンチ全景(西から) (2)Gトレンチ全景(東から)
- 図版第56 出土遺物(1)
- 図版第57 出土遺物(2)
- 図版第58 出土遺物(3)

7. 丹後あじわいの郷関係遺跡

(2)桐谷古墳群

- 図版第59 (1)桐谷古墳群・ニゴレ遺跡空中写真 (2)桐谷1・2号墳空中写真
- 図版第60 (1)桐谷1号墳近景(西から) (2)桐谷2号墳主体部近景(南から)

(3)ニゴレ遺跡

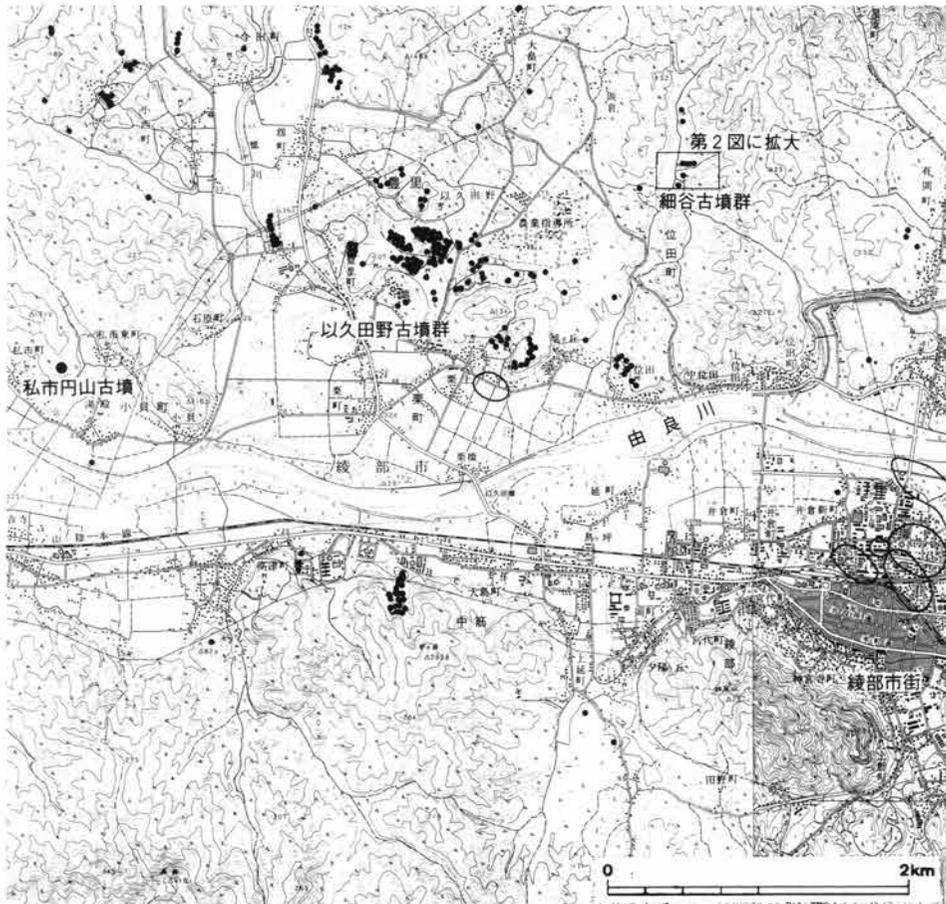
- 図版第61 (1)ニゴレ遺跡A拡張区近景(南西から)
(2)ニゴレ遺跡住居跡近景(北西から)
- 図版第62 (1)ニゴレ遺跡炭窯近景(西から) (2)ニゴレ遺跡製鉄炉近景(南から)

1. 細谷古墳群第2次発掘調査概要

1. はじめに

細谷古墳群は、京都府綾部市位田町大字細谷に所在する後期古墳群であり、社団法人京都府農業開発公社が計画・施工する公社営畜産基地建設に伴う事前調査である(第1図)。

細谷古墳群は、京都府教育委員会が刊行した京都府遺跡地図第2分冊によると、4基からなる後期古墳群と記載されていたが、本開発事業に伴って京都府教育委員会が分布調査及び試掘調査を行い、また、当調査研究センターが発掘調査を行った結果、すでに消失し



第1図 細谷古墳群位置図(1/50,000)

由良川流域の不整形の範囲指定は、古墳時代後期の遺跡を示す。

た古墳も含め、総計9基からなる後期古墳群であることが判明した^(注1)。本報文は、昨年度に引き続いて実施した第2次調査の調査成果報告である。

発掘調査は、平成4年5月18日から同7月4日の間に実施し、同年6月19日に現地説明会を行い、60余名の参加者を得た。現地調査は、当調査研究センター調査第2課調査第2係長奥村清一郎、同調査員小池 寛が担当し、本概要報告の執筆・編集は小池が行った。

発掘調査を進めるにあたり、綾部市教育委員会をはじめ関係諸機関の方々からは、多くの御協力を得た。また、共同調査を担当された京都府教育委員会森 正氏からは、多くの御援助をいただいた。記して感謝の意を表したい^(注2)。

本調査に係わる経費は、全額、社団法人京都府農業開発公社が負担した。

2. 細谷古墳群概観

細谷古墳群は、先述したように9基からなる後期古墳群であることが判明したが、その内6・8号墳は後世の開墾のために全壊している。ここでは、周辺の歴史的環境にかえて、本概要報告に記述した以外の古墳について概観しておく^(注3)(第2図)。

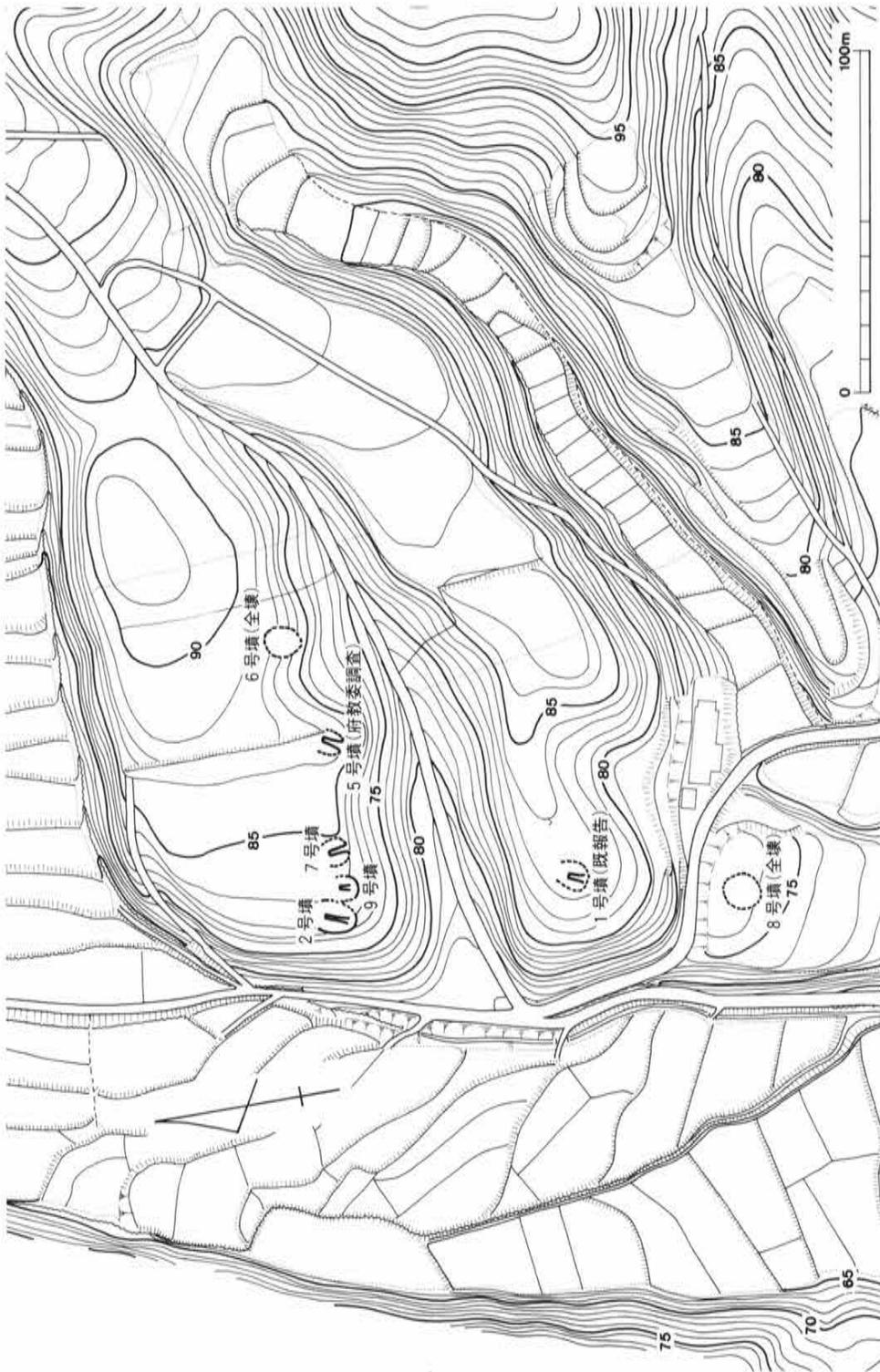
1号墳 墳丘は、開墾により完全に消失しており、墳形・墳丘規模については不明である。主体部は、全長3.8m・幅1.34~2mの規模をもつ横穴式石室である。追葬時に玄室奥壁から50cmの線上に人頭大の礫で区画部を設け、ここから7世紀初頭の土器群を検出した。なお、1・2次床面から須恵器・土師器・耳環・玉類・刀子などが出土しており、初葬時期を6世紀後半に比定できる。

3号墳 直径10mの円墳で、主体部は残存長4m・幅1.2mを測る横穴式石室である。須恵器・土師器・鉄鏃などが出土しており、築造時期は7世紀前半に比定できる。

4号墳 直径17mを測る円墳であり、主体部は玄室長4m・幅1.3m、羨道長6.6m・幅0.9~1.7mを測る両袖の横穴式石室である。追葬時には、玄室内を不整形な板石によって、区画部を構築している。玄室から須恵器・土師器・馬具・鉄鏃・石製紡錘車などの遺物が出土しており、細谷古墳群内で最大規模であり、最も副葬品が多い。築造時期は6世紀後半であり、細谷古墳群に埋葬された被葬者の中において、最も上位階層に位置付けられる被葬者像を描きうる。

5号墳 直径12mの円墳で、主体部は復原長5m・幅1.2mを測る横穴式石室である。石室から須恵器などが出土しており、築造時期を6世紀末に比定できる。

細谷古墳群を解釈する場合、西方に所在する以久田野古墳群との関連が、最も重要である。今後、本古墳群の群構成などを十分に検討し、その関連を考察しなければならない。

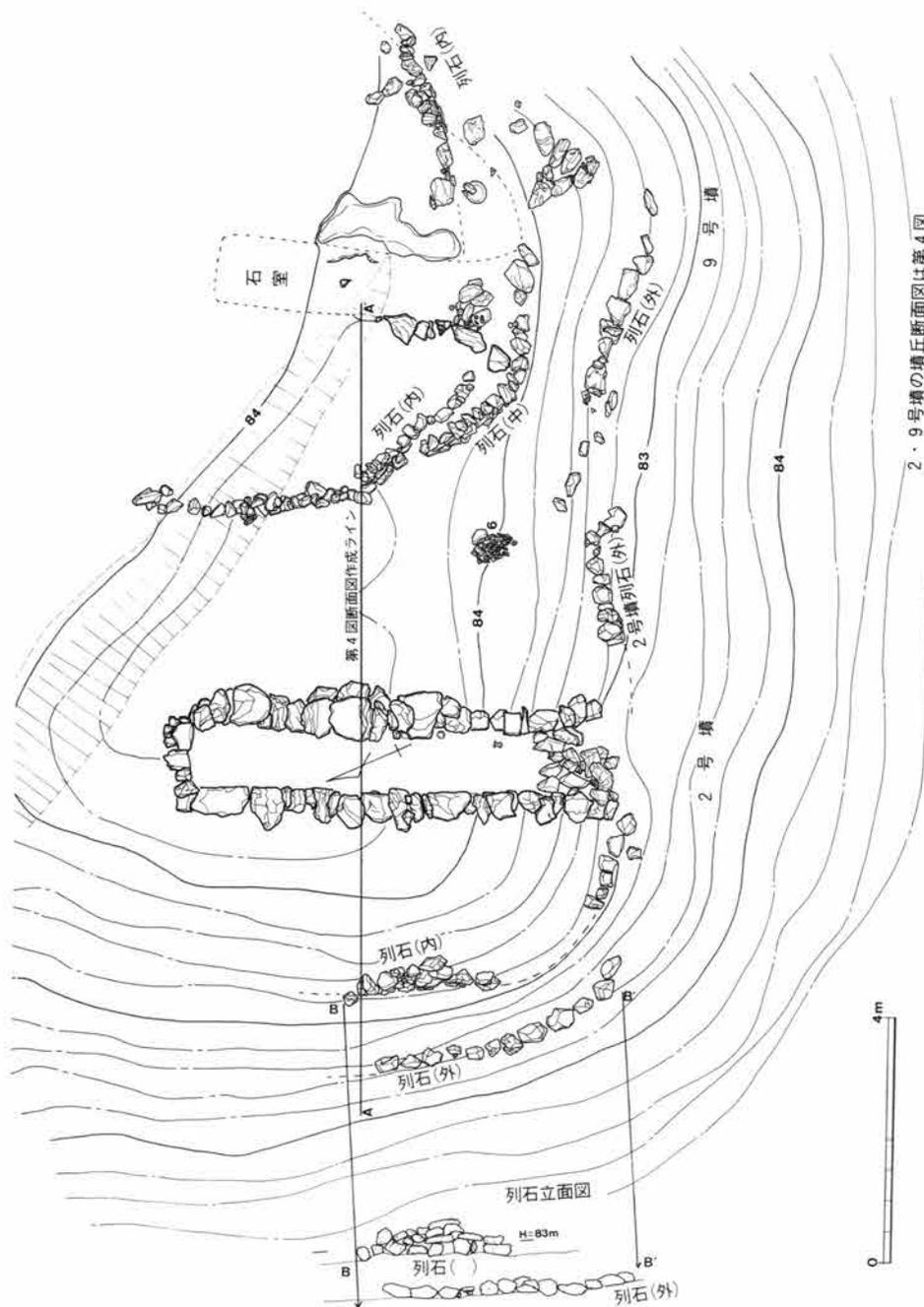


第2図 細谷古墳群地形測量図(1/2,000)

3. 調査概要

2号墳

(1)墳丘 2号墳は、2・5・6・7・9号墳が所在する尾根の先端に位置しており、

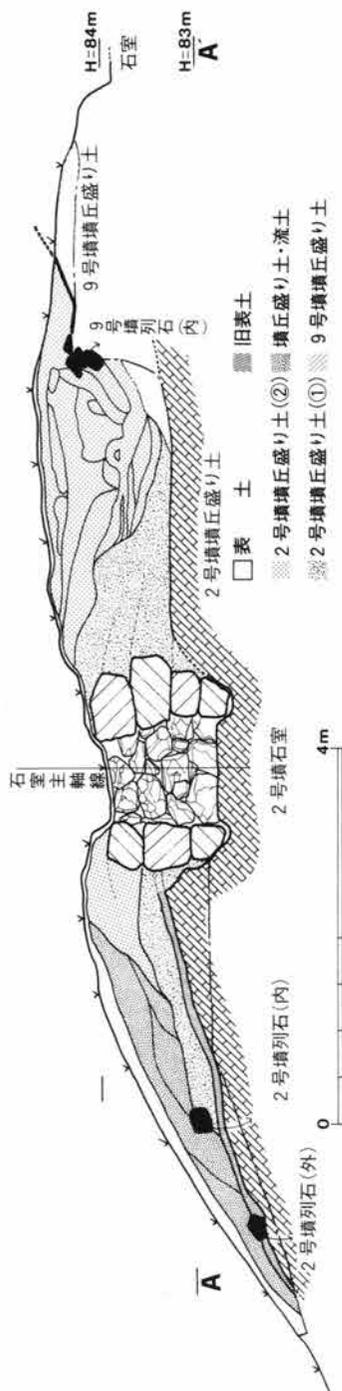


第3図 2・9号墳墳丘測量図(1/120) 2・9号墳の墳丘断面図は第4図

墳丘は、丘陵傾斜面の最上位に位置している。墳丘西半は、その傾斜に面しているために、一部崩落した部分もあるが、断続的ながら2重の列石がめぐっている。外側の列石は、検出長4.9mを測り、西側から南側にかけて緩やかに弧を描くように配置されていることから、元来、墳丘の西半周にめぐっていた可能性がある。なお、残存する列石群は、基底石のみであるが、2・3石の礫を積んでいたことも考えられる。一方、内側の列石は、外側よりも残存状況が悪く、検出長は2.5mを測るにすぎないが、西側部分では高さ4段の礫が残存している。西側から南側にかけての屈曲部は流出しているが、羨門に取り付くように配置されたと考えられる(第3図、図版第1-(2)・2-(1))。両者の列石の位置関係を土層断面からみれば、高差は0.64mを測り、列石間の距離は1.1mを測る(第4図)。

墳丘東側は、後述するように先行して築造された9号墳の墳丘を埋め込んで築成されているため、明確な列石はめぐらないが、南側の石室前面には、残存長2.3mを測る列石が残存している。1段のみの残存である点は、墳丘西側と同じであり、また、9号墳の墳丘裾に規制され、東端部は、南東方向に屈曲している(図版第1-(1))。

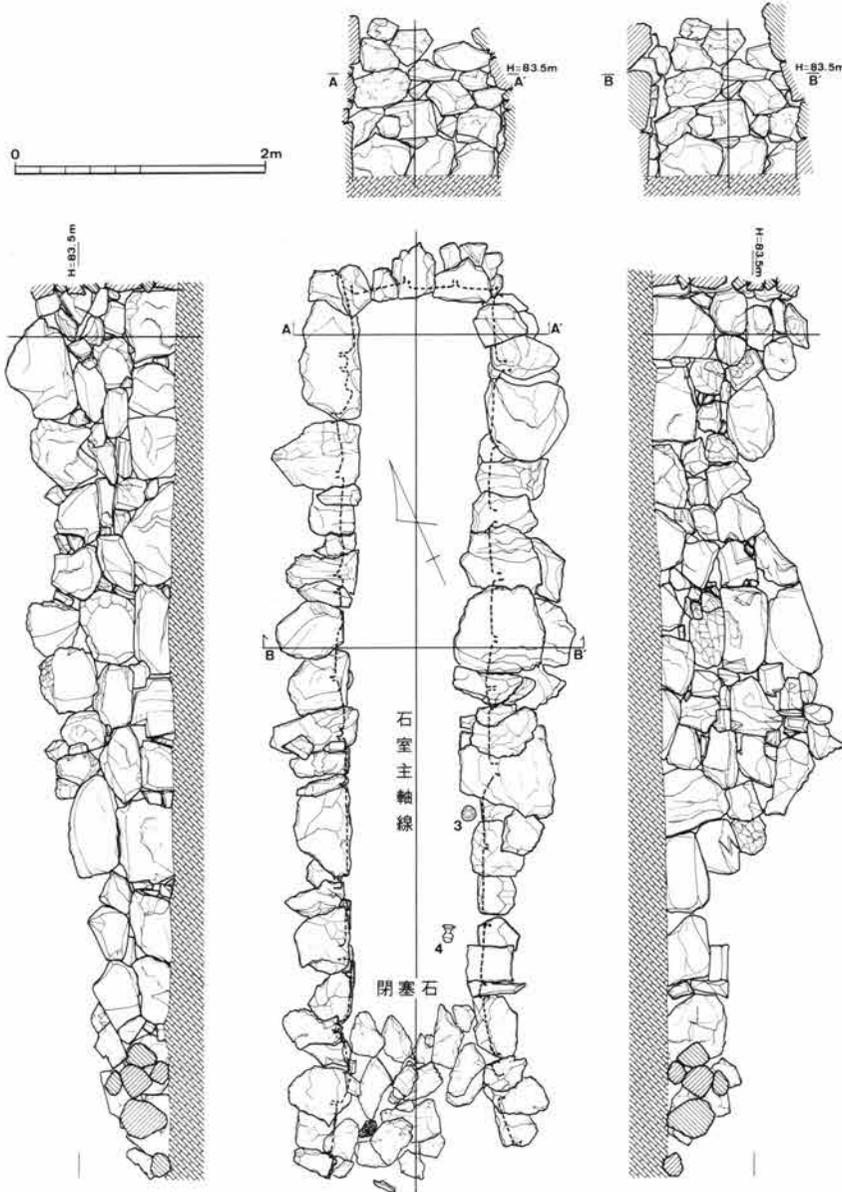
2号墳の墳形は、直線的な列石群ではあるが、広義な意味において円墳と規定してよい条件下にある。また、外側の列石を墳丘裾とし、外側列石と石室主軸線間の距離を石室主軸線を中心に東方に反転させれば、東西間の短径は、10mを前後する値となる。一方、南北の長径は、外側の列石復原推定線と石室中点の位置関係から、12m前後の復原値をえることができる。なお、墳丘裾の表示は、列石によって行われたと推定でき、墳丘が可視できる西側から



第4図 2・9号墳墳丘断面実測図(1/80)

南側にかけては、ていねいに列石を配しているが、東側から北側にかけては、開墾時に攪乱を受けているものの、簡略化された可能性が指摘できる。

墳丘は、石室構築のために地山を掘り込み、基底石とその上段の石材を埋め込んだ後、石室構築と同時に盛り土を搬入して成形している。墳丘西側は、地山直上・盛り土直下に旧表土の堆積が認められることから、墳丘築造時には地山を削り込むことなく、盛り土を



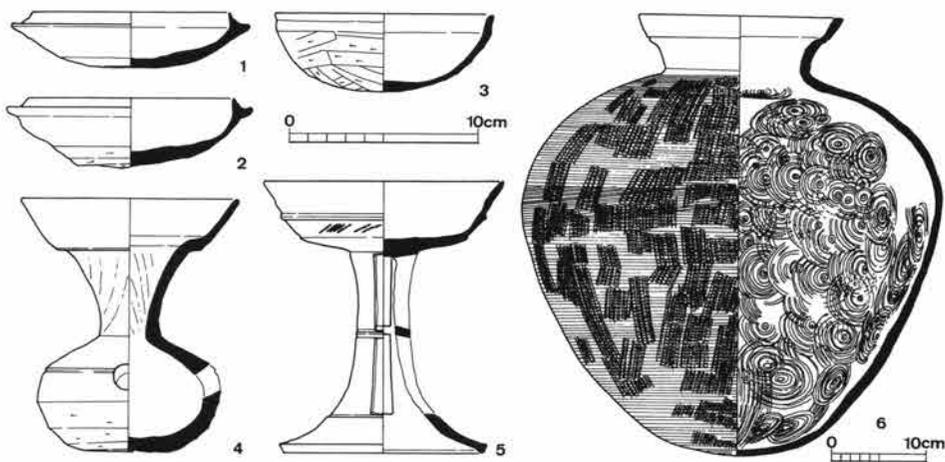
第5図 2号墳石室実測図(1/60)

行っていることが判明した。一方、東側では、旧表土が確認できないことから、何らかの地山成形が行われた後、盛り土が集積されたと考えられる。なお、2号墳石室と9号墳西側列石の中間点で出土した須恵器・甕6(第6図6)は、2号墳の盛り土下から出土した。

(2)石室 無袖の横穴式石室で、羨門部西側側壁と墳丘列石の結合点の石材を起点に計測すれば、石室全長は7.12mである。また、東西両側壁に袖石と認識できる石材が配置されていることから、玄室長は3.9mとなる。玄室幅は、1.1~1.2mを測り、基本的には精緻な長方形の平面プランを有している。羨道は、羨門部に人頭大の石材を用いて閉塞石としており、その内側で計測すれば、羨道長は1.8mであり、閉塞石外側で計測すれば、3.22mである。羨道幅は、玄室と同じく1.1mであるが、羨門はわずかに広がっており、1.4mを測る。羨門部の閉塞石(図版第2-(2))は、上半部が消失しているものの、その基底石の残存状況は良好であり、閉塞石の石材間に須恵器の甕片が混入している。西側側壁の構築は、基底石の壁面と残存する最上位の壁面とが、玄室床面に対してほぼ直角を保っているが、東側側壁は、基底石と残存する側壁最上位の位置が、内側に0.25m傾斜しており、持ち送りを意図した壁面の構築が見られる。なお、計測できる最小の石室幅は、0.9mを測る(第5図、図版第3-(1))。

(3)出土遺物 玄室床面は、後世の攪乱を受けた形跡もないが、羨道部に須恵器の杯蓋・甕が、ほぼ完形の状態で検出したのみである。以下、各個体について概観する(第6図)。

1は口径10.6cm、2は口径10.8cmを測る須恵器・杯蓋である。3は口径11.5cmの土師器・椀で、体部外面を不整方向の篋削りによって調整する。4は口径11.6cm・器高13.5cmの須恵器・甕である。平らな底部に特徴がある。5は口径12.6cm・器高14.5cmの須恵器・高



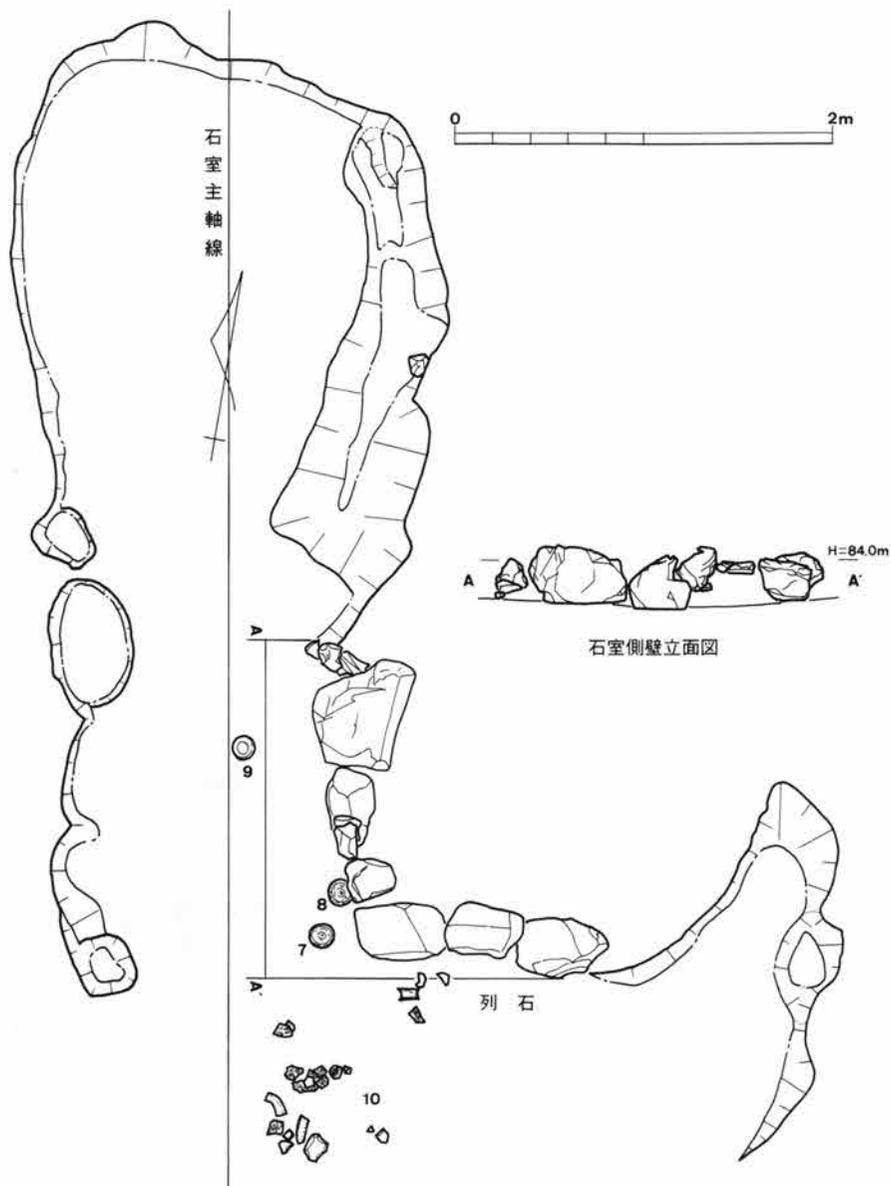
第6図 2号墳出土土器実測図(1~5:1/4、6:1/8)

3・4.石室内 6.羨門部 1・2・5.墳丘

杯で、脚部に長方形の透孔をもつ。6は口径21.2cm・器高46.8cmの須恵器・甕で、外面に叩き目、内面に青海波文が残る。これらの特徴から陶邑編年TK217前後に比定できる。

7号墳

(1)墳丘 墳丘は、後世の開墾によって完全に削平を受けており、墳形や墳丘規模などは不明である。しかし、他の古墳と7号墳の石室の規模などを比較すれば、直径10m前後



第7図 7号墳石室実測図(1/40)

の円墳である可能性が指摘できる。なお、石室の羨門部東側側壁に直交する列石をわずかではあるが検出しており、2・9号墳と同じように墳丘の周囲に列石がめぐっていた可能性が指摘できる。

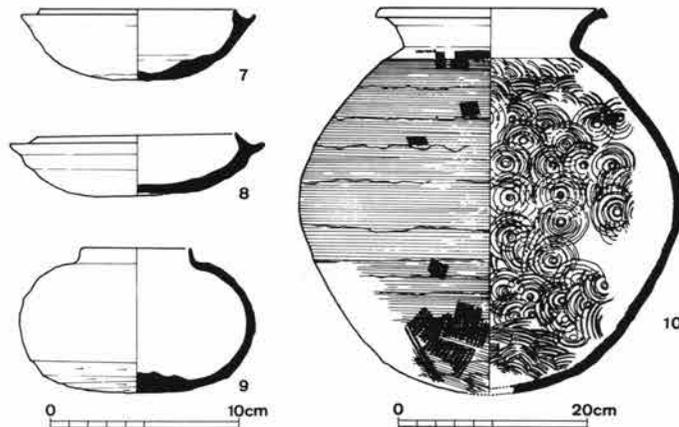
(2)石室 墳丘同様、石室の8割が削平を受け、側壁・奥壁の構造は不明である。しかし、石室の基底石を据える際にわずかに地山を掘り込んだ落ち込みの形状と羨門部の側壁石材と列石の結合点から、全長4.4m以上の横穴式石室であったと考えられる。また、残存する東側側壁の北端石材がやや大きく、これを袖石と仮定するならば、玄室全長を2.8m以上と復原しうる。羨道部は、東側側壁が3石残存し、やや羨門部で広がっている。羨道部床面直上から須恵器、蓋杯・壺が出土している。また、石室前庭部で須恵器・甕片が破片化した状態で出土している(第7図、図版第3-(2))。

(3)出土遺物 7は口径10.6cm、8は口径10.7cmを測る須恵器・杯身であり、受け部の形態に違いが見られる。9は口径5.6cm・器高7.7cmを測る短頸壺である。10は口径23.6cm・器高40.8cmを測る須恵器・甕である。体部外面は叩きの後カキ目調整を行い、内面は青海波文が見られる(第8図)。

以上のように7号墳は、極めて残存状況が不良で、正確な石室の構造・規模などを把握できない状況であるが、出土した須恵器から陶邑編年TK217前後に築造されたと考えられる。先述した2号墳と比較すれば、石室の規模が小型化している点から、2号墳より築造時期が、やや後出する要素が指摘できる。

9号墳

(1)墳丘 墳丘の多くは、後世の開墾によって削平され残存していないが、2号墳の墳丘盛り土で覆われた部分は、墳丘の周囲にめぐる列石が良好に残存している。また、南傾斜面の崩落によって大半の列石は流出しているが、石室前庭部にも列石が残存している。これらのことから、東西8~10m・



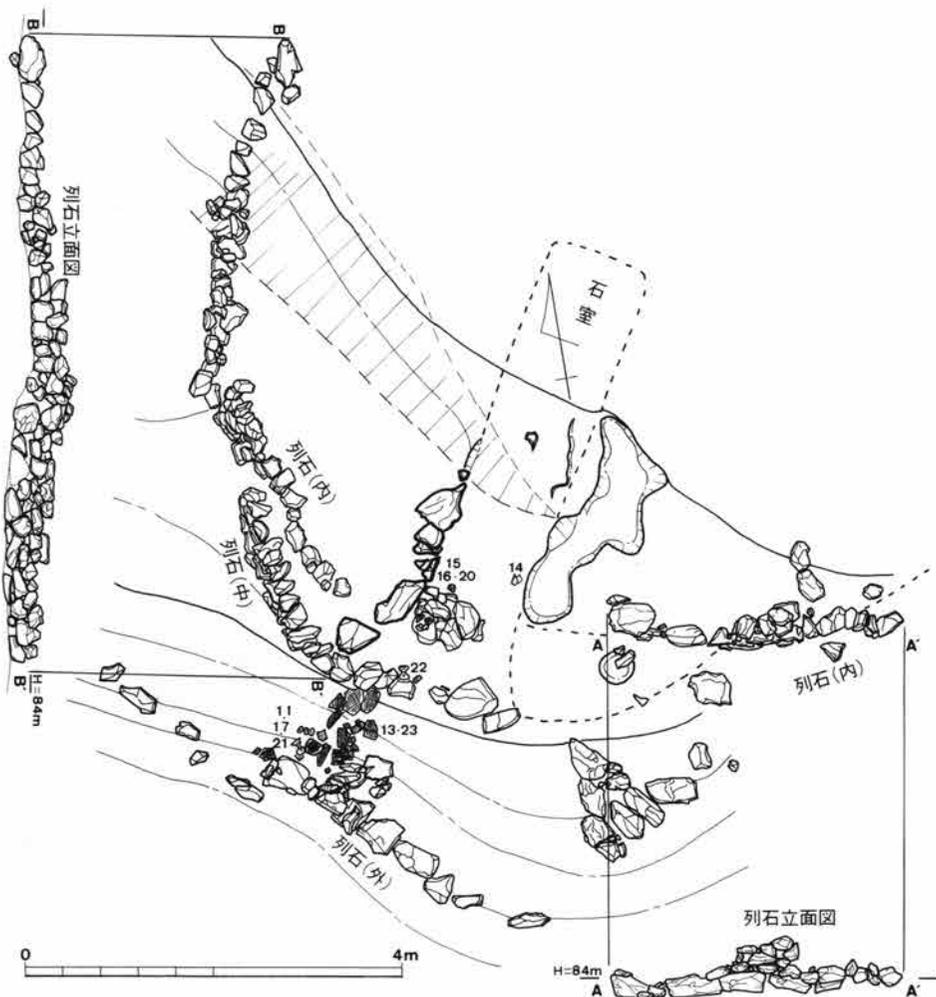
第8図 7号墳出土土器実測図(7~9:1/4、10:1/8)
7~9.石室内 10.羨門部

南北12~13mの楕円形を呈する円墳と推定しうる。

列石は、墳丘の西側では一列であるが、北端の列石から4.5mの地点で内側の列石と中側の列石に分岐する。内側の列石は、石室の西側側壁と結合するが、中側の列石は、羨門部を取り囲むようにめぐらせている。また、外側の列石は、一部、2号墳築造時に消失しているが、内・中側の列石と石室前庭部を取り囲むように配されている(第9図)。

墳丘の東側では、内側の列石の延長部を検出しているが、西側の列石群に比べて、残存状況は悪い(図版第4)。

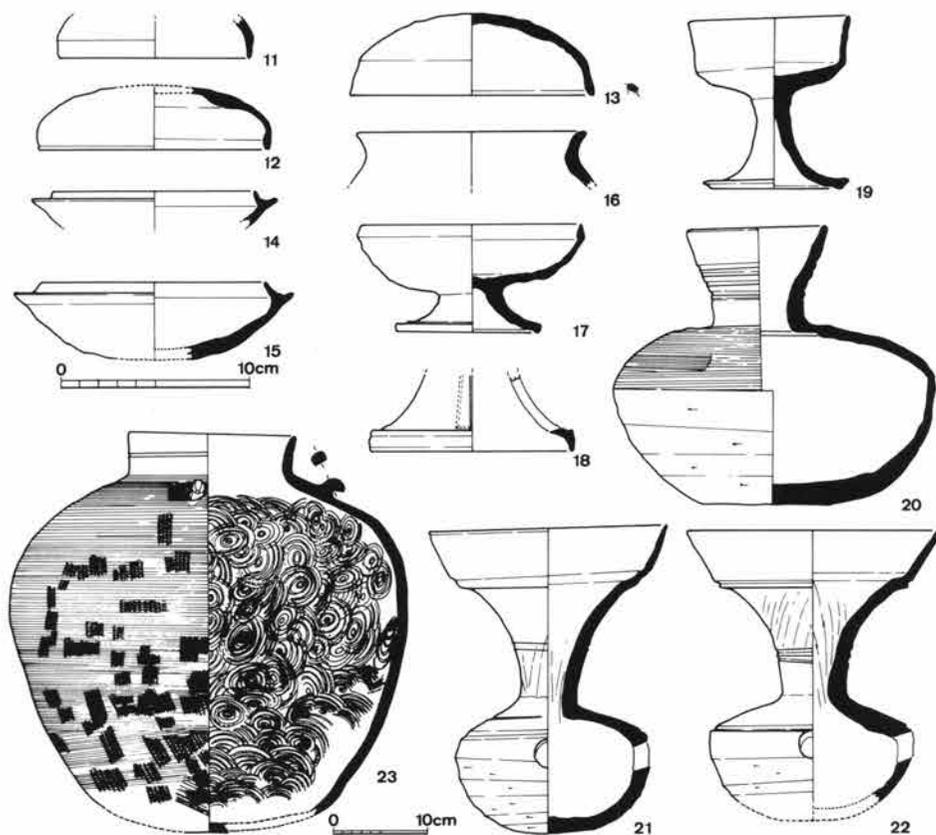
(2)石室 羨道の西側側壁の一部が残存するにすぎず、石室の具体的な形態や構造・規模などは不明である。残存する羨道は2mを測り、2・7号墳と同じく、羨門部がやや開



第9図 9号墳墳丘測量図(1/80)

く特徴が認められる。なお、羨道南端部で閉塞石の一部を確認しており、その閉塞石と外・中側の列石間に後述する遺物群が集中している。それらは追葬時に石室内からかき出された土器群と考えてよい状況にある。

(3)出土遺物 11は口径10cm、12は口径12.2cm、13は口径12.9cmを測る須恵器・杯蓋である。その中において13は、天井部が丸く、口縁部がわずかに開いており、少なからず古い要素をもっている。14は口径10.8cm、15は口径11.9cmの須恵器・杯身である。15は立ち上がりからの形態からやや古い要素をもっている。16は口径12.2cmを測る土師器・甕である。17は口径11.8cm・器高5.8cm、19は口径8.6cm・器高9.2cmを測る無蓋高杯である。20は、口径7.4cm・器高14.6cmを測る須恵器・平瓶で、体部外面をカキ目と篋削りによって調整している。21は口径11.2cm・器高16.2cm、22は口径13.4cmを測る須恵器・甕である。基本的な手法・形態は酷似している。23は口径17.6cm・器高42.4cmを測る須恵器・甕である。肩部に短く屈曲させた突起を3か所に付し、体部外面には、過度の高温焼成のために流れ



第10図 9号墳出土土器実測図(11~22:1/4、23:1/8)

11・13・17・21・23.列石間 12・18・19.墳丘 14~16・20.石室内 22.羨門部

落ちた自然釉とともに、焼成時に熔着した他の土器片が多く見られる(第10図)。

これらの土器群は、2・7号墳出土土器群と比較すれば、蓋杯の立ち上がりが高くのびる点や甕の口縁部が長く、体部が球体に近い点などから、先行する要素が見られる。これは、9号墳の墳丘を、後出して築造された2号墳の墳丘盛り土が覆っていることから傍証できよう。9号墳の築造時期は、陶邑編年TK209前後に比定できる。

4. ま と め

今回の細谷古墳群の発掘調査は、極めて狭小な谷も墓域として土地利用が行われたことを解明した点で重要であり、特に、本古墳群の西方に所在する以久田野古墳群の動態を考える上で、新資料を提示できたと言える。

古墳の残存状況は不良であり、埋葬主体部である横穴式石室についての構造的検討が十分行えない状況であったが、9号墳の列石群は、外表施設の構造を考える上で重要な検出例となった。複数の列石がめぐる類例としては、丹後半島にわずかな類例と兵庫県北部に20余例あり、八鹿町箕谷3号墳例は、比較検討する有用な資料^(注4)である。

今後、諸類例を検討することによって、細谷古墳群が所在する小地域内での歴史的環境を細かく復原できると考える。

(小池 寛)

注1 a森下 衛「府営農業基盤整備事業関係遺跡平成3年度発掘調査概要 4 細谷古墳群」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1992)』 京都府教育委員会) 1992、b小池 寛「細谷古墳群発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第49冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1992、c「綾部市細谷古墳群第2次」(『京埋セ現地説明会資料』No.92-04 京都府教育委員会・(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1994.6.19、d小池 寛「3重の列石がめぐる後期古墳2例」(『京都府埋蔵文化財情報』第47号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1993.3 既刊の報文に墳丘規模・石室規模などのデータを記載したが、今回、詳細に検討を加えた結果、多少、それらのデータを修正する必要が生じた。本書をもって改訂しておきたい。

注2 調査参加者(順不同・敬称略)

橋本 稔・前田暁宏・波部 健・中瀬かほり・木村隆之・村上綾子・生湊久枝・芦田正夫・大槻芳枝・荻野隆康・荻野一代・大槻哲雄・荻野一夫・大槻 睦・村上茂雄・荻野秀男・村上秀代・村上加代子・村上ミヨノ・門小光・村上幸枝・梅原文男

注3 1号墳は当調査研究センター、3～5号墳は京都府教育委員会が調査を行った。

注4 谷本 進・藤原弘幸「箕谷古墳群」(『兵庫県八鹿町文化財調査報告書』第6集 八鹿町教育委員会) 1987

2. 算用田遺跡発掘調査概要 (I K-16)

1. はじめに

今回の調査は、京都府乙訓郡大山崎町円明寺字宝本に計画された山崎郵便局の建設工事に先立ち、郵政省近畿郵政局の依頼を受けて、当調査研究センターが実施した。調査対象地は、古墳時代の遺跡として知られている算用田遺跡の南端に位置する^(注1)。対象地内に算用田遺跡の遺構・遺物の分布が及んでいるかを確かめる目的で、本格的な発掘調査を実施するに先だって試掘調査を行った。試掘調査により弥生時代の終末から飛鳥時代までの遺物を多く含む包含層を確認したことから、本格的な調査が必要であると認められた。試掘調査の結果を受け、京都府教育委員会をはじめとする関係機関と協議のうえ、本格的調査の計画をたて実施した。調査の結果、弥生時代後期～古墳時代にかけての堅穴式住居跡、古墳時代の溝、土坑などの遺構群及び多くの遺物を検出した。

現地調査は、平成3年5月21日に開始し、平成4年1月31日に終了した。調査面積は試掘区を含め約1,200m²である。調査は、当調査研究センター調査第2課調査第3係係長小山雅人、同調査員中川和哉が担当した。概報作成のための遺物整理は平成4年度にひきつづき行われた。平成4年度の整理報告には、当調査研究センター調査第2課調査第4係課長補佐平良泰久、同調査員中川和哉が担当した。調査に当たってご協力をいただいた近畿郵政局、大山崎郵便局、大山崎町教育委員会等の関係諸機関、実際に調査に携わった学生諸君や整理を担当した方々に記して礼を述べたい^(注2)。また、向日市埋蔵文化財センターの中塚良氏からは当調査地内での土層観察と、周辺土層について重要なご教示を受けた。

なお、調査に係る経費は、郵政省近畿郵政局が負担した。

2. 位置と環境

算用田遺跡は、小泉川右岸の海拔12m前後に立地する。遺跡のある大山崎町は京都盆地の西南、淀川右岸に位置し、現在の宇治川、桂川、木津川の三川が合流する地点に当たる。西には天王山山地が迫り、偏狭な土地に遺跡は展開する。また、淀川の対岸に石清水八幡宮のある男山丘陵があり、狭隘部を作り南に広がる大阪平野と京都盆地の境となっていることから、古代以来の水陸上及び陸上の交通の要衝となってきた。

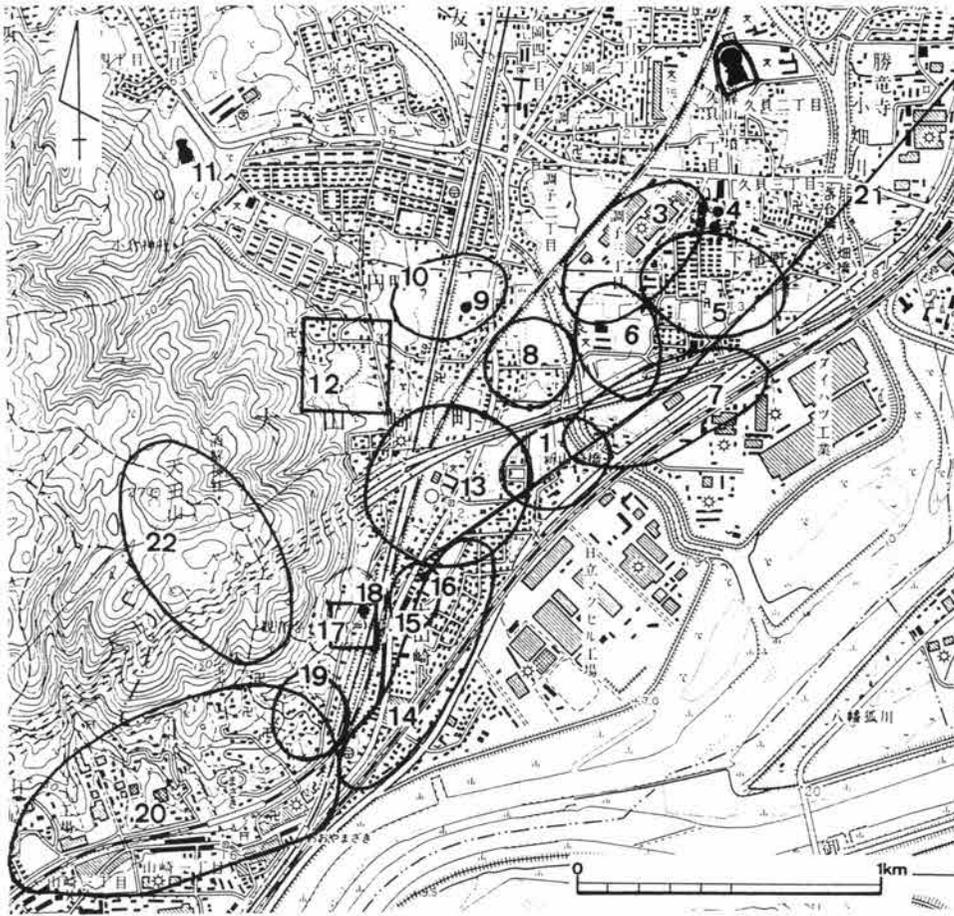
大山崎町の歴史は、山崎聖天境内と字上ノ田から瀬戸内技法によって作られた国府型ナ

イフ形が発見されており、旧石器時代後期にさかのぼることが確認されている。縄文時代には、下植野地区に長岡京市からのびる微高地上に宮脇^(注4)・松田^(注5)・裕遺跡^(注6)が営まれる。縄文時代早期の異形石器(トロトロ石器)と中期・晩期の土器が出土している。算用田遺跡の南に隣接する下植野南遺跡においても縄文時代晩期の遺物が出土している。

弥生時代にはいると、大山崎町に近い雲宮遺跡^(注7)において環濠集落が営まれる。雲宮遺跡は、佐原 眞氏の弥生第一様式編年の基本資料^(注8)となった土器群が出土した遺跡として有名である。大山崎町内では、いまのところ弥生時代前期の遺物は認められない。中期にはいると、下植野南遺跡において集落が営まれる。弥生時代後期にはいると、集落の規模が大きくなり町域に広く集落が分布するようになる。なかでも、前述の微高地周辺では方形周溝墓や竪穴式住居跡が検出され、集落規模も乙訓地域においても有数の規模を持つと想定できる。算用田遺跡の弥生時代後期の遺構も、この一連の集落の末端に位置している可能性も指摘できる。

古墳時代にもそれ以前の中核的な集落が継続する。これまで大山崎町内で発見されているもっとも古い古墳は、丘陵上に営まれた鳥居前古墳^(注9)である。この古墳は前期末に造られた、全長60mの三段築成の前方後方墳で、主体部は竪穴式石室である。出土遺物には環状乳神獸鏡、巴形銅器、玉類、鉄器、埴輪がある。周辺地域の前期古墳の分布と考え合わせると、大山崎地区を中心とした勢力の首長墓と考えられる。中期にはいると、大型の古墳は大山崎町内では認められない。長岡京市南部の恵解山古墳が唯一近接する中期古墳である。恵解山古墳は、全長120mの前方後円墳で周濠^(注10)を持つ。1980年の調査において、前方部埋納施設から刀147本、剣63本、鏃472本、鈍5本、蕨手刀子10本などのおびただしい鉄器が出土しており、前期に比べより広い地域を収める首長の存在が認められる。古墳時代中期から後期にかけて、下植野南遺跡を中心とする集落が大きく居住地域を広げ、乙訓地域において拠点的な集落の1つとなる。恵解山古墳の首長を支える集落の1つであったことが想定できる。

飛鳥時代にはいると文献史料に山崎が見える。『日本書紀』白雉4(653)年条に孝徳天皇の「山碕宮」の名が認められる。白鳳期には山崎廃寺が造られる^(注11)。奈良時代に入ると、この土地が交通の要衝であることを反映して、行基によって山崎橋が神亀2(725)年9月に造られた。また、天平3(731)年に行基は道場として山崎院を造る^(注12)。延暦3(784)年に桓武天皇によって乙訓の地に長岡京が造営された。初期長岡京は、聖武天皇によって設けられた副都難波京の建物の移建によって造営された。淀川をさかのぼり、山崎津で荷上げされ、陸路でも山陽道から山崎橋を通り物資が搬入された。山崎は、都の物流の中心の一つとなっていたことが想定できる。平安時代には山陽道が走り、山陽道の首駅である山崎駅が設



第11図 調査地及び周辺遺跡分布図

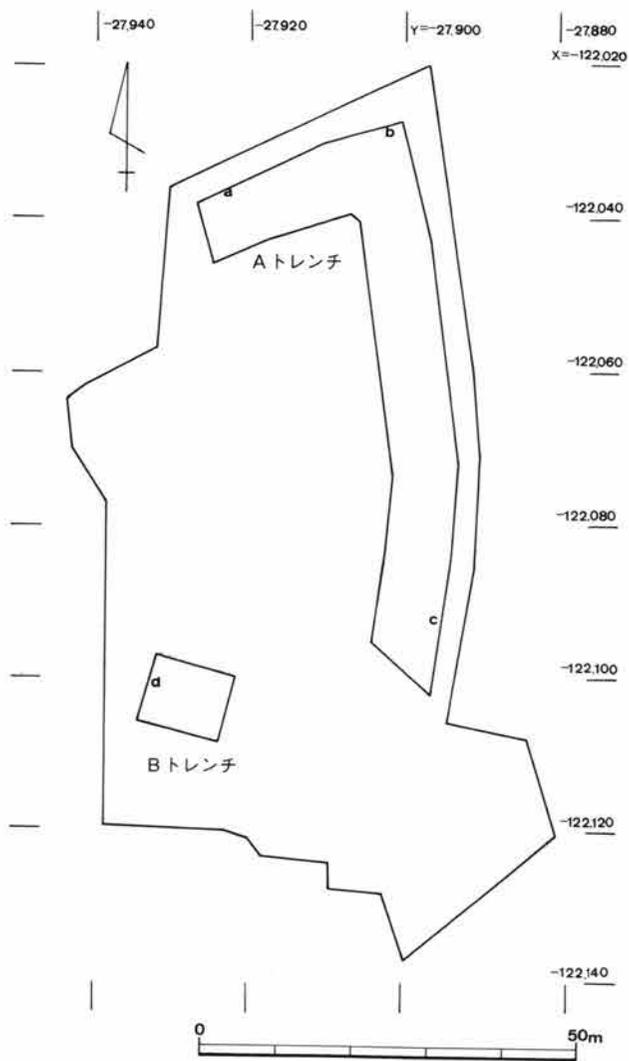
- | | | | | | |
|-----------|------------------|----------|-----------|-----------|-----------|
| 1. 算用田遺跡 | 2. 恵解山古墳 | 3. 砦遺跡 | 4. 境野古墳群 | 5. 宮脇遺跡 | 6. 松田遺跡 |
| 7. 下植野南遺跡 | 8. 金蔵遺跡 | 4. 里後古墳 | 10. 久保川遺跡 | 11. 鳥居前古墳 | 12. 円明寺跡 |
| 13. 百々遺跡 | 14. 山崎津跡 | 15. 堀尻遺跡 | 16. 傍示木古墳 | 17. 山崎廃寺 | 18. 白味才古墳 |
| 19. 山崎遺跡 | 20. 山崎駅・相応寺跡・山崎院 | 21. 久我縄手 | 22. 山崎城跡 | | |

けられた。山崎駅は山崎離宮(河陽⁽¹³⁾離宮)として嵯峨天皇、淳和天皇、仁明天皇の交野・水無瀬野における狩猟時、行幸を受けている。また、後の貞観3(861)年以降は山城国司の申し入れによって第4次山城国府として転用されている。平安時代には山崎津、山陽道などが所在する交通の要衝とともに、地方政治の舞台ともなった。中世には離宮八幡を中心とする油座が組織され、神人と呼ばれる商人、生産者たちによってもっとも繁栄した。天正10(1582)年6月13日には京都本能寺において織田信長を殺害した明智光秀と羽柴秀吉が山崎の地で相見えた。これが世に言う山崎合戦(天王山合戦)である。この戦いに勝利を取めた秀吉は、天王山に山崎城を築城した。

3. 試掘調査概要

a. 調査概要

調査対象地は、南を現在国道171号線、北を平安時代からつづく久我繩手^(註14)に挟まれた南北に長い敷地であった。調査地北に位置する算用田遺跡の第一次調査では、古墳時代の住居跡が検出されているが、調査地の南に位置する山崎津跡の第4次調査では地表面から8mまで調査したが有効な遺構面は認められず、河川堆積物による粘土・礫・砂の互層が認められた^(註15)。また、南に近接する久我繩手の側溝が検出できる可能性が指摘できた。これらのことから、調査対象地内での算用田遺跡の広がりや遺構面の数を確定するために、第

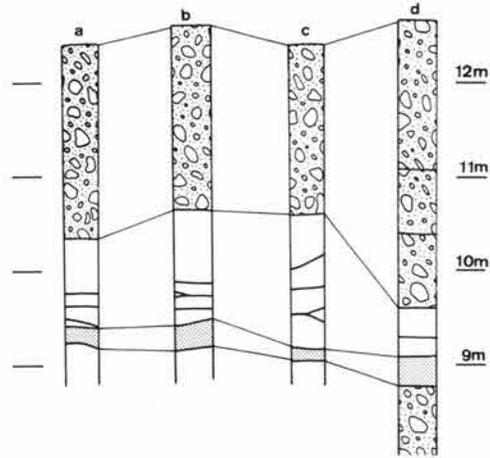


第12図 試掘トレンチ配置図

12図のように、「L」字状のAトレンチと方形のBトレンチの2か所の試掘トレンチを設けた。「L」字状のトレンチは前述の久我繩手の側溝を確認するために、現在の道路に近接して設定した。Aトレンチ南端やBトレンチは小泉川の伏流水があるのか、礫層中から激しく水が吹き出し土層観察の後埋め戻した。

第13図の模式柱状図に見られるように、2m近くの礫が調査対象地全面を覆っていた(表土は整地土で厚さは一定ではない。模式図では表土を省略している)。この礫が周辺の現在の地形を形成したものとみなされる。Aトレンチの屈曲部周辺では、奈良・平

安時代の遺構面が検出できたが、他の部分では遺構面が削られており認められなかった。調査地全面には点のスクリーントーンで表示した飛鳥時代以前の遺物、特に古墳時代の遺物を多く含むを包含層が広がっていた。現地表面から遺構面までが深く、近接する小泉川の河床面より低くなったことから、激しい湧水があり土質も脆弱であったため、飛鳥時代以前の遺構面を平面的に検出できなかつたが、水抜き用の深掘り断面から遺構を検出した。

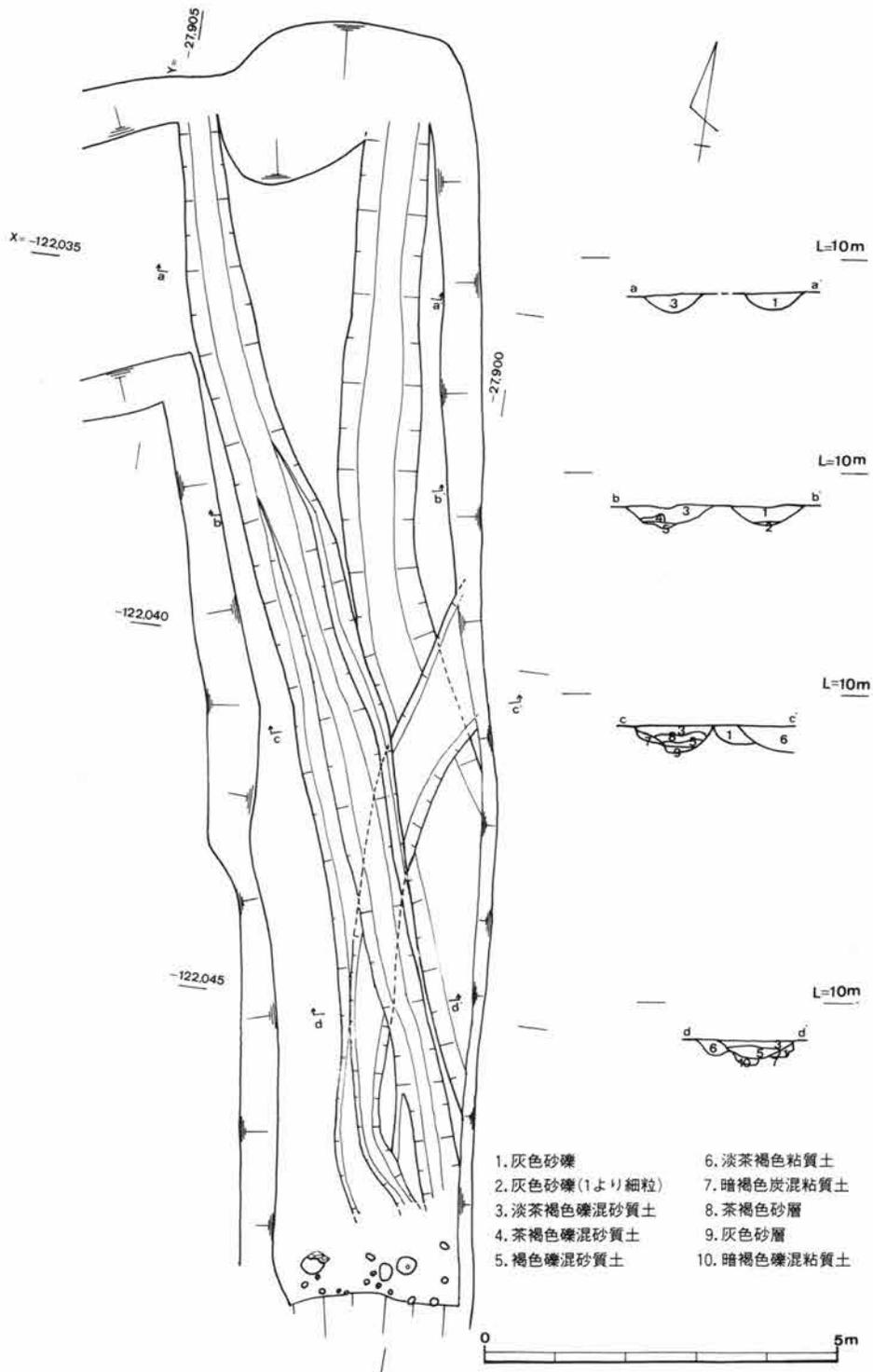


第13図 試掘トレンチ模式柱状断面図

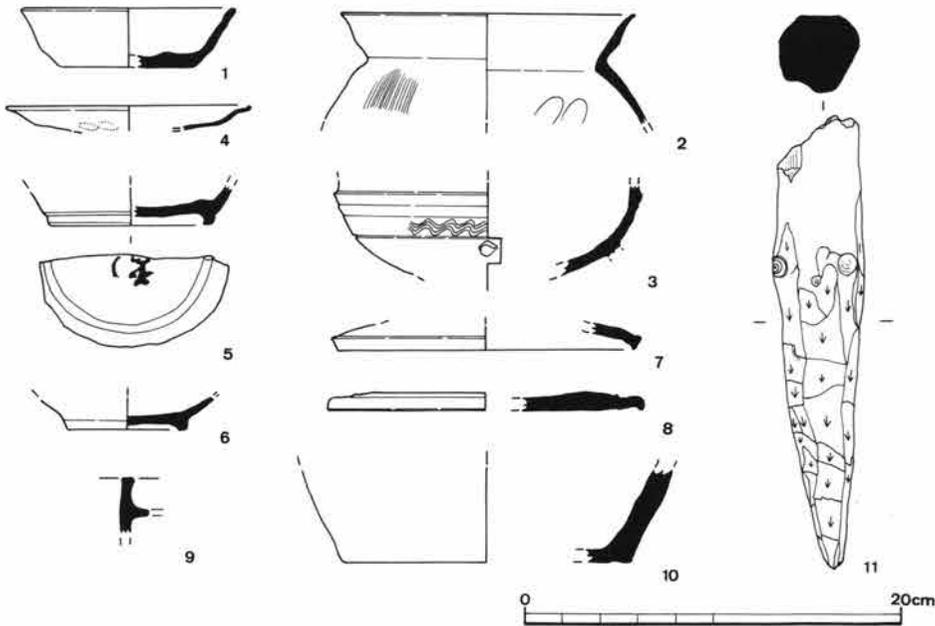
Bトレンチでは包含層の下が礫層になっていたことと、礫層上面が海拔9m以下になることから良好な遺構面が残存している可能性は低いと想定した。調査地周辺地では、海拔9m以下で遺構等は検出されていない。もちろん、これは調査地周辺に地盤の沈降速度が著しく早いところや、断層がないことが前提である。また、郵便局の本部建物は調査地北部に建設されることから、基礎工事等で破壊される部分を中心に、良好な遺構の存在が期待できる敷地内北部の本調査の必要が認められた。奈良時代以降の遺構面が残存している部分は試掘トレンチ内ではほぼ調査終了できることから、飛鳥時代以前の遺構面から調査に着手することにした。

b. 遺構・遺物(第14・15図)

第14図は、奈良時代以降の遺構面で検出した溝と杭の跡である。溝は断面が「U」字状を呈する。数回にわたり掘られているが、礫の流入でその都度埋められていることがわかる。埋土からは、第15図1で示した、奈良時代末から平安時代前期にかけての須恵器・杯が出土している。上位にあった包含層からは備前焼(11)、瓦器片(6・9)、土師器(4)、須恵器(7・8)等が出土している。遺構検出面直上の包含層から長岡京期前後の遺物が出土している。中には5の須恵器杯Bの底部高台内面に墨書が施されたものが認められた。遺物の多くは小片で接合関係もほとんど見られなかった。二次堆積の遺物と想定できる。杭列跡の中には、杭自身が残っているものも認められる。11は表皮の残る杭で先端部は加工によって尖る。この奈良時代以降の遺構面の下位に位置する包含層からは、弥生時代後期から飛鳥時代にわたる遺物(2・3)が出土している。久我縄手の遺構は検出できなかった。



第14図 上層検出遺構



第15図 試掘トレンチ出土遺物実測図

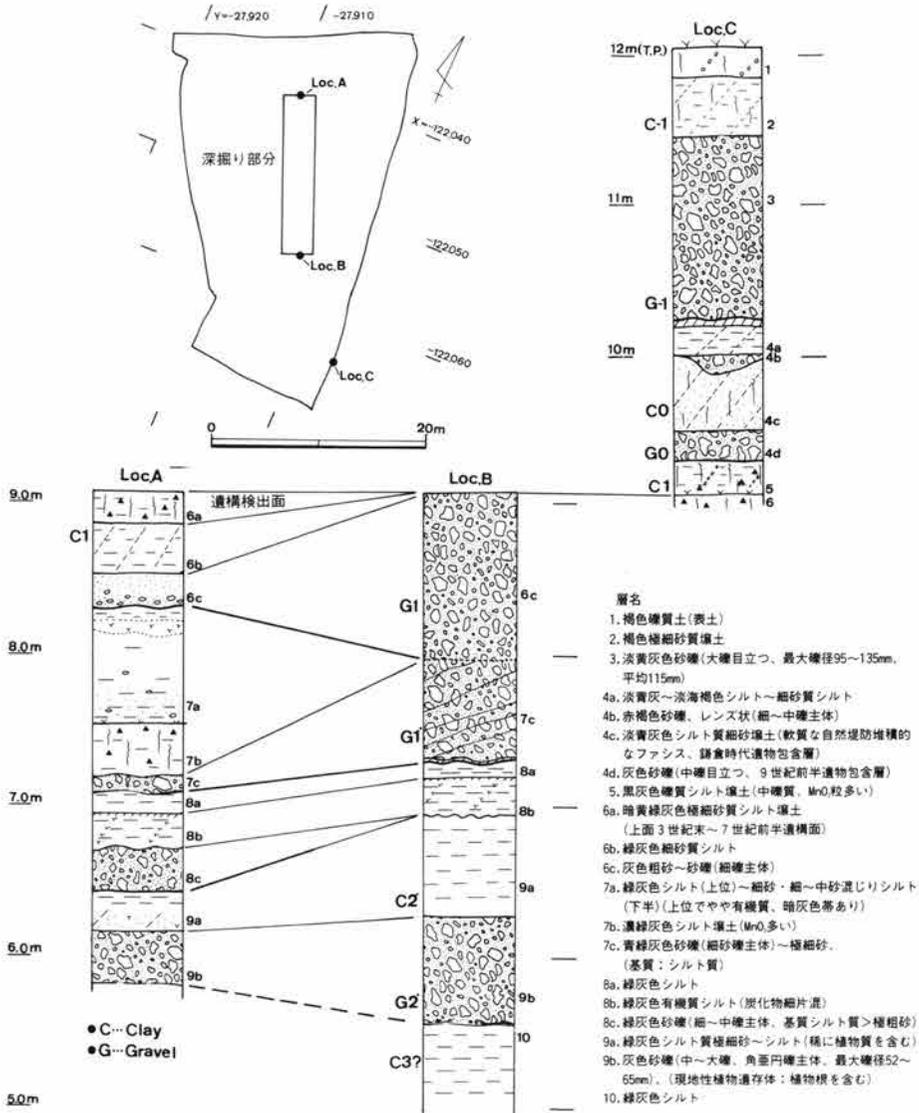
4. 本調査の概要

本調査は、試掘調査を受けて遺構の存在が期待できる調査地北側の建物予定地に試掘トレンチを取り込む形でトレンチを設定した。遺構検出の途中、南側に遺構がのびることが明らかになったため、南側にトレンチの拡張を行った。トレンチは北側に府道、西に民家が近接している。遺構面までの深さが地表面から約3mを測り、かつ大半が礫層で地盤が脆弱であったので、周辺建造物と調査作業の安全のためトレンチは3段に段掘りを行い、約45度の勾配を保つようにした。また、遺構面に近い最下底の段部分は土圧と湧水のためトレンチの壁が崩れ調査の妨げとなるので、鋼管と矢板によって土留めを施し、釜場を設定し24時間4インチ水中ポンプを稼働した。

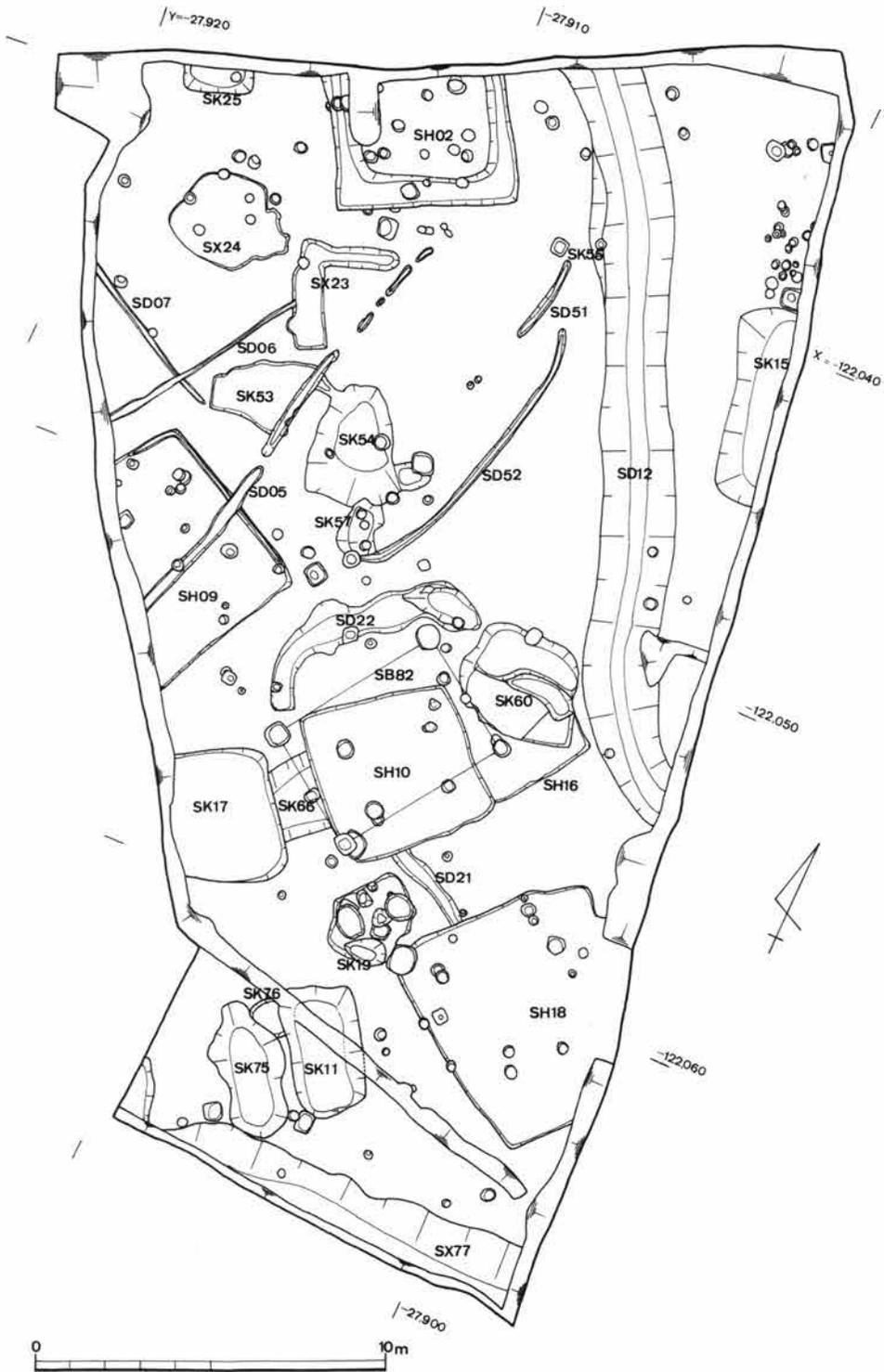
1. 基本層序と堆積環境(第16図)

第16図に示した層序に関し、上層から説明する。深掘り部分は、遺構完掘後に遺構検出面から重機により下層遺構確認をかねて掘削を行った。1層は、細粒の礫質シルトで土地利用等の人為的な営力で堆積した。2層は砂質シルトで、後背湿地であったと考えられる。1・2層は、調査地内での厚さが地点によって異なり、認められなかった地点もある。3層は粗粒の礫層で、大規模な土砂の押し出しによる扇状地性の堆積物と考えられる。現在の小泉川沿いの微高地を形成した堆積物と考えられる。中世～近世の堆積物とみられる。

4 a層は、シルト質の堆積物で、流れを伴う後背湿地であったことを示す。4 bは、やや粗粒のレンズ状に堆積する礫層である。河道の堆積物と考えられる。4 cは、シルト質の細粒状土で、自然堤防堆積物的な軟質の土である。この層は、13世紀前後の包含層である。4 d層は、やや粗粒の礫層である。扇状地性の堆積物と考えられるが、営力は小規模と想定できる。トレンチ北東部には4 d層と5層の間に他の層が入る。この層が試掘時に検出した溝の検出面となる。5層は黒灰色礫質シルト壤土で、弥生から飛鳥時代までの包含層となる。しかし、包含層を人力での掘削途中土器溜まりや炭層が認められた。おそらく5



第16図 算用田遺跡土層柱状図



第17図 遺構図



第18図 包含層内検出遺構

層中に遺構の掘り込み面があるか、6 a層上面が5層に影響を受け、色
 が変化していると想定できる。6 a
 層は、極細砂質シルト壤土で、後背
 湿地における凹地の埋積土である。
 上面は、弥生時代末から飛鳥時代の
 遺構の検出面となる。6 b層は、緑
 灰色砂質シルトで、後背湿地におけ
 る流れを伴う凹地の埋積土である。
 6 c層は、細礫を主体とする灰色礫
 層である。扇状地の堆積物で、中州
 を形成していたと考えられる。部分
 的に5層の下に直接6 c層になる部
 分も認められた。7 a層は、緑灰色
 シルトで、上位は細粒で下位ほど粒
 土が大きくなる。後背湿地から泥炭
 地に変わる堆積環境の変化が認めら
 れる。7 b層は濃緑灰色シルト壤土
 で、マンガン粒を多く含み土壌化が

認められる。後背湿地の凹地の埋積土である。

この層上面では今回の深掘りでは遺物が検出できなかつたが、弥生時代末以前の遺構面になる可能性が高く、面的な調査の対象として考慮する必要がある。7 c層は、細礫を主体とする青緑灰色砂礫層である。扇状地性の堆積物である。8 a層は、緑灰色シルトで後背湿地であったと考えられる。8 b層は、暗黒灰色有機質シルトで、炭化物の細片を含む。後背湿地であったと考えられる。8 c層は、細砂～中礫を主体とする緑灰色砂礫層で、基質はシルト質が強い。比較的狭い範囲の河道堆積物と考えられる。9 a層は、緑灰色シルトで河床から後背湿地への堆積環境の変化が認められる。9 b層は、中～大礫の粒度を持つ角～亜角礫を主体とする灰色砂礫層である。扇状地・河道であったと考えられる。9 B層上面には現地性の植物根が見られ、比較的低水位になったことがわかる。10層は、緑灰色シルト層で、後背湿地であったと考えられる。

II. 遺構 (第17～34図)

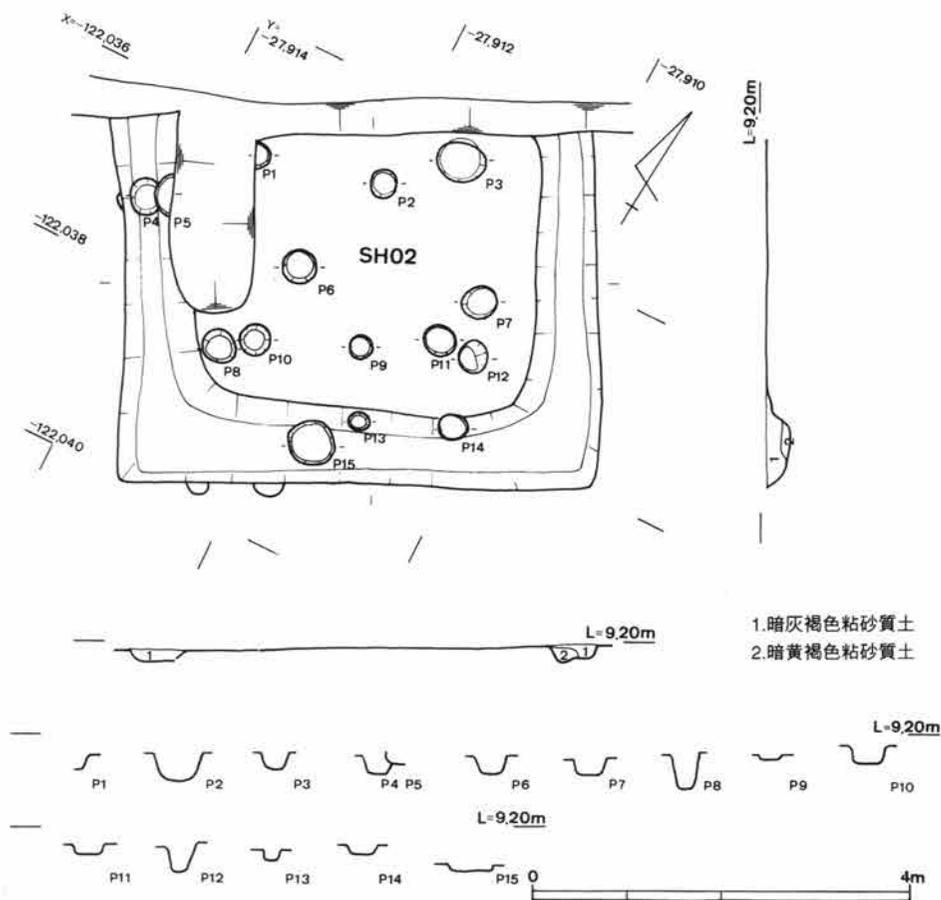
調査区内における遺構密度は高かったが、遺構の残存状態は一般的に悪く、竪穴式住居跡では床面が露出しているものなどがある。遺構検出面は暗黄緑灰色シルトとその下層に位置づけられる礫層が露出した層からなるが、第18図で示したように、遺構検出面上位の黒灰色シルト層中に土器や炭の集中地点が見られた。これらの性格を明らかにするため、出土土器片間の接合率、土器片の破損面の摩滅度、出土レベル、下層の遺構検出面で検出した遺構との位置関係を検討した。

a. 弥生時代

ここでは、明らかに古墳時代に入る遺物が出土していない弥生系の遺物が出土した遺構を弥生時代とした。周辺の遺構のあり方から古墳時代初頭の遺構の可能性は極めて高い。

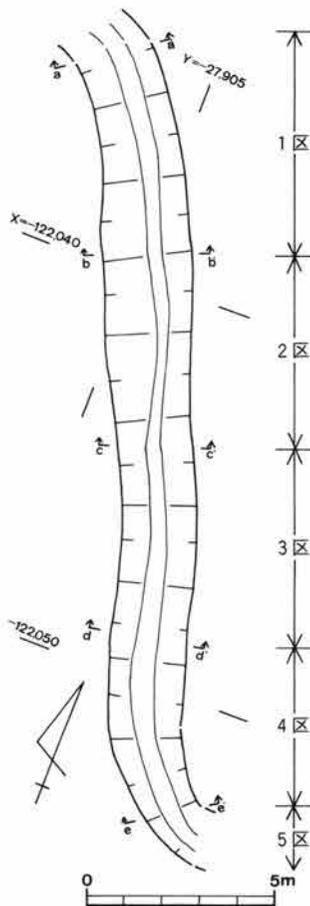
竪穴式住居跡 S H02 (第19図)

トレンチ北辺で検出した竪穴式住居跡である。北側はトレンチ外に続く。周壁溝の幅が

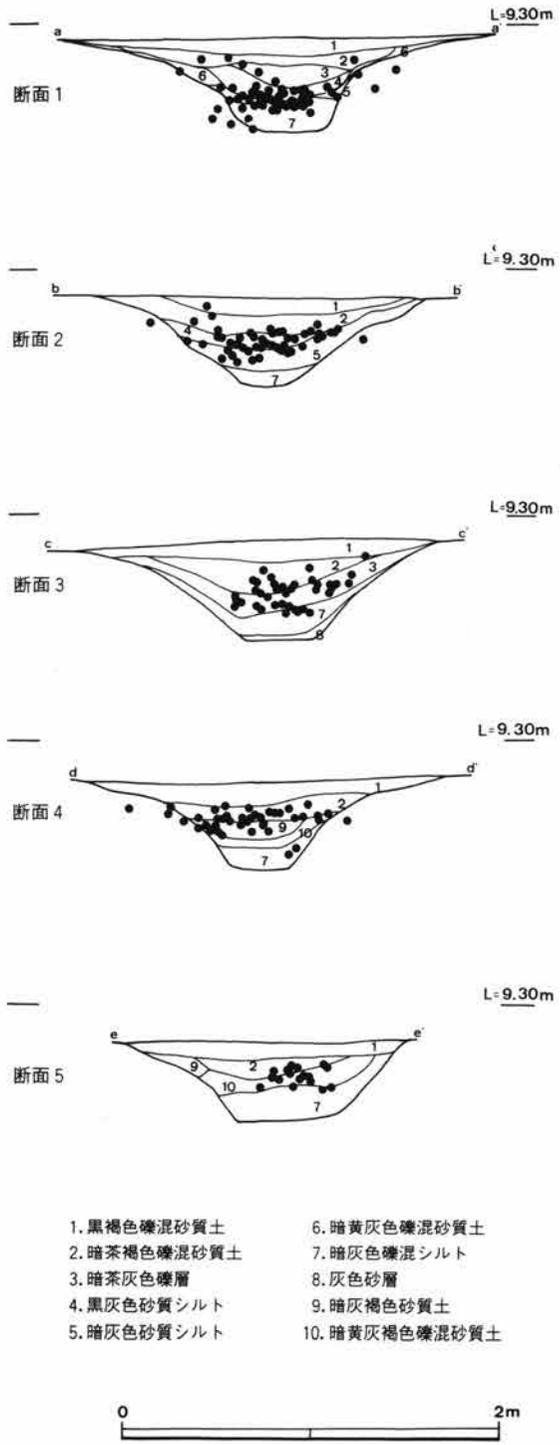


第19図 S H02平・断面図

大きく、幅は約1.0mを測る。床面は検出面とほぼ同レベルであった。断面の観察から東側の溝は、大きく溝が掘られた後内側を埋め戻した可能性を示す。南側の溝中央部にある土坑は溝の埋土を取り除いた後に検出した。この土坑の埋土には炭化物が多く含まれていた。住居跡の年代は、周壁溝内の細片から弥生時代末と考えられる。P3は住居跡の柱穴の位置にあるが、北方向にオーバーハングしており、中から古墳時代と



第20図 SD12断面位置図



- | | |
|--------------|----------------|
| 1. 黒褐色礫混砂質土 | 6. 暗黄灰色礫混砂質土 |
| 2. 暗茶褐色礫混砂質土 | 7. 暗灰色礫混シルト |
| 3. 暗茶灰色礫層 | 8. 灰色砂層 |
| 4. 黒灰色砂質シルト | 9. 暗灰褐色砂質土 |
| 5. 暗灰色砂質シルト | 10. 暗黄灰褐色礫混砂質土 |

第21図 SD12断面・遺物出土レベル

考えられる土師器の高杯の杯部が出土したので、時期には不確定要因が認められる。南北方向の検出長約4.2m・東西長約4.9m、周壁溝の検出面からの最大深さ約0.25mを測る。

土坑 S K 55

平面形が方形を呈する土坑で、完形の器台が横倒しの状態で検出できた。埋土は暗灰褐色粘質土である。一辺が0.4m、検出面からの最大深さ約0.25mを測る。

b. 古墳時代須恵器出現以前

溝 S D 12(第20・21図)

トレンチ内で直線状を呈する断面が逆台形の溝である。溝の方向性を確認するため埋め戻し時に重機によって確かめた結果、北では大きく西に曲がり、南では東に曲がるのがわかる。多くの土師器が検出することが期待されたので、第20図で示したように5の区域に分け遺物を取り上げた。

また、比較的大型の土器片については個体ごとに取り上げ、第21図に示したように出土レベルを1区はa、a'断面、2区はb、b'断面、3区はc、c'断面、4区はd、d'断面、5区はe、e'断面、に投影した。大型の土器片の多くは溝の中層から出土する。S D 12は、1区から5区へと溝下底部が低くなる、調査時の所見では10cm強の深度幅を持ち、中央部に向かい落ち込む傾向が見られた。土器は溝全体に一律な出土状態を示すのではなく、いくつかの集中区に分かれた。1回ごとの廃棄単位とも考えられる。これらとは別に細片が多くなるが、溝最下層からは、比較的古い土器群が出土している。

溝の検出面及び遺構掘削中に上面から溝を掘り込む柱穴を検出したが、埋土がS D 12に近似しており、すべてを検出することが困難であった。このため、S D 12出土遺物には、若干の新しい時期の土器の混入が認められる。溝の年代としては庄内期から布留の前半と考えられる。トレンチ内におけるS D 12の長さ約22.0m・幅2.4m、検出面からの深さ約0.11mを測る。多くの遺構が底面まで削られていることと考え合わせれば、集落を区画する溝になる可能性もある。

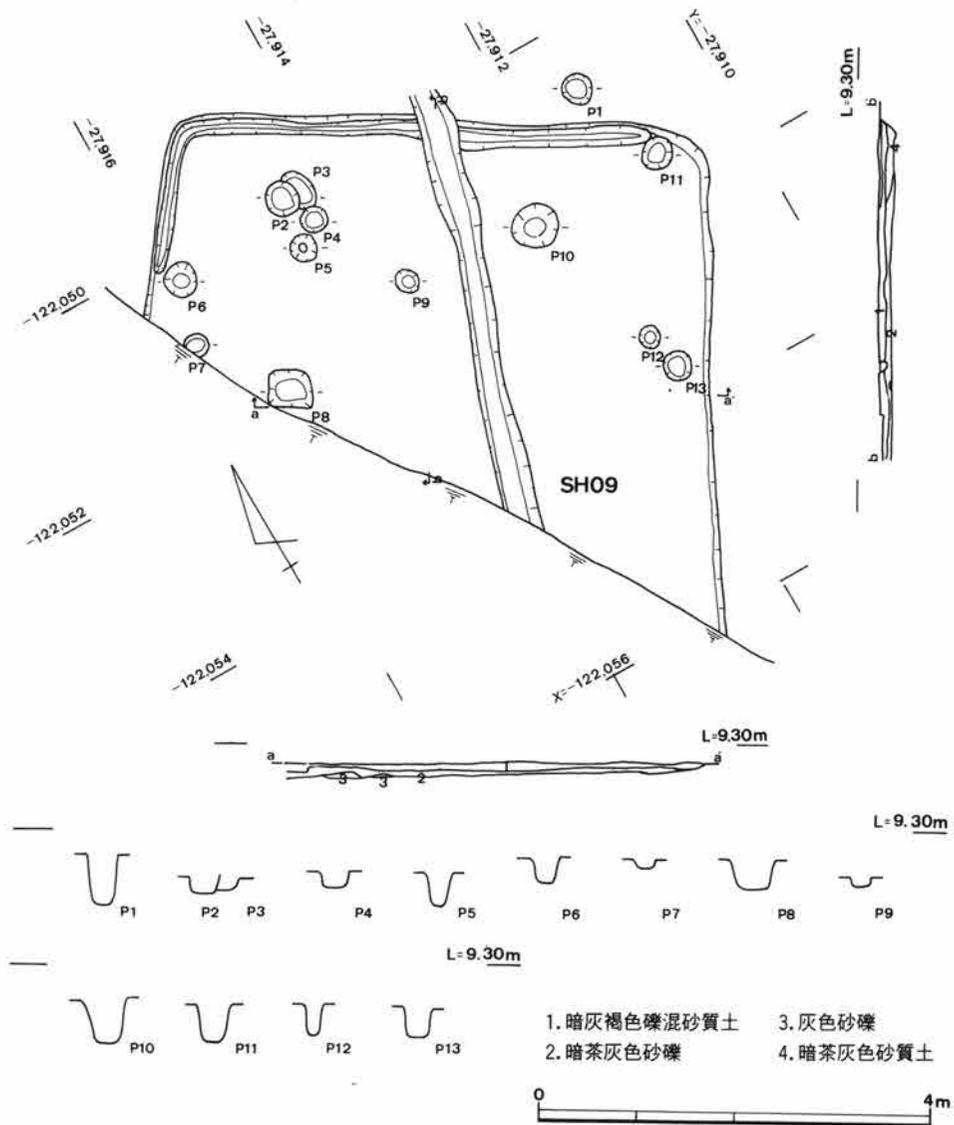
落ち込み状遺構 S X 77

遺構はトレンチ外へ緩やかに落ち込む。出土遺物からみて、古墳時代前半の時期を与えることができる。検出部分における検出面からの深さは約0.9mを測る。埋土は暗灰褐色砂質シルトである。

c. 古墳時代須恵器出現以後

竪穴式住居跡 S H 09(第22図)

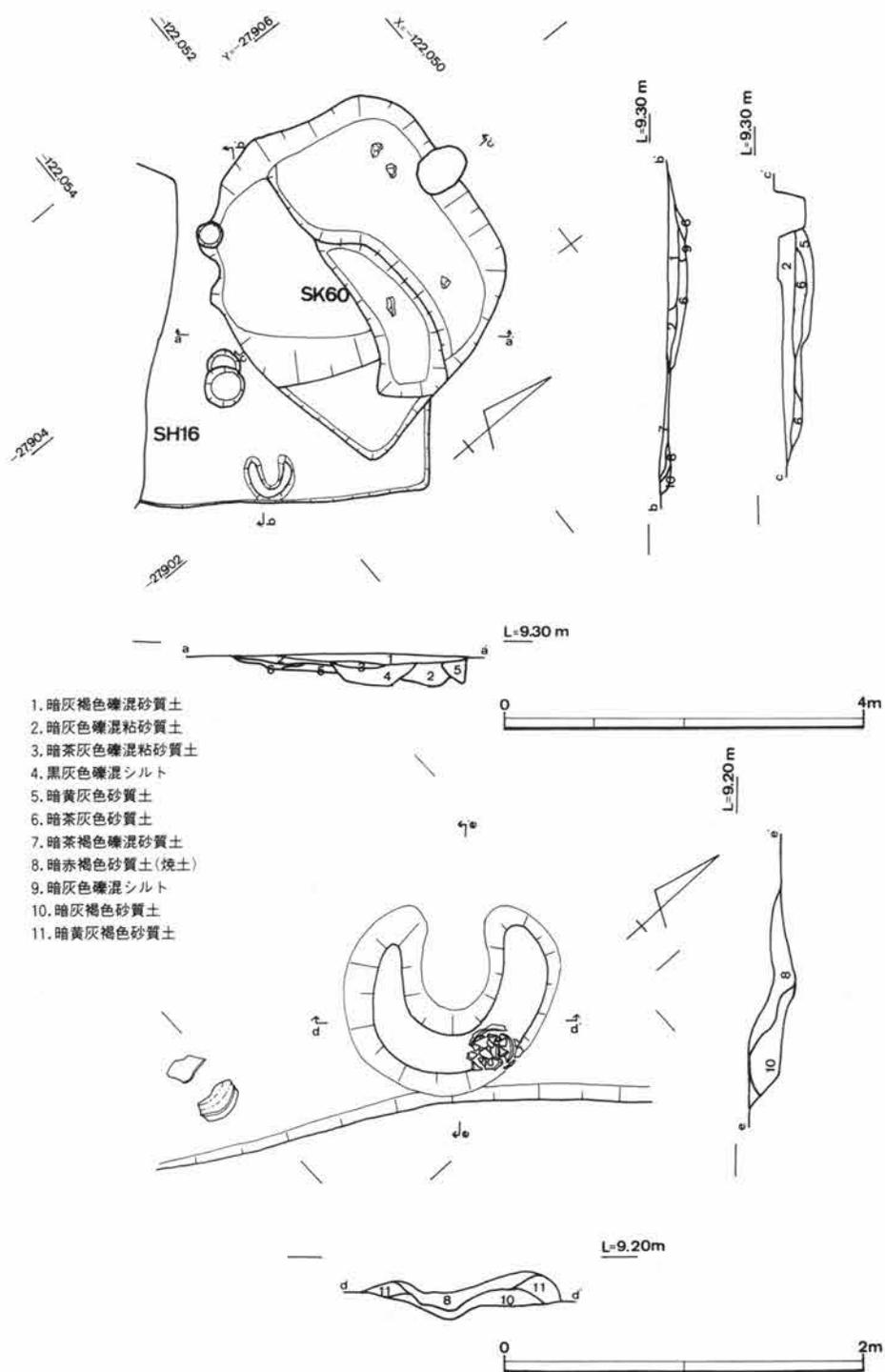
調査区西辺で遺構の2/3検出できた竪穴式住居跡である。周壁溝は住居跡床面北側の



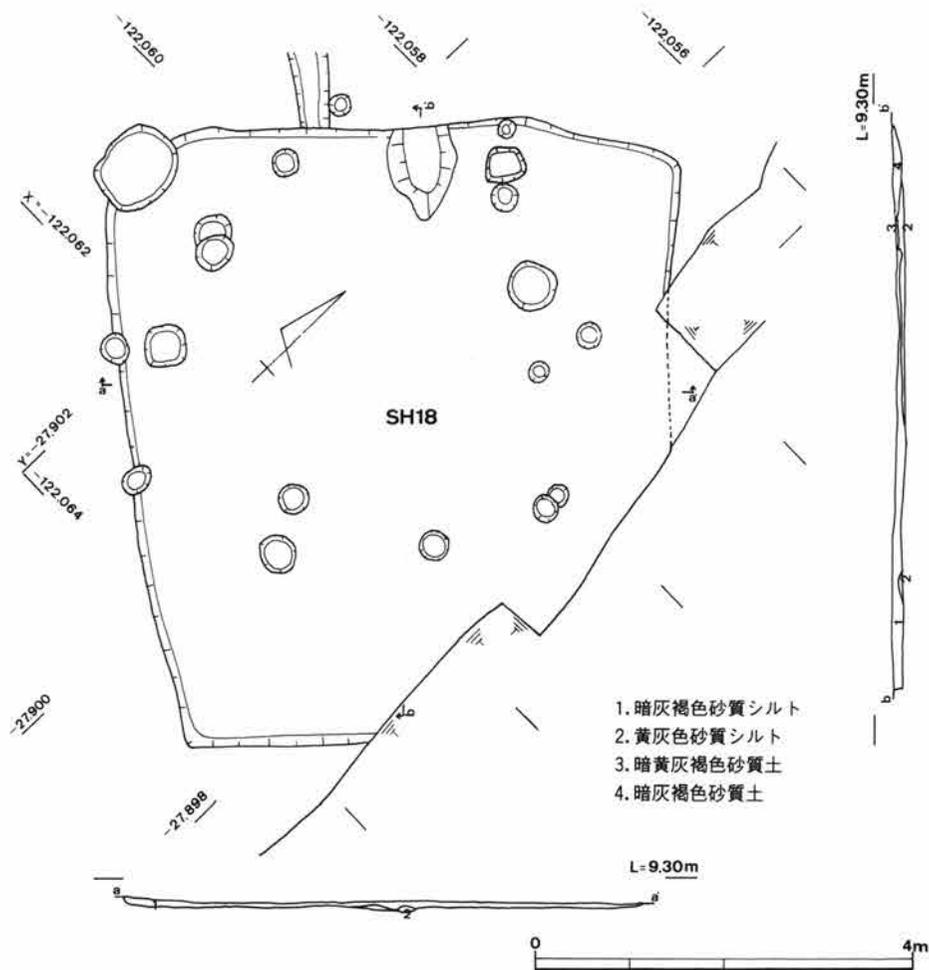
第22図 SH09平・断面図

み認められた。他の周壁溝がめぐる可能性のある部分は、床面が礫層になっており、断ち割ったが周壁溝は検出できなかった。

また、北辺中央部外側には焼土塊が認められたが、明確な竈跡とは認められなかった。出土遺物は少なく時期決定の決め手を欠くが、おおむね古墳時代後期と考えられる。東西方向5.0m、南北方向の検出長6.2m、検出面から床面までの深さ約0.13m、周壁溝の床面からの深さ0.03mを測る。



第23図 SH16・SK60平面・断面図及びSH16竈拡大図



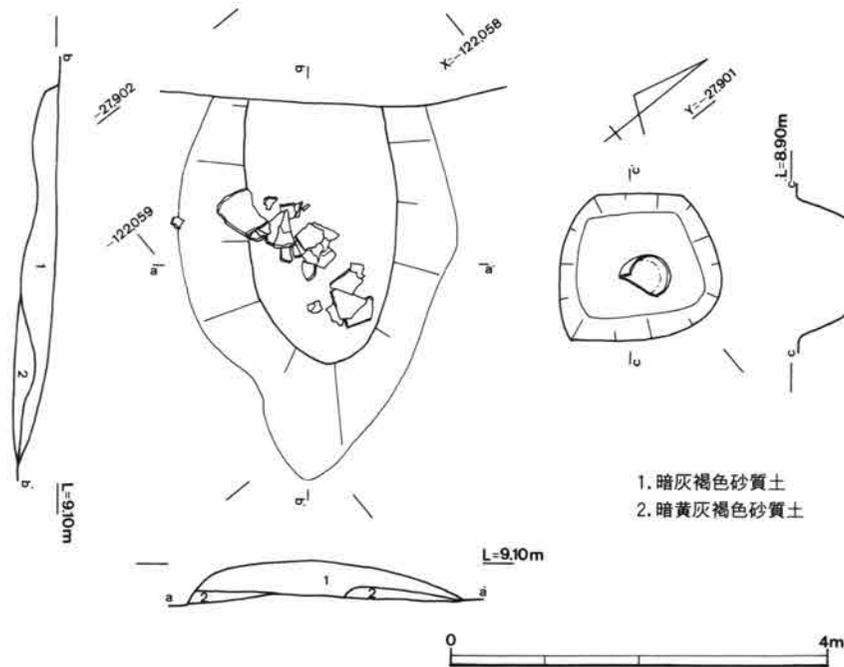
第24図 SH18平・断面図

竪穴式住居跡SH16(第23図)

SH16は遺存状態が非常に悪く、北半部分は床面まで削平されていた。かろうじて南東部分の周壁が検出できたが、西部はSH10によって壊されていた。竈は南東部分に設けられていた。竈では土師器1個体、周辺部分からは須恵器の杯蓋が出土している。住居跡の年代は出土須恵器から古墳時代後期に位置付けられる。残存する南東辺の長さ約3.2m、北東辺の残存長1.1m、検出面から床面までの最大深さ約0.11mを測る。

竪穴式住居跡SH18(第24・25図)

トレンチ南東部で検出した竪穴式住居跡で、東部がトレンチ外へのびる。南東壁は礫層を掘り込んでおり、廃棄後の崩落のためか検出面で明確なプランはでなかった。北西辺に竈を持つが、形状等は明らかでない。竈からは土師器の甕が出土しているが、体部のみで



第25図 S H 18竈周辺平・断面図

時期は不明である。

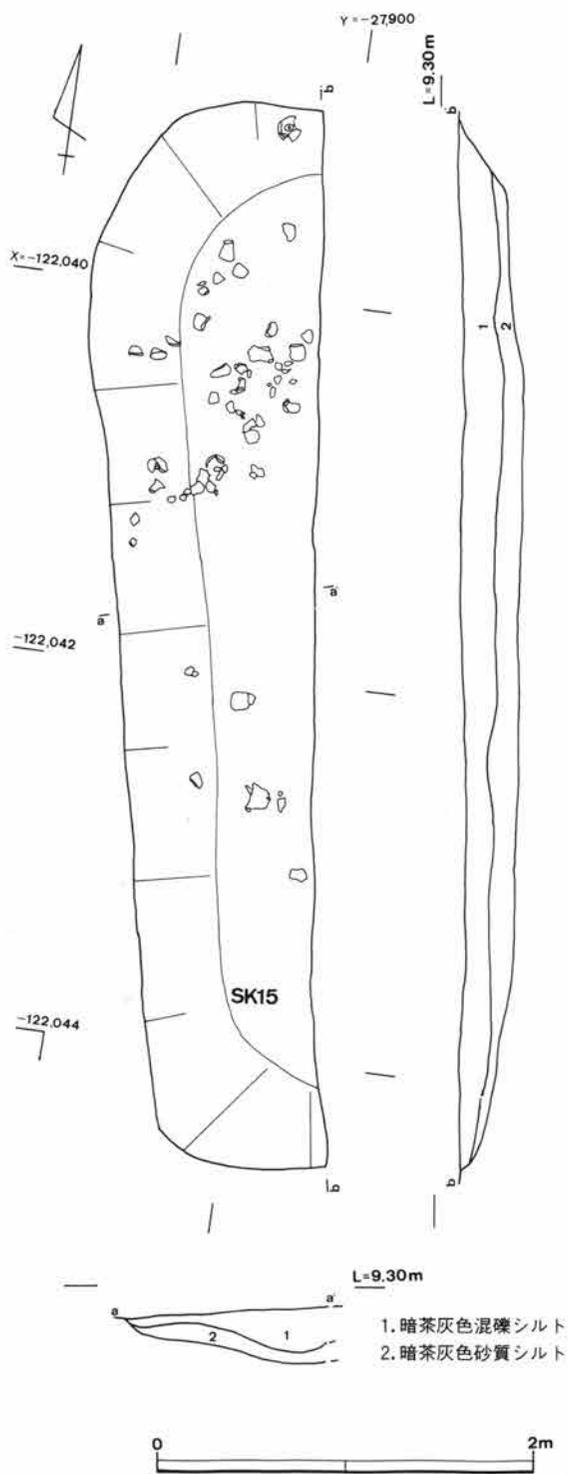
土師器は、竈痕跡の最上部覆うように面をなして出土しており、竈廃絶後に遺物が廃棄あるいは遺棄されたと想定できる。第25図で示したように竈の北の土坑中(柱穴?)からは、古墳時代後期の須恵器の杯身が出土している。この土坑は、住居跡埋土除去後に検出した住居跡と同時期かそれより古いことがわかる。北西辺約6.4m・南西辺約6.6m、検出面から床面までの深さ約0.16mを測る。

土坑 S K 15 (第26図)

調査区内東辺で検出した遺構で、東部はトレンチ外に続く。検出時、隅丸の角を2か所検出したので竪穴式住居跡の一部と想定したが、埋土を取り除くと底部は中心へと緩やかに傾斜し、住居跡の床面とは考えられず土坑とした。遺物には布留式土器が見られ、中でも比較的新しい時期と考えた。埋土は断面図で明らかなように、2層に分けられる。遺物は多くが1層あるいは2層上面で検出され、土坑がある程度埋まった後に埋土内に包蔵されたと考えられる。南北方向約5.4m・東西検出長約1.4m、検出面からの最大深さ約0.3mを測る。

土坑 S K 54 (第27図)

不定形な平面形を持つ土坑である。出土遺物から5世紀後半に位置付けられる。S K 53



第26図 SK15平・断面図

と連続的に続くが連結部分は埋土が薄く一連のものになるかは不明である。検出面からの深さ約0.27mを測る。

土坑 S K 60 (第23図)

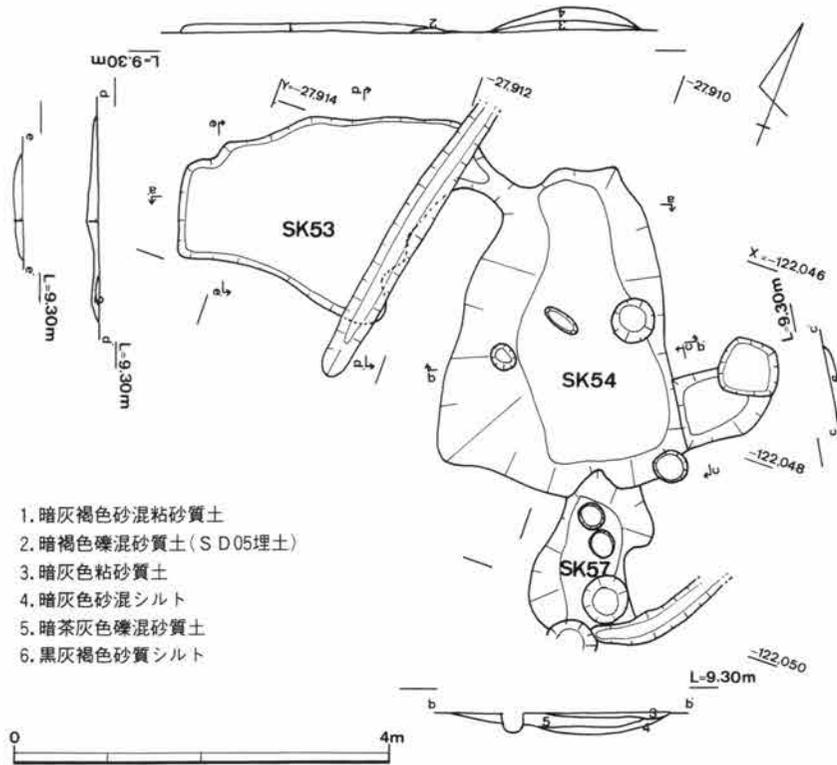
SH16床面で検出したが、断面等では住居跡の埋土がほとんどなかったため、新旧関係を遺構の切り合い関係では明らかにしがたいが、出土遺物からSK60が住居跡に先行すると想定することができる。また、SK60自体も数回の掘削で生じた断面の観察から推測できるが、今回は1つとして報告した。検出面から最深部までの深さは約0.46mを測る。

溝 S D 21

SH10・SH18に切られる遺構である。出土遺物と切り合い関係からみて古墳時代後期と考えられる。検出長約2.6m・幅約0.6m・深さ約0.3mを測る。埋土は、暗茶褐色粘砂質土である。

溝状遺構 S D 22

基盤が礫である西部は浅く、シルト質が基盤となる東部では著しく深くなる。別の遺構の可能性もある。深部には大型の礫が遺構埋土中に浮いた状態で出土している。このような大型の礫は遺構検出面には認められな



第27図 SK53・54・57平・断面図

いことから、人為的に運ばれたと考えられる。検出長約7.6m・幅約1.4m、浅部の深さ約0.05m、深部の深さ約0.4mを測る。

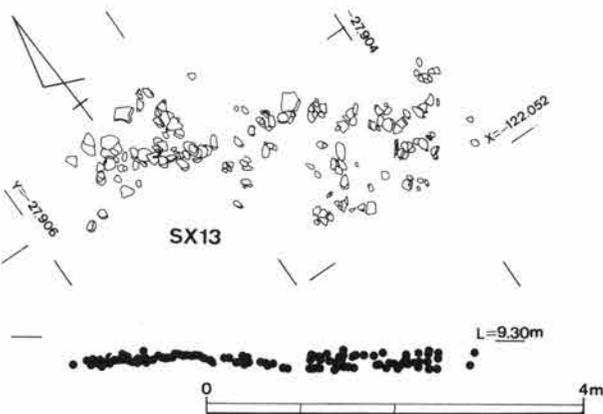
土器溜まり S X 03

包含層中に検出した須恵器の杯身・杯蓋を中心に出土する土器溜まりである。遺物間の接合率が非常に高く、

完形近くに復原できるものも存在している。この土器溜まりの分布域は、下層のSK53・54の上位に位置する。

土器溜まり S X 04

1個体分のタタキのある土師器と、1個体の須恵器の甕からなる土器溜まりである。時



第28図 SX13平・断面図

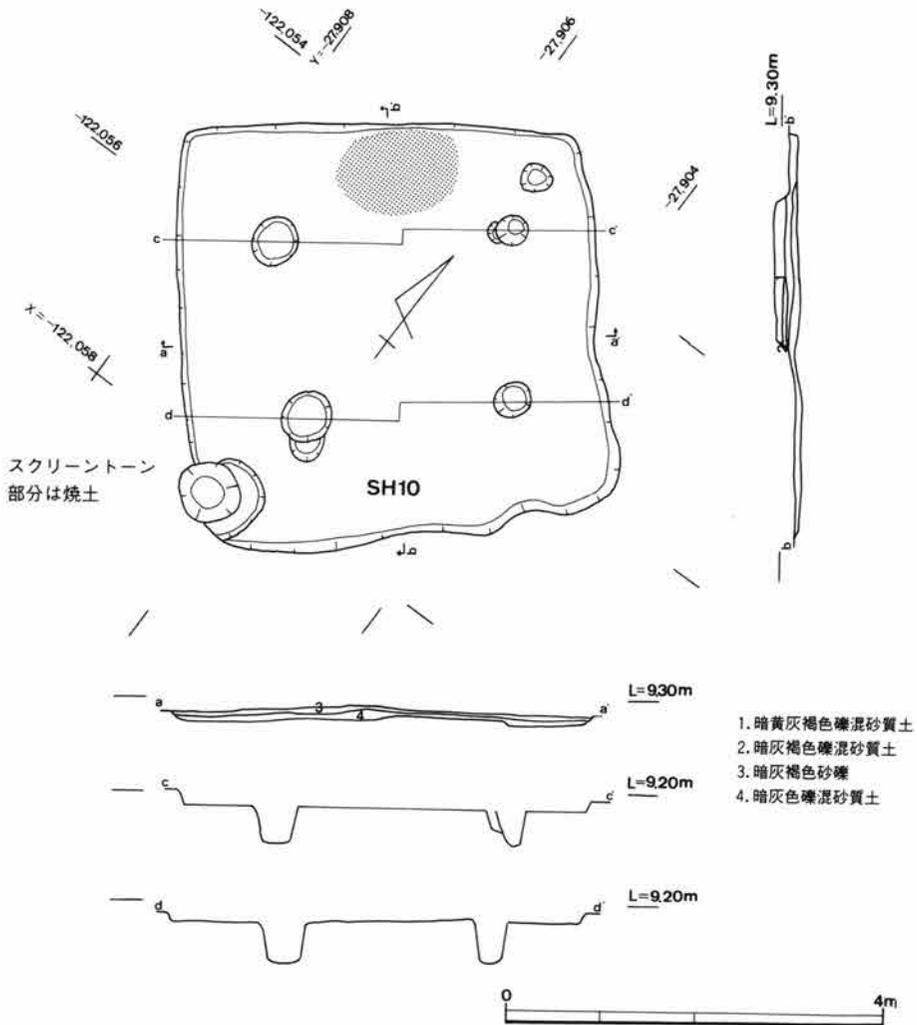
期差が認められるが、明らかに間層を挟み、須恵器が10数cm上方から出土する。出土した土師器の接合率は比較的低い。直径約1m程度の分布域を持っている。

土器溜まり S X 13(第28図)

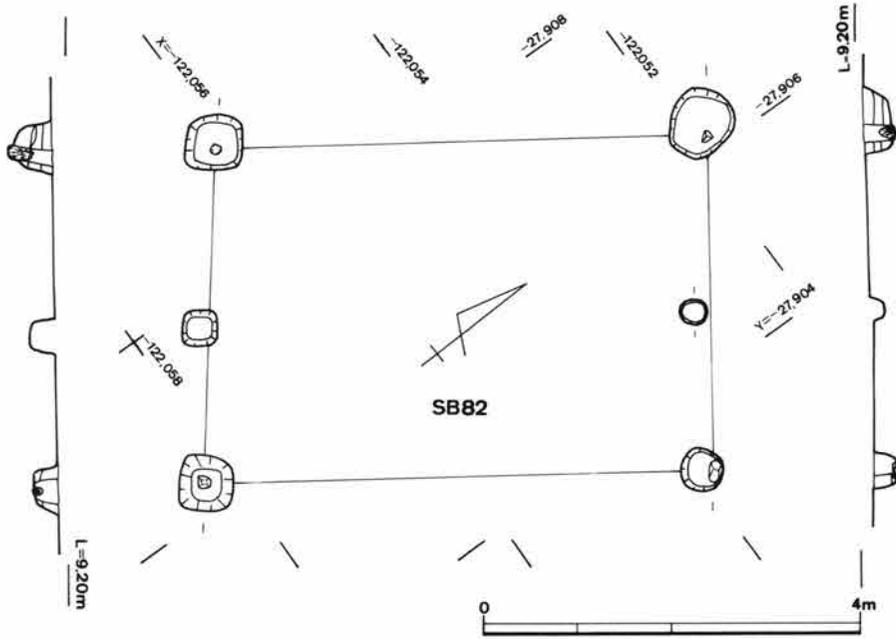
長胴化した土師器甕の細片を中心とする土器溜まりである。第28図で示したように、かなりの深度幅をもって出土していることがわかる。しかし、検出状態は肉眼的には面をなして出土している。

土器溜まり S X 14

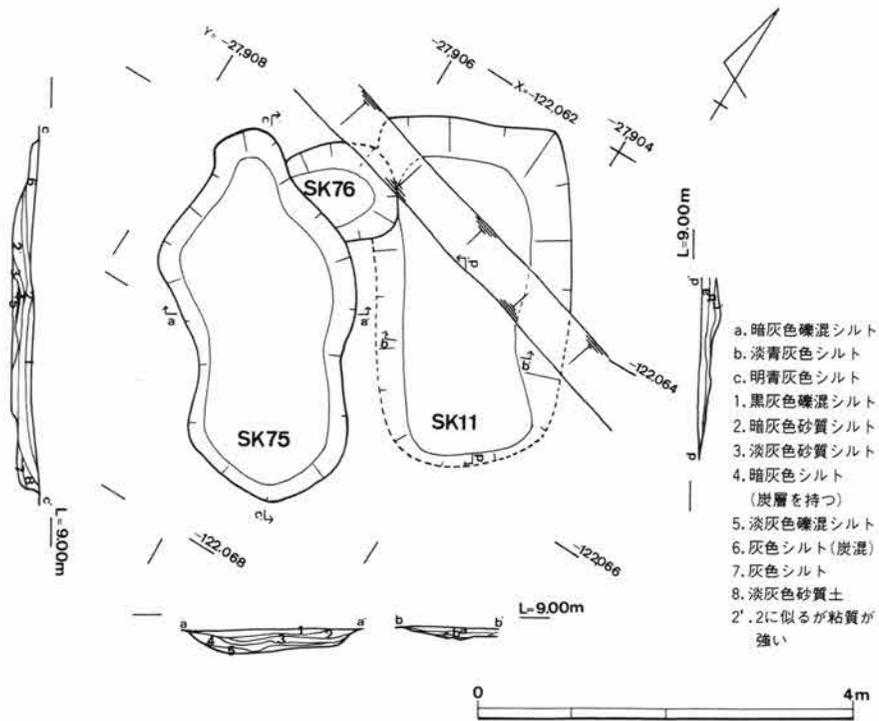
須恵器甕1個体分が遺構検出面と、包含層の層離面に面的な広がりをもって出土した。



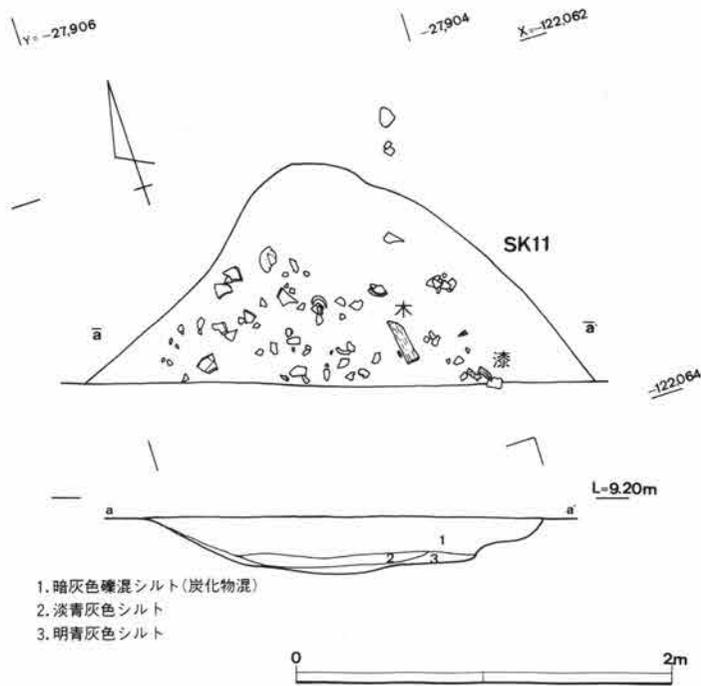
第29図 SH10平・断面図



第30図 S B 82平・断面図



第31図 S K 11・75・76平・断面図



第32図 SK11遺物出土状況

甕は大部分が体部であるが、破片相互の接合率は高い。下層にはSK17があるが、同じ時期のものであるかは不明である。

c. 飛鳥時代

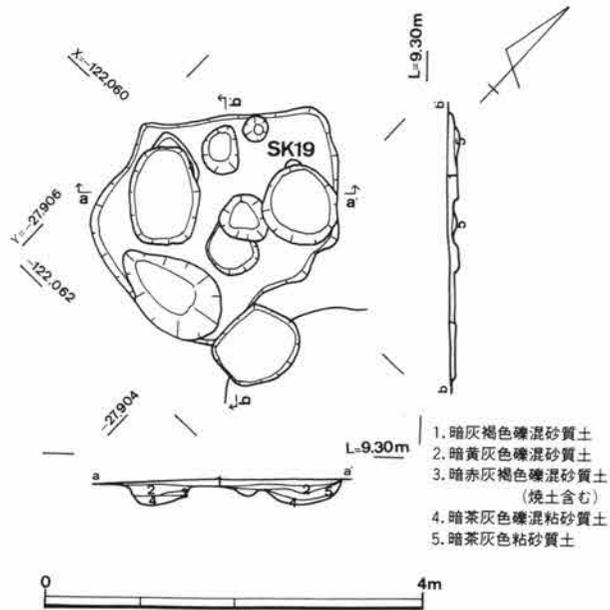
竪穴式住居跡SH10(第29図)

平面形が方形の竪穴式住居跡で、北東部分は礫層に掘り込まれるため、埋没過程で周壁が損壊し形状が乱れる。北西辺の中央部分に焼土が認められた。この部分で須恵器の杯身、高杯が出土した。竈の痕跡は認められなかった。支柱穴は4か所検出したが、北と南の柱穴は2回の建て換えの痕跡を示す。柱間には長短があり、長い柱間は約2.6m、短い方は約1.9mである。住居跡の平面はほぼ正方形で一辺約4.4m、検出面からの深さ約0.15mを測る。

掘立柱建物跡SB82(第30図)

今回の調査で検出した唯一の掘立柱建物跡である。切り合い関係からSH11に後出する。また、包含層との前後関係から飛鳥時代以前と考えられるので、SH11の年代に近い時期

の建設と想定できる。6本の柱で構成されたとしたが、4隅の柱掘形は他のものに比べて大きく、中間の柱掘形が建物の柱でない可能性もある。4隅の柱掘形のうち3か所には柱根が残存していた。北東の柱掘形は他のものに比べて小さく、底部には偏平な円礫が礎盤として置かれていた。南東及び北西柱間約1.7m・北東、及び南西辺の柱間約5.2mを測る。



第33図 SK19平・断面図

土坑SK11(第31・32図)

トレンチ南部でコーナー部分を確認した飛鳥時代(飛鳥Ⅱ)の土坑で、土坑遺物の重要性から、調査期間後半にトレンチを拡張し全貌を明らかにした。平面形は長方形で、中央に向かい深くなる。第32図は遺物出土状態を示す。遺物は土坑底部から約10cmの深度幅で出土した。須恵器・土師器・木器・桃の種・漆被膜が出土した。SK75からSK11出土の須恵器甕腹が比較的多く出土したので同時期と考える。長辺約3.6m・短辺約2.0m、検出面から深さ約0.35mを測る。

土坑SK19(第33図)

検出時外角線が凹凸のある不定形の土坑である。埋土掘削中に数か所の深部が検出できた。出土遺物から飛鳥時代の他の遺構とほぼ同時期であることがわかる。南北方向約2.8m・東西約2.3m、検出面から最も深い部分は約0.25mを測る。

土坑SK75(第31図)

拡張部分で検出した不整形な楕円形の土坑である。SK11に近接し、同時期の所産と考えられる。埋土中には比較的多く炭化物が含まれ、ほぼ中位の深さで小枝片等の炭化物が面をなす層が認められた。遺物には須恵器・土師器・桃の種が認められる。長さ約4.0m・幅約2.0m、検出面からの深さ約0.3mを測る。

土坑SK76(第31図)

SK11とSK75に挟まれた浅い皿状の底部を呈する土坑である。埋土は暗灰色粘質土層

で検出面からの深さは約0.1mである。

炭化物集中区 S X 23

遺構検出面上位の暗色層から小枝、木の葉が面をなして検出できた。S H 18の上層に位置するが、出土遺物から時期差が認められる。S K 75の炭化物の検出状況、時期に共通点があることから、暗色層中に切り込み面があり、暗色層中で終わる遺構が想定できる。

d. 時期不明遺構

土坑 S K 25

北半がトレンチ外にのびる土坑である。出土遺物には土師器の細片が認められたが時期決定できる遺物は認められなかった。検出面からの深さ約0.1mを測る。

土坑 S K 17

方形を呈し、南部が削平され検出面では立ち上がりが認められなかった。布留式土器等の細片などが出土しているものの、摩滅が激しく混入の可能性が高く、時期を決定する根拠に乏しいが、飛鳥時代のS H 10に切られるS K 66を切っている。埋土は暗茶褐色礫混砂質土で、検出面からの深さ0.2mを測る。

土坑 S K 57

不定形の土坑で上面から柱穴に切られる。出土遺物には土師器の細片がある。図化できる遺物や時期のわかる遺物は出土しなかった。検出面からの深さ約0.2mを測る。

土坑 S K 66

S H 10との切り合い関係から飛鳥時代以前であることがわかるが、出土遺物は土師器の細片であるため時期は特定できない。

溝 S D 05

S H 09、S K 53を切る南北方向の溝で古墳時代後期以後の年代が与えられる。残存状態が悪いため部分的に切れる。幅約0.4m、検出面からの深さ約0.05mを測る。埋土は暗色の粘質土であるが南に行くに従って、基盤層に含まれる礫が多く含まれる。

溝 S D 06

切り合い関係からS D 07に先行する溝であることがわかる。S X 23との前後関係は両遺構の埋土が薄く不明である。トレンチ内での検出長約6.3m・幅約0.3m・深さ約0.05mを測る。埋土は礫混じりの暗灰色粘質土である。

溝 S D 07

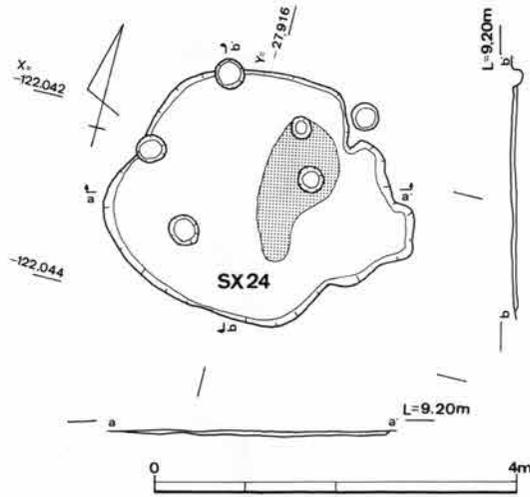
S D 06に直交する溝で東端がトレンチ内で収束する。トレンチ内での検出長約5.1m・幅約0.2m、検出面からの深さ約0.05mを測る。埋土はS D 06に似ている。

溝 S D51

トレンチ内で収束するが、深い部分だけが残ったものと想定できる。断面形は「U」字形を呈する。長さが約9.4m、幅約0.3m、検出面からの深さ約0.06mを測る。埋土は暗灰色の粘質土である。

溝 S D52

S K57を切る溝で、両端が西に曲がる。断面形は「U」字形を呈する。長さ約9.4m、幅が約0.3m、検出面からの深さは約0.7mを測る。埋土はS D51に似ている。



第34図 SX24平・断面図
(スクリーントーン部分は焼土)

窪み状遺構 S X24 (第34図)

直径約3mの不定形の遺存状態の悪い遺構である。埋土は、炭化物を比較的多く含む暗灰色粘砂質土であった。遺構を切るピットは2か所あるが、他のものは、埋土を取り除いた後に検出したが、埋土が非常に薄く厳密な切り合い関係の断定は慎重に判断しなければならない。

スクリーントーン部分は赤化した焼土の範囲である。竪穴式住居跡の残欠である可能性が指摘できる。出土遺物には土師質の土器片があるのみで時期は不明である。検出面からの深さは約0.07mを測る。

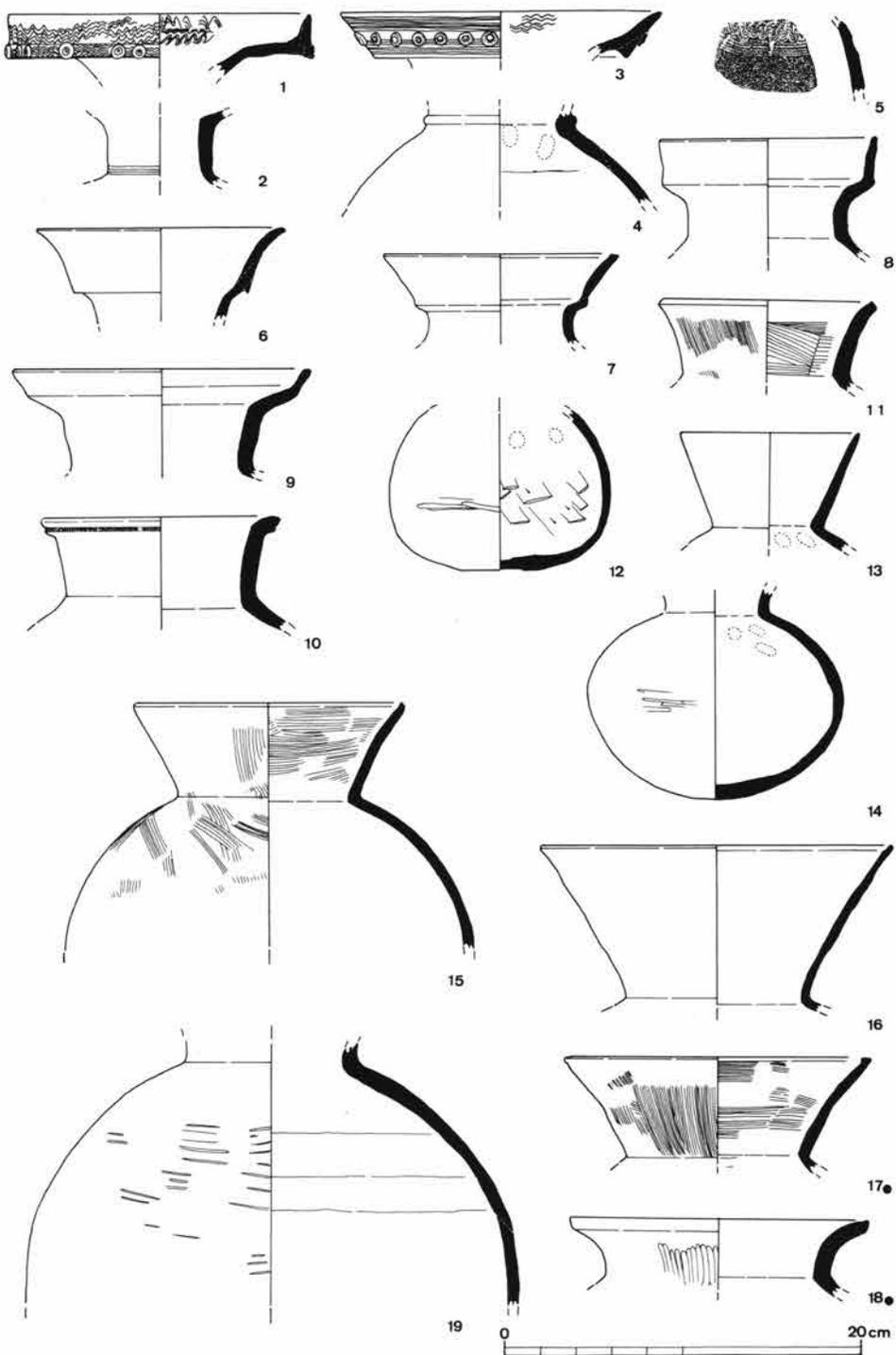
窪み状遺構 S X23

「L」字状の平面形をもつ遺存状態の悪い遺構である。埋土は暗灰褐色粘質土である。遺物には土師質の土器の細片があるが、時期を特定できるものではない。ただし、平面形からS H02と同様の竪穴式住居跡の残欠の可能性が指摘できる。南北方向約3.3m・東西検出長約2.8m、検出面からの最大深さ約0.08mをそれぞれ測る。

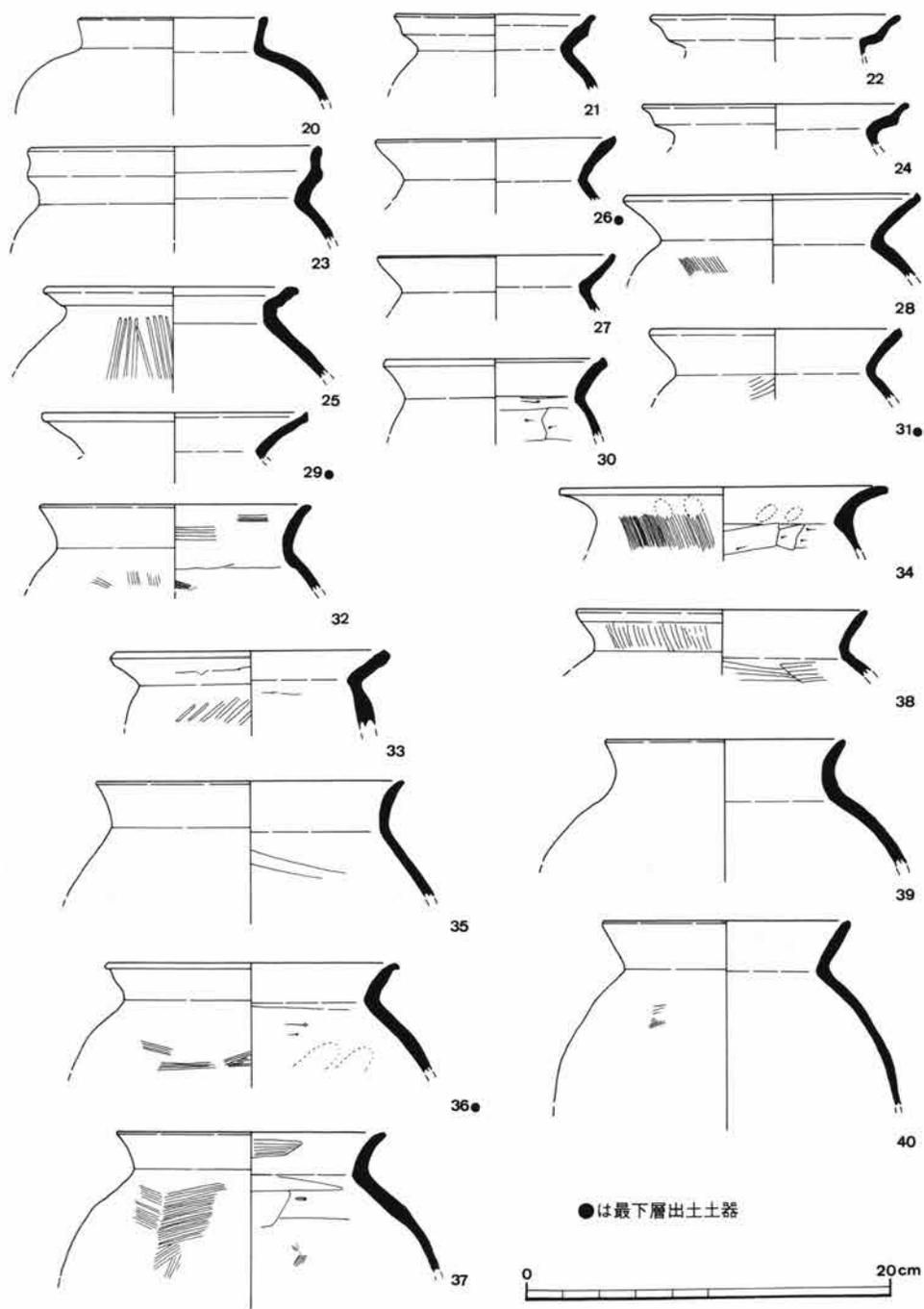
III. 出土遺物

A. 土器

土器はコンテナバットにして60箱以上出土した。古墳時代初頭のもものが主体を占める。多くはS D12内からまとまって出土している。今回の調査で出土した土器のうち、遺構内出土で器形のわかるものについてはできるかぎり図化に努めた。



第35図 SD12出土土器(1)

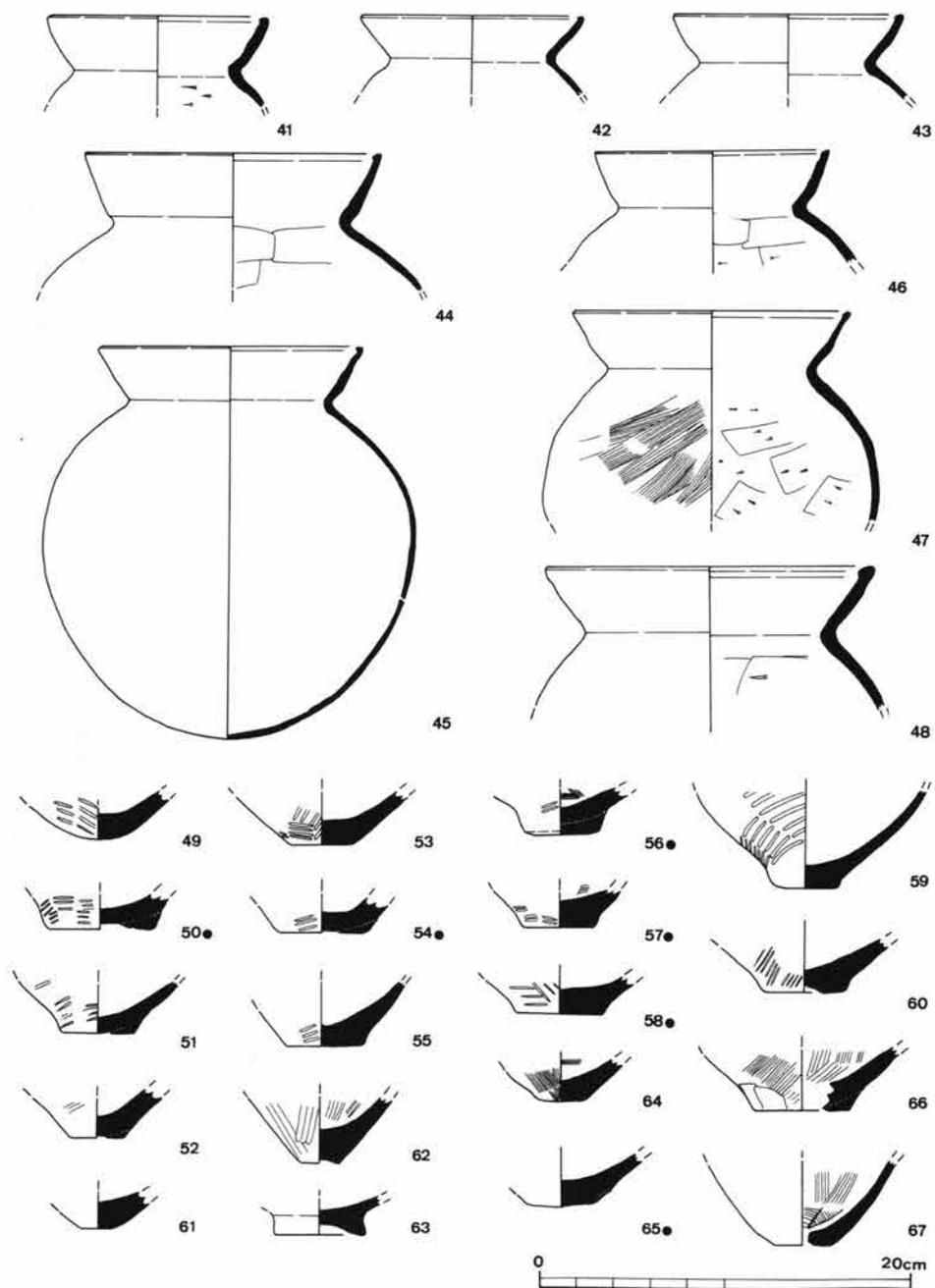


第36図 S D12出土土器(2)

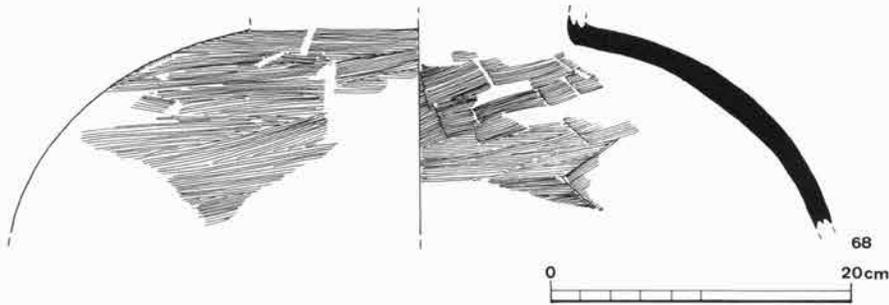
a. 弥生時代

S K 55(第41図)

1は、完形の状態で出土した器台である。脚柱部外面には荒いヘラミガキが認められる。



第37図 S D 12出土土器(3)



第38図 S D 12出土土器(4)

他の部分はハケ調整の後ナデが施される。4か所に先行が認められる。器台端部が上方に垂直にのびることから、丹波地域の影響を受けているものと想定できる。

S H 02(第41図)

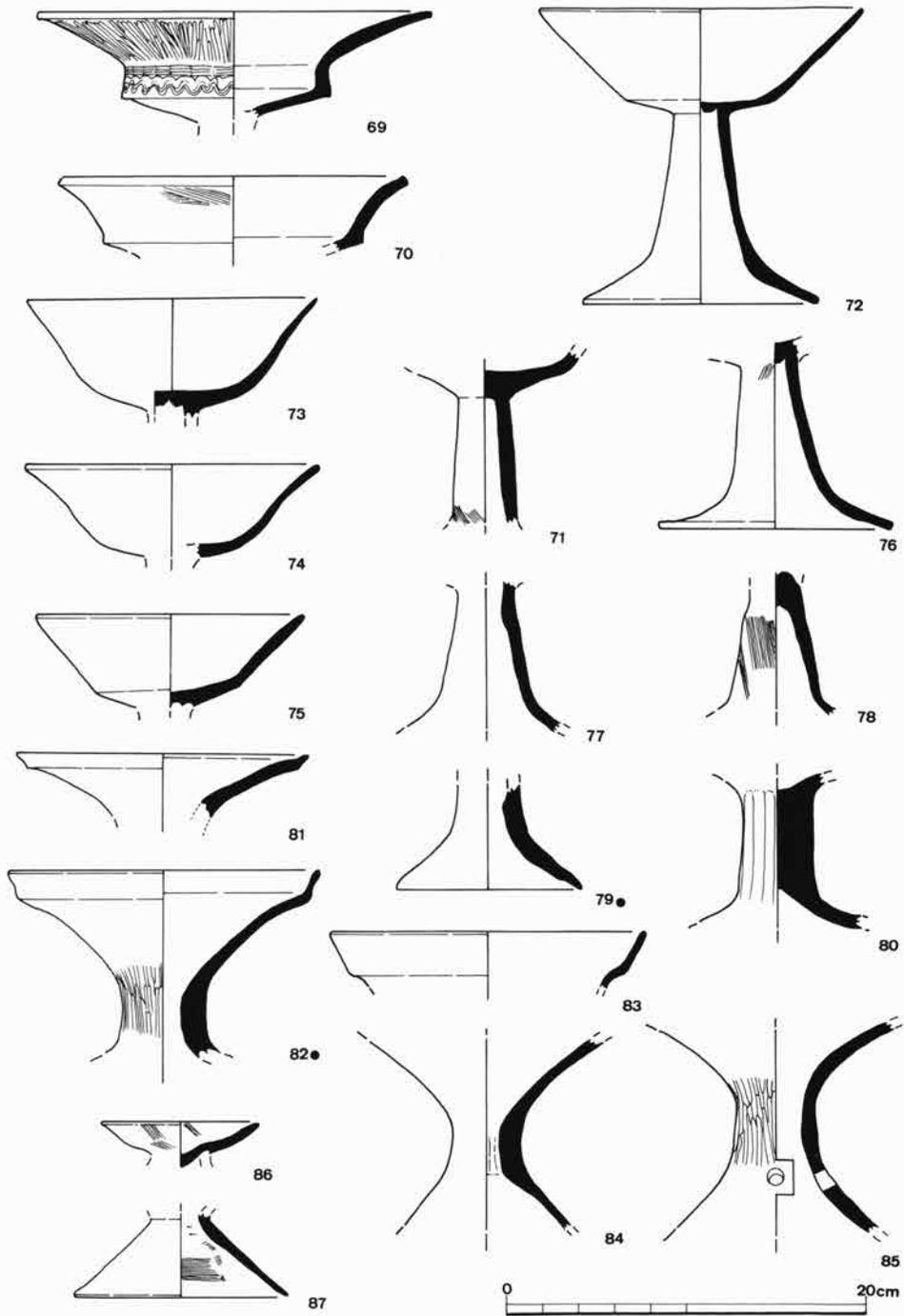
周壁溝部分からは2・3が出土している。2は、外面にタタキの認められる甕である。4は、ミニチュア土器である。5・6は、P 3から出土した高杯である。同一個体ではない。杯部は内外面ともにハケ調整が施されおり完存している。

b. 古墳時代須恵器出現以前

S D 12(第35～40図)

1は、加飾の壺である。1・2・5は、同一個体と考えられる。二重口縁の内外面は波状文が施され、外面には円形浮文が張り付けられる。頸部には4条の沈線、肩部には波状文と沈線、列点文が施される。3は、内面に波状文、外面には沈線文を施したのち円形浮文が張り付けられている。4は、頸部と胴部と継ぎ目に突帯が付く壺形土器である。加飾の口縁部を持つと考えられる。6～9は、二重口縁壺である。9は、摩滅が著しく原位置性には問題がある。10は、壺形土器で端部外面に連続刺突による文様が施される。12～14は、直口壺である。12は、若干凹む底部を持つが、14は丸底である。外面はともに磨き調整が施される。14は、赤色研磨される。19は、体部外面にタタキが施された壺形土器で、頸部は直に立ち上がる。25は口縁部が短く緩やかに「S」字状に屈曲し、体部には荒い縦方向のハケ目が施される東海系の台付壺である。胎土には堆積岩系の砂粒は含まれない。22・24は、生駒山西麓の胎土を持つ二重口縁甕の口縁部である。台付き鉢の口縁部である可能性もある。29は、生駒山西麓の胎土を持つ庄内式甕の口縁部である。生駒山西麓産の土器はこのほかに1個体あるのみで極めて少ない。

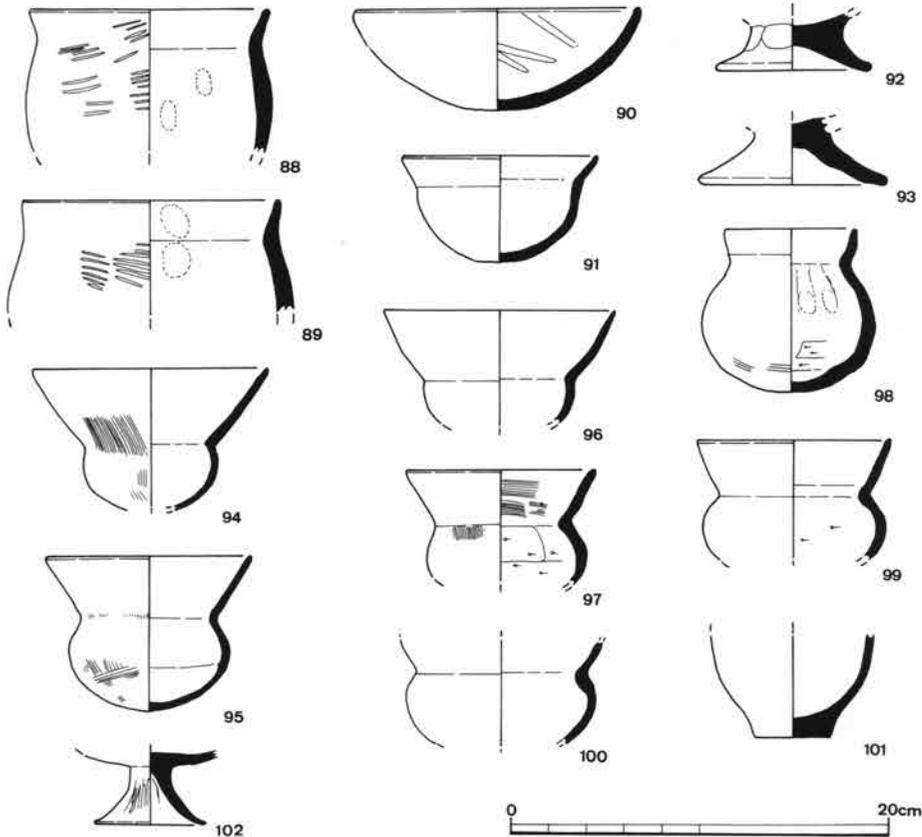
41～48は、布留式土器である。45は、完形でa、a'断面で出土した。内面のケズリの単位は不明瞭であるが、ケズリによって非常に薄くていねいに作られている。布留式土器



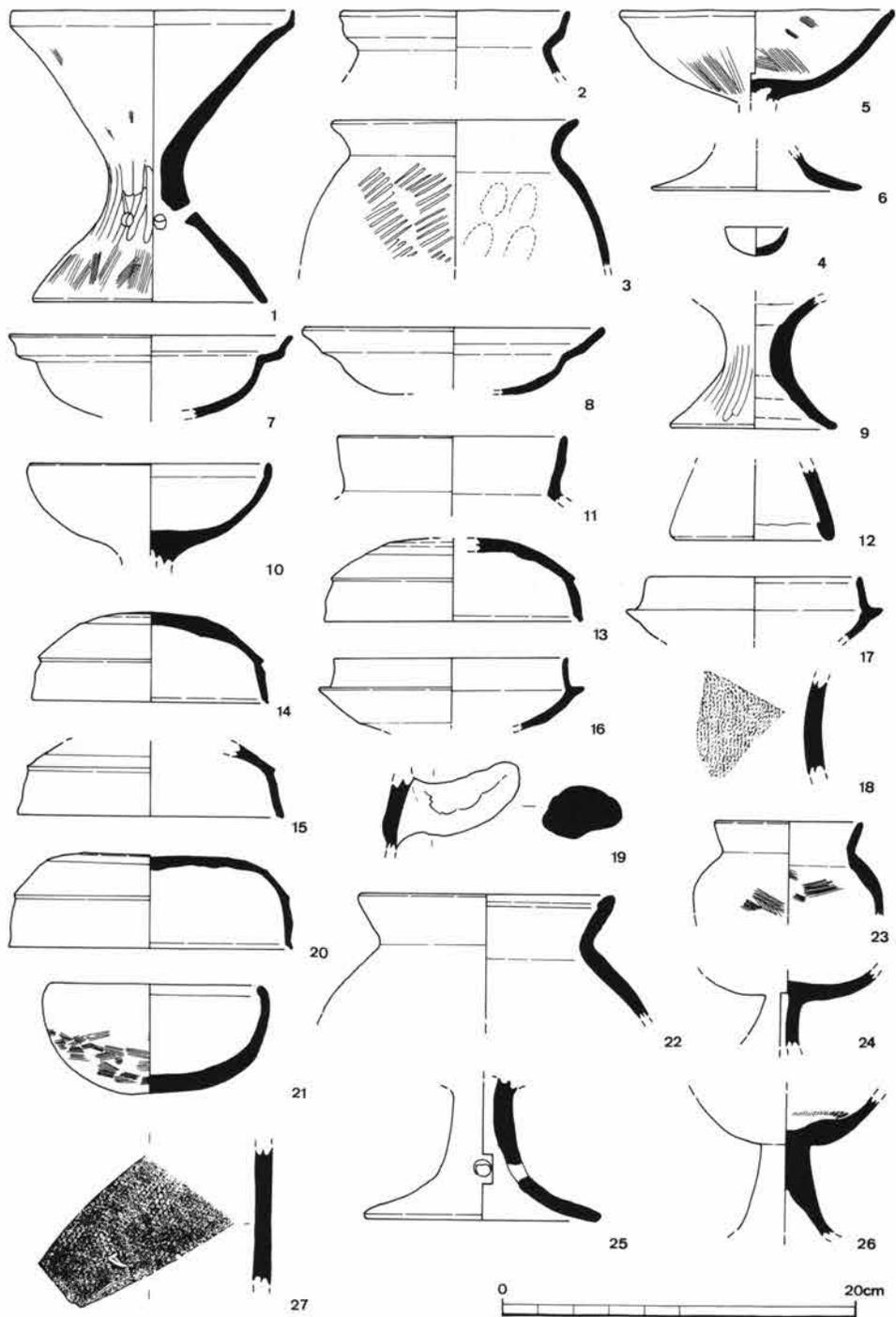
第39図 S D12出土土器(5)

には若干新しい様相を見せるものもあるが、破片が比較的小さく同一固体の破片も少数であった。口縁部を持つ個体の観察では外面にタタキ調整を持つ甕の出土量は少なかったが、底部には比較的多くタタキ調整を持つものが認められた。67は、穿孔された底部である。甕と考えられる。68は、内外面にていねいなハケ調整が施された大型の甕形土器である。体部は他の破片から丸くなるものと考えられる。S D 12の第5区検出面直下から破片が面をなして出土した。

69は、装飾の施された庄内型の高杯である。外面はヘラミガキの後沈線と波状文と列点文によって模様が施される。この文様パターンは第35図1の二重口縁壺肩部の施文と同じことからセット関係をなすと考えられる。内面は剥離のため調整が不明であるが、ヘラミガキが施されていたと想定できる。70は、緻密な胎土を持つ口縁部である、大型の二重口縁壺の口縁部である可能性もある。高杯の多くは丸い杯部を持つ新しい様相を示すものが多い。81～85は、大型の器台である。端部が上方につまみあげた特徴をもち、端部のないものについても、形態からS K 55出土の器台と同系統であると考えられる。85は、皿状の



第40図 S D 12出土土器(6)



第41図 弥生・古墳時代遺構出土遺物(1)

S K 55(1)

S H 02(2~6)

S X 77(7~9)

S H 09(10)

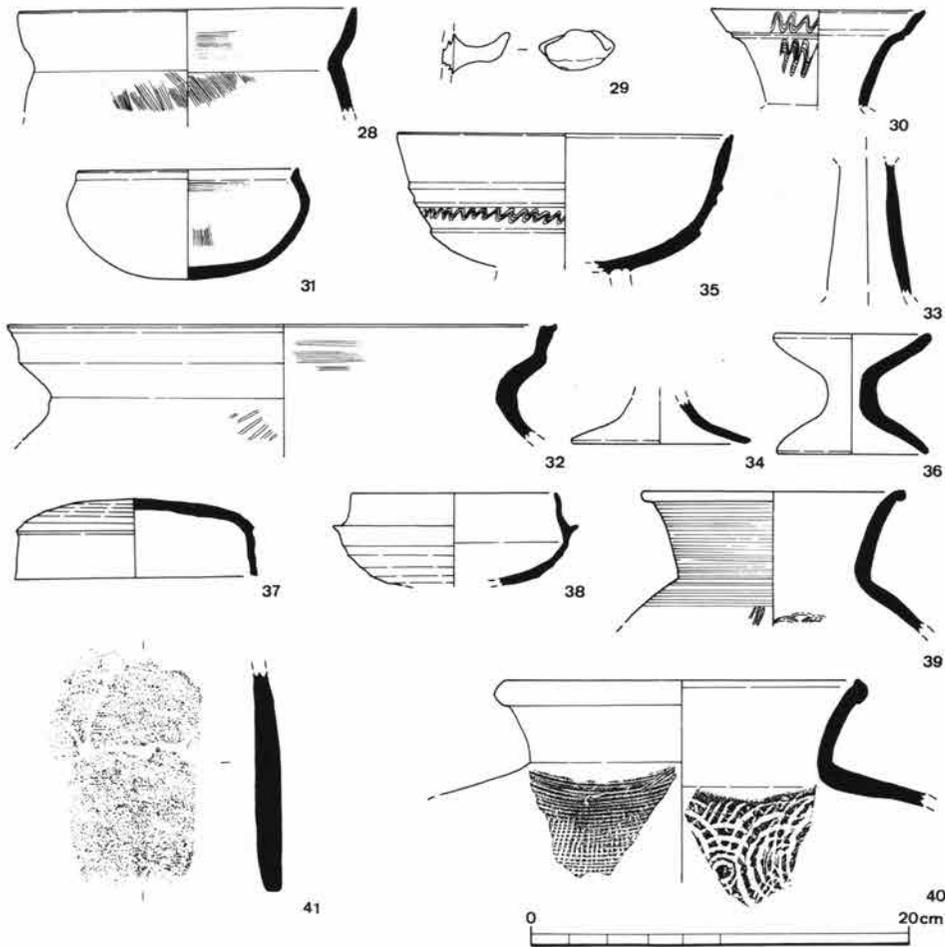
S H 16(11~16)

S K 60(18)

S H 18(19・20)

S K 15(21~27)

受け部を持ち、受け部が貫通しない小型の器台である。86は、脚部が直線状に開く受け部と、脚部が貫通する中空の小型器台である。88・89は、厚手の外面にタタキの施された鉢である。胎土に黒褐色の斑粒を多く含む特徴を共有する。90は、庄内系の鉢である。口縁端部はわずかに肥厚する。内面はヘラミガキが認められる。91の鉢は、口縁部が外上方に広口を開き、体部に張りを持たない。わずかに平坦な底部を持つ。92・93は、台付き鉢の脚部である。92は、生駒山西麓の胎土を持つ。94～100は、小型丸底壺である。外面にハケ調整の認められるものが主体を占める。96は、赤色の色調を呈し、細粒の胎土をもつ精製の小型土器である。ミガキ調整が施されていたと想定できるが剝落のため不明である。101は、平底の鉢またはミニチュア土器と考えられる。内外面は剝離のため調整は不明。



第42図 弥生・古墳時代遺構出土土器(2)

S D22(28~30) S K54(31~35) S K75(36) S D21(41) S X03(37・38)
S X04(39) S X13(40)

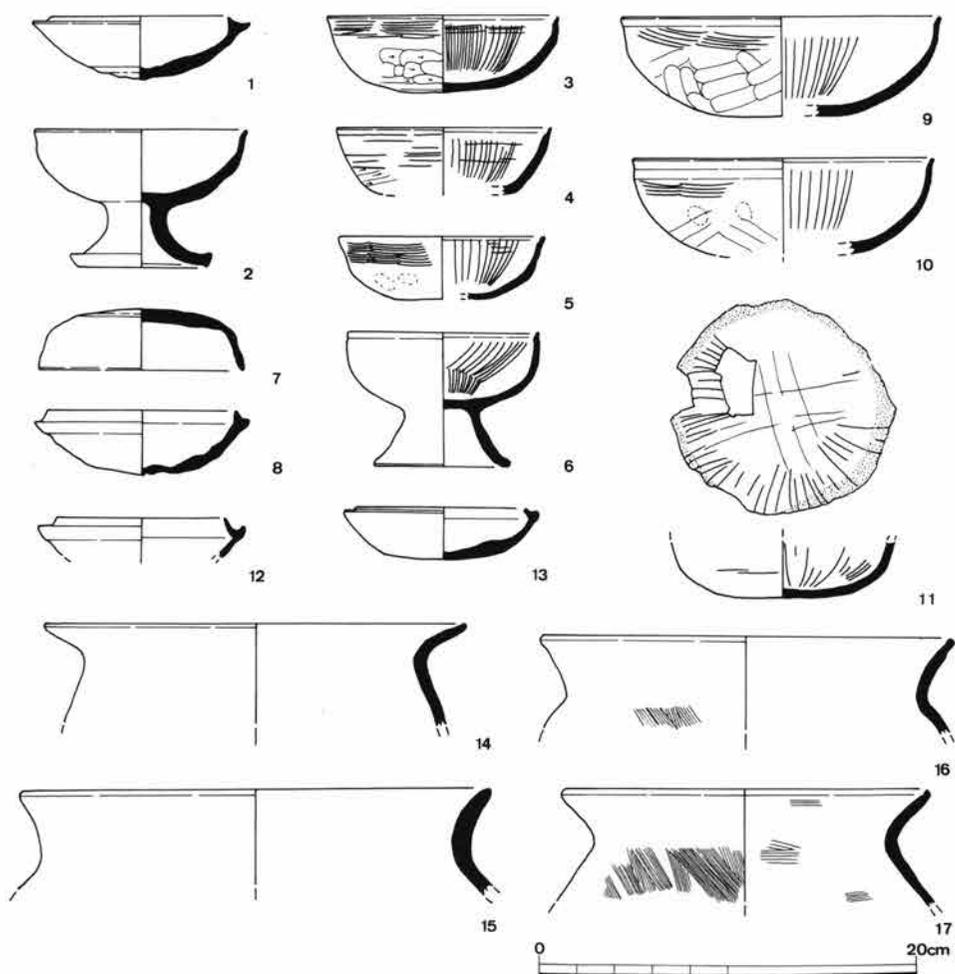
S X77(第41図)

7・8は、2段の口縁部を持つ鉢である。9は、中空の脚部で、外面にはミガキが認められ、器台の脚部と考えられる。

c. 古墳時代須恵器出現以後

S H09(第41図)

住居跡内からは図化できる土器片はほとんどなかったが、唯一の土師器の高杯の杯部が出土した。形状等から古墳時代後期の高杯と考えられる。



第43図 遺構出土遺物

S H10(1・2)

S K11(3~8・14)

S K19(13・15)

S X26(13)

S K75(9・10・16・17)

S K76(11)

S H 16(第41図)

11は、竈直上で口縁部を下にした状態で出土した土師器の直口壺である。12は、埋土中から出土した東海系の台付き甕の脚部である。内面に肥厚するが作りは荒い。須恵器の年代と合わないことから混入したものと考えられる。須恵器は杯身・杯蓋が出土している。胎土中に黒色粒を含むものと、含まないものがあり、複数の産地からもたらされていることが想定できる。

S K 60(第41図)

須恵器の甕の体部が出土している。外面は縄蓆文が見られ、内面はていねいなナデによって当て具痕跡は認められない。外面は暗灰色であるが、断面は赤みを帯び古い須恵器の特徴を持つ。

S H 18(第41図)

竈上面からは土師器の甕あるいは甑の体部が出土している。口縁部が存在しなかったため図化できなかったが、同一個体の土器片は多く出土した。19は、土師器の甑の把手部分である。20は、前述した竈の右側に検出した土坑内から出土した須恵器の杯蓋である。

S K 15(第41図)

21は底部が丸く、内湾して立ち上がる体部を持つ土師器の鉢である。22は、口縁端部が内側に肥厚する、いわゆる布留式甕である。器壁が厚く、布留のうちでも新しい時期に帰属するものである。27は、須恵器の甕の体部である。体部外面は暗灰色で格子目のタタキが施されている。内面はナデによって当て具痕跡は消されている。断面は赤褐色で古い須恵器の特徴を持つ。S K 15から出土した遺物は、完形品であった21を除いて接合率が乏しい傾向があった。

S K 54(第42図)

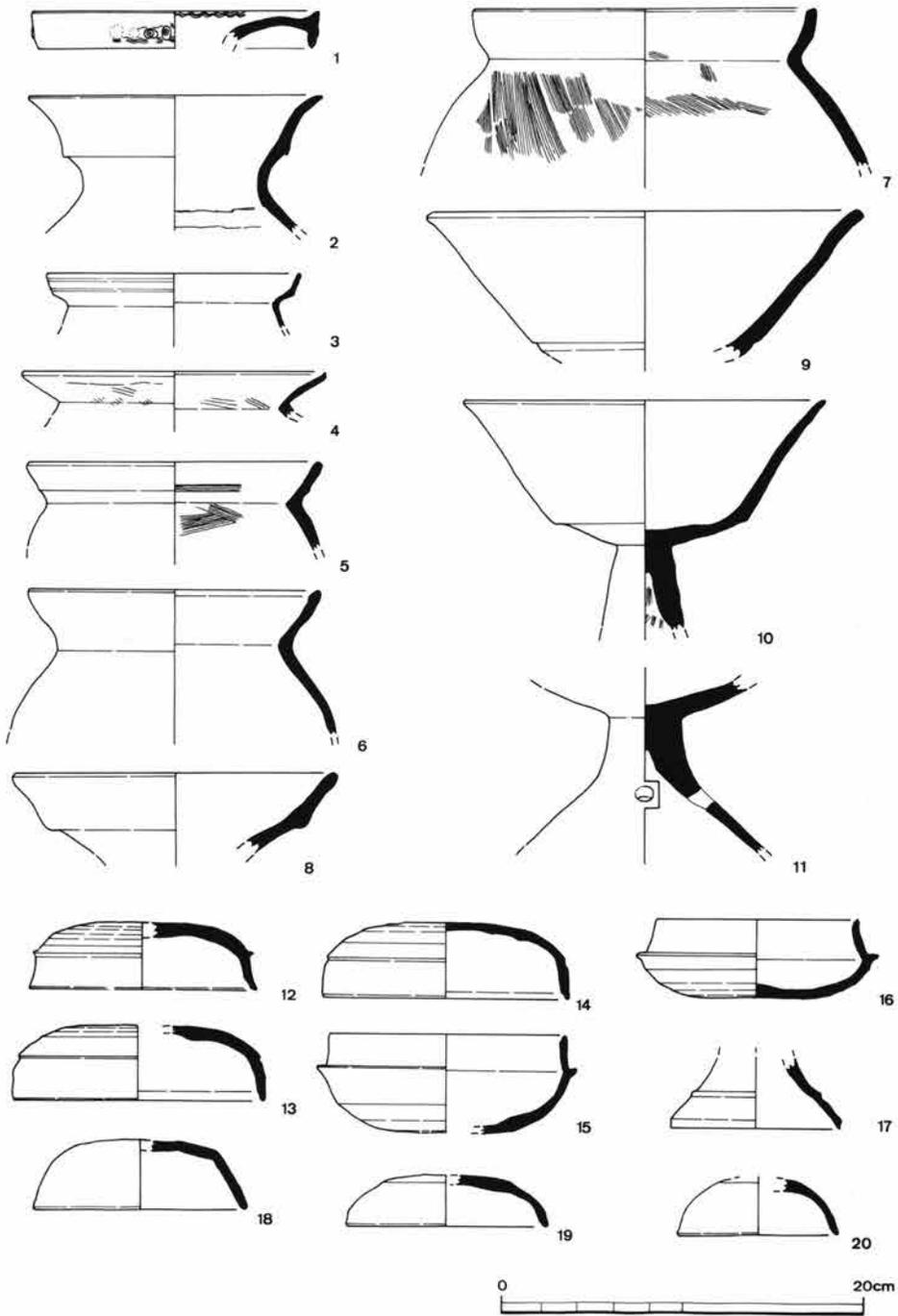
31は、体部が外方に張りだし、口縁部が短くわずかに立ち上がる土師器の鉢である。32は、2重口縁の土師器の甕で、体部外面にはタタキが認められる。35は、須恵器の無蓋高杯である。包含層から出土した破片と接合関係が認められる。透かしは四方向にあったものと想定できる。

S D 21(第42図)

41は、移動式の竈の接地面の破片と考えられる土師質の土器である。平らな端面をもち、外面にはわずかに縦方向のハケ、内面には横方向のハケ調整が認められる。土器の胎土に比べ、もろい。

S D 22(第42図)

土師器の甕、把手、甕の口縁部が出土している。30の須恵器の甕には外面にカキ目調整



第44図 包含層出土土器

の後二段の波状文が施される。口縁部のみの出土で体部片は出土しなかった。

S X03(第42図)

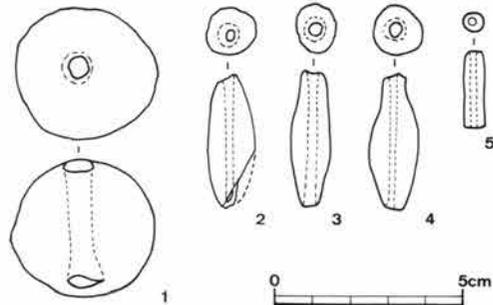
出土土器は須恵器のみで須恵器の杯が主体であった。37は、全体的に黒っぽく断面がチョコレート色をしたいわゆる陶邑産の特徴をもつ古い様相を見せる須恵器である。38は、やや軟白味を帯びた須恵器で乙訓地域では比較的に見られる胎土の特徴をもつ。

S X04(第42図)

39は、前述したようにやや出土レベルが高く検出できた須恵器の甕である。頸部にはカキ目が施され、体部外面にはタタキ、内面には当て具の青海波文が認められる。下部から出土した外面にタタキを持つ甕は、比較的大きな破片を含むが図化できるものはなかった。

S X13(第42図)

図化した須恵器の甕1個体分のみが出土している。体部片は多く存在するが図化した口縁部には接合しなかったものの、接合率は極めて高い。



第45図 土錘実測図

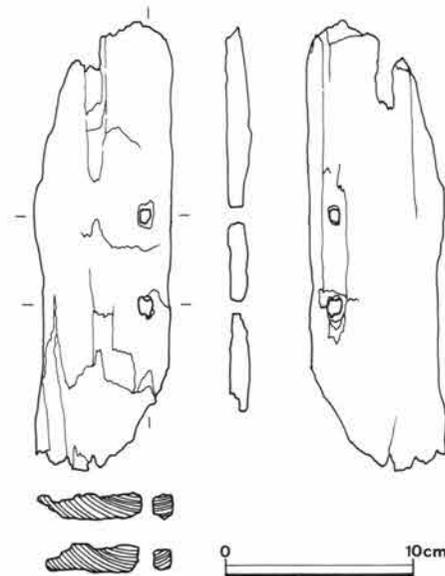
d. 飛鳥時代(第43図)

S H10

1は、ミズビキ成形され、底部回転ヘラケズリはわずかではあるが認められる。2は、短脚の無蓋高杯である。いずれも完形のもので、住居跡焼土部分で出土している。2は、軟質である。

S K11

3・4は、口縁部外面に横方向のヘラミガキが施され、底部外面はヘラケズリ調整、内面は1段の放射文が認められる。5は、口縁部外面に横方向のヘラミガキが施され、底部外面はヘラケズリ調整を省略する。内面に1段の放射文が認められる。外面には漆がわずかに付着する。6は、内面に2段の放射文が認められる短脚の土師器の高杯である。14は、土師



第46図 S K11出土木製品

器の甕である。7は、杯蓋で、頂部には回転ヘラケズリが認められる。8は、須恵器の杯身で底部回転ヘラ切りは未調整である。8は、内面に黒漆が付着していることから容器として利用されたものと考えられる。

S K 19

13は、軟質の須恵器の杯身で底部回転ヘラケズリののち、1回の板状原体の小口によって調整されている。15は、肩部がやや張りだす土師器の甕である。

S K 75

9・10は、大型の土師器の椀で、口縁部外面に横方向のヘラミガキが施され、底部外面はヘラケズリ調整、内面は1段の放射文が認められる。混入遺物と考えられるが、第42図36の古墳時代の中空脚を持つ小型の器台が出土している。

S K 76

11は、口縁部が欠けた土師器の椀である。欠けた部分は熱を受けた形跡がある。内面には放射状の暗文が認められる。

e. 包含層出土遺物(第44図)

1は、装飾を加えた壺の口縁部である。外面には波状文の後、円形浮文を付す。3は、口縁外面に擬凹線が施された甕である。4は、生駒山西麓産の庄内甕である。高杯は遺構では出土しなかった大型のものを選んで図化した。須恵器は、古墳時代のものや飛鳥のものうち、完形率の高いものについて図化した。18は、外面に自然釉が付着しており蓋とした。18・19・20は、いずれも頂部に回転ヘラケズリが認められる。

B. 土錘(第45図)

土錘は、トレンチ内で5点出土した。1は、球形の大型でS D12から出土した。2～4は、長胴の土錘である。2は、S X60から出土した。他は包含層からの出土である。5は、管玉状の土錘で他に比べ作りがていねいである。包含層中から出土した。重量は、1は47.0g、2は4.5g、3は4.5g、4は4.8g、5は0.9gを量る。

C. 木製品(第46図)

S K11から出土した木製品である。2か所に穿孔が施されており、針葉樹を部材として利用している。全体的な形状は朽ちているため不明である。この他に、薄い木片や焼けた形跡のある分厚い小木片がS X11から出土している。

D. 種子

S H10から1点、S K11から11点、S K75から1点、その他桃の種と考えられるものが出土した。縦方向の法量は、最大が2.6cm、最小が1.9cm、大部分が2.0～2.1cmに集中する。

3. 胎土分析

土師器の胎土の重鉱物分析は、(株)京都フィッション・トラックに依頼した。

a. 資料の分析方法

(1)前処理

まず半湿潤状態の生試料を一定量秤量し、50°Cで15時間乾燥させる。乾燥重量測定後、2リットルピーカー中で数回水替えしながら水洗し、超音波洗滌を行う。この際、中性のヘキサメタリン酸ナトリウムの溶液を液濃度1～2%程度となるよう適宜加え、懸濁がなくなるまで洗條水の交換を繰返す。乾燥後、篩別時の汚染を防ぐため使い捨てのフルイ用メッシュ・クロスを用い、8段階の篩別(60、120、250mesh)を行い、各段階の秤量をする。こうして得られた120～250mesh(1/8～1-16)粒径試料を比重分別処理等を加えることなく、封入剤(N_d=1.54)を用いて岩石用薄片を作成した。

(2)重鉱物分析

主要重鉱物(カンラン石・斜方輝石・単斜輝石・角閃石・黒雲母・アパタイト・ジルコン・イデイングサイト等)を鏡下で識別し、顕微鏡用薄片1枚中の重鉱物をポイント・カウンターを用いて無作為に200個体計数してその量比を百分率で示した。なお、試料により重鉱物含有が少ないものは結果的に総数200個に満たないことをお断りしておきたい。この際、一般に重鉱物含有の少ない試料は重液処理により重鉱物を凝集することが行われるが、風化による比重変化や粒径の違いが組成分布に影響を与える懸念があるため、今回の分析では重液処理は行っていない。また上記主要重鉱物以外の特殊な重鉱物ユウレン石(Zoisite)、緑レン石(Epidote)、ザクロ石(Garnet)、電気石(Tourmaline)などを含む鉱物試料があり、これらも計数した。

(壇原 徹=(株)京都フィッション・トラック)

b. 分析試料

1. S D12から出土した生駒山西麓の胎土を持つ庄内式土器の甕である。
2. S D12から出土した結晶片岩を含む土器の体部である。
3. S D12から出土した東海系の甕である(第36図25)。
4. S D12から出土した二重口緑壺である(第35図7)。

付表1 重鉱物組成表(1)

No.	試料名	重鉱物組成* (1)													
		Pyroxene			Amphibole		Zoi-			Epi-			その他	total	
		Ol	Opx	Cpx	Bho	Gho	Opq	site	Zr	Bi	Ap	dote			Gar
1	包含層	—	1	—	1	193	1	—	—	4	—	—	—	—	200
	4—44	0	0.5	0	0.5	96.5	0.5	0	0	2	0	0	0	0	100
2	SD12	—	1	—	—	7	2	179	12	—	—	9	—	—	200
	土器体部	0	0.5	0	0	3.5	1	89.5	1	0	0	4.5	0	0	100
3	SD12	—	1	—	10	66	45	—	3	31	—	—	8	—	200
	36—25	0	0.6	0	6.1	40.3	27.4	0	1.8	18.9	0	0	4.9	0	100
4	SD12	—	—	—	12	64	29	—	4	15	—	—	3	—	200
	35—7	0	0	0	9.5	50.4	22.8	0	3.1	11.8	0	0	2.4	0	100
5	SD12	—	—	—	—	5	1	—	—	2	—	—	—	—	8
	40—88	0	0	0	0	62.5	12.5	0	0	25	0	0	0	0	100
6	SD12	—	1	—	—	182	12	—	—	5	—	—	—	—	200
	38—68	0	0.5	0	0	91	6	0	0	2.5	0	0	0	0	100
7	SD12	—	—	—	—	9	—	—	—	1	—	—	—	—	10
	35—16	0	0	0	0	90	0	0	0	10	0	0	0	0	100
8	SD12	—	—	—	2	10	4	—	—	1	—	—	—	—	17
	36—37	0	0	0	12	58.8	23.5	0	0	5.9	0	0	0	0	100
9	SH02	—	2	—	3	63	23	—	—	5	—	—	—	—	96
	甕	0	2.1	0	3.1	65.6	24	0	0	5.2	0	0	0	0	100
10	SH02	—	—	—	2	46	39	—	—	1	—	—	—	—	88
	甕	0	0	0	2.3	52.3	44.3	0	0	1.1	0	0	0	0	100

注 * (1) 上段 計測粒子数 下段 %

なお各鉱物とその略称は以下のように対応します。

Ol: カンラン石、 Opx: 斜方輝石、 Cpx: 単斜輝石、 Bho: 褐色普通角閃石、
 Gho: 緑色普通角閃石、 Opq: 不透明(鉄)鉱物、 Id: イディングサイト、 Zr: ジルコン、
 Bi: 黒雲母、 Ap: アバタイト、 Gar: ザクロ石、 VG: 火山ガラス、
 Zoisite: ユウレン石、 Epidote: 緑レン石

付表2 重鉱物組成表(2)

No.	試料名	重鉱物組成*(1)													total
		Pyroxene			Amphibole		Opq	Zoi-site	Zr	Bi	Ap	Epi-dote	Gar	その他	
		Ol	Opx	Cpx	Bho	Gho									
11	包含層	—	—	—	8	15	5	—	2	2	—	—	—	—	32
	高杯	0	0	0	25	46.8	15.6	0	6.3	6.3	0	0	0	0	100
12	SH16	—	—	—	—	56	4	—	1	3	—	—	—	—	64
	41—11	0	0	0	0	87.5	6.3	0	1.5	4.7	0	0	0	0	100
13	SD21	—	1	3	1	29	32	—	2	2	—	—	—	—	70
	42—41	0	1.4	4.3	1.4	41.4	45.7	0	2.9	2.9	0	0	0	0	100
14	SK19	—	—	—	8	1	12	2	—	5	—	1	—	—	29
	43—15	0	0	0	27.6	3.5	41.4	6.8	0	17.2	0	3.5	0	0	100
15	包含層	—	1	—	—	186	3	—	—	10	—	—	—	—	200
	羽釜	0	0.5	0	0	93	1.5	0	0	5	0	0	0	0	100
16	SX13	—	—	—	—	28	13	—	1	10	—	—	1	—	53
	甕	0	0	0	0	52.8	24.5	0	1.9	18.9	0	0	1.9	0	100
17	包含層	—	—	—	—	10	8	—	1	—	—	—	—	—	19
	椀	0	0	0	0	52.6	42.1	0	5.3	0	0	0	0	0	100
18	包含層	—	—	—	—	14	5	—	—	1	—	—	—	—	20
	椀	0	0	0	0	70	25	0	0	5	0	0	0	0	100
19	—	—	—	—	—	12	16	—	3	86	—	—	—	—	117
	砂	0	0	0	0	10.3	13.7	0	2.6	73.4	0	0	0	0	100
20	—	—	—	—	—	26	43	—	1	130	—	—	—	—	200
	粘土	0	0	0	0	13	21.5	0	0.5	65	0	0	0	0	100

注 *(1) 上段 計測粒子数 下段 %

なお各鉱物とその略称は以下のように対応します。

Ol: カンラン石、 Opx: 斜方輝石、 Cpx: 単斜輝石、 Bho: 褐色普通角閃石、
 Gho: 緑色普通角閃石、 Opq: 不透明(鉄)鉱物、 Id: イデイングサイト、 Zr: ジルコン、
 Bi: 黒雲母、 Ap: アバタイト、 Gar: ザクロ石、 VG: 火山ガラス、
 Zoisite: ヌウレン石、 Epidote: 緑レン石

付表3 重鉍物組成表(3)

No.	火山 ガラス	重鉍物	軽鉍物	土粒子	P.O. 含有	備考
1	1	23	15	61	-	土粒子としたものglassばい
2	3	13	44	40	-	B-Qz含む
3	0+	3	47	50	-	ガラス中ヒビ割れ、気泡あり
4	1	1	35	63	+	
5	1	0.1	27	71.9	+	
6	3	4	36	57	+	
7	4	0.1	27	68.9	+	土粒子黒い
8	0	0.1	37	62.9	+	土粒子黒い
9	0.3	1	46	52.7	+	B-Qz含む
10	0.3	1	55.7	43	+	
11	0.2	1	33	65.8	+	
12	5	1	17	77	+	ガラス中ヒビ割れ、気泡多くあり
13	3	1	76	20	+	B-Qz含む、ガラス中ヒビ割れ多し
14	0	0.2	45	54.8	-	
15	0.1	34	18	47.9	+	
16	0.3	1	45	53.7	+	
17	0.2	1	25	73.8	+	
18	0.1	1	13	85.9	-	
19	0.1	1	68.9	28	-	
20	0.1	9	82.9	8	+	

P.O. は、プラント・オパールの略

火山ガラスのひび割れ発泡は、加熱によるものと考えられる。

5. S D12から出土した鉢である(第40図88)。
6. S D12から出土した大型の壺、二重口縁であったものと想定できる(第38図68)。
7. S D12から出土した壺である(第35図16)。
8. S D12から出土した甕である(第36図37)。
9. S H02から出土した外面にタタキを持つ甕である。
10. S H02から出土した外面にタタキを持つ甕である。
11. 包含層から出土した古墳時代の高杯である。
12. S H16の竈から出土した壺である(第41図11)。
13. S D21出土の移動式竈の下端部である(第42図41)。
14. S K19出土の長胴化した甕の口縁部である(第43図15)。

15. 包含層出土の生駒山西麓の胎土を持つ羽釜である。
16. S X13出土の長胴化した甕の口縁部である。
17. 包含層出土の飛鳥時代(飛鳥のⅡ)の暗文を持つ椀。
18. 包含層出土の椀
19. 遺跡内で採集した砂。
20. 遺構の基盤となる黄褐色粘土層。

c. 小結

重鉍物組成分析の結果、重鉍物を200カウントできるものと、重鉍物の少ないものとの分離できる。200カウントできるものについても付表3で見られるように、試料番号3の東海系の「S」字口縁を持つ甕のように重鉍物が全体の3%しかないものと、重鉍物が10%以上を計るものが認められる。

重鉍物が200個体を数えることのできる試料では、1・6・15の緑色普通角閃石が90%を越すもの、2のユウレン石が約90%と他の重鉍物に卓越するもの、20の黒雲母が卓越するもの、3・4の一つの重鉍物にかたよらないものの4種類が認められる。

1・6・15は肉眼的にいわゆる生駒山西麓産のチョコレートブラウンの色調を呈する角閃石を多く含むものである。15は他の2つの試料に比べると重鉍物の割合、絶対量としての角閃石の含有量が低いためか、色調がやや薄い。粘土が採集された地域的な差が反映されていると想定できる。

2の試料は、胎土中に大型の結晶片岩の岩片を含む土器の体部である。90%近くを占めるユウレン石は結晶片岩起源の重鉍物であることから、結晶片岩地帯で堆積した粘土によって造られたものである。近畿地方周辺では和歌山の紀ノ川沿い、兵庫県淡路島、徳島県吉野川沿い等が想定される。口縁部が存在しないため、型式等でのクロスチェックはできなかった。

20の試料は算用田遺跡の遺構面となる、黄褐色粘土層中の粘土である。遺跡内で採集した粘土によって土器作りを行っていた場合、用いられていた可能性が高い。分析の結果65%が黒雲母で占められる。今回分析に出した試料中には同様な分析結果を認めることのできる試料はなかった。しかし、黒雲母が熱に弱いことから、新たに一定の温度まで熱処理を行った粘土の重鉍物組成分析が必要であることが指摘できる。

チャート片を含まない3の試料の場合、胎土に含まれる基質(マトリックス)が粗い。また、土器型式も東海地方に認められる「S」字状口縁を持ち、体部外面には粗いクシ目を施した甕である。肉眼による岩石観察では、砂粒の摩滅がほとんど認められない。以上の

ように、在地産と言われる土器の胎土とは大きくことなる。重鉱物の中では緑色普通角閃石、不透明(鉄)鉱物、黒雲母が多くザクロ石も4.9%含まれている。花崗岩地域の粘土が用いられたものと想定できる。4の二重口緑壺の試料も同様の傾向を示している。

在地産と考えられる円磨度の高いチャート片や、赤色半粒と言われる茶褐色から赤色を呈する非常に脆いものを含む試料は、重鉱物が1%未満である。多くは重鉱物が50以下であった。

また、胎土中に火山ガラスを含むものが20試料中18個の試料に認められた。遺跡内での粘土や砂の試料中では、0.1%の火山ガラスしか含まれなかった。誤差を認めるとしても火山ガラスの含有量が3%を超すような試料は遺跡外の粘土を用いたものであろう。このように火山ガラスが多く含まれる粘土は、粘土自体に火山灰降灰層が含まれている可能性が強い。したがって、ガラスの屈折率と成分分析を行うことによって粘土の特定ができる。1つの可能性としては大阪層群中の淡水性粘土層の利用も考えられる。

火山ガラスを取り出して実体顕微鏡によって観察すると、ガラス自体が多くヒビ割れていたり、発泡しているものが認められる試料がある。試料12の土器は堅穴式住居跡SH16の竈から出土した。試料13は移動式の竈の下部の試料である。いずれの試料も熱を再度にわたって受けたと考えられる。このことから、試料2の土器の体部は発泡したガラスを含んでいたことから、煮炊き具と想定でき甕である可能性が高い。

4. ま と め

今回の調査地内では弥生時代末から飛鳥時代までの遺構が検出できたが順を追って調査成果についてまとめたい。

①算用田遺跡は、現在の地表面から約3m下、海拔9mという低い場所からも遺構や遺物がでてくることが明らかになった。現在の地形は調査区内で厚く認められる扇状地性の礫層によって形成されているので、遺跡周辺古地形や古環境を考え直す必要がある。特に、この周辺地域では、扇状地の発達時期が遺跡ごとに同調しておこることが周辺調査から明らかになっており、深掘りや試掘時の断面観測によって遺構面や時期を決定できる。今回の調査では模式的な断面を提示でき、この地域の今後の調査の指標となると考えられる。

②SD12からは、古墳時代初頭の土器が多く出土した。土器の多くは、乙訓地域の土器の胎土に多く含まれるといわれる赤色の粒を含み、大阪層群に含まれるチャート、石英、長石の摩滅した砂粒を含む。ごく少量ではあるが、チョコレート色を呈した角閃石を含むいわゆる生駒山西麓の土器が含まれる。典型的な庄内甕は少ない。東海系の「S」字状口縁の甕は、摩滅のない長石、石英粒を主体とする胎土を持ち、花崗岩地域からもたらされ

た土器であることがわかる。また、古墳時代では比較的少ない形態を持つ大型の器台などは、丹波地域からの影響下で成立したと考えられる。各地域からの搬入土器が認められるが、在地の土器に比べ、搬入された土器は極めて少なかったものと想定できる。

今回の出土遺物からは、独自の編年案を出すことは資料的に限界がある。在地の土器を中心とするこの地域の土器の変遷は、周辺地域の変遷に対応させるのが一般的であるが、弥生時代末から布留式土器前半までの土器の変遷には地域色を持つ可能性が高く、実態に即した土器の変遷に認められる古墳時代化の研究が必要とされる。

③古墳時代中期から後期には近接する算用田遺跡1次調査地内、宮脇・松田遺跡(長岡京跡右京第188次調査)、名神高速道路拡幅に伴う下植野南遺跡の調査地^(注18)で竪穴式住居跡が検出されている。特に、後期には小さな谷部を挟み、何群かの集落に分かれる可能性があるが、総体として大集落を営んでいたと考えられる。

乙訓地域の古墳は、首長墓の系譜を地域ごとに大きく椋原グループ、向日グループ、長岡グループ、山崎グループに分けられる。山崎グループは鳥居前古墳のほか様相が明らかでないが、現在の小畑川の西岸と小泉川に挟まれる地域には恵解山古墳、恵解山古墳の東南東60mからは5世紀後半に築造された南栗ヶ塚古墳(方墳)、西南400mに中期と考えられる境野古墳群^(注19)、さらに400m西南の下植野南遺跡からは方墳が検出されている。これらの古墳は同じ微高地に所在し、その末端にある古墳時代後期の集落の一部に算用田遺跡がある。恵解山古墳は、従来乙訓地域における中期の盟主的首長墳で長岡グループに帰属するとされている。しかし、長岡グループの古墳は長岡京市の今里・井内に分布するが、恵解山古墳は大きくその分布域から離れる。恵解山古墳が久貝地域に造られたのは偶然ではなく、それを造り出す有力な勢力が近くにあったものと想定できる。その勢力の一翼を算用田遺跡も果していたと捉えられる。

また、SK60・SK15では初期須恵器が出土している。周辺の調査においても多く出土していることから、集落内において比較的早く須恵器が導入されたものと考えられる。

④SK11及びSK75出土遺物は7世紀第二四半期(飛鳥Ⅱ)にあたる。乙訓地域では飛鳥時代の須恵器・土師器が共伴した良好な出土例ははじめてである。出土土師器は坂田寺の池SG100出土の土師器椀同様、底部外面をヘラケズリして仕上げるものとヘラケズリを省略するものが認められる。また、古墳時代の系譜を引く須恵器の杯もSG100のものと類似する。大和地域で認められる土器のセット関係と手法の組み合わせが算用田遺跡内でも認められる。SK11からは、木片、漆の被膜、漆を入れた須恵器が出土しており、遺跡内で漆工芸が営まれたと想定できる。高度な技術を持ち、中央とのつながりを感じさせるこの遺跡は、白雉4(653)年の孝徳天皇による山崎宮造営の下地の存在を示唆している。



発掘調査風景

大山崎町地域においてまとまった調査は緒についたばかりであり、遺跡の性格や密度については今後の課題が多い。今回の調査は貴重な基礎的データが提示できたと考えられる。当調査研究センターが近接する名神高速道路関連の調査で、大規模な面的調査を継続中であり、今回の調査と合わせ、大山崎町地域の歴史を明らかにする資料の増加が期待できる。

(中川和哉)

注1 林 亨『算用田遺跡－右京192次発掘調査概報－』（『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第9集 大山崎町教育委員会）1991

注2 赤木 香・阿部真生・江口正孝・尾関真二・小笠原健二・柿原 実・久保博昭・小島孝修・小村美香・島田加奈・島田豊彰・進木和美・寺本知佐子・飛田浩一・針尾有章子・広瀬時習・松本とも子・溝口博士・若松幹郎・小田栄子・中島恵美子・針尾紀代・松崎才枝・山下敬子・山中道代

注3 都出比呂志・四手井晴子『京都乙訓地方の石器－資料篇－』（乙訓文化遺産を守る会第1 日曜日会）1971

注4 林 亨「長岡京跡右京第46次(7ANSMD地区)発掘調査概要」（『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第4集 大山崎町教育委員会・長岡京跡発掘調査研究所）1984

注5 久保哲正「長岡京跡右京第15次(7ANTMK)発掘調査報告」（『長岡京跡発掘調査研究所調査報告書』第1集 長岡京跡発掘調査研究所）1979

注6 久保哲正「長岡京跡右京第14次(7ANRUN)発掘調査報告」（『長岡京跡発掘調査研究所調査報告

- 書】第1集 長岡京跡発掘調査研究所) 1979
- 注7 戸原和人・竹井治雄・石尾政信他「長岡京跡左京第216・241・242次、右京第349・357次」
(『京都府遺跡調査概報』第47冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1992
- 注8 佐原 眞「山城に於ける弥生式文化の成立—畿内第I様式の細別と雲ノ宮遺跡出土土器の占める位置—」『史林』50-5 1967
- 注9 福永伸哉・松木武彦・青谷尚美他「鳥居前古墳」(『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第6集 大山崎町教育委員会) 1987
- 注10 山本輝雄・久保哲正・吉岡博之他「恵解山古墳第3次発掘調査概要」(『長岡京市文化財調査報告書』第8冊 長岡京市教育委員会) 1981
- 注11 高橋美久二「山城国葛野・乙訓両郡の古瓦の様相」『史想』15 1970
- 注12 田中重久「行基建立の四十九院」『史迹と美術』11-9 1940
- 注13 高橋美久二「山崎駅と駅家の構造」(『長岡京古文化論叢』同朋舎) 1986
- 注14 戸原和人・百瀬ちどり・國下多美樹他「長岡京跡左京第28次(7ANMTG-1地区)調査概要—左京五条三坊四町・棚次遺跡・久我畷—」(『長岡京市文化財調査報告書』第14冊 長岡京市教育委員会・長岡京跡発掘調査研究所) 1985、奥村清一郎・戸原和人・百瀬ちどり・中塚 良「長岡京跡左京第53次(7ANMSB地区)調査概要—左京六条二坊五・十二町・下八ノ坪遺跡・久我畷—」(『長岡京市文化財調査報告書』第14冊 長岡京市教育委員会・長岡京跡発掘調査研究所) 1985
- 注15 引原茂治「山崎津第4次(7YYMSHD地区)発掘調査概要」(『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第4集 大山崎町教育委員会・長岡京跡発掘調査研究所) 1984
- 注16 中塚 良「山城盆地中央部小泉川沖積低地の微地形分析—遺跡立地からみた地形形成過程と構造運動—」(『東北地理』第43巻第1号 東北大学理学部) 1991
- 注17 西 弘海『土器様式の成立とその背景』真陽社 1987
- 注18 戸原和人他「名神高速道路関係遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第51冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1992
- 注19 林 亨「境野古墳群1号墳第1次(TSN地区)発掘調査概要」(『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第2集 大山崎町教育委員会) 1982

付表4 遺物観察表(石：石英、長：長石、チ：チャート、雲：雲母、赤：赤色斑粒)

種 類	図 番 号	器 種	法量 (c m) 口径・残存高 () : 残高	色調		胎土	調整・手法		焼成	口縁部 残存度	備考
				外面	内面	素質、含有鉱物 (粒度/種類)	外面	内面			
第 3 5 図	1	壺	1 6.8 (3.5)	明赤褐色 明赤褐色	やや粗 3 (2) 石・長・チ	ミガキ ナデ	硬	2/3			
	2	壺	(3.6)	明赤褐色 明赤褐色	やや粗 3 (2) 石・長・チ	不明 不明	硬				
	3	壺	1 7.8 (2.6)	暗茶色 灰褐色	やや粗 3 (1) 石・長	不明 不明	やや軟	1/6			
	4	壺	(5.5)	淡茶橙色 淡灰黒色	粗 3 (2) 石・長・チ・赤	不明 不明	やや軟				
	5	壺		明赤褐色 明赤褐色	やや粗 3 (2) 石・長・チ	不明 不明	硬				
	6	壺	1 3.6 (5.1)	淡茶色 淡茶色	やや粗 5 (1) 石・長・チ	不明 ナデ	硬	1/6			
	7	壺	1 3.0 (5.0)	淡茶色 淡茶色	やや粗 2 (1) 石・長・チ	不明 不明	硬	3/8			
	8	壺	1 1.9 (6.3)	淡茶褐色 淡茶褐色	やや粗 4 (2) 石・長・赤	不明 不明	やや軟	1/4			
	9	壺	1 6.6 (6.2)	明黄橙色 明黄橙色	密 2 (2) チ・赤	不明 不明	軟	1/8			
	10	壺	1 2.8 (6.3)	淡茶褐色 淡茶褐色	やや粗 3 (1) 石・長・チ	ハケ ナデ	硬	1/14			
	11	壺	1 1.6 (5.1)	淡茶橙色 淡茶橙色	やや粗 3 (2) 石・長・チ	ハケのちナデ ナデ	やや軟	1/5			
	12	壺	1 2.4 (9.0)	淡茶褐色 淡茶褐色	密 3 (2) 石・長・雲・赤	ミガキ ケズリ	硬				
	13	壺	9.9 (6.5)	暗茶褐色 暗茶色	密 3 (1) 長・赤	不明 指オサエ	硬				
	14	壺	(1 1.8)	淡赤褐色 淡赤褐色	密 5 (2) 石・長・チ・赤	ミガキ 指オサエ	やや軟			赤色斑粒を 多く含む	
	15	壺	1 5.0 (1 3.9)	淡橙褐色 淡橙褐色	やや粗 2 (2) 石・長・チ	ハケ ハケ	硬	ほぼ完			
	16	壺	1 9.6 (9.5)	淡茶橙色 淡灰黒色	粗 7 (3) 石・長・チ	不明 不明	やや軟	1/8			
	17	壺	1 6.4 (6.5)	淡茶褐色 淡茶褐色	やや粗 3 (1) 石・長・雲	ハケのちナデ ハケのちナデ	やや軟	1/5			
	18	壺	1 6.7 (4.4)	淡茶褐色 淡茶褐色	やや粗 3 (1) 長・チ・石	ミガキ ナデ	硬	1/5			
	19	壺	(1 5.0)	淡茶色	密 5 (2) 石・長・チ・赤	タタキ 不明	硬				
	36	20	壺	1 0.2 (4.7)	淡茶褐色 淡茶色	密 1 石・長・チ	不明 ナデ	硬	1/6		

種類	図番号	器種	法量 (cm) 口径・残存高 (): 残高	色調		胎土	調整・手法	焼成	口縁部 残存度	備考
				外面	内面	素質、含有鉱物 (粒度/種類)	外面 内面			
第36	21	壺	1 0.7 (4.1)	淡黄茶色	密 4 (3)	石・長・チ	不明	軟	1/4	
				淡黄茶色	石・長・チ		不明			
22	壺	1 3.5 (2.3)	淡茶褐色	やや粗 (-)	長・角	ナデ	硬	1/6		
			淡茶褐色	長・角		不明				
23	壺	1 5.8 (5.1)	淡茶色	密 6 (3)	石・長・チ	ナデ	硬	1/8		
			淡茶色	石・長・チ		不明				
24	壺	1 4.6 (2.4)	暗茶褐色	やや粗 3 (-)	石・長・角	ナデ	硬	1/6		
			暗茶褐色	石・長・角		不明				
25	壺	1 4.5 (4.7)	淡茶色	やや粗 4 (2)	石・長・雲	不明	硬	1/6		
			淡茶色	石・長・雲		不明				
26	壺	1 2.9 (3.4)	淡茶褐色	密 5 (2)	石・長・赤	不明	やや軟	1/6		
			淡茶褐色	石・長・赤		不明				
27	壺	1 2.8 (3.0)	灰褐色	粗 1 (1)	石・長・赤	不明	やや軟	1/6		
			灰褐色	石・長・赤		不明				
28	壺	1 6.0 (4.5)	淡灰褐色	やや粗	石・長	ナデ	やや軟	1/4		
			淡灰褐色	石・長		ナデ ハケ				
29	壺	1 4.5 (2.6)	淡茶褐色	やや粗 3 (1)	石・長・角	ナデ	硬	1/8		
			淡茶褐色	石・長・角		ナデ				
30	壺	1 1.9 (4.3)	淡茶色	密 4 (3)	石・長・チ	ナデ	硬	1/4		
			淡茶色	石・長・チ		ナデ ケズリ				
31	壺	1 3.6 (4.0)	淡黄茶色	やや粗 3 (1)	石・長・チ・赤	タタキ	やや軟	1/8		
			淡黄茶色	石・長・チ・赤		ケズリ				
32	壺	1 4.5 (4.7)	淡灰褐色	密 3 (2)	石・長	ナデ	硬	1/6		
			淡灰褐色	石・長		ナデ ハケ				
33	壺	1 4.7 (4.4)	淡橙色	密 4 (3)	長・チ・石	タタキ	軟	1/6		
			淡橙色	長・チ・石		不明				
34	壺	1 7.6 (3.5)	淡灰茶色	密 3 (3)	石・長・チ	ナデ ハケ	やや軟	1/4		
			淡灰茶色	石・長・チ		ハケ ケズリ				
35	壺	1 6.8 (6.4)	淡明橙色	密 4 (3)	石・長・チ・赤	タタキ	軟	1/6		
			淡明橙色	石・長・チ・赤		不明				
36	壺	1 5.8 (6.2)	褐色	粗 0.5~3.5	石・長・チ・赤	ナデ ハケ	硬	1/6		
			褐色	石・長・チ・赤		ナデ				
37	壺	1 5.4 (8.2)	淡茶褐色	密 4 (3)	石・長	ハケ	やや軟	1/5		
			淡茶褐色	石・長		ケズリ ナデ				
38	壺	1 5.7 (3.7)	淡灰褐色	密 3 (2)	石・長・赤	ナデ ハケ	やや軟	1/4		
			淡灰褐色	石・長・赤		不明				
39	壺	1 2.9 (7.0)	茶褐色	やや粗 4 (3)	石・長・チ・赤	不明	やや軟	1/4		
			茶褐色	石・長・チ・赤		不明				
40	壺	1 3.4 (10.3)	淡灰褐色	密 5 (3)	石・長・チ・赤	不明	やや軟	1/5		
			淡茶褐色	石・長・チ・赤		不明				

種 類	図 番 号	器 種	法量 (c m) 口径・残存高 () : 残高	色調		胎土		調整・手法		焼成	口縁部 残存度	備考
				外面	内面	素質、含有鉱物 (粒度/種類)	外面 内面					
第 3 7 図	41	甕	1 1.6 (4.8)	淡暗橙色 淡暗黄色	密 3 (1) 石・長・チ・雲	ナデ ナデ ケズリ	硬	1/6				
	42	甕	1 1.7 (4.2)	淡赤褐色 淡赤褐色	密 4 (2) 石・長	不明 不明	硬	1/5				
	43	甕	1 2.2 (3.6)	淡橙茶色 淡橙茶色	密 3 (2) 石・長・チ・赤	不明 不明	やや軟	1/4				
	44	甕	1 5.7 (7.3)	淡茶色 淡茶色	やや粗 2 (1) 石・長・チ	不明 ケズリ	やや軟	3/4				
	45	甕	1 4.0 (20.0)	淡茶灰色 淡茶灰色	やや粗 1~4 石・長	不明 ケズリ?	やや軟	9/10				
	46	甕	1 2.4 (6.0)	茶褐色 茶褐色	密 2 (1) 石・長・チ	ナデ ケズリ	硬	1/5				
	47	甕	1 4.8 (11.3)	灰茶色 淡黄灰色	粗 3 (2) 長・チ・石	ナデ ハケ ケズリ	硬	1/2				
	48	甕	1 7.5 (7.3)	淡橙茶色 淡橙茶色	やや粗 4 (2) 石・長・チ・雲	不明 ケズリ	やや軟	1/3				
	49	底	(2.6)	淡灰褐色 淡灰褐色	密 3 (3) 石・長・赤	タタキ 指圧痕	硬					
	50	底	(1.9)	淡橙褐色 灰茶色	やや粗 7 (4) 石・長・チ	タタキ 不明	硬					
	51	底	(2.8)	淡茶褐色 淡茶褐色	密 4 (3) 石・長・チ・赤	タタキ 不明	やや軟					
	52	底	(2.7)	暗赤褐色 淡茶色	やや粗 3 (1) 石・長	タタキ 不明	硬					
	53	底	(2.9)	暗灰褐色 淡灰褐色	やや粗 3 (2) 石・長	タタキのちハケ 不明	やや軟					
	54	底	(2.0)	淡茶灰色 暗灰褐色	粗 3 (1) 石・長・チ	タタキ 不明	やや軟					
	55	底	(3.5)	淡茶色 淡茶色	密 4 (2) 石・長・チ	タタキ 不明	硬					
	56	底	(2.5)	灰赤褐色 暗灰茶色	粗 3 (2) 石・長・チ・赤	タタキ ハケ	硬					
	57	底	(2.0)	淡茶灰色 淡茶灰色	密 4 (3) チ・長・石	タタキ ハケ	硬					
	58	底	(1.7)	淡橙褐色 淡黄橙色	やや粗 3 (2) 石・長・チ	タタキ 不明	硬					
	59	底	(5.3)	淡茶色 淡茶色	やや粗 4 (3) 石・長・チ	タタキ 不明	軟					
	60	底	(2.5)	淡褐色 淡褐色	やや粗 3 (2) 石・長	タタキ 不明	やや軟					

種 類	図 番 号	器 種	法量 (cm) 口径・残存高 () : 残高	色調		胎土	調整・手法	焼成	口縁部 残存度	備考
				外面	内面	素質、含有鉱物 (粒度/種類)	外面 内面			
第 3 7 図	61	底	(2.1)	暗赤褐色 淡茶褐色		やや粗 3 (2) 石・長・チ	不明 不明	硬		
	62	底	(3.7)	淡茶灰色 淡茶灰色		密 7 (4) 石・長	ハケ ハケ	硬		
	63	底	(2.2)	暗赤褐色 淡茶色		密 3 (2) 石・長・チ・赤	ハケ 不明	硬		
	64	底	(2.3)	淡茶色 淡茶色		やや粗 3 (2) 石・長・チ	ハケ ハケ	硬		
	65	底	3.8 (2.9)	淡茶色 淡灰褐色		密 5 (3) 石・長・チ・赤	不明 ナデ	硬		
	66	底	(3.4)	淡橙色 淡茶灰色		密 3 (2) 石・長・チ	タタキ ハケ	硬		
	67	底	(4.5)	淡茶灰色 淡茶灰色		やや粗 4 (2) 石・長・チ	不明 ハケ	やや軟		
38	68	壺	(13.2)	茶灰色 茶灰色		粗 7 (2) 石・長・チ・赤	ハケ ケズリ	やや軟		
第 3 9 図	69	高 杯	2 2.1 (6.1)	橙茶色 橙茶色		密 8 (2) 石・長・チ・赤	ミガキ 不明	やや軟	4/5	
	70	高 杯	1 8.8 (4.2)	淡褐色 淡褐色		密 (-) 石	ハケのちナデ ナデ	硬	1/9	
	71	高 杯	(9.4)	淡赤褐色 淡赤褐色		密 1 (1) チ	ケズリのちハケ ナデ	硬		
	72	高 杯	1 7.8 (16.4)	淡暗赤色 淡黄褐色		やや粗 3 (1) 石・長・雲	ナデ	硬	5/8	
	73	高 杯	1 6.1 (6.4)	淡茶色 淡茶色		やや粗 4 (1) 石・長	不明	やや軟	1/5	
	74	高 杯	1 6.2 (5.2)	茶褐色 淡茶褐色		やや粗 2 (2) 石・長	剝離	やや軟	1/4	
	75	高 杯	1 4.7 (5.3)	淡橙色 淡橙色		密 2 (2) 石・長・赤	不明	硬	1/4	
	76	高 杯	(10.5)	淡茶褐色 淡茶褐色		やや粗 2 (2) チ・石・長	ハケ 不明	やや軟		
	77	高 杯	(8.4)	淡暗橙色 淡茶褐色		密 2 (1) チ・石・長・雲	不明	硬		
	78	高 杯	(8.0)	淡茶褐色 淡茶褐色		密 2 (0.5) 石・長・雲	ハケ ナデ	硬		
	79	高 杯	(5.8)	赤褐色 赤褐色		粗 5 (2) 石・長・チ・赤	不明	やや軟	1/4	
	80	高 杯	(8.5)	淡赤褐色 淡赤褐色		やや粗 4 (2) チ・石・長	ミガキ 不明	硬		
	80	高 杯	1 6.1 (3.6)	淡褐色 灰黒色		密 3 (2) 石・長・チ・赤	不明	硬	1/8	
80	高 杯	1 7.2 (10.5)	淡褐色 淡灰黒色		粗 1~2 石粒	ミガキ ナデ	硬			

種類	図番号	器種	法量 (cm) 口径・残存高 ():残高	色調		胎土		調整・手法		焼成	口縁部 残存度	備考
				外面	内面	素質、含有鉱物 (粒度/種類)	外面	内面	外面			
第39図	81	器台	16.1 (3.4)	淡褐色 灰黒色	密 3 (2)	石・長・チ・赤	不明 不明	硬	1/8			
	82	器台	17.2 (10.5)	淡褐色 淡灰黒色	粗 1~2	石・長・チ・赤	ミガキ ナデ	硬	1/6			
	83	器台	17.3 (3.2)	淡褐色 淡灰黒色	やや粗 4 (2)	石・長・チ	不明 不明	軟	1/6			
	84	器台	(10.6)	淡褐色 淡灰黒色	密 3 (2)	石・長・チ・赤	不明 不明	軟	1/2			
	85	器台	(11.6)	淡黄色 淡黄色	密 3 (2)	石・長・チ	ミガキ ハケ	硬				
	86	器台	8.8 (2.5)	淡茶色 淡茶色	密 4 (3)	石・長・チ	ナデ 不明	やや軟	完			
	87	器台	(4.7)	淡茶褐色 淡茶褐色	密 5 (1)	石・長・チ	ナデ ハケ	硬	1/4			
第40図	88	鉢	12.4 (7.6)	灰褐色 灰褐色	粗 3 (2)	石・長・赤	ハケ タタキ 不明	やや軟	1/4			
	89	鉢	13.5 (6.0)	淡暗橙色 暗茶褐色	粗 5 (2)	石・長・赤	タタキ 不明	硬	1/4			
	90	鉢	14.7 5.4	淡茶褐色 淡茶褐色	密 2 (0.5)	石・長・赤	ナデ 板状ハケ	硬	1/3			
	91	鉢	10.2 5.6	暗茶褐色 暗淡褐色	粗 2 (1)	石・長・雲・赤	指おさえ後 ナデ	軟	3/4			
	92	脚	(3.0)	茶褐色 茶褐色	やや粗 4 (3)	石・長・角	ナデ ナデ	硬				
	93	脚	(3.6)	淡褐色 淡褐色	密 3 (2)	石・長・チ	不明 不明	やや軟				
	94	壺	12.4 (7.5)	淡明茶色 淡明茶色	やや粗 2 (1)	石・長・チ・雲	ハケ 不明	やや軟	1/2			
	95	壺	10.7 (8.2)	淡黄茶色 淡黄茶色	やや粗	石・長・雲	ハケ 不明	軟	1/4			
	96	壺	12.1 (5.9)	明橙褐色 明橙褐色	密 1 (-)	不明	不明 不明	軟	1/3			
	97	壺	9.9 (6.2)	淡褐色 淡褐色	やや粗 5 (1)	石・長・チ・雲	ナデ ハケ ハケ ケズリ	硬	5/6			
	98	壺	6.8 (8.7)	明赤褐色 暗灰色	密 4 (2)	石・長・チ	ハケ ケズリ	硬	3/4			
	99	壺	10.0 (6.4)	淡橙色 淡橙色	やや粗 5 (2)	石・長・チ・赤	不明 ナデ	やや軟	5/8			
	100	壺	(5.3)	淡茶褐色 淡茶褐色	やや粗	石・長・雲	不明 不明	やや軟				

種類	図番	器種	法量 (cm) 口径・残存高 (): 残高	色調		胎土		調整・手法		焼成	口縁部 残存度	備考
				外面	内面	素質、含有鉱物 (粒度/種類)	外面 内面	外面	内面			
第40	101	底	(5.5)	淡褐色	やや粗	4 (3)	不明	やや軟				
				淡褐色	石・長・チ・赤	不明						
第40	102	脚	(4.0)	淡灰褐色	密	2 (1)	ミガキ	硬				
				淡灰褐色	長・赤	不明						
第41	1	1	16.4	淡茶色	粗	8 (3)	ハケ	ミガキ	やや軟	完		
				淡茶色	石・長・チ・雲	ナデ						
		2	12.8	淡橙茶色	やや粗	4 (2)	不明	軟	1/4			
				淡橙茶色	石・長・チ・赤	不明						
		3	13.6	淡橙茶色	やや粗	7 (3)	タタキ	軟	1/8			
				淡橙茶色	石・長・チ・赤	不明						
		4	3.5	淡黄茶色	やや粗	(-)	不明	軟	1/2			
				淡黄茶色	不明	不明						
		5	15.2	暗赤褐色	やや粗	4 (2)	ハケ	やや軟	完			
				暗赤褐色	石・長・チ	ハケ						
		6	2.2	淡褐色	粗	4 (2)	不明	やや軟				
				暗褐色	石・長・赤	不明						
		7	16.0	淡茶色	密	1 (-)	不明	硬	1/6			
				淡茶色	不明	ナデ						
		8	16.8	淡黄茶色	密	2 (1)	不明	軟	1/9			
				淡黄茶色	石・長・赤	不明						
		9	(7.5)	淡茶色	密	5 (2)	不明	硬				
				淡茶色	石・長・チ・赤	不明						
10	13.5	淡茶色	粗	4 (2)	不明	軟	完					
		淡茶色	石・長・チ・赤	不明								
11	12.7	淡茶色	粗	4 (2)	ナデ	硬	2/3					
		淡茶色	石・長	ナデ								
12	(3.8)	暗赤褐色	やや粗	3 (2)	ナデ	やや軟						
		黒褐色	石・長	ナデ								
13	14.4	灰白色	6		ハラケズリ	硬	1/8					
		灰白色	長石	ナデ								
14	13.5	青灰色	3		ハラケズリ	硬	2/5					
		青灰色	長石?	ナデ								
15	15.0	暗青灰色			ハラケズリ	硬	1/8					
		淡青灰色			ナデ							
16	13.2	淡青灰色	黒色粒		ハラケズリ	硬	1/8					
		暗青灰色			ナデ							
17	12.0	淡青灰色	黒色粒		ハラケズリ	硬	1/8					
		暗青灰色			ナデ							
18		暗青灰色			縄蓆文	硬				断面赤褐色		
		淡青灰色			ナデ							

種類	図番号	器種	法量 (cm) 口径・残存高 () : 残高	色調		胎土	調整・手法		焼成	口縁部 残存度	備考
				外面	内面	素質、含有鉱物 (粒度/種類)	外面	内面			
第41図	19	把手		淡橙茶色 淡橙茶色	粗 3 (2) 石・長・赤	ナデ 不明	軟				
	20	杯蓋	1 6.2 5.2 5	青灰色 青灰色	3 石・長	ヘラケズリ ナデ	硬	2/3			
	21	鉢	1 2.0 6.6	橙褐色 橙褐色	やや粗 3 (2) 石・長・チ・雲	ハケ ナデ ナデ	やや軟	完	スス		
	22	甕	1 0.2 (1 1.9)	暗橙茶色 暗橙茶色	粗 3 (2) 石・長・チ・赤	不明 不明	やや軟	1/6			
	23	壺	8.2 (5.2)	暗灰色 暗灰色	やや粗 2 (1)	ナデ ハケ	硬	1/6			
	24	高杯	(4.2)	淡灰茶色 淡灰茶色	粗 4 (2) 石・長・チ	不明 不明	軟			石英多い	
	25	高杯	(8.0)	淡灰茶色 淡灰茶色	やや粗 3 (2) 石・長・チ・赤	ナデ 不明	やや軟				
	26	高杯	(7.4)	暗橙茶色 暗橙茶色	やや粗 3 (2) 石・長・チ	ナデ ハケ	やや軟				
	27	甕		暗青灰色 淡青灰色		格子目タタキ ナデ	硬			断面赤褐色	
第42図	28	甕	1 7.6 (5.8)	淡茶色 淡茶色	密 2 (2) 石・長・雲	ハケ ハケ	やや軟	1/5			
	29	把手	3.9 2.1	淡茶色 淡茶色	密 2 (1) 石・長・チ・赤	ハケ 不明	やや軟				
	30	甕	1 1.6 (5.1)	淡青灰色 青灰色	白色粒	カキメ ナデ	硬	2/3			
	31	碗	1 1.8	淡褐色 淡褐色	やや粗 3 (1) 石・長	ナデ ハケ ナデ	硬	1/6			
	32	甕	2 9.8 (6.1)	淡橙茶色 淡橙茶色	密 4 (3) 石・長・チ・雲	タタキ ハケ	硬	1/10			
	33	脚	4.0 (6.9)	淡茶色 淡茶色	密 2 (1) 石・長	不明 不明	軟				
	34	高杯	1 7.6 (7.3)	暗青灰色 暗青灰色	密 4 (-) 長	ケズリ ナデ	硬				
	35	脚	(2.4)	橙褐色 橙褐色	密 4 (-) 石・長	不明 不明	軟	1/12			
	36	器台	8.2 6.5	暗灰色 暗灰色	密 7 (-) 長・チ	不明 不明	軟	1/2			
	37	杯	1 2.9 4.1 5	暗青灰色 暗青灰色	長?	ケズリ ナデ	硬	1/3			
	38	杯	1 0.8 (4.8)	灰白色 灰白色		ケズリ ナデ	やや軟	1/3			

種 類	図 番 号	器 種	法量 (c m) 口径・残存高 () : 残高	色調		胎土		調整・手法		焼成	口縁部 残存度	備考
				外面	内面	素質、含有鉱物 (粒度/種類)	外面 内面					
第 4 2	39	甕	14.0 (7.0)	淡灰色	淡灰色			タタキ 青海波	硬	1/4	カキメ	
	40	甕	18.6 (6.8)	淡青灰色	淡青灰色			タタキ 青海波	硬	1/3	頸部カキメ	
	41	甕	(11.4)	淡橙茶色	淡橙褐色	粗 5 (2) 長・石・チ		ハケ ハケ	軟		黒斑	
第 4 3 図	1	杯 身	9.4 3.4	淡灰色	淡灰色			ケズリ ナデ	やや軟	完		
	2	高 杯	11.4 7.3	灰白色	灰白色			ナデ ナデ	やや軟	完		
	3	椀	12.4 4.1	淡橙茶色	淡橙褐色	やや粗 2 (1) 石・長		ミガキ ミガキ	硬	2/3		
	4	椀	11.4 (3.5)	淡橙茶色	淡橙褐色	やや粗 2 (1) 石・長		ミガキ ミガキ	硬	1/6		
	5	椀	11.0 3.4	淡橙茶色	淡橙褐色	やや粗 2 (1) 石・長		ミガキ ミガキ	硬	1/3		
	6	高 杯	10.0 7.1	橙茶色	橙茶色	粗 1 (-) 石・長		ミガキ ミガキ	硬	3/4		
	7	杯 蓋	10.0 3.5	淡青灰色	淡青灰色			ケズリ ナデ ナデ	硬	1/4		
	8	杯 身	10.0 3.4	茶灰色	茶灰色			ナデ ナデ	硬	7/8	漆附着	
	9	椀	17.3 5.3	淡茶褐色	淡茶褐色	やや粗 3 (1) 石・長・チ		ケズリミガキ ミガキ	硬	1/2		
	10	椀	15.8 5.0	暗橙褐色	暗橙褐色	やや粗 2 (-) 石・長・赤		ケズリミガキ ミガキ	硬	1/4		
	11	椀	(3.0)	暗橙茶色	淡茶褐色	粗 3 (-) 石・長		ミガキ ミガキ	硬			
	12	杯 身	9.2 (2.2)	暗青灰色	暗青灰色			ナデ ナデ	硬	1/4		
	13	杯 身	9.1 2.8	淡茶灰色	淡茶灰色			ナデ ナデ	軟	2/3		
	14	甕	22.2 (5.1)	淡橙茶色	淡橙褐色	密 3 (3) 石・長・赤		不明 不明	軟	1/6		
	15	甕	24.8 (5.0)	淡黄茶色	淡黄褐色	やや粗 3 (3) 石・長・赤		ナデ ナデ	硬	1/4		
	16	甕	19.2 (6.2)	淡茶色	淡茶色	密 4 (2) 石・長・チ・赤		ハケ 不明	軟	1/6		
	17	甕	21.6 (5.0)	淡茶色	淡茶色	密 4 (2) 石・長・チ・赤		ハケ ハケ	軟	1/4		

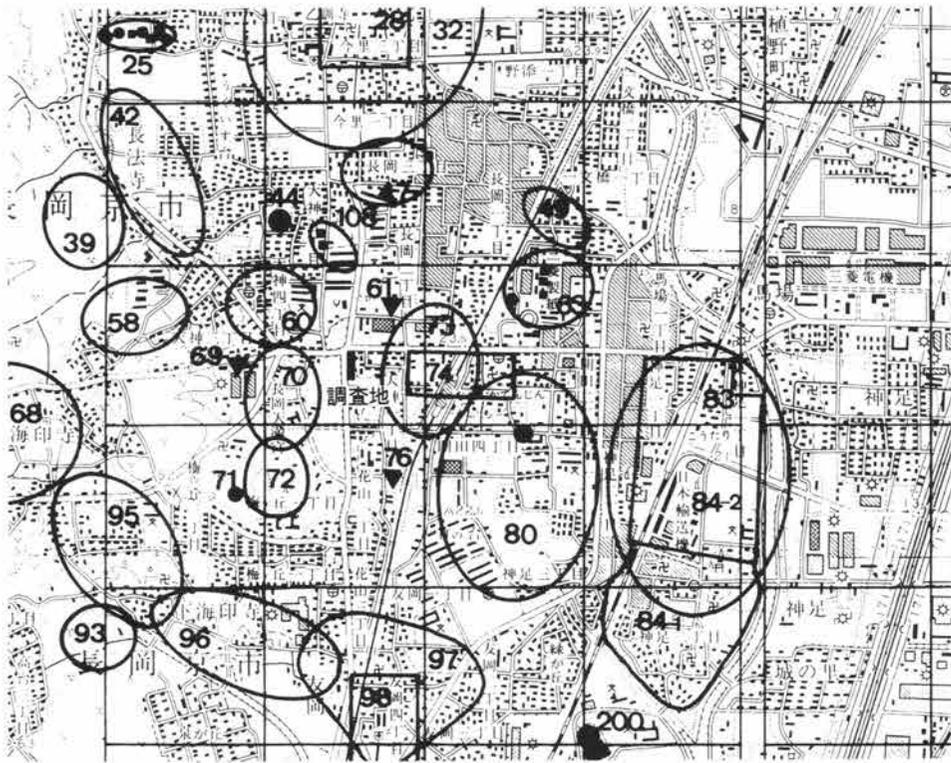
種類	図番号	器種	法量 (cm) 口径・残存高 ():残高	色調		胎土	調整・手法		焼成	口縁部 残存度	備考
				外面	内面	素質、含有鉱物 (粒度/種類)	外面	内面			
第44図	1	壺	15.6 (2.2)	淡褐色 淡褐色	やや粗 4 (2) 石・長・雲	不明 不明	やや軟	1/6			
	2	壺	16.3 (7.3)	淡茶褐色 淡茶褐色	密 5 (3) 石・長・チ・赤	ナデ ナデ	やや軟	1/4			
	3	甕	13.8 (3.0)	淡茶褐色 暗灰色	密 2 (-) 長・赤	不明 不明	やや軟	1/6			
	4	甕	16.6 (2.5)	淡茶褐色 淡茶褐色	密 4 (3) 石・長・チ・雲	ナデ ナデ	やや軟	1/5			
	5	甕	16.0 (4.8)	暗褐色 暗褐色	密 (-) 石・長・雲・角	ナデ ナデ	硬	1/8	生駒山西麓		
	6	甕	16.2 (7.8)	暗茶色 暗茶色	やや粗 5 (2) 石・長・チ	不明 不明	やや軟	1/6			
	7	甕	18.7 (8.8)	淡茶色 淡茶色	やや粗 3 (2) 石・長・雲・赤	ハケ ハケ	硬	1/9			
	8	器台	17.6 (4.4)	暗橙褐色 暗橙褐色	密 3 (2) 石・長・雲	ナデ ナデ	硬	2/3			
	9	高杯	23.4 (8.3)	暗茶色 暗橙褐色	粗 5 (3) 石・長・チ・赤	ナデ ナデ	硬	1/10			
	10	高杯	19.6 (12.7)	暗橙褐色 暗赤褐色	やや粗 4 (2) 石・長・チ・赤	不明 不明	軟	1/3			
	11	高杯	(9.5)	淡赤茶色 淡赤茶色	密 2 (2) 石・長・赤	不明 不明	軟				
	12	杯蓋	12.5 3.8	暗青灰色 暗青灰色		ケズリ ナデ	硬	1/2			
	13	杯蓋	13.5 4.2	暗灰色 暗青灰色		ケズリ ナデ	硬	1/10			
	14	杯蓋	13.4 4.3	明青灰色 明青灰色		ケズリ ナデ	硬	1/5			
	15	杯身	13.0 5.6	淡灰色 淡灰色		ケズリ ナデ	やや軟	1/4			
	16	杯身	11.1 4.5	淡青灰色 淡青灰色		ケズリ ナデ	硬	2/3			
	17	高杯	(3.9)	淡灰色 淡灰色		ナデ ナデ	硬				
	18	杯蓋	11.7 (3.9)	淡灰色 淡灰色		ケズリ ナデ	硬	1/3			
	19	杯蓋	11.0 (2.9)	淡青灰色 淡青灰色		ケズリ ナデ	硬	1/5			
	20	杯蓋	9.0 (3.1)	灰色 灰色		ケズリ ナデ	硬	1/8			

粒度・数字は砂粒の最大のもの、()内は主体を占めるものの大きさを示す。

3. 長岡京跡右京第411次発掘調査概要 (7ANNKZ-2地区)

1. はじめに

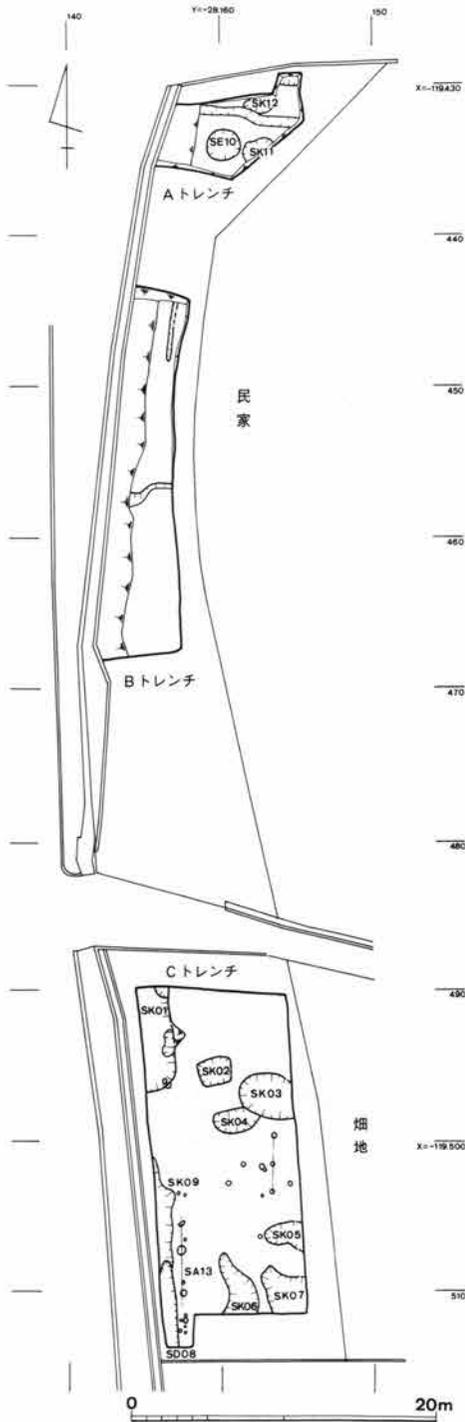
この調査は、都市計画道路石見下海印寺線の街路改良工事に伴うもので、長岡京市天神一丁目45-3番地ほかにおいて、京都府乙訓土木事務所の依頼を受けて実施した。石見下海印寺線は、これまで石見淀線と呼称されていたのが計画変更になり、名称も石見下海印寺線となった。(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターは、設立した初年度の1981年と82年に石見淀線の埋蔵文化財の調査を実施している。^(注1)



第47図 調査地及び周辺遺跡位置図(1/25,000)

(『長岡京市遺跡地図』・『長岡京市史資料編』より作成)

- | | | | | |
|------------|--------------|-------------|----------|-----------|
| 44. 今里大塚古墳 | 108. 宇津久志古墳群 | 61. 小池下遺跡 | 60. 東代遺跡 | 70. 西陣町遺跡 |
| 71. 天神山古墳 | 72. 天神山遺跡 | 73. 開田城ノ内遺跡 | 74. 開田城跡 | 76. 十三遺跡 |
| 80. 開田遺跡 | | | | |



第48図 調査地平面図

調査対象地は、従来の長岡京条坊復原案(平城京型)では、右京五条三坊六町(新条坊復原案によれば六条三坊八町)にあたり、調査地の北端を五条条間小路(新呼称では五条大路)南側溝が通り、西側を西三坊坊間小路が通る場所になる。また、調査地の東には弥生時代から中世の集落跡である開田城ノ内遺跡、中世の城館跡である開田城があり、八条ヶ池の西側には平安時代の墳墓が発見された西陣町遺跡がある。このため、長岡京の条坊関連の遺構・遺物や弥生時代から中世の集落跡などの所在が予想された。

現地調査は、調査第2課課長補佐兼第4係長 平良泰久、主任調査員 戸原和人、調査員 石尾政信が担当し、1992年9月24日に開始し11月20日に終了した。調査面積は約300㎡である。

調査にあたって、長岡京市教育委員会、(財)長岡京市埋蔵文化財センターなどの関係諸機関、学生諸氏^(注2)などの協力をえた。なお、調査に係る経費は京都府乙訓木土事務所が負担した。

2. 調査の概要

調査対象地は、緩やかに北西から南東に広がる緩扇状地に位置する南北約85mの用地で、現在の標高は27.5~26mを測る。調査地の間を東西方向の小道が通るため、北部と南部に分け3か所の調査トレンチを設定した。北からA・B・Cと呼称する。調査前は、北部が民家敷地で南部が畑地でっ

た。重機で表土などを取り除いた後、人力で掘り下げた。

A・Bトレンチは西側が擁壁工事で攪乱されていた。また、民家敷地内も幾度か整地が繰り返されたようすで、暗茶褐色土・暗褐色土等が堆積していた。Aトレンチでは茶褐色土層に掘り込まれた近代溝、土坑、柱穴跡や小凹みと井戸跡を検出した。Bトレンチでは近代溝、小凹みと整地以前の段差を検出したのみで顕著な遺構はみられない。Cトレンチでは、北部で耕作土の直下が「地山」と考えられる黄褐色土・黄褐色砂礫層となり、南部で耕作土の下に黄灰褐色土・灰褐色土・暗褐色土が堆積し、その下層が黄褐色土となる。黄褐色土・黄褐色砂礫層に掘り込まれた土坑、溝、柱穴跡などを検出した。以下に主な遺構について南(Cトレンチ)から記述する。

(1) 検出遺構(第48・50～52図、図版第29～32)

土坑 S K 41101 Cトレンチの北西部で検出した土坑で、東西2m以上・南北6.7m以上ある。北東隅と東辺中央に凹みがあり、西に一段落ち込む。深さ20～50cmを測る。瓦器・須恵器・土師器・緑釉陶器などが出土した。

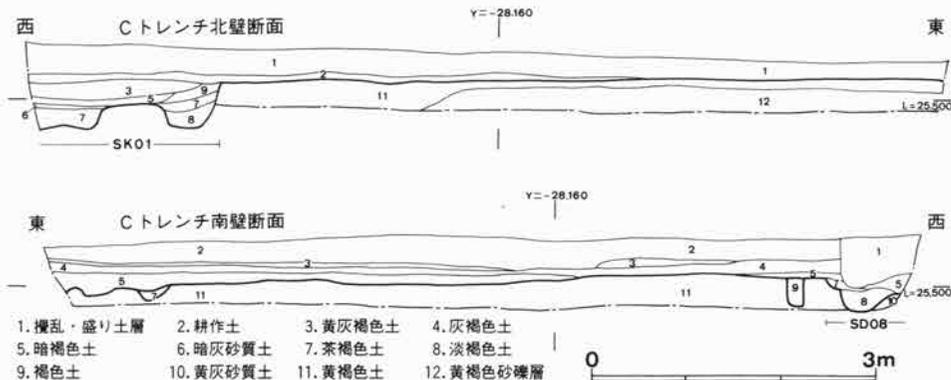
土坑 S K 41102 Cトレンチの北部で検出した隅丸方形の土坑で、長さ約2.1m・幅約1.9m・深さ5cm前後を測る。須恵器・土師器・瓦器の細片が出土した。

土坑 S K 41103 Cトレンチの北部で検出した隅丸方形の土坑で、東西3.3m以上・南北約3.0m・深さ5～10cmを測る。須恵器・土師器・瓦器の細片が出土した。

土坑 S K 41104 Cトレンチの北部で検出した土坑 S K 41103に接する東西方向の土坑で、東西約3.0m・南北約1.4m・深さ3～7cmを測る。土師器・瓦器の細片が出土した。

土坑 S K 41105 Cトレンチの南部で検出した長円形を呈する土坑で、東西約2.3m以上・最大幅1.0m・深さ5～10cmを測る。土師器・瓦器などの細片が出土した。

土坑 S K 41106 Cトレンチの南部で検出した南北方向の不定形な土坑である。南北



第49図 Cトレンチ土層断面図

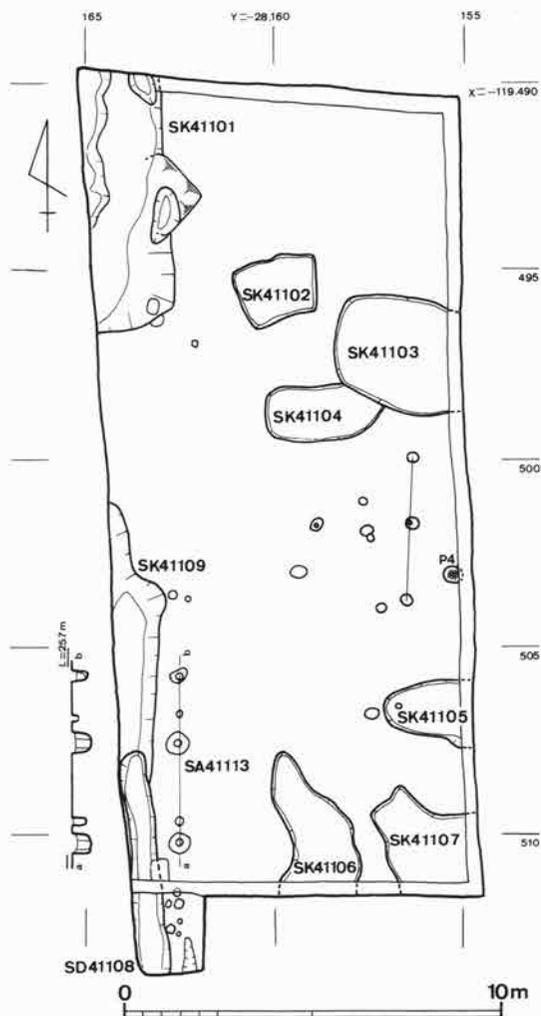
4.0m以上・最大幅2.0mを測る。須恵器・土師器・瓦器の細片が出土した。

土坑 S K 41107 Cトレンチの南東隅で検出した不定形の土坑である。東西2.7m以上・南北3.0m以上ある。深さ5～10cmを測る。須恵器・土師器・瓦器などの細片が出土した。

土坑 S K 41109 溝 S D 41108の北で検出した南北方向の土坑である。溝より新しい。南北約7.5m・幅1.2m以上・深さ10cm前後を測る。土師器・瓦器などの細片が出土した。

土坑 S K 41102～09は、皿状の浅いもので「地山」面の凹地に、整地のとき暗褐色土などが堆積したものと考えられる。

溝 S D 41108 Cトレンチの南西隅で検出した南北方向の素掘り溝である。南北6.0mにわたって検出した。幅0.8m以上・深さ約30cmを測り、北では段がある。わずかに北で西



第50図 Cトレンチ遺構平面図

に振れている(2～3度)。上層では瓦器が出土したが、下層には長岡京期までさかのぼる須恵器杯片などを包含する。

柵列 S A 41113 Cトレンチの南西隅で検出した S D 41108に平行した柱穴列を柵列と推定した。柱穴の間隔は不揃いである。柱穴の一つは径50cmの円形で深さ45cmを測り、径20cmの柱痕跡が見られる。

Cトレンチでは、このほかにも、柱穴群があるが明瞭な建物跡と推定されるものは検出していない。このうち柱穴 P 4には拳大の礫が入っていた。

井戸跡 S E 41110 Aトレンチで検出した井戸跡である。一部が崩壊しているが、検出面で直径約2.2m・深さ約2.8mを測る。井戸内部は多量の土器を包含する茶褐色土・暗茶褐色土で埋められ、井戸枠等は残存していなかった。多量の土師器とともに折り曲げ技法で瓦当を

造る剣頭文軒丸瓦、釘などが出土した。土師器は上層出土のものと下層のものが接合することから、一時期に埋没したと考えられる。

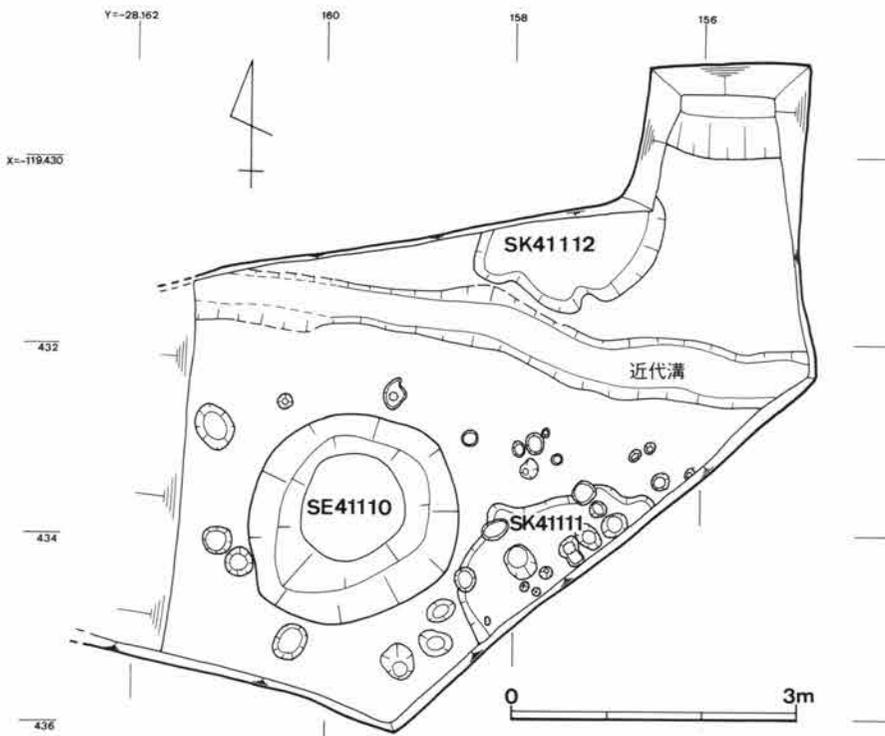
土坑SK41111 井戸跡SE41110の東で検出した土坑である。不整円形で深さ10cm前後を測る。底及び周辺に小凹みが見られる。土師器の小破片が出土した。

土坑SK41112 Aトレンチの北辺で検出した土坑である。不整円形を呈し、摺り鉢状に落ち込み深さ約40cmを測る。土器類は出土しなかった。

Aトレンチでは、五条条間小路(新呼称では五条大路)の南側溝が通る位置にあたることから、用地境界まで北に拡張したが攪乱と北方への落ち込みを確認したのみで、長岡京期の遺構は検出されなかった。

(2) 出土遺物

各トレンチの堆積層や遺物包含層及び土坑からは中世を中心とした時期の遺物が出土し、井戸跡から大量の土師器(皿類)が出土した。遺物包含層・土坑の土器は破片のため図化できないものが多い。以下に包含層及び井戸跡以外の遺構のもの、井戸跡出土のものについて簡単に記述する。



第51図 Aトレンチ遺構平面図

①包含層及び土坑出土の遺物(第53図・第56図18、図版第33)

土坑 S K41101から瓦器椀(1~6)・同皿(7・8)、土師器皿(9)・同甕(16)、須恵器椀(11・12)・同壺(10)・同鉢(15)、緑釉陶器(13)、緑釉陶器素地(14)、滑石製品(17)などが出土した。全体がわかるのは8だけである。11は底部を糸きりの後、高台を貼りつけ、高台径は5.8cmを測る。13は淡青灰色の胎土で、淡緑色に発色した釉薬を外表面全体にかける。14は石英・黒灰色粒子などを含み、焼成がやや甘く淡青灰色~灰色を呈する。削り出し高台である。17は外面にススが付着後、幅1mm前後の擦痕が認められ、上端部にも同様な擦痕があることから、石鍋を再加工したものと考えられる。この土坑からは平安時代前期から鎌倉時代の遺物が出土するため、中世以降の埋没と推定される。

Cトレンチの柱穴P4から土師器杯または皿と推定されるもの(23)が出土した。口縁端部を内側に肥厚させ、外面にヘラケズリがみられる。胎土に石英・赤褐色粒子を含み、色調が橙褐色を呈する。形態の特徴から長岡京期までさかのぼる可能性がある。

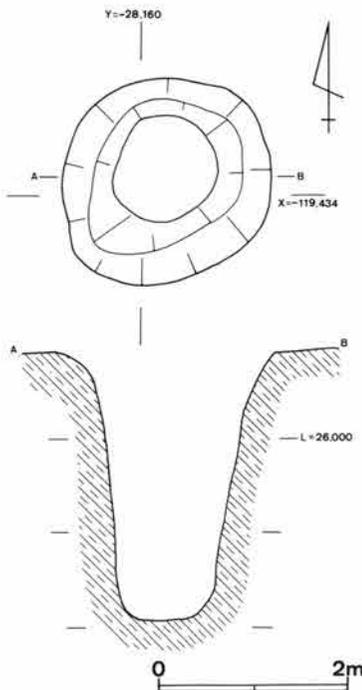
Cトレンチ包含層から銅椀(22)、青磁椀(25)、白磁皿(24)、鉄製品(第56図18)などが出土した。銅椀は厚さ1.5~2mmを測り、口縁端部は内側に肥厚させる。復原口径は18.8cmを測る。青磁椀は口縁部外面に鑄蓮弁を描く。鉄製品は錆の付着が著しく不明なことが多いが、刃部が認められるため刀子または小刀と推定される。

Bトレンチから土師器鍋(18)、軒丸瓦(29)、軒平瓦(30)などが出土した。29は蓮華文軒丸瓦で外区外縁に鋸歯文を配する。胎土に石英等の砂粒を含み、やや軟質で瓦当表面が暗灰色、表面が灰色~黄褐色を呈する。平城宮式と推定される。30は剣頭文軒平瓦である。剣頭は幅広く、子葉も幅広い。胎土に石英等の砂粒を含み、やや軟質で淡灰色を呈する。

Aトレンチから須恵器練り鉢(20・21)・同壺の口縁部(26)・同壺の体部(28)、緑釉陶器素地(27)などが出土した。27は精良な胎土で、断面が灰色・表面が灰色~黄灰色を呈する。削り出し高台である。

②井戸跡 S E41110出土の遺物(第54~56図、図版第33・34)

井戸跡から、土師器皿などコンテナ整理箱にし



第52図 井戸跡 S E41110実測図

て16箱以上の遺物が出土した。土師器以外に須恵器杯(111)・同椀(112)、軒丸瓦(113)、軒平瓦(114・115)、石製硯(116)、釘(第56図1~17)などがある。土師器皿の分類は伊野分類を参考にした。^(注3)

土師器の色調は大別して褐色系と灰白色系のものがある。褐色系には淡褐色・淡黄褐色・淡赤褐色があり、そのほとんどに赤褐色粒子を含む。灰白色系は、やや砂質のもの、粘土質のものがある。

褐色系の土師器皿は、手捏ねで成形し、底部が不調整で口縁部をヨコナデする伊野分類のAタイプが圧倒的に多い。ヨコナデの強弱によって口縁部が外反するもの、直線的なものがある。口径約15cm・深さ2cm前後のもの(1~36・101~104)、口径約11cm・深さ2cm前後のもの(37・38)、口径約7cm・深さ1~1.5cm(39~57)のもの3規格がみられる。小規格の皿には深さ1cm以下の扁平なものがある。また、口径約11cm・深さ3~3.5cmで椀型のもの(58・59)、口径12~13cm・深さ2.5cm前後で杯型のもの(60~62)、杯型でやや浅いもの(63~68)などもある。

灰白色系の土師器皿は、口径8~9cm・深さ1.5~2cmで口縁部がやや厚く内湾ぎみに立ち上がるもの(71~80)、口径6.5~7.5cm・深さ1.5~2cmで底部が突出する(いわゆるヘソ皿)かこれに近いもの(81~100)、その中間的なもの(105~108)、やや大きく深いもの(109・110)がある。口縁部が内湾ぎみに立ち上がるものは胎土がやや砂質である。このタイプには、ススが付着した燈明皿に使用した痕跡を留めるものがある(78・79)。

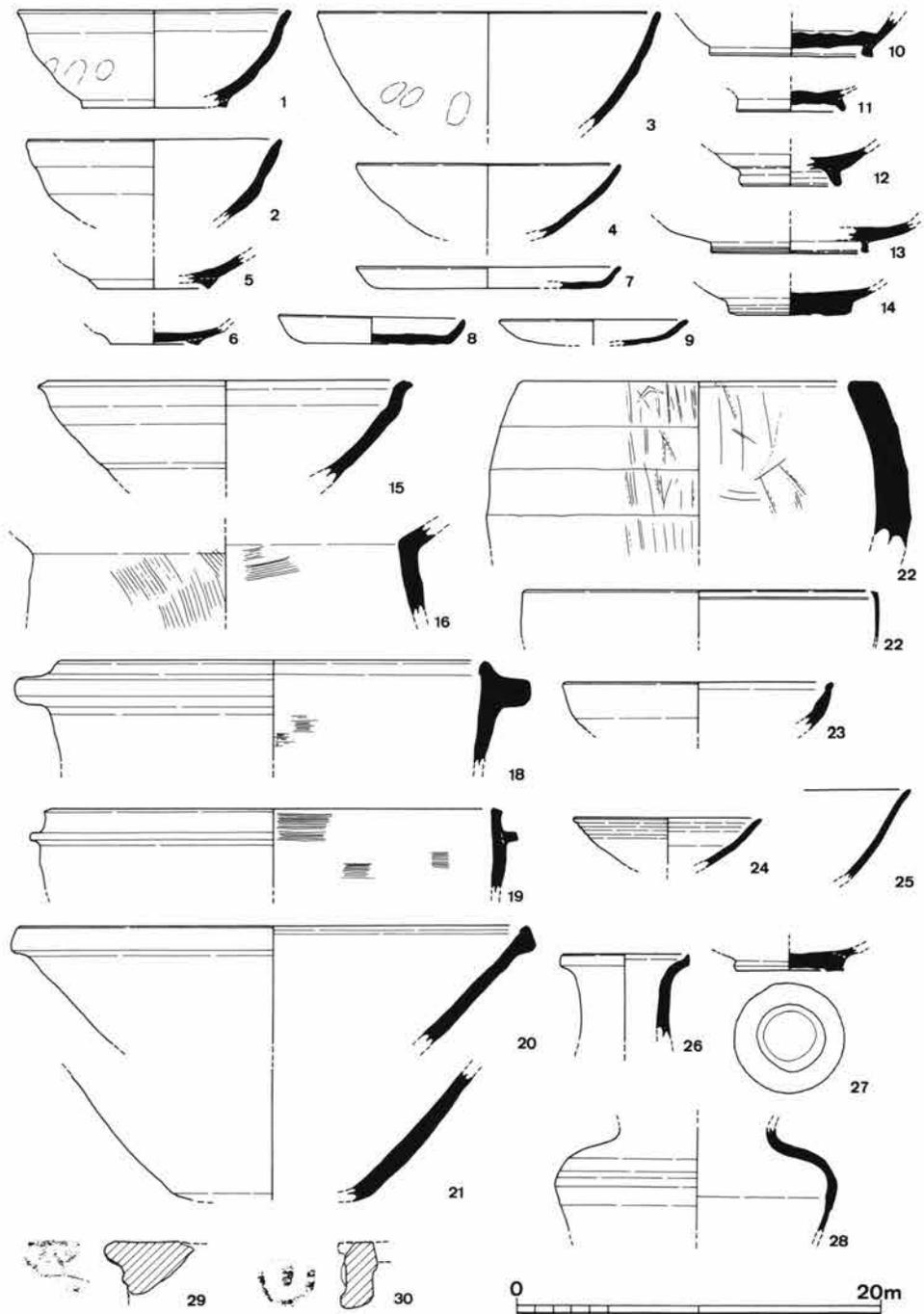
これらの土師器皿類は、伊野分類のAタイプが多く、いわゆるヘソ皿を含むので、平安京跡出土資料から判断して14世紀前半の所産であろう。

須恵器は、形態の特徴からみて平安時代(前期・後期)のものが混入したのであろう。

軒丸瓦(113)は、残存する瓦当面を薄く造るため、外縁との境界が屈曲する。このため、外区にある珠文が外縁側を向き、拓本では表現しにくい。胎土に石英等の砂粒を含み、焼成がやや甘く表面が黒灰色、断面が灰色を呈する。

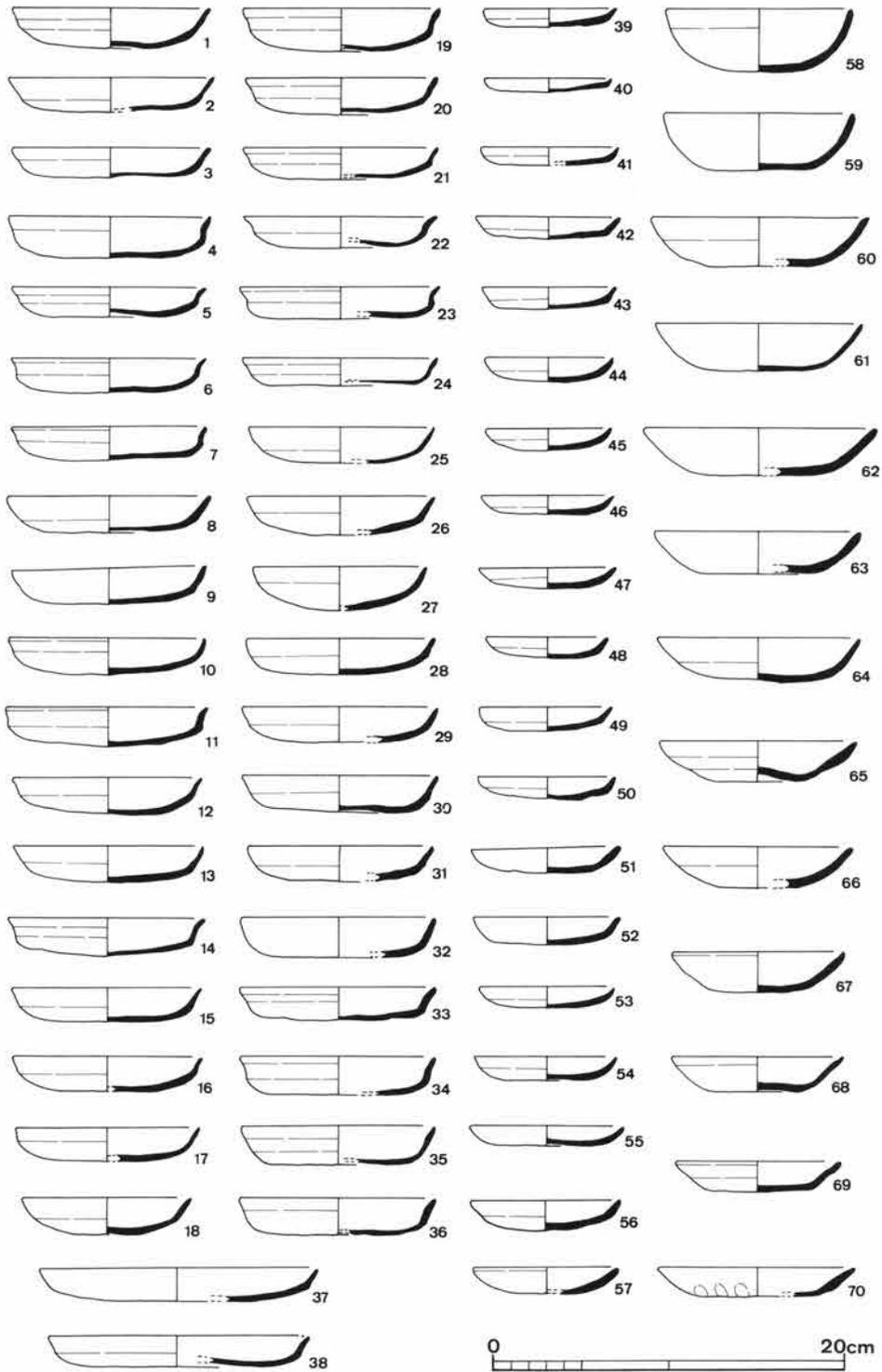
軒平瓦(114・115)は、剣頭文軒平瓦である。114は平瓦を折り曲げた後、顎に粘土を補充して瓦当面を造る。瓦当文様はBトレンチ出土の瓦(第53図30)より剣頭の幅がやや狭い(約18mm)。子葉の幅は狭い。平瓦部の凹面に布目痕が残る。胎土に石英等の砂粒を含み、焼成がやや甘く表面が黒灰色~灰色、断面が灰色を呈する。115の瓦当面は114と同様の技法で造る。瓦当文様は剣頭の幅が114より狭く、子葉の幅は広い。平瓦部の凹面に布目痕残り、凸面にナデ痕跡が認められる。胎土に石英・チャート等の砂粒や1cm前後の礫を含み、焼成がやや甘く表面が淡黄灰色、断面が灰色を呈する。

「平安京跡・左京内膳町」の調査では、^(注4) 剣頭文軒平瓦類が平安時代後期の12世紀末~13



第53図 出土遺物実測図・拓影(1)

1~17・24. Cトレンチ土坑S K41101出土 22・23・25. Cトレンチ出土
 18・29・30. Bトレンチ出土 19~21・26~28. Aトレンチ出土



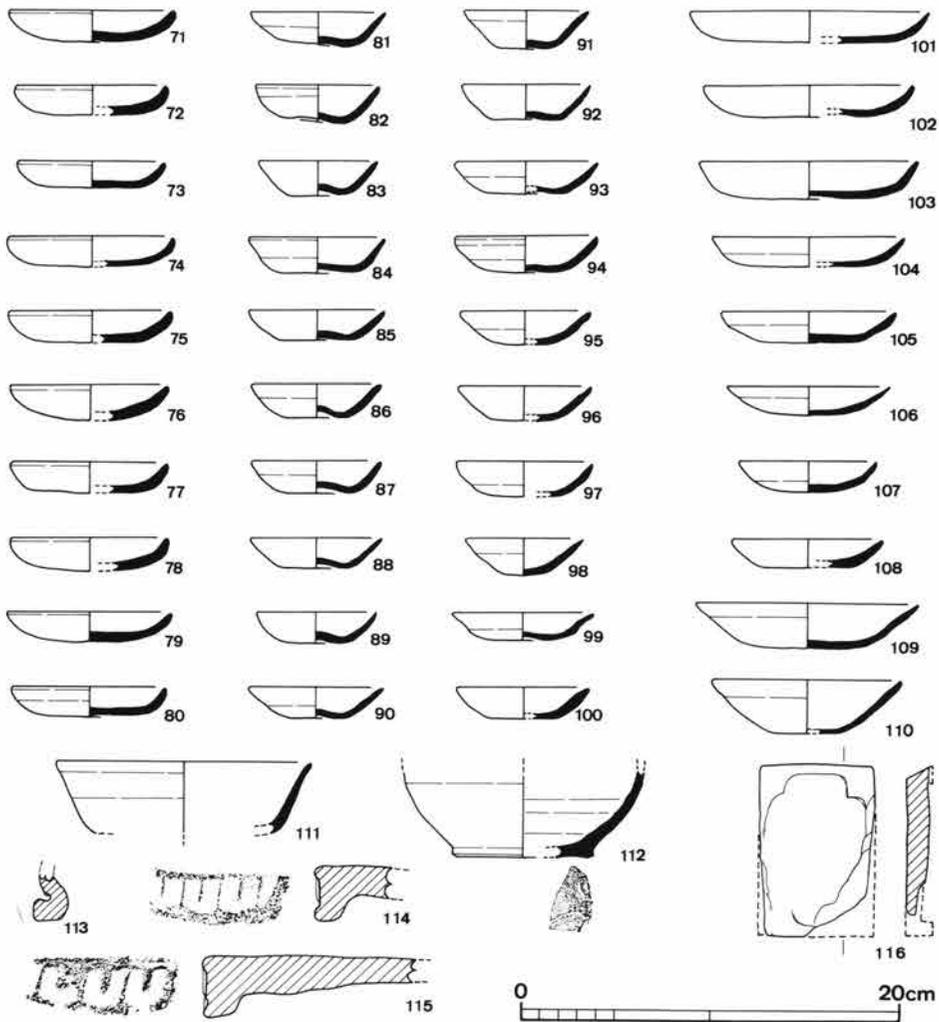
第54図 出土遺物実測図(2) 井戸跡 S E41110出土 1~70.土師皿

世紀初頭の遺構から出土しており、その製作年代を12世紀後半にしている。この調査で出土した剣頭文軒平瓦も、ほぼ同時期の所産と推定できる。

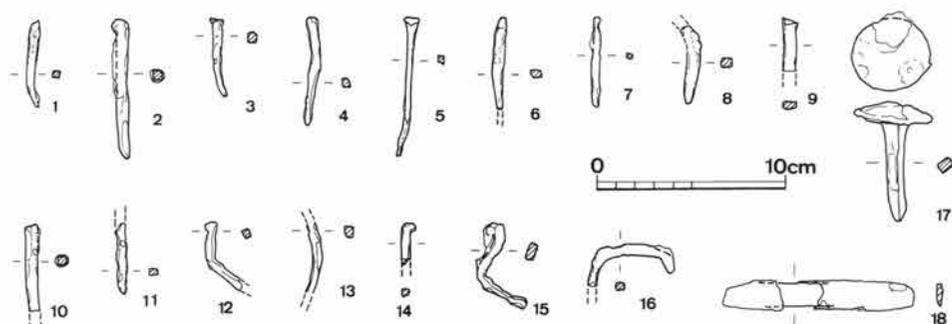
剣頭文軒平瓦は、乙訓地域では「勝龍寺城」で出土している。^(注5) その瓦は剣頭の幅がやや広く、子葉も広い。第53図30や第55図115に似ている。

石製硯(116)は粘板岩質の石材を使用している。剝離が著しく不明瞭な部分もあるが、海と陸の境界線が残り、海の中央部がわずかに脹らんでいる。残存長9.1cm、残存幅6.2cm、残存高1.2cmを測る。

鉄釘(第56図1~17)は残存状況が悪く形状の明確なものは少ないが、脚部はいずれも断



第55図 出土遺物実測図・拓影(3) 井戸跡SE41110出土
71~110.土師器皿 111・112.須恵器 113~115.軒瓦 116.石製硯



第56図 出土遺物実測図(4) 鉄製品

面が長方形・方形を呈する。5は頭部を平たく叩きだすもので、長さ7.3cmを測る。14は頭部を折り曲げる。17は円形の頭部を鍛接した円頭釘と呼ばれるものである。頭部径4.2cm前後・長さ6.3cmを測る。

3. まとめ

当地は北西から南東方向に緩やかに傾斜する地形を屋敷地と畑等に利用しており、大きく地形の改変を受けている。このため長岡京期の遺構は削平された可能性がある。

長岡京期の遺構とは断定しがたいが、溝S D41108は、溝の中心点をX=-119,510.000、Y=-28,163.500にもとめれば、右京第105次調査で検出された西三坊坊間小路西側溝S D10571(X=-118,865.000、Y=-28,171.400)からの溝心間距離が7.9mとなることから、西三坊坊間小路東側溝の可能性もある。そして、溝S D41108に並行する柵列跡S A41113も長岡京期までさかのぼる可能性がある。

Aトレンチの井戸跡S E41110が検出されたことから、この周辺に中世集落が存在したことが明らかになった。開田城内遺跡や開田城に関係するものであろう。また、井戸跡S E41110から多量に出土した土師器皿類は、同時に出土した剣頭文軒平瓦とは1世紀以上の時期差があり、どこで使用されたか興味がもたれる。剣頭文軒平瓦は、この周辺では出土例がなく、長岡天満宮の前身施設や西陣町遺跡との関連も今後注意する必要がある。周辺での調査が期待される。

(石尾政信)

注1 山口 博ほか「長岡京跡右京第83・105次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第9冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1984

注2 今回の調査で参加・協力いただいた方々に記して謝意を表する(敬称略・順不同)。

飛田浩一、岡本一秀、小笠原健二、永見真知子、山中道代、針尾紀代、山下敬子、寺尾貴美子

- 注3 伊野近富「かわらけ考」(『京都府埋蔵文化財論集』第1集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1988
- 注4 平良泰久・伊野近富ほか「平安京跡(左京内膳町)昭和54年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1980-3)』 京都府教育委員会) 1980
- 注5 岩崎 誠・中山修一・北垣總一郎・橋本清一・近藤公夫「勝龍寺城発掘調査報告」(『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第6冊 (財)長岡京市埋蔵文化財センター) 1991

4. 大切^{おぎれ}遺跡発掘調査概要

1. はじめに

大切遺跡は、綴喜郡田辺町大字草内小字大切に所在する。

今回の調査は、国道307号道路新設改良事業に伴い、京都府土木建築部の依頼を受けて当調査研究センターが調査を実施した。

調査対象となった大切遺跡は、防賀川小規模河川改修事業に伴う事前の発掘調査が平成3年度に行われた結果、新たに発見された遺跡である。当初、この地域は木津川と防賀川の影響が考えられ、良好な状態での遺跡検出が期待されていなかった。防賀川は南山城地域に見られる典型的な天井川で、古くから洪水の記録がある。現在、天井川の盛り土掘り下げ工事が行われており、改修後の両岸は親水地域として整備が進んでいる。その工事の際に、弥生時代中期から古墳時代・中世・近世の遺物が発見されている。また、昨年度の調査では古墳時代前期の溝や、中・近世の遺物包含層が確認された^(註1)。

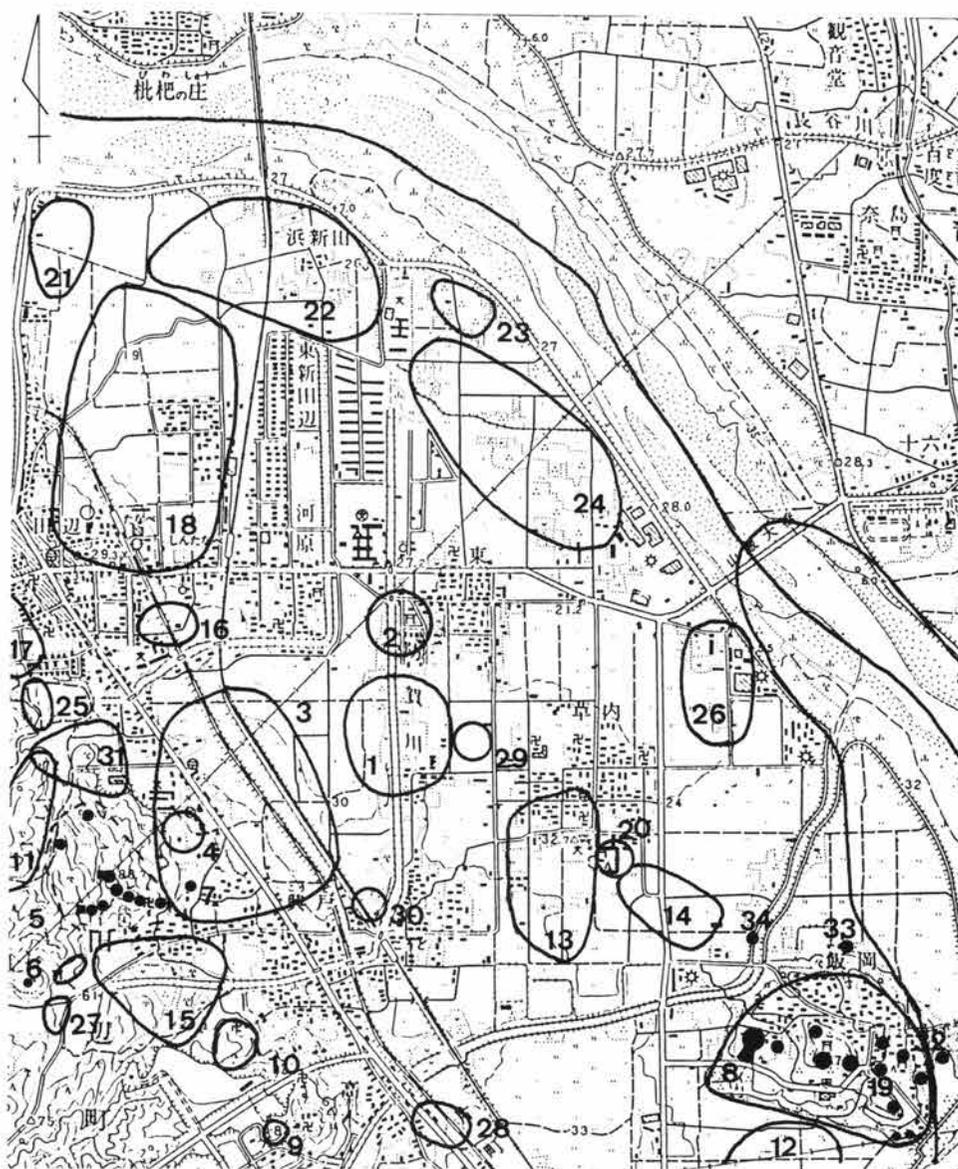
今回の調査地は、防賀川の東岸の天井川の盛り土の裾部にあたる。遺跡の範囲は防賀川を挟んで両岸に広がるが、発見されたときには、防賀川を渡る橋の工事がほぼ終わっており、西岸地域はすでに道路工事が開始されており、調査は実施できなかった。

今回の発掘調査は、調査面積約280㎡で、平成4年5月18日から7月5日にかけて行った。また、調査成果を6月25日の関係者説明会において公表した。現地調査は、当調査研究センター調査第2課調査第3係長小山雅人、同調査員有井広幸が担当した。本概要の執筆・編集は有井が行った。調査を進めるにあたり、田辺町教育委員会・京都府田辺土木事務所をはじめ関係諸機関の協力と、調査に参加された多くの方々への援助をいただいた。記して感謝の意を表したい。

なお、調査に関係するすべての経費は、京都府土木建築部が負担された。

2. 位置と環境(第57～59図、図版第35参照)

田辺町は木津川の左岸に位置し、南西部は京阪奈丘陵の一部である甘南備山丘陵によって占められ、北部～北東部～南東部は木津川によって形成された沖積地となっている。調査地は田辺町のほぼ中央部の沖積地に位置する。木津川は山間部を西流した後、木津町内で平地部に出るとともに、流れを北に変える。やがて田辺町付近で再び流れを西に変え、



第57図 調査地位置図(1/25,000)

- | | | | |
|-----------|-------------|------------|------------|
| 1. 大切遺跡 | 10. 興戸城跡 | 19. 飯岡東原古墳 | 28. 野神遺跡 |
| 2. 鍵田遺跡 | 11. 田辺城跡 | 20. 草路城跡 | 29. 五反田遺跡 |
| 3. 興戸遺跡 | 12. 古屋敷遺跡 | 21. 西浜遺跡 | 30. 下ノ川原遺跡 |
| 4. 興戸廃寺 | 13. 南垣内遺跡 | 22. 伝道林遺跡 | 31. 田辺遺跡 |
| 5. 興戸古墳群 | 14. 宮ノ後遺跡 | 23. 青上遺跡 | 32. 塚古墳 |
| 6. 酒壺古墳 | 15. 興戸宮ノ前遺跡 | 24. 東神屋遺跡 | 33. 馬塚古墳 |
| 7. 郡塚古墳 | 16. 河原遺跡 | 25. 竹ノ脇遺跡 | 34. 古塚古墳 |
| 8. 飯岡車塚古墳 | 17. 尼ヶ池遺跡 | 26. 橋折遺跡 | |
| 9. 天神山遺跡 | 18. 稲葉遺跡 | 27. 川原谷遺跡 | |

宇治川、桂川との合流点へと向かう。南山城の盆地内では木津川に流れ込む多くの支流が見られるが、そのほとんどは天井川になっている。木津川流域には花崗岩が多く、山地の荒廃によって土砂の流入量が増し、河床の上昇を招いたようである。その結果、支流の河床も上げねばならなくなり、堤防を増強し、この地域に天井川が発達することになったとされている。天井川が発達した時期については、江戸時代初頭以降南山城地域の洪水の記録が増大しており、この頃より顕著になっていったと思われる。田辺町東集落の中世からの記録でも、この地域が洪水に見舞われた記録が江戸時代後期に増えている^(注2)。

防賀川は甘南備山丘陵の麓を発した後、西に向かって流れ下る。そして、すぐ天井川化して府道木津八幡線、さらにJR学研都市線を越えて、近鉄京都線興戸駅付近で向きを北に変える。以前はそのまま木津川と合流していたようであるが、改修作業により合流点付

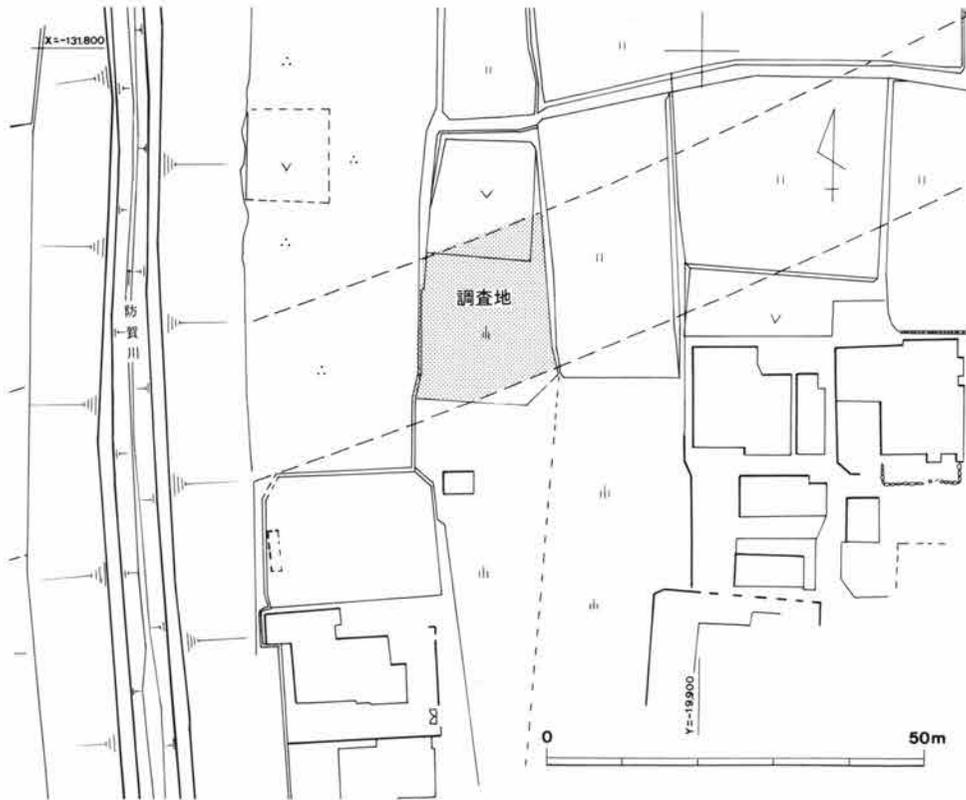


第58図 調査地周辺図(1) (1/10,000)

近で、流れは北西に曲げられ八幡市内を通過して男山丘陵の北裾で木津川に注ぐ。防賀川の本来の流れは、等高線によって微地形を復原すると、調査地北の東集落と、調査地東の草内集落との間を流れていたと思われる。それが現在もこの付近に残る条里地割の影響か、今の位置に改修されている。

調査地付近では、防賀川天井川としての風景は変わってきている。防賀川の河床を下げて、盛り土部分の堤防を除去する改修工事が調査地付近まで北から進んできており、天井川としての姿は、いまや調査地から南に残っているのみである。この工事の^(注3)おりに防賀川の断面観察が行われており、近世前期と思われる流路の跡が確認されている。

調査地の標高は約25.5mで北東方向に向かって階段状に緩く下がっていく。周辺部の土地利用は、防賀川付近には、竹林、茶畑が多い。これは、堤防保持のためと、堤防付近が砂地の傾斜地になっているため、茶の栽培に適しているのであろう。調査地も最近まで茶畑であった。防賀川から離れるにつれて砂地の影響が減るためか水田が多くなり、東は木津川の堤防まで平坦に広がっていく。また、周辺部はかなり宅地化が進んできている。



第59図 調査地周辺図(2) (1/1,000)

大切遺跡との関連が考えられる周辺の遺跡としては、興戸遺跡、飯岡遺跡、天神山遺跡などをあげることができる^(注4)。

3. 調査概要

調査地は耕作土から下、約2mほどが砂礫を中心とした土が堆積しており、崩壊を防ぐため壁のノリ面を緩くとるとともに、間に平坦部を設けて掘り下げた。また調査の都合上、暗青灰色粘質土上面まで機械によって掘削した。

遺構の多くは緑青灰色シルト層の上面で検出している。主な遺構は、弥生時代中期の溝1条、古墳時代初頭の溝1条、土坑1基、古墳時代中期の溝数条、古墳時代の掘立柱建物跡2棟、時期不明の掘立柱建物跡1棟などである。

(1) 基本層序(第61図、図版第35参照)

土は基本的に、上から①現在の耕作土、②黄褐～灰黄色砂礫層、③暗青灰色粘質土層、④黒灰色細砂質土層、⑤緑青灰色シルト層、⑥灰色砂礫層の順で堆積している。

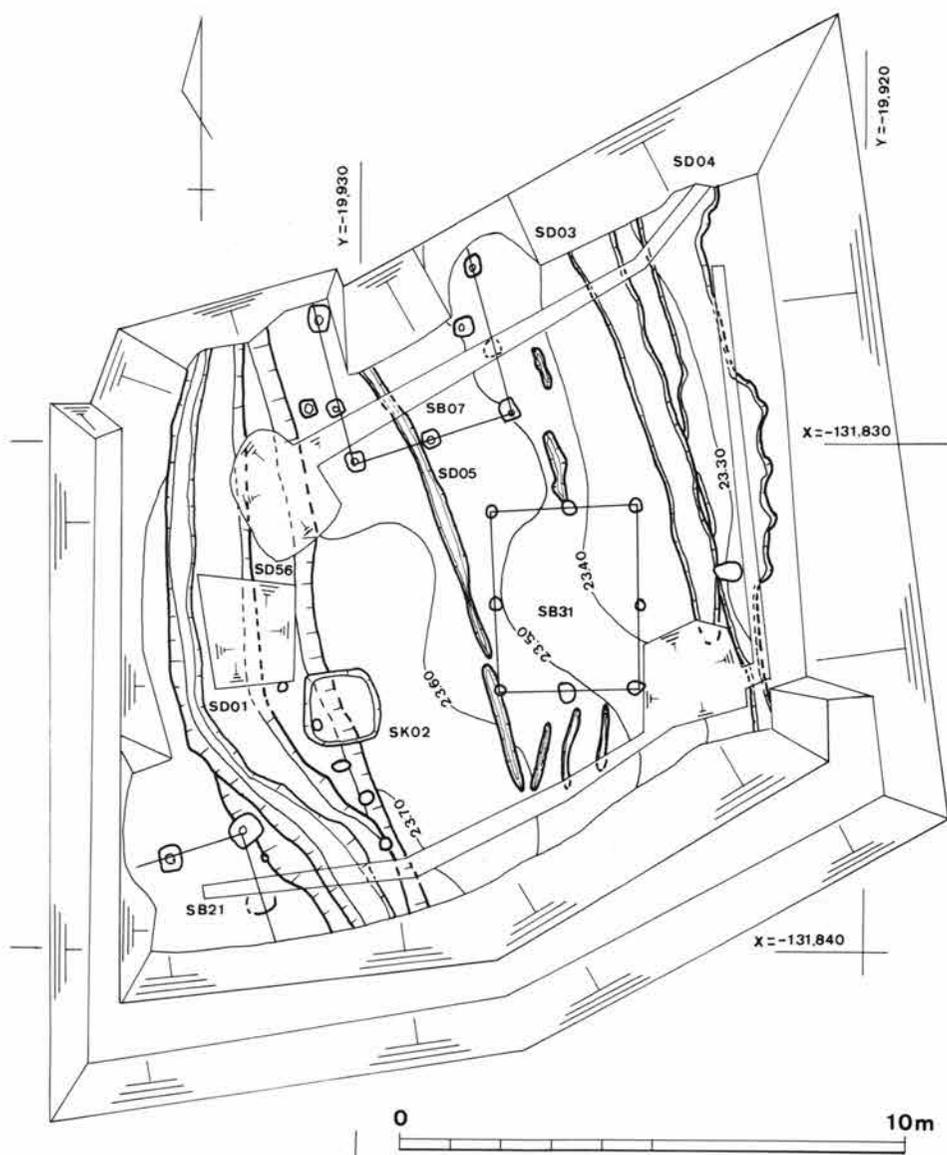
①は現在荒地となっていたが、最近まで茶畑ないし畑として利用されていたことが地図によって確認できる(第61図)。

②は、西側の防賀川に近い方で厚く、東に行くにつれて薄くなる(第61図2・3・4・12・13・14・21)。この層の中には数枚の水田ないし畑作によると考えている耕作土層が見られ、防賀川からオーバーフローした砂で埋められては、また耕作地に作り直しているようすが観察できた。出土遺物は近世の陶磁器片を数片確認している。また、この層の下部で幅約8m・深さ0.4mの規模の南北の溝を確認できた(第61図21)。現在も南壁の砂礫層の中から伏流水がコンコンと湧いており、鉄分の沈着が著しい。遺物は確認できなかったが、この溝は中世の包含層と考えている③を切っており、中世以後、現在の防賀川が形成される前に南北方向の溝が流れていたと考えている。やがて土砂の流入とともにこの溝は埋まり、さらには現在の防賀川のように天井川化した可能性が指摘できる。

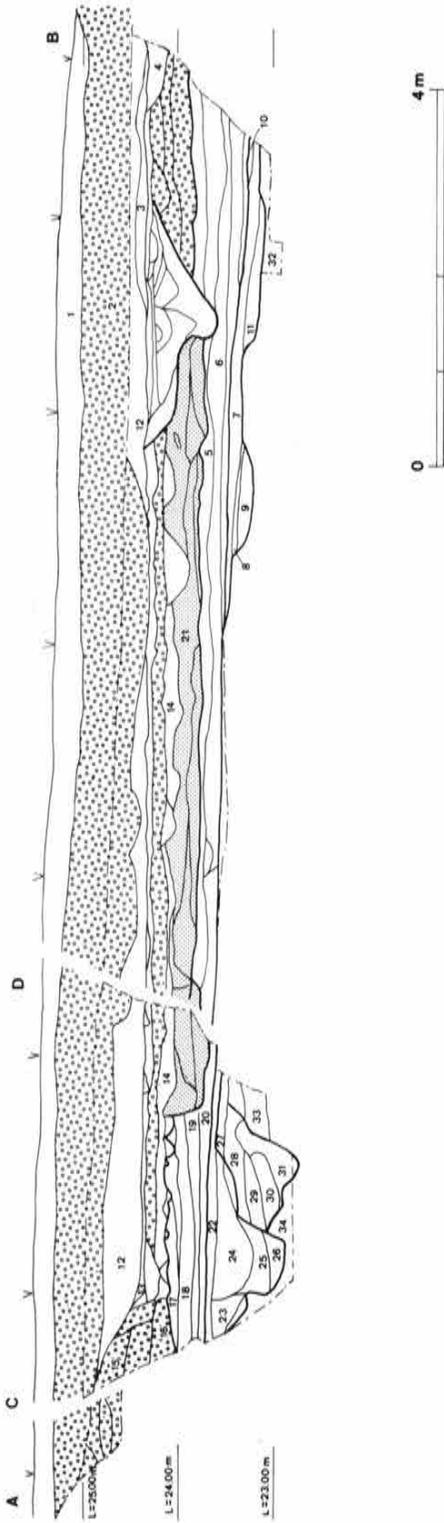
③は、調査地全域で確認でき、中世の水田層と考えている(第61図5・6・17～20)。水が浸透しにくい層のためか、この層の上面から絶えず水がにじみ出るとともに鉄分の沈着が著しい。出土遺物は瓦器、奈良時代の須恵器、古墳時代の須恵器、土師器、カマド片などである(第74図)。出土遺物は耕作の影響か、ほとんどが細片になっていた。

④は調査地の西端と、東端に部分的に広がる(第61図10・22)。この層は昨年度の調査によれば、広い範囲で厚く確認されており、本来は調査地全域に広がっていたと思われるが、今回の調査地内では窪んだ地点に部分的に広がっており、中世の水田によって削られた可能性がある。古墳時代の須恵器と土師器が出土した。

⑤の上面で多数の遺構を確認した(標高約23.5m)。この層(第61図27・32・33・34)の上面は西から東に緩やかに傾斜している。また、図化はしなかったが、いわゆるカニ穴とも、稲株痕跡ともみられる径5cm前後の小穴も多数検出し、人の足跡状の痕跡も確認している。埋土は黒灰色細砂質土である。こうした点から、この面を使って水田耕作が行われた可能性が指摘できる。遺物は弥生時代の壺の一部が出土している(76)。しかし、未検出遺構内から出土した可能性があり、この土器以外はこの層から出土した遺物がないことから、

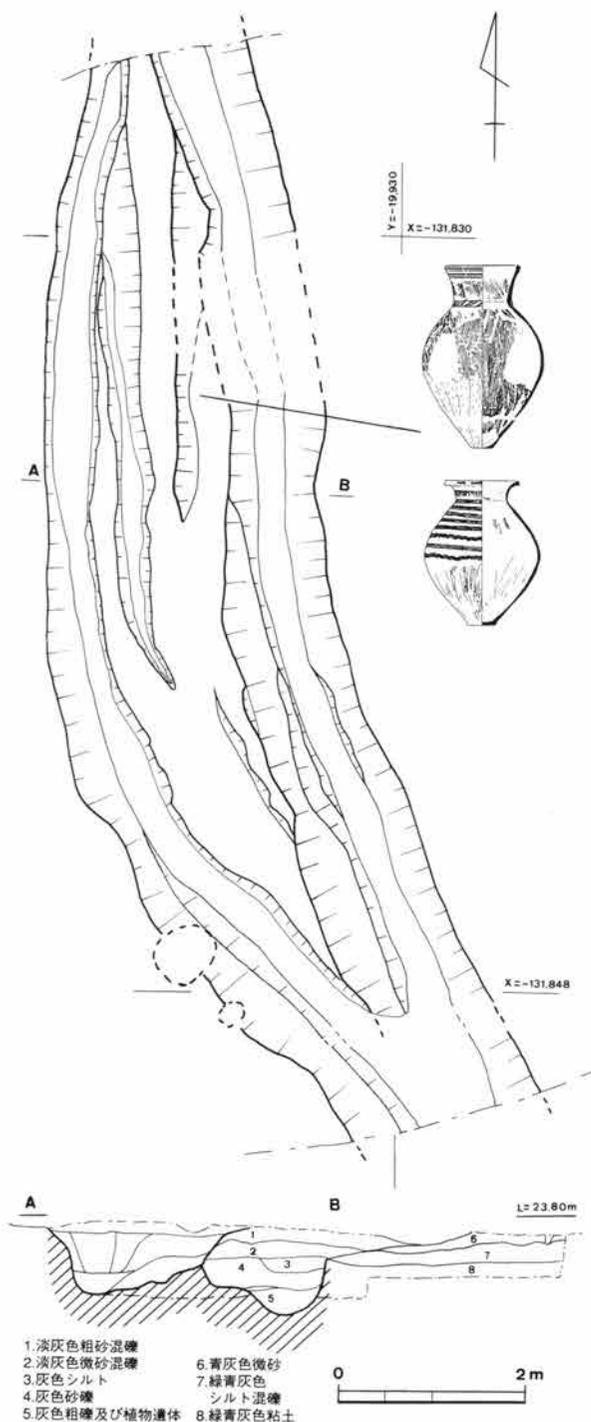


第60図 遺構配置図(1/150)



- | | | |
|-----------------------|-----------------|-----------------|
| 1. 耕作土 | 13. 淡灰黄色シルト(床土) | 24. 暗黒灰色細砂質土 |
| 2. 淡黄色粗砂～礫 | 14. 灰褐色細砂質土混粗砂 | 25. 暗灰色細砂質土 |
| 3. 茶褐色粗砂 | 15. 淡灰色粗砂礫多 | 26. 灰色粗砂 |
| 4. 淡黄色粗砂 | 16. 灰褐色細石 | 27. 緑青灰色細砂質土混粗砂 |
| 5. 暗青灰色シルト炭混粗砂 | 17. 淡青灰色シルト | 28. 暗緑青灰色シルト混粗砂 |
| 6. 暗青灰色シルト混砂礫 | 18. 淡青灰色粘質土混炭 | 29. 灰色砂礫 |
| 7. 暗灰色細砂質土 | 19. 暗青灰色粘質土 | 30. 灰色粗砂 |
| 8. 暗黒色細砂質土 | 20. 暗青灰色細砂質土粗砂 | 31. 灰色砂礫 |
| 9. 灰色砂礫(S D 03) | 21. 黄灰色砂礫～微砂 | 32. 緑青灰色シルト混粗砂 |
| 10. 黒灰色細砂質土混粗砂 | 22. 黒灰色細砂質土 | 33. 緑青灰色シルト |
| 11. 暗黒灰色細砂質土(S D 04) | 23. 暗灰色細砂質土 | 34. 緑青灰色粘土 |
| 12. 旧耕作土黒褐色砂混礫(2～6cm) | | |

第61図 調査地北壁土層断面図(1/80)



第62図 S D56平・断面図(1/80)

この層の時期は、弥生時代以前と判断している。

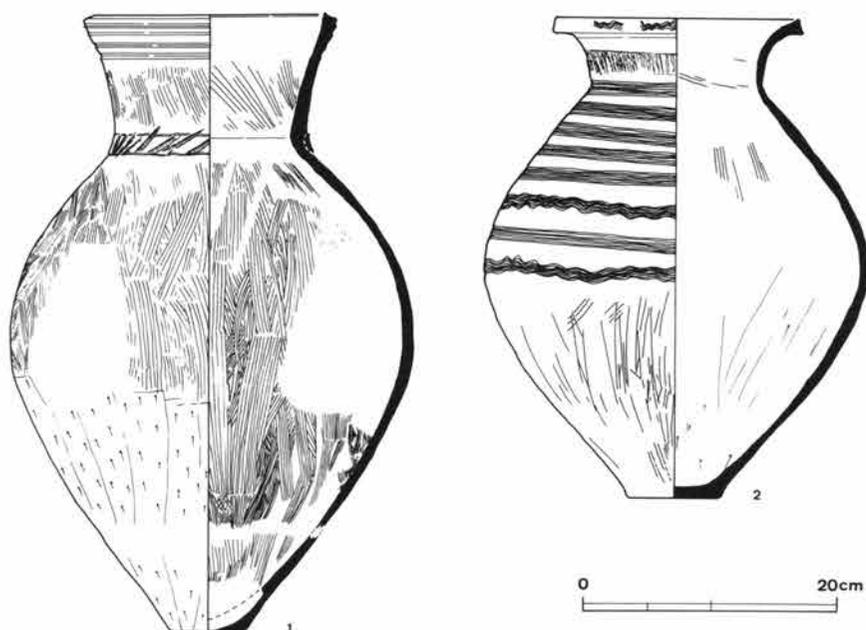
⑥は⑤が約1mほどの層になっている下にあるが、厚みは不明である。湧水がはげしく、遺物は確認していない。

(2) 検出遺構出土遺物

S D56(第62図、図版第38参照)

調査地西端を南から北にかけて位置する。検出長は約12m、幅3~4m、深さ約1mで北も南も調査区外に続く。断面は逆台形をしている。幅は西側がS D01によって切られているため不明である。溝底は、南側がやや高く緑青灰色粘土を切って掘り込んでいる。埋土は灰色砂礫と粘土の互層である。最下層の砂礫層からは植物遺体も出土している。砂礫を充填している状況から、この溝は常に水が流れていた状態にあったと考える。

出土遺物は、弥生時代中期の壺2点(1・2)(第63図、図版第40参照)と高杯片などが灰色砂礫層から出土している。瓜科植物に似た表皮片も出土している。この2点の壺は、カマバ付近から出土し、ともに口縁から底部にかけてあたたかも半割したような状況で、器壁外面を溝の



第63図 S D56出土遺物実測図(1/6)

西壁に貼りつけた状況で出土した。壺の周囲には、掘形のような施設は見当たらなかった。1は、器高48cm・口径20cm、色調淡茶褐色で、一部に黒斑がある。2は、器高38.4cm・口径19.3cm、色調淡黄灰色。出土遺物から、この溝の時期は弥生時代中期と考えている。

S D01(第64図、図版第37・38参照)

調査地西端に位置し、南北方向に長く、西側に膨らむ形で弧を描く溝である。幅は1.5～2m、深さは約0.7m、検出長は約12m、全長は南も北も調査地外にのびていくため未確認である。断面は、全般に「U」字形で、一部2段掘りになっている。埋土は、上層が黒灰色細砂質土、下層が灰色粗砂である。遺物の多くは上層から出土している。溝底は、南側がやや高い。埋土の状況から、溝が掘られた当初は水が流れていたが、やがて土器が捨てられるようになるにつれ滞水状態となったと考えている。S D56の西方を切っている。

出土遺物は、土師器の鉢・小型丸底壺・高杯・壺・甕他がある(第65～69図、図版第40～42参照)。遺物の多くは、各個体が比較的まとまった形で出土しており、一部には完形に近い状態で出土したものもあった。近くに住居などがあり、そこから捨てられたものとする。

3～6は鉢である。3は器高10cm・口径7.8cm、色調は淡黄色である。外面にタタキの痕跡が残り、底部付近はケズリによる調整が見える。4は器高4.5cm・口径12.7cm、色調は淡黄色で一部に黒斑がある。全体をナデ調整しており、外面底部付近は指オサエの跡が

ある。5は器高6cm・口径14cm、色調は黄淡褐色で内面底部に黒斑がある。全体をケズリの後ナデ調整している。6は器高10.7cm・口径13.1cm、色調は黄淡褐色である。底部に穿孔があり、外面口縁下にタタキを施す。

7～10は小型丸底壺である。7は器高4.1cm・口径7.6cm、色調は淡茶褐色で全体にナデ調整を施す。8は器高5.6cm・口径13cm、色調は淡褐色。9は、口径12.9cm、色調は暗褐色。10は頸部から下が完形である。

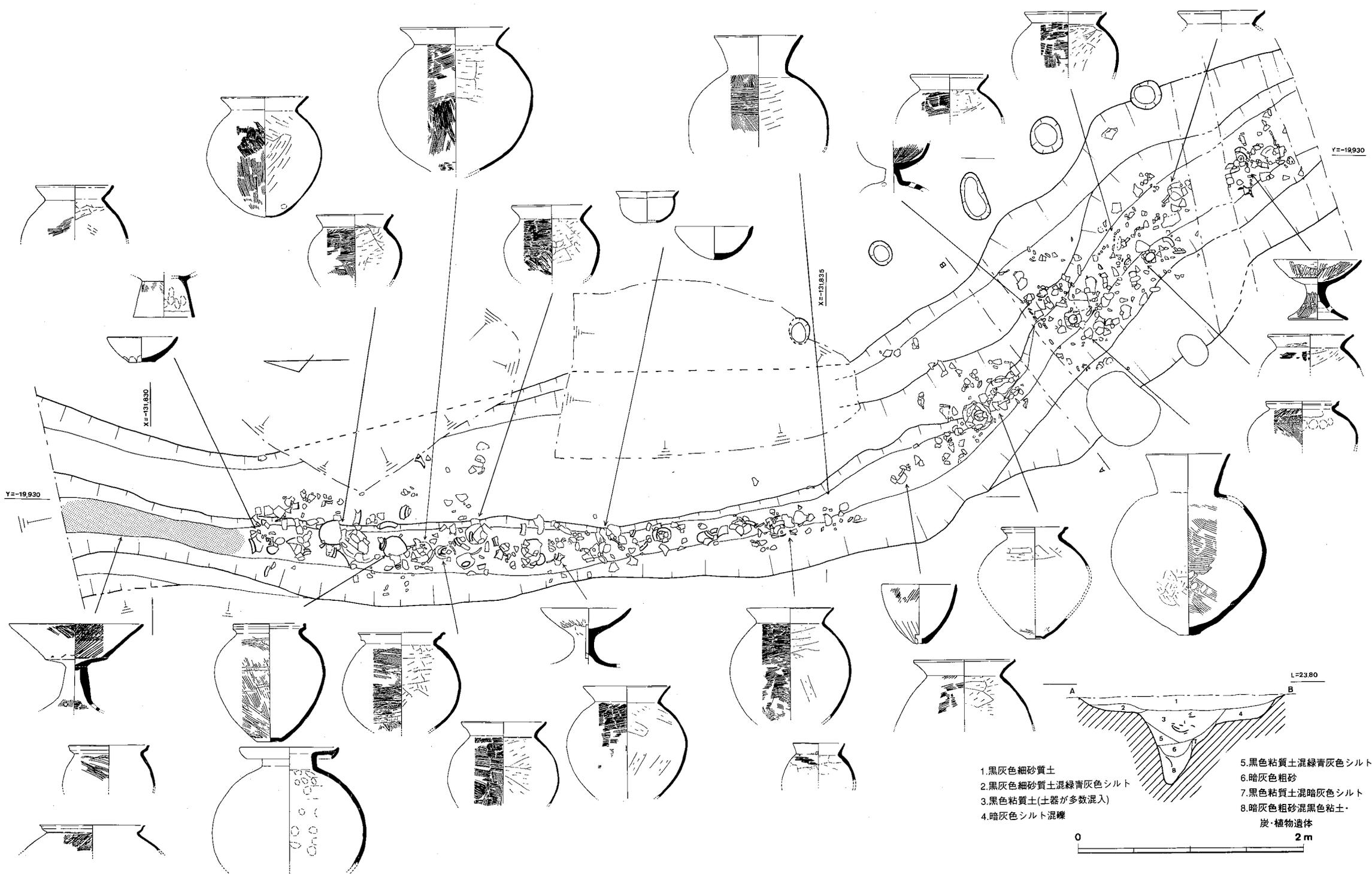
11～20は高杯である。11は器高10.8cm・口径15.6cm、色調は内面・淡黄褐色、外面・赤褐色である。内外面とも細かいナデ調整をする。15は脚部内面から穿孔しようとした跡が3か所あるが、いずれも外面まで達していない。17は残存高15.6cm・口径24cm、色調は淡黄褐色である。内外面ともハケ調整である。

21～40は甕である。全体を復原できたのは30・34のみで残りは胴部から上の資料である。器壁はいずれも薄い。内面はほとんどの個体がケズリを受けている。外面がタタキによって仕上げている資料も多く、そのほとんどが水平から右上がりの螺旋状にたたかれている。また胴部から下の外面にハケメを残す資料も見られる。21は口径12.8cm、焼成が悪く、灰色を呈し、器壁は摩滅している。24は口径15.1cm、色調は大半の甕と同様に、淡黄灰色である。30は、口径19.5cm・残存高25.7cm、外面の胴部以下はタタキの後ハケで調整している。34は、口径16.0cm・器高21.6cm、頸部から下をハケで仕上げている。胴部外面に煤の付着が目立つ。

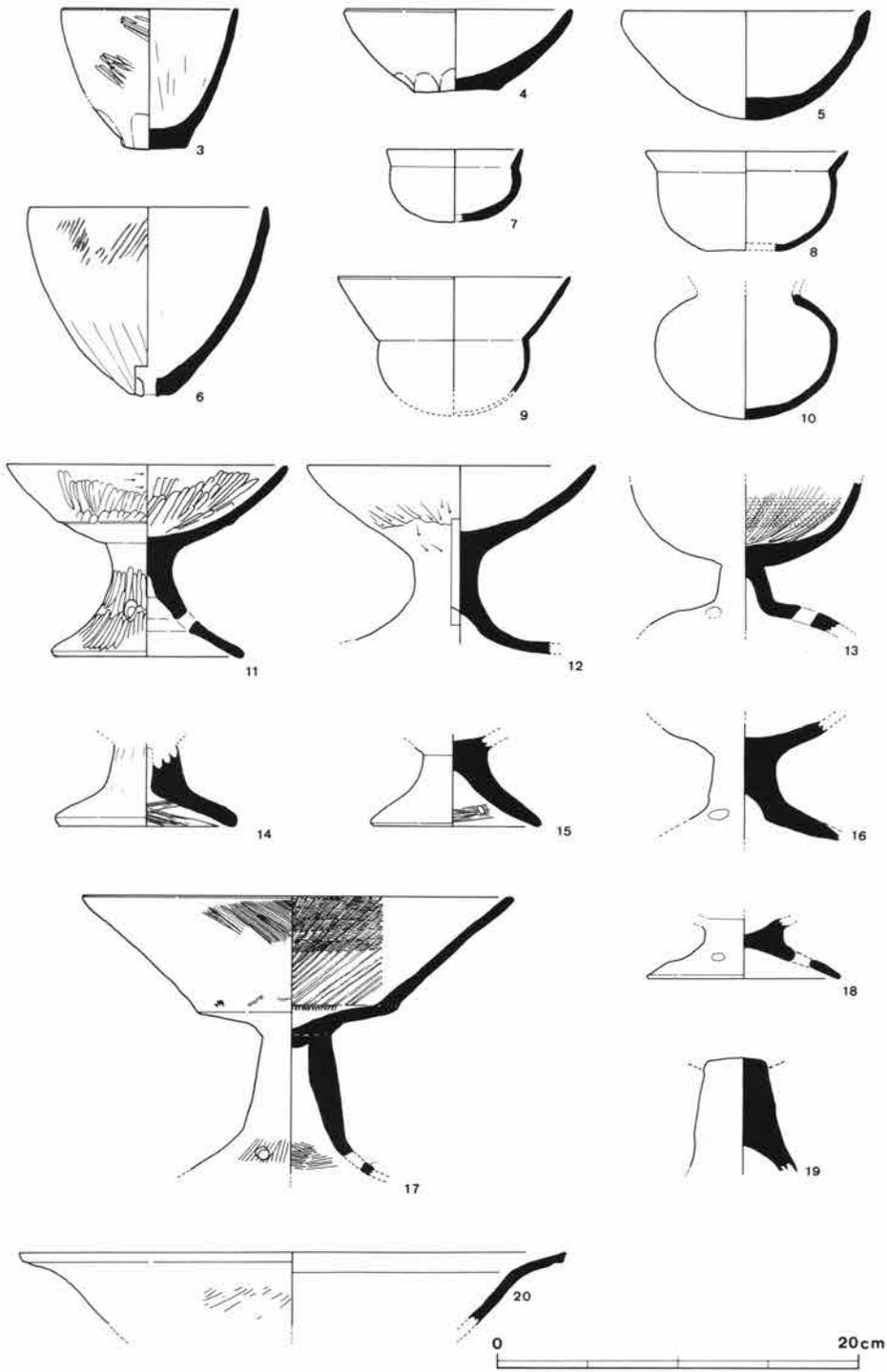
41～50は壺類である。41は直口壺で、口径15.0cm・器高32.5cm、色調は淡黄褐色である。外面はハラケズリ、内面は粗いハケによって調整している。43は口径16.0cm、色調淡黄褐色。外面はタテハケの後ヨコハケを行っており、内面はケズリで調整している。47は二重口縁の壺で、口径21.2cm、色調は赤褐色である。口縁部はほとんど残っていたが頸部から下は復原できなかった。46は壺の底部に木の葉の痕跡が残っている例である。48は二重口縁の壺である。口径は18.0cm、色調は淡赤褐色である。内面は指オサエによる調整がなされているが、外面は摩滅が激しく調整は不明である。

51～59は他の地域からの搬入品と考えている土器類である。51～54は近江地方系の甕の特徴に類似している。口縁部が直立ないし内湾していおり、受け口状になっている。51は口径13.1cm・器高21.0cm、色調は淡灰褐色である。外面はハケで粗く調整され、内面は、ケズリ調整であろう。底部の中心部は小皿を伏せたように窪んでいる。54は口径15.5cm、外面はハケ、内面はケズリ調整している。55・56は色調がチョコレート・ブラウンに似た特徴的な胎土で、生駒山西麓産の甕と判断した。55は口径15.6cmである。

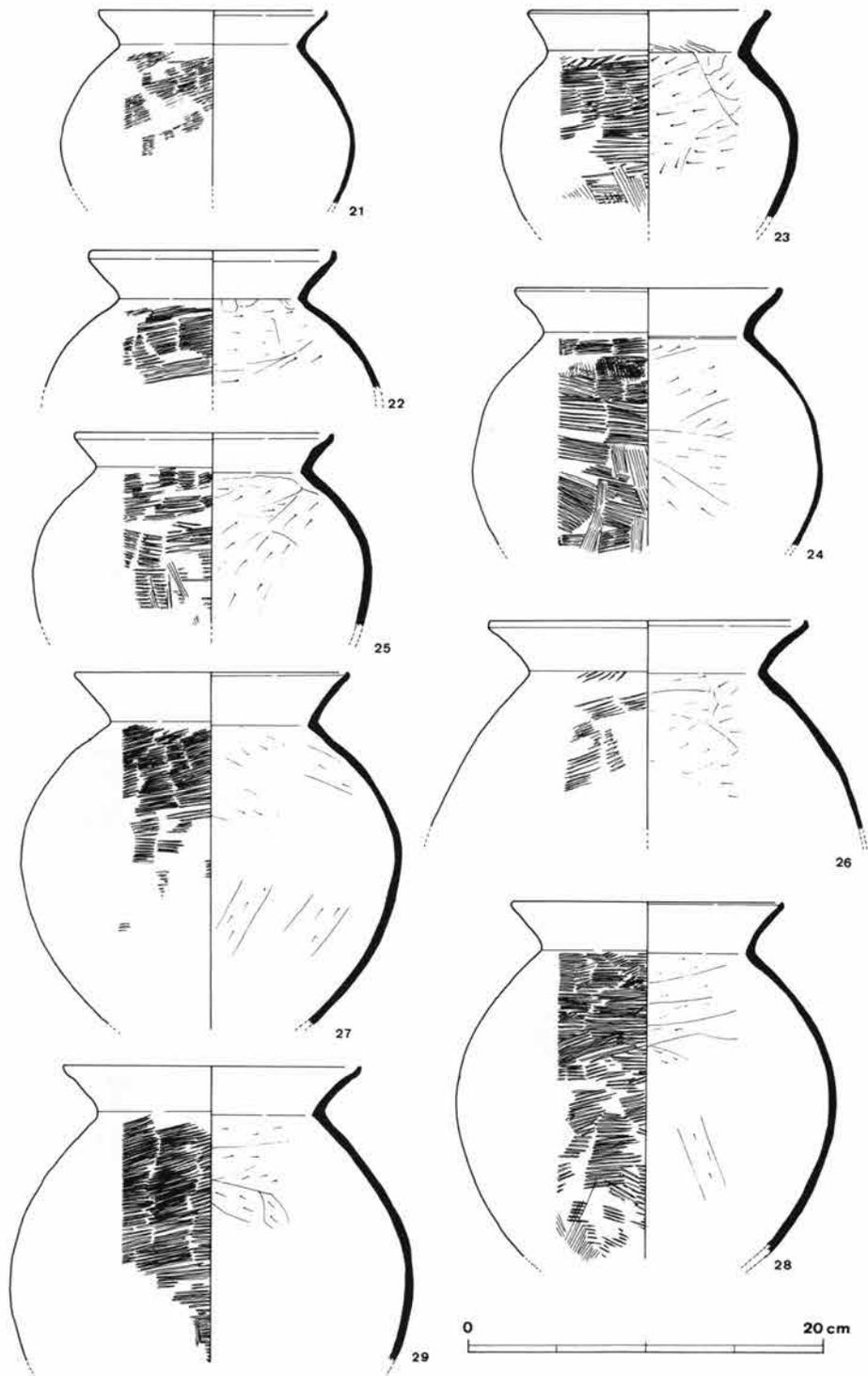
57～59は「S」字口縁を持ち、いわゆる東海系の甕と考えている。57・58は口縁の資料



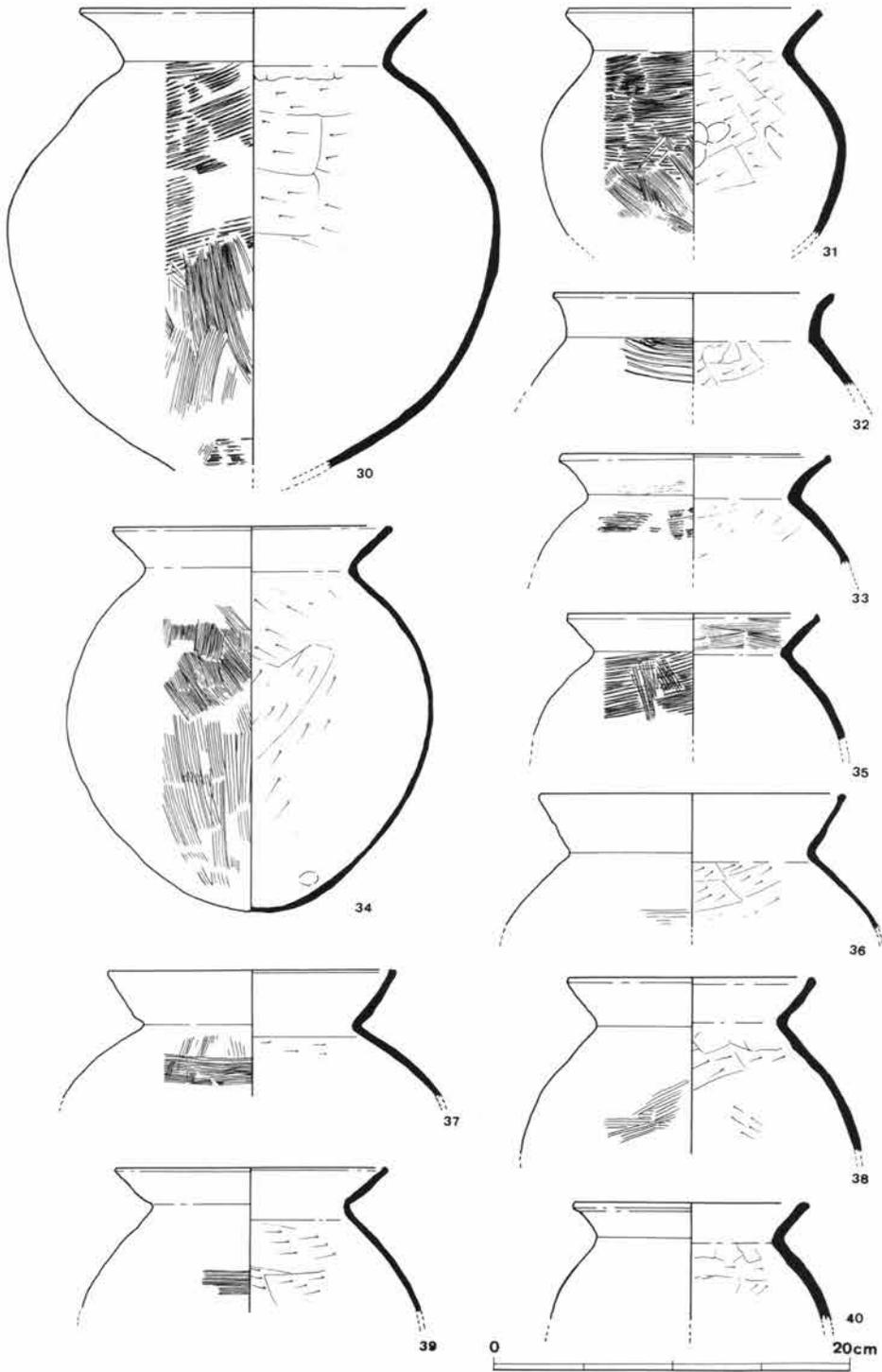
第64図 S D01遺物出土状況図(1/40)



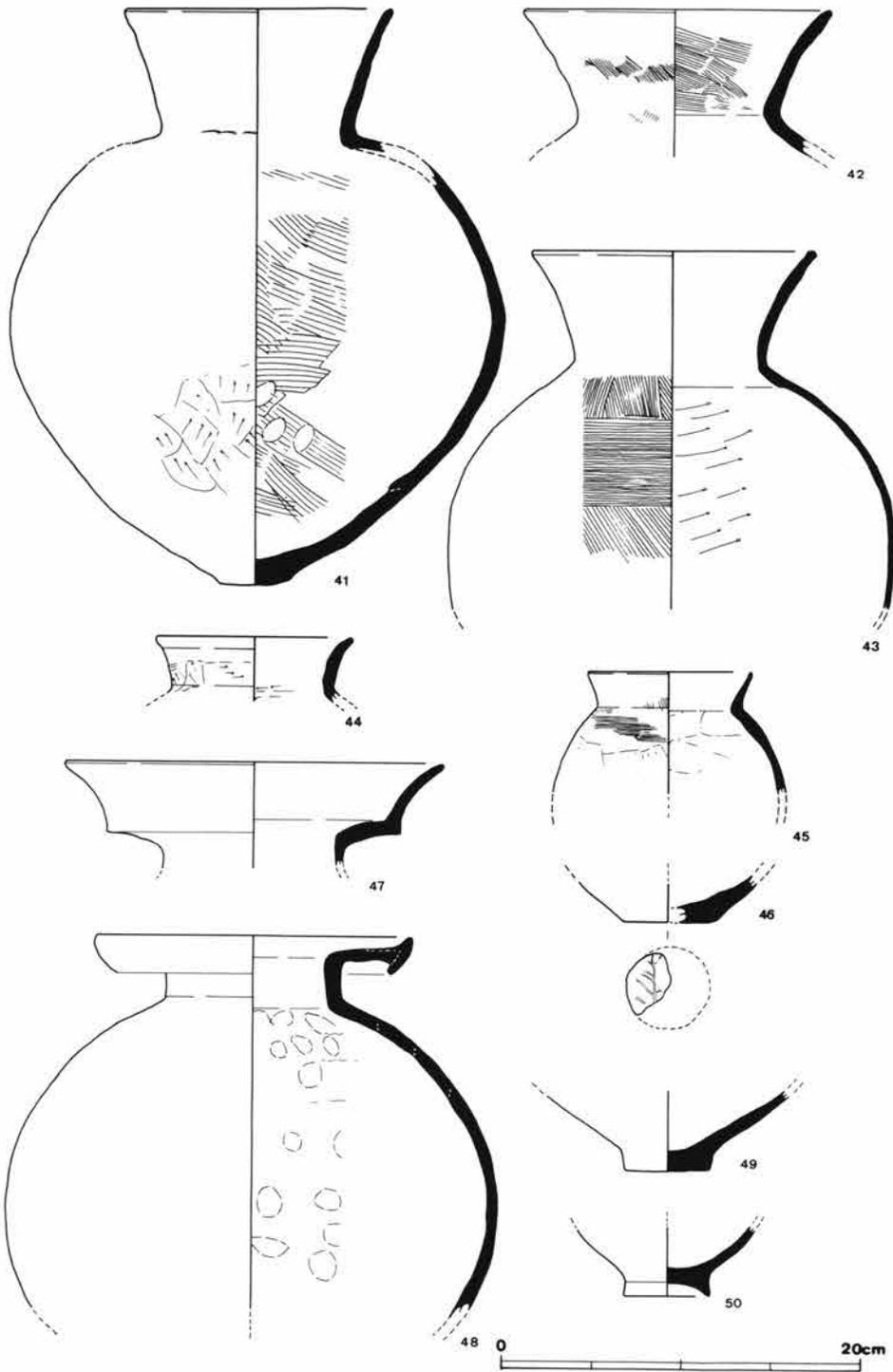
第65図 S D01出土遺物実測図(1)(1/4)



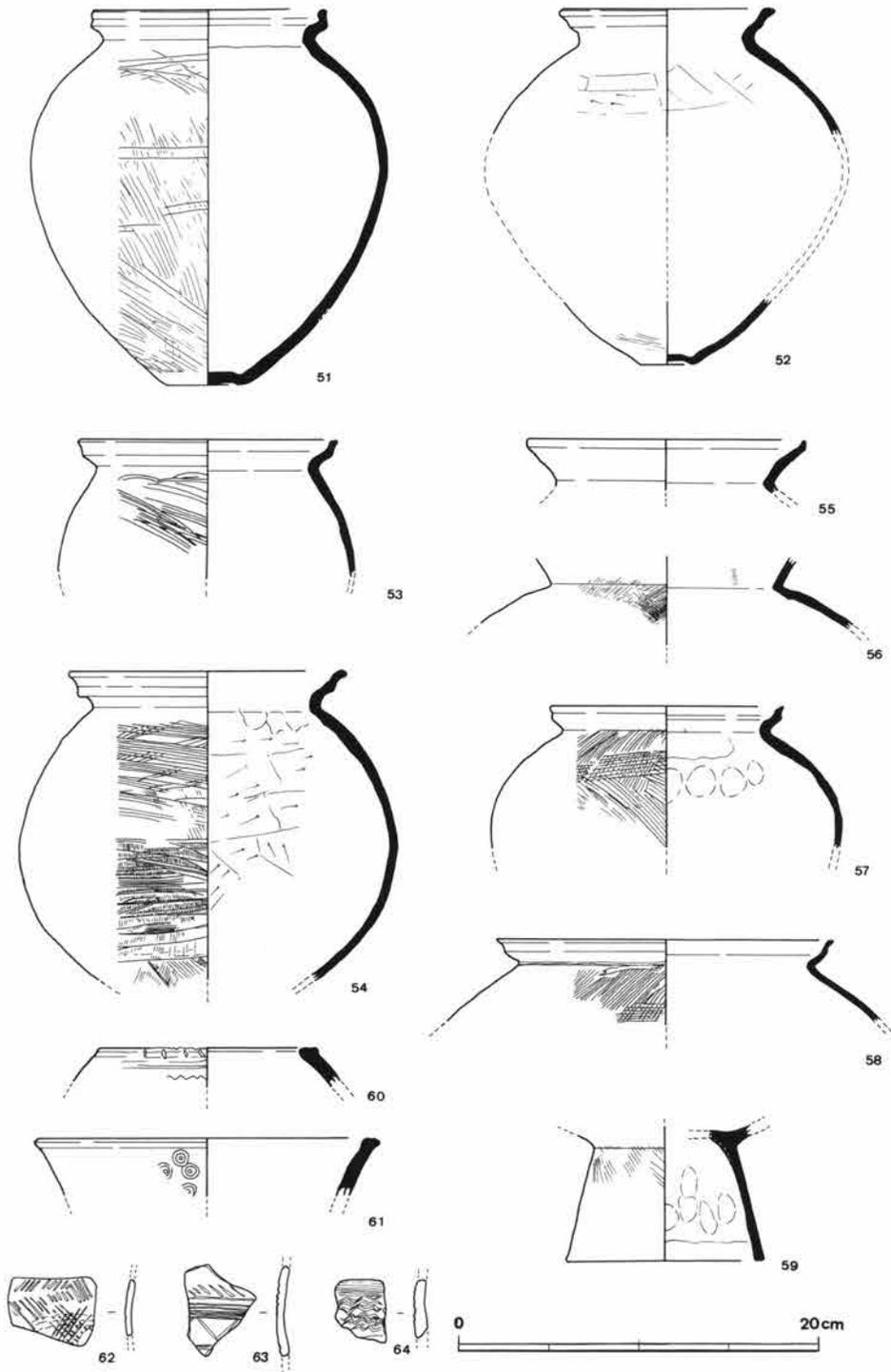
第66図 S D01出土遺物実測図(2) (1/4)



第67図 S D01出土遺物実測図(3)(1/4)



第68図 S D01出土遺物実測図(4) (1/4)



第69図 S D01出土遺物実測図(5)(1/4)

で、59は台部の資料である。57は、口径13.6cm、色調淡黄灰色である。外面の調整はハケメ、内面の調整は指オサエとナデを併用している。58は、口径18.8cm、色調は淡黄色である。外面はハケによる調整、内面はナデ調整による。59は底径11.1cm・残存高10.7cm、色調は淡黄灰色である。外面はハケの後ナデている。底部内側には粘土を折り返してナデた痕跡が明瞭にある。また指オサエの痕跡がある。

60～64は調整に特徴のある弥生土器と考えている破片例である。61は竹管状の器具で装飾している。62は矢羽状のタタキが観察できる。63・64は、鋸歯文状、波状文の装飾を行っている。

出土遺物からこの溝の時期は、庄内式併行期の新相段階及び布留式併行期の古相段階頃と考える。

S D01の南東側に5間の杭列が確認できた。ピットの直径は0.25m前後で、深さも0.2mと浅く、埋土は灰色砂礫で遺物は出土していない。S D01とほぼ同時期に設けられていたものと考えている。

S D03・04・05(第60図、図版第36参照)

調査地中央部から東にかけて検出した、いずれも南北方向に長く、浅い溝である。

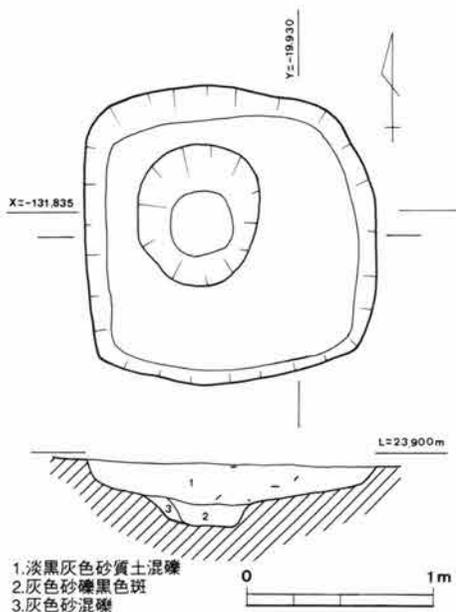
S D03は、検出長7.6m・幅0.7～0.9m・深さ0.2mである。北にさらにのびていくが、南は調査地内で途切れる。溝底は南側がやや高い。埋土は2層に分けられ、上から黒灰色粘質土、灰色砂礫である。埋土の状況から、南から北へ水が流れていて、S D04との関係から

用水溝の機能があったと考えている。

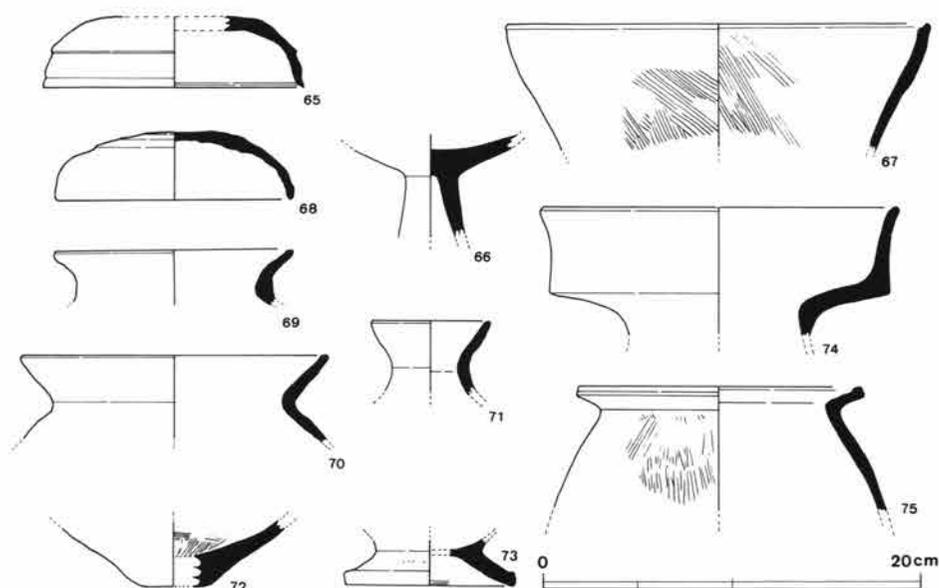
出土遺物は、須恵器の杯蓋(65)、土師器の高杯(66)・鉢(67)などがある。遺物の多くは、灰色砂礫から出土した。

S D04は、検出長10m・幅0.4～1.2m・深さ約0.15mである。溝底は凹凸が多く、人の足跡状の窪みも見え、東側の肩があまりはっきりでなかったことなどから、さらに東に広がる水田跡の可能性もある。埋土は、黒灰色粘質土である。

出土遺物は、須恵器の杯蓋(68)、土師器の壺(71)・甕(69・70)などがある。遺物の多くは、細片で出土したが、杯蓋は北端で完形で出土した。



第70図 S K02平・断面図(1/40)



第71図 S D03・04、S K02、S B21・31出土遺物実測図(1/4)

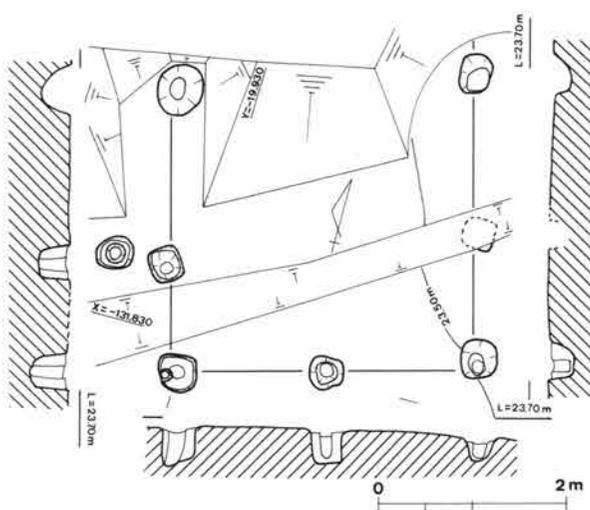
S D05は検出長約9m・幅約0.25m・深さ約0.1mで、断面は、「U」字形である。北側はさらに調査区外へと伸びている。埋土は黒灰色粘質土である。耕作に関係した溝と考えている。土師器の破片などが出土している。

これら溝は出土遺物から古墳時代後期頃の、耕作に関係した溝と考える。

S K02(第70図)

S D01の東側に位置する。平面は、やや不定形な正方形を呈しており、一辺1.5mを測る。断面は中央部が二段に深くなる。深さは、0.3mである。埋土は2層に分かれており、上から淡黒灰色砂質土、灰色砂礫となっている。この土坑は、S D56が完全に埋まった後に掘られている。

出土遺物は、土師器の壺(72)などがある。遺物の多くは細片で、まともでは出土していない。S D01とほぼ同時期の遺構と考えている。



第72図 S B07平・断面図(1/80)

S B07(第72図、図版第39参照)

調査地北部に位置する、2間×3間以上(3.2m×2.9m以上)の掘立柱建物跡である。規模は建物の北辺が調査地外に出てしまうため詳細は不明である。建物跡の方位はN-17°-Wである。建物の検出レベルは標高23.5m。柱穴の形状は隅丸方形に近く、一辺0.4m前後・深さ0.4mである。埋土は黒灰色粘質土である。柱間隔は梁間が約1.6m、桁行きは南端一間が約1.2m、もう一間が約1.6mである。

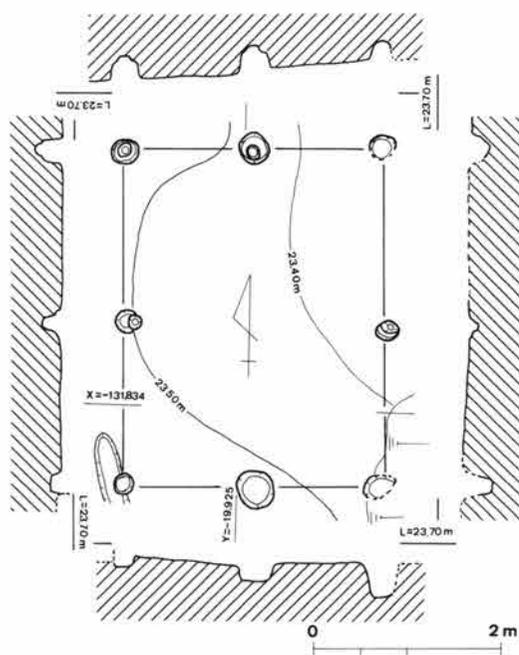
出土遺物は、土師器小片が少し出土したが図化できなかった。

S B21(第60図参照)

調査地南西端に位置する。掘立柱建物跡の北東端を検出したのみで規模は不明である。建物跡の方位はN-18°-Wを向いており、S B07とほぼ同じ方位である。建物跡の検出レベルは標高23.6m。柱心の柱穴の形状は隅丸方形に近く、一辺約0.5~0.6mである。柱穴内には柱根が遺存していたが調整などはわからなかった。柱間隔は約1.6mである。出土遺物は、土師器甕、壺(74)の破片などが出土した。この建物跡はS D01を切っており、S B07とともに、古墳時代初頭以降古墳時代の内に建てられたと考える。

S B31(第73図、図版第39参照)

調査地中央部東寄りて検出した2間×2間(2.7m×3.5m)の掘立柱建物跡である。今回の調査で検出した掘立柱建物跡で唯一調査区内に納まったものである。面積は約9.5㎡である。



第73図 S B31平・断面図(1/80)

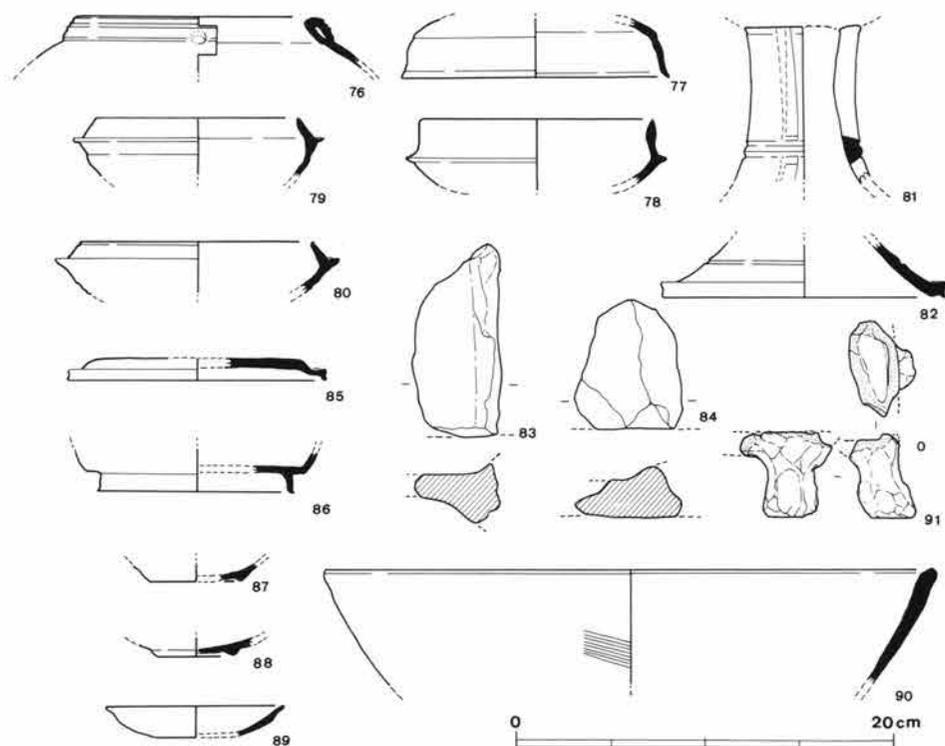
建物跡の方位はN-2°-Wである。この方位は現在残っている条里地割の方向に近く、条里に規制された可能性がある。建物跡の検出レベルは標高23.4m。柱穴はほぼ円形で、直径約0.3m前後で、深さ0.3m前後である。埋土は暗灰色粘質土である。

出土遺物は、土師器高杯(73)・甕(75)などが出土している。遺物の時期から平安時代以後に建てられたと考える。

(3)包含層出土遺物(第74図、図版第42参照)

77は黒灰色細砂質土から出土。

78~90は暗灰色粘質土から出土し



第74図 包含層出土遺物実測図(1/4)

ている。81・82は二段スカシの脚を持つ須恵器の高杯である。83・84はカマド袖付近の部分の破片ではないかと考えている。色調は淡黄褐色、胎土はやや粗目である。図化した以外に同様の破片が数点あるが、全体を復原するには至らなかった。

87～89は瓦器の破片である。87・88は碗の底部であるが、高台は低く、時期の下がる個体と考えている。89は小皿である。90は須恵質の鉢の破片である。破片が小さいため口径や傾きは多少誤差があるかもしれない。91は表採資料である。硯ないし盤状の器の脚と思われる。縁部分に4mmほどの高まりがあり、上部に平らな部分が残っている。脚部分は指オサエによる成形の痕跡が明瞭に残っている。色調は淡赤褐色、焼成は固く焼けており、胎土も良好である。

4. まとめ

今回の調査では、狭い範囲ながら面的な調査ができ、大切遺跡の性格を考えるうえで貴重な資料が多数得られた。最後に、今回の調査結果をいくつかまとめておきたいと思う。

弥生時代から近世に至るまでの遺物が出土し、付近に各時期の集落があったことが確認できた。特に、弥生時代から古墳時代にかけては、掘立柱建物跡や土器のつまった溝な

ど集落の一部を確認できた。今後この周辺での調査成果が期待される。

S D01からは弥生時代の終わりから古墳時代初めにかけての土器(庄内式～布留式)が多数出土した。出土した土器の中には、「S」字状口縁を持つ、東海系と考えられる甕や、近江産の甕、河内産の甕などが確認でき、南山城地方と他地域との交流がうかがえる搬入品が多く含まれている。木津川を介して人や物の移動が広く行われていたのであろう。その中でも、特に今回出土した東海系の甕は、木津川流域で出土した東海系の土器の中で比較的残りのよいものである。調整・胎土とも愛知県廻間遺跡出土の例とよく似ており、廻間式土器の編年でいうところの廻間Ⅱ式頃のものと考えている^(注5)。今後さらに他の遺跡から出土する例が期待できると考えられ、古墳時代初頭頃を中心とした時期の地域間交流を考える題材になりうると考えている。

中世の頃から、この地は水田など耕作地として利用されてきたようである。

今回の調査では、防賀川の堤防部分を直接断ち割って観察することはできなかったが、調査地内の土層の上部に堆積している砂礫層の状況や出土遺物から、近世以降に防賀川の天井川化が急速に進んだと考えている。しかし、防賀川がいつから現在の位置を流れるようになったのか、さらに、条里地割との関係など明らかにできなかった点も多い。

今後周辺の調査が進むことにより、この付近の弥生時代～古墳時代の集落の内容・規模などの変化の状況が確認されると思われる。また、防賀川の天井川化の時期やその過程などがさらに明らかにされることが望まれる。

(有井広幸)

注1 小池 寛「大切遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第49冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1992

注2 A・日下雅義『古代景観の復原』 1991

B・『惣村から近世の農村へ』京都府山城郷土資料館 1990

注3 注2 B文献参照

注4 周辺遺跡については注1文献他を参照されたい。

注5 赤塚次郎ほか『廻間遺跡』(『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書』第10集 愛知県埋蔵文化財センター) 1990

愛知県埋蔵文化財センター松原隆治氏のご配慮により、同センターで直接廻間遺跡の土器を観察する機会をいただいた。記して感謝の意を表します。

付記 調査、整理にあたっては多くの方に協力をいただいた。以下に記して感謝します(順不同、敬称略)。

久保田琢磨、平松久和、山岡邦章、本田 香、岩本 貴、福田玲子、与十田節子、森田千代子、新谷二三代、中西 修、中村久登、林 恵子、林 益美、大西 都、吉永清美、菱田直美、辻 道子、市原智穂、北村伊佐子、伊藤こず江

付 論

大切遺跡の花粉化石

1. 試料について

採取された試料は全部で5試料であるが、以下にそれらの簡単な記載を示した。

試料はSD01の埋土がみられる北壁西部の断面より採取された。試料1は褐色を帯びた青灰色シルト質砂で礫が点在し、塊状の植物遺体から樹木ではその断面構造からクロマツと判断される葉やマツ属の球果、ハンノキ属の果苟が、草本類ではイネの穎の破片の他、ホタルイ属やイグサ属、カヤツリグサ属、スゲ属、イバラモ属、シソ科などの種子や果実、シャジクモ属の卵胞子などが検出され、また保存が悪く種の同定には?マークがつくが、ミズアオイ属(コナギ?)の種子も検出された(吉川(パレオ・ラボ)が同定)。本試料は基本土層②にあたり、近世の陶磁器片が数片確認された。試料2は青灰色の粘土混じり砂で、礫が点在し、植物遺体も少し認められる。本試料は基本土層③にあたり、中世の水田層と考えられる。試料3は黒灰色の粘土混じり砂礫で、植物遺体が少し認められる。試料4は暗青灰色の粘土混じり砂で、礫が散在しており、炭片や土器片もみられる。また植物遺体も少し認められる。これら試料3、4は基本土層④にあたり、古墳時代の須恵器と土師器が出土した。試料5は青灰色の砂質粘土で、管状に赤褐色の酸化鉄集積層が認められる。

2. 結果

検出花粉;胞子の分類群数は樹木花粉31、草本花粉30、形態分類で示したシダ植物胞子2、藻類2の計65である。樹木花粉の産出傾向から局地花粉化石帯(下位よりI~III)を設定。

I帯(試料11~16): シイノキ属-マテバシイ属(以下シイ類と略す)が59%と高率で産出している。またコナラ属アカガシ亜属も20%弱の出現率を示している。その他ではスギ属が5%ほど検出されているなどいずれも低率である。草本類ではクワ科(13%)が最も多く、イネ科は9%の出現率を示す。また単条型のシダ類胞子が20%を越えて検出されている。

II帯(試料3、4): スギ属が20%を、コウヤマキ属が10%を越えて検出されているなど他の針葉樹類も含めていずれもI帯に比べて増加している。アカガシ亜属も20%を越えて出現しており、シイ類も20%に減少しているものの依然として多く検出されている。草本類ではイネ科が急増しており(出現率49%)、ヨモギ属も増加している。その他ではサジョ

モダカ属やキカシグサ属など湿地に生育する水生植物が検出されている。

Ⅲ帯(試料1、2)：Ⅱ帯で僅かに増加傾向がみられたマツ属複維管束亜属(アカマツやクロマツなどのニヨウマツ類)はⅢ帯に入り急増し、試料1では出現率が27%に達している。これとは反対にⅡ帯で増加を示したスギ属は上部に向かい急減しており、同様の傾向がアカガシ亜属やシイ類にみられる。またコナラ亜属やクマシデ属-アサダ属などは試料2で増加傾向を示すものの最上部の試料1では出現率を下げている。草本類ではイネ科が試料1で出現率を下げるものの依然として高率を示しており、カヤツリグサ科も10%前後に増加している。またアブラナ科が試料1で4%の出現率を示している。その他ではサジオモダカ属やオモダカ属、スプタ属-ミズオオバコ属、ミズアオイ属、キカシグサ属などの水生植物がⅡ帯同様検出されている。またツバ属花粉も得られている。

3. 大切遺跡周辺の植生変遷

出土遺物などから、遺跡周辺の植生変遷としては縄文時代から近世と考えられる。花粉化石帯Ⅰ帯は、遺跡周辺ではアカガシ亜属やシイ類を主体とした照葉樹林が優勢であり、時代としては縄文時代と予想される。京都市の深泥池では5,000年前~2,000年前にかけてアカガシ亜属が優占しており(深泥池団体研究グループ1976)、その後1,500?年前頃まではアカガシ亜属に加えマツ属やスギ属の優占がみられる。また彦根市の曾根沼(松下1987)や大阪周辺地域(古谷1979)においても約6,000年前~3,000年から2,500年前ではアカガシ亜属が優占しており、その後一時期アカガシ亜属とともにスギ属などが優勢となる時期が認められる。Ⅰ帯の年代としては上記のいずれかに当たるものと思われる。

古墳時代にはいと(試料3、4)、アカガシ亜属などの照葉樹林とともに、スギ属やコウヤマキ属などの針葉樹類も遺跡周辺に分布を広げている。こうした現象は上記したように近畿地方各地で認められている。中世ではニヨウマツ類が遺跡周辺では目立つようになり、近世にはいとさらに分布を拡大したと思われる。先にも記したがこのニヨウマツ類について試料1よりマツ属の葉が多数得られており、その断面形態からクロマツと同定された。このことから、大切遺跡周辺では中世以降クロマツが急速に分布を拡大し、それまで優勢であったスギ属林や照葉樹林は分布域を縮小した。また中世においてコナラ亜属が一時期増加しており、これは人間によるスギ属や照葉樹林要素の縮小にともない、その跡地に二次林要素としてコナラ亜属が進出したためであろう。近世においてはハンノキ属が突出した出現率を示している。しかし、同試料よりハンノキ属の果苟が得られており、ハンノキ属が試料採取地点付近に生育していた可能性が高く、出現率に示されているほどにはハンノキ属は遺跡周辺に生育していなかったとみた方がよいであろう。

4. 水田稲作およびソバについて

試料1～3(古墳時代以降)においてイネ科が高率で出現しており、その中にはイネ属とみられる花粉も含まれている。試料1では現在水田雑草として普通にみられるオモダカ属やスブタ属-ミズオオバコ属、ミズアオイ属、キカシグサ属などが検出されており、基本土層②にみられる水田層の存在を裏付けている。試料2でもオモダカ属やミズアオイ属、キカシグサ属などが産出し、基本土層③での水田層を支持していると思われる。試料3では分類群数が少なくなるもののサジオモダカ属やキカシグサ属など水田雑草が検出されており、水田稲作の可能性はあると思われる。しかし試料3が含まれる基本土層④は上位の水田層による削平や、上位の水田土壌が混入している可能性もあり、古墳時代の遺物を含む基本土層④における水田稲作については更に検討が必要であろう。また試料1・2よりソバ属花粉がそれぞれ2・3個体検出されている。このことから、中世以降大切遺跡周辺(試料採取地点付近)ではソバの栽培が行われていた可能性が高いと判断されよう。

(付論中の文・図は、有井が編集及び一部変更した。)

(鈴木 茂(パレオ・ラボ))

引用文献

- 古谷正和(1979)大阪周辺地域におけるウルム氷期以降の森林植生変遷. 第四紀研究, 18, P. 121-141.
 松下まり子(1987)晩氷期以降の植生史-照葉樹林の出現と拡大-. 群落研究, 4, P. 15-20.
 深泥池団体研究グループ(1976)深泥池の研究(2). 地球科学, 30, P. 122-140.
 那須孝悌(1989)活動の舞台: 概論. 弥生文化の研究1 弥生人とその環境, 雄山閣出版, P. 199-130.

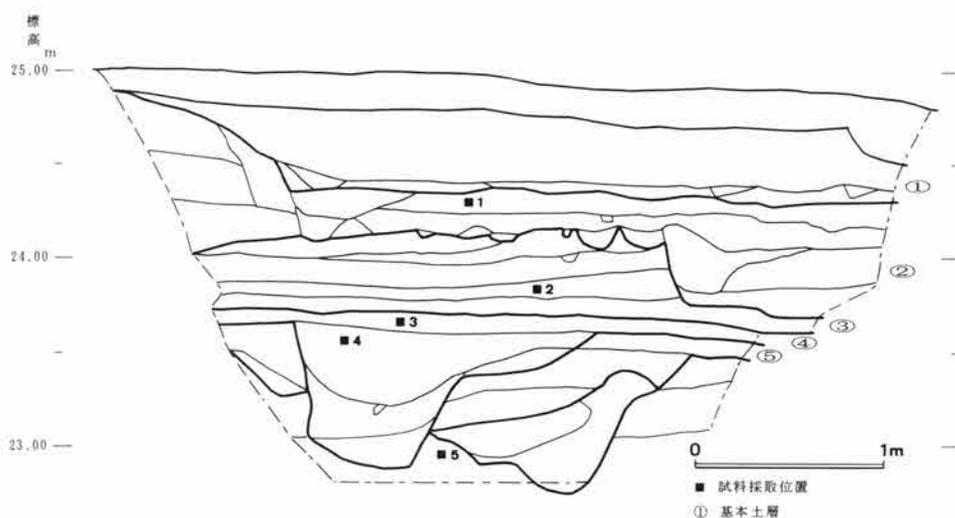


図1 大切遺跡北壁西部のセクション図及び試料採集位置図

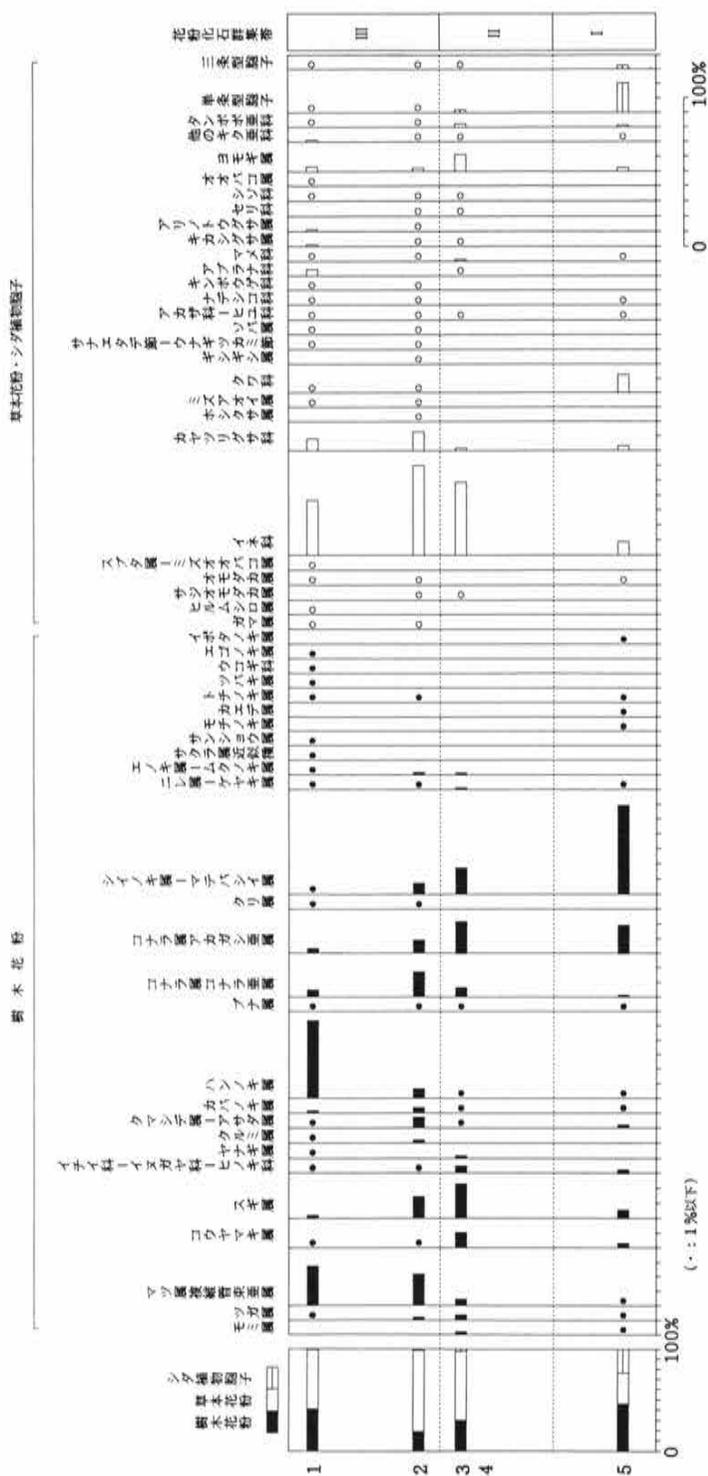


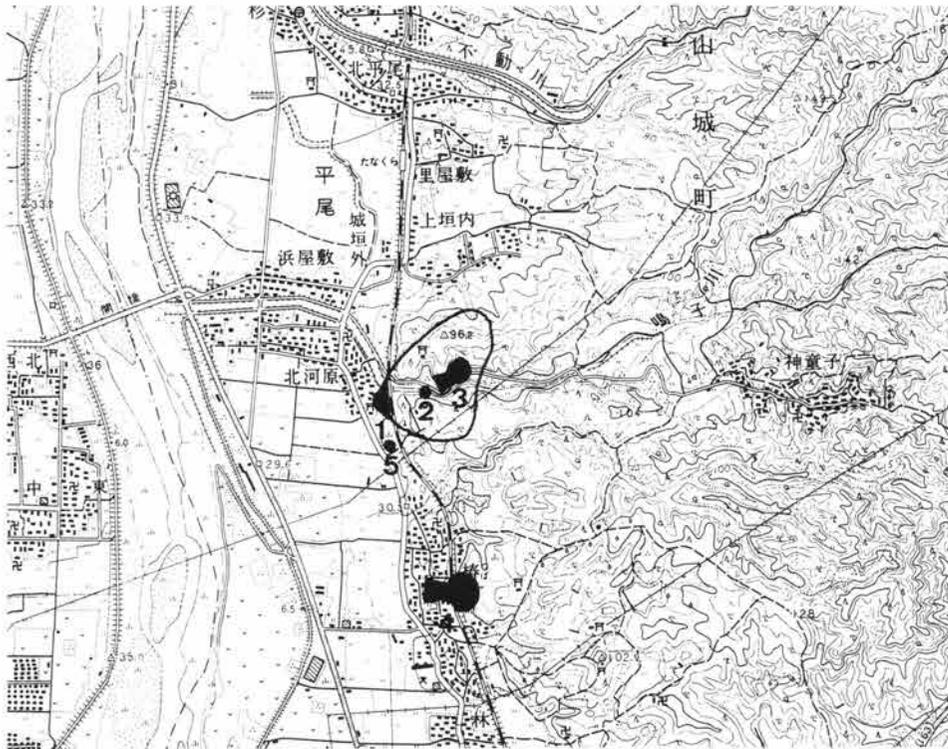
図2 大切遺跡の主要花粉化石分布図
(樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・胞子は花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した)

5. 今城跡発掘調査概要

1. はじめに

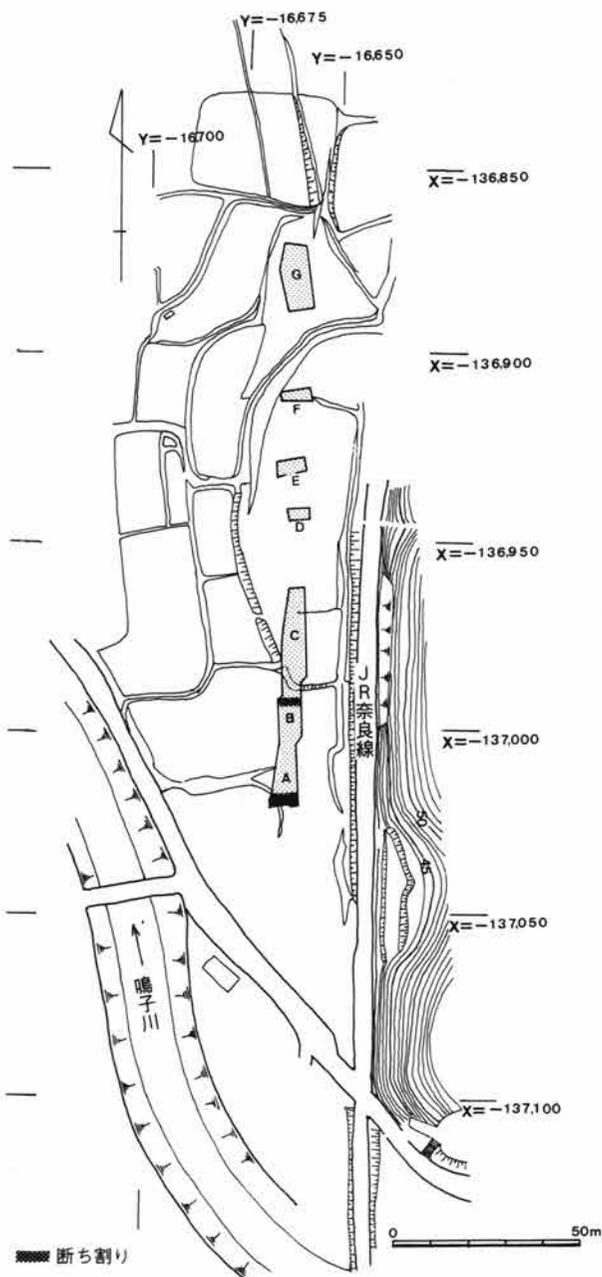
この調査は、京都府が計画した一般地方道上狛・城陽線の建設に伴い、京都府土木建築部からの依頼を受けて実施した。京都府土木建築部木津土木事務所と京都府教育庁指導部文化財保護課、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターの協議により、道路建設工事に先立ち、当調査研究センターが今城跡の発掘調査を実施するにいたった。調査期間は平成4年5月6日～同6月12日までであり、調査面積は約500㎡である。

なお、発掘調査及び遺物整理作業にかかる費用は、すべて京都府土木建築部が負担した。また、調査及び整理作業にあたり、山城町教育委員会や京都府木津土木事務所はじめ関係



第75図 調査地位置図(1/25,000)

- | | | |
|------------|----------|-----------|
| 1. 調査地 | 2. 稲荷山古墳 | 3. 平尾城山古墳 |
| 4. 椿井大塚山古墳 | 5. 堂ノ上遺跡 | |



第76図 トレンチ配置図

諸機関より多大な御協力、御教示を受けた。また、調査補助員と整理員、また作業員に多大な労苦をかけた。記して感謝したい。

2. 位置と環境

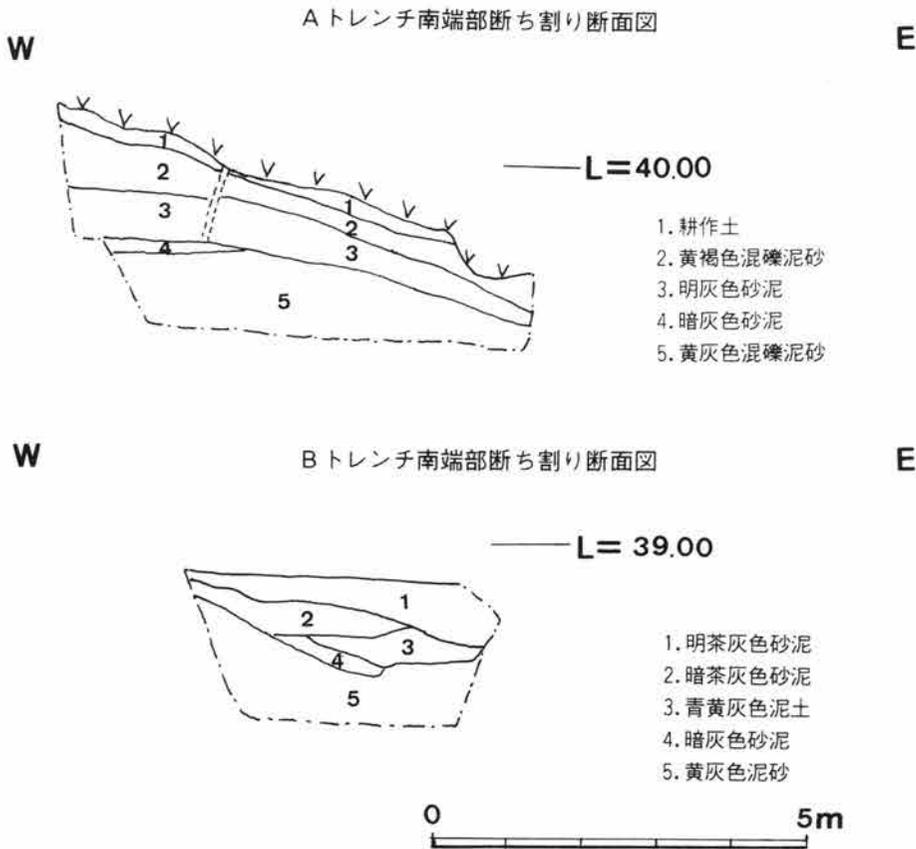
今城跡は、京都府の南部の山城町にあり、地籍上は相楽郡山城町大字北河原小字北谷に所在する。木津川の形成した河岸段丘と山城町の東側に広がる山塊の裾部分の傾斜変換地点上に位置し、北西へ流路を変え木津川に流入する鳴子川とJR奈良線に囲まれた地点に位置する。とりわけ調査地区の東側は、JR奈良線と平行している。

今城は、山城国一揆(1485~1493)の際の畠山義就の居城と伝えられ、東西330m・南北400mがその範囲とされている。^(注2) また調査地の南部には前年度、当調査研究センターが発掘調査した堂ノ上遺跡^(注3)、そして丘陵の頂部には、著名な前期の前方後円墳である平尾城山古墳(全長110m)や、北河原稲荷山古墳(円墳 直

径30m)が存在する。平尾城山古墳の調査に際して、古墳築造以前の弥生時代後期の土器片が確認されており、木津川東岸の河岸段丘面には後期の集落の存在が考えられる。また、7世紀初頭には上狛の地に高麗寺が創建され、飛鳥寺創建時の軒丸瓦が出土しており、平安時代まで存続した。

3. 調査の概要

調査範囲の地形は、北部から水田に近いやや傾斜をもった低地、その南には、舌状に張り出した微高地(竹林)、最南部はかなり傾斜のある茶畑の三つの区域に分けることができる。トレンチの設定は南の茶畑にA～Cトレンチ、中央の微高地にD～Fトレンチ、北部はGトレンチを配置した。まず、A～Cトレンチから重機で掘削後精査を行ったが、遺構面を確認することができなかつたため、A～Cトレンチの東西方向に断ち割りを行った。その結果、A・Bトレンチのいずれの断ち割り断面とも地山まで到達していないが、斜面



第77図 A・Bトレンチ断ち割り断面図

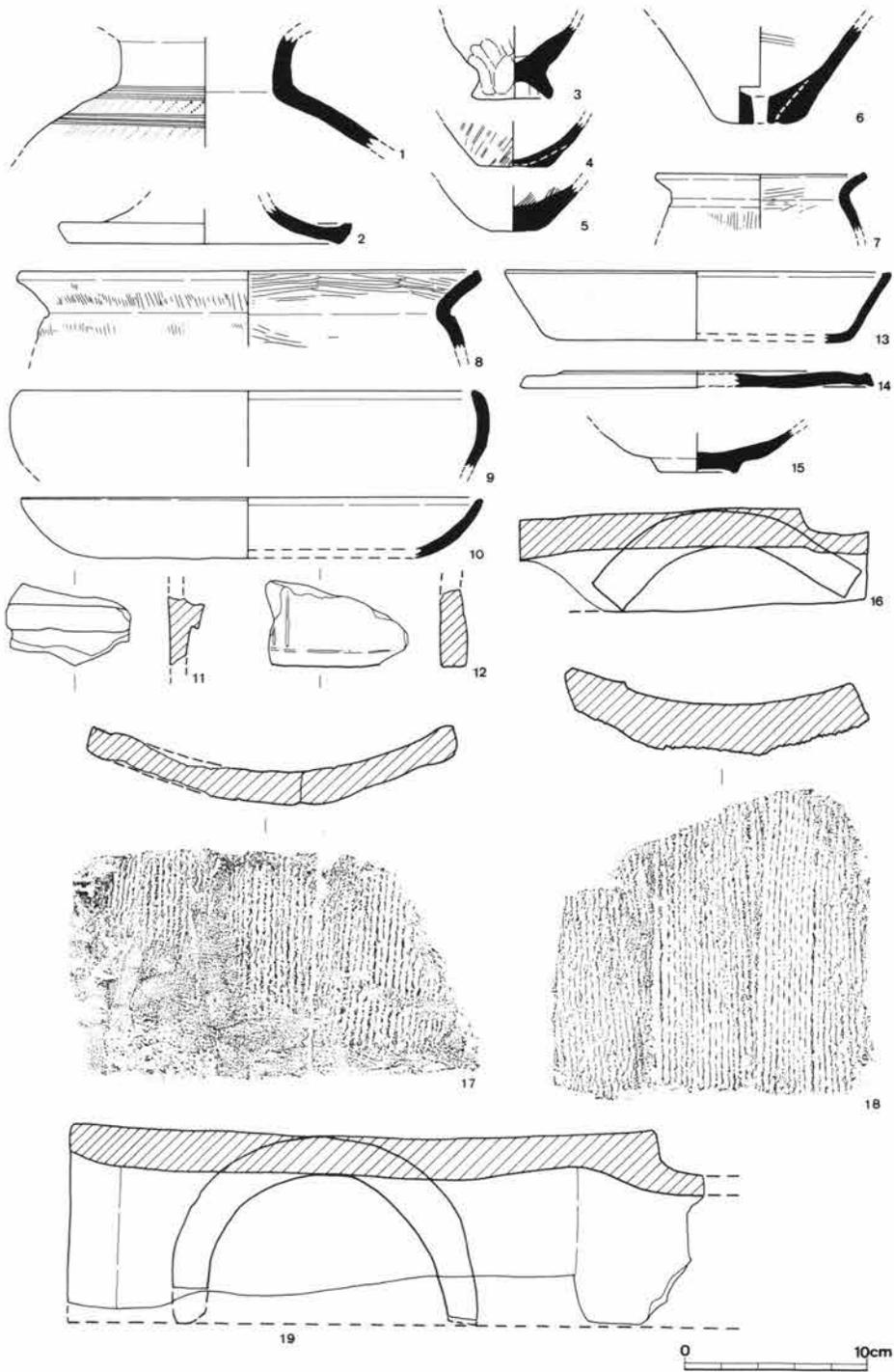
上方からの流土と思われる最下層の黄灰色泥砂層は全くの無遺物であり、遺構面の存在はないものと考えられる。Cトレンチでは北壁の崩落にともない、断ち割り断面の最下層を確認することができなかった。D～Fトレンチでの土層は水平堆積が見受けられたが、砂層の堆積であり、ここでも遺構面の確認はできなかった。Gトレンチでは、耕土を除去しただす下の土層から直径30cm前後のピット群を確認したが、ピットの埋土からは遺物の検出は全くなく、また遺構となるような相互関係が見られなかった。また、周辺の同一面から近現代の陶磁器、そしておそらくJ R奈良線によって削平された際に転落したと思われる蓋形埴輪片などが出土した。Gトレンチでも遺構面が確認できないため、Gトレンチの東側に断ち割りを入れた結果、バイラン質の地山が検出された。地山は、階段状に掘削され、その上に盛り土をして耕作を行っていたと考えられる。

遺物は、A～Bトレンチに奈良時代の瓦片が多量に出土したことが注目される。Cトレンチでは弥生土器と須恵器細片が同じ土層から出土している。D～Fトレンチからの遺物の出土は皆無である。

4. 出土遺物

瓦片をはじめとする遺物は、A～Bトレンチに集中しており、弥生土器もBトレンチで集中的に出土した。調査地周辺は、山城町教育委員会によって分布調査がなされており、弥生時代V様式の土器片の分布が確認されているが、瓦の確認はなされていなかった。

第78図1～6の弥生土器は、Bトレンチ出土で、1は摩滅が激しいが、かすかに6条の沈線と列点文が見受けられる。2はおそらく高杯の脚部であろう。調整は外面のみ横ナデである。3は高台に指頭圧痕文が見受けられる。4の外面は赤褐色を呈し、粘土の貼り足しを行い、その後、タタキにて外面を調整している。5は外面は茶褐色、内面は黒褐色を呈し、内面にはハケメ調整を施している。6は甌であり穿孔は焼成前に行われ、内面を横ハケにより調整している。土師器のうち、7・9はBトレンチ出土で、8・10はCトレンチ出土である。7は土師器の甕であり口縁部内面はハケメ調整、外面は横ナデ、口縁内面はハケメ、頸部はケズリを施す。8は内外面ともハケメ調整を施している。9は土師器の鉢で摩滅が激しいため調整方法は不明である。10は土師器の皿で、口縁部が内湾しながら立ち上がり、端部を内側に肥厚させる。調整は、外面には横方向のケズリ、口縁端部までナデで仕上げる。内面は全面に横方向に磨きで仕上げる。11・12はGトレンチ出土である。11は円筒埴輪で、突帯の突出度は低いがいわゆる「M」字形断面を呈するため、古相がうかがえる。黒班はなく調整技法も不明であるが、別個体では内外に横ハケ調整し黒班の見られるものもある。12は蓋形埴輪の笠部の下端部で、成形方法は不明である。笠部外面に



第78図 出土遺物実測図

1~7. 弥生土器 8~10. 土師器 11・12. 埴輪 13・14. 須恵器 15. 陶器 16~19. 瓦

線刻表現がある。13・14はCトレンチ出土で、13は須恵器の杯Aで内外面とも横ナデで仕上げる。口縁端部内面に1条の沈線を施すことによって端部を肥厚させている。14は須恵器杯の蓋である。形態は天井部が平坦で全体に偏平な感を与えるが、焼け歪みの可能性がある。成形方法は天井部外面が回転ヘラケズリ、その後内外面とも横ナデで仕上げている。15はGトレンチ出土で、胎土目の唐津で釉調は淡緑灰色を呈する。釉は一部高台まで垂れる。16・17はAトレンチ、18・19はBトレンチ出土である。17・18の瓦片は凸面にナナメタタキ、内面には布目圧痕がみられ、側端面はヘラケズリで仕上げる。17の凸面の一部はタタキの後、一部ヘラケズリを施している。

5. ま と め

今回の調査では、城跡に関する遺構・遺物を検出することはできなかった。

しかし、A～Bトレンチで出土した奈良時代の瓦片が注目に値する。周辺の踏査の結果から、寺院や役所というよりも、瓦窯跡が調査地の近隣に存在するのではないかと考えられる資料である。窯の存在を直接的に示す焼土、炭、灰などは全く見られず、瓦片の中にも窯跡出土に特有の歪んだ製品も見られないが、現在JR奈良線が通っている丘陵斜面あたりに奈良時代の窯があった可能性は高いといえよう。またCトレンチよりローリングの激しい弥生土器が出土していることから弥生時代の遺跡が近くに存在した可能性も高いといえよう。またGトレンチ出土の埴輪は、調査地の丘陵斜面上方に存在する平尾城山古墳か稲荷山古墳に位置していたものが、丘陵裾へと流れ出し、さらにJR奈良線造成によって削平を受け、現在の堆積土中入ったものではないだろうか。今後の調査結果に期待したい。

(森正哲次)

注1 五百磐頭一・林 恵子・疋田季美枝

注2 平良泰久編『京都府遺跡地図』第5分冊〔第2版〕 京都府教育委員会 1985

注3 野島 永「堂ノ上遺跡・恭仁京推定地発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第47冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1992

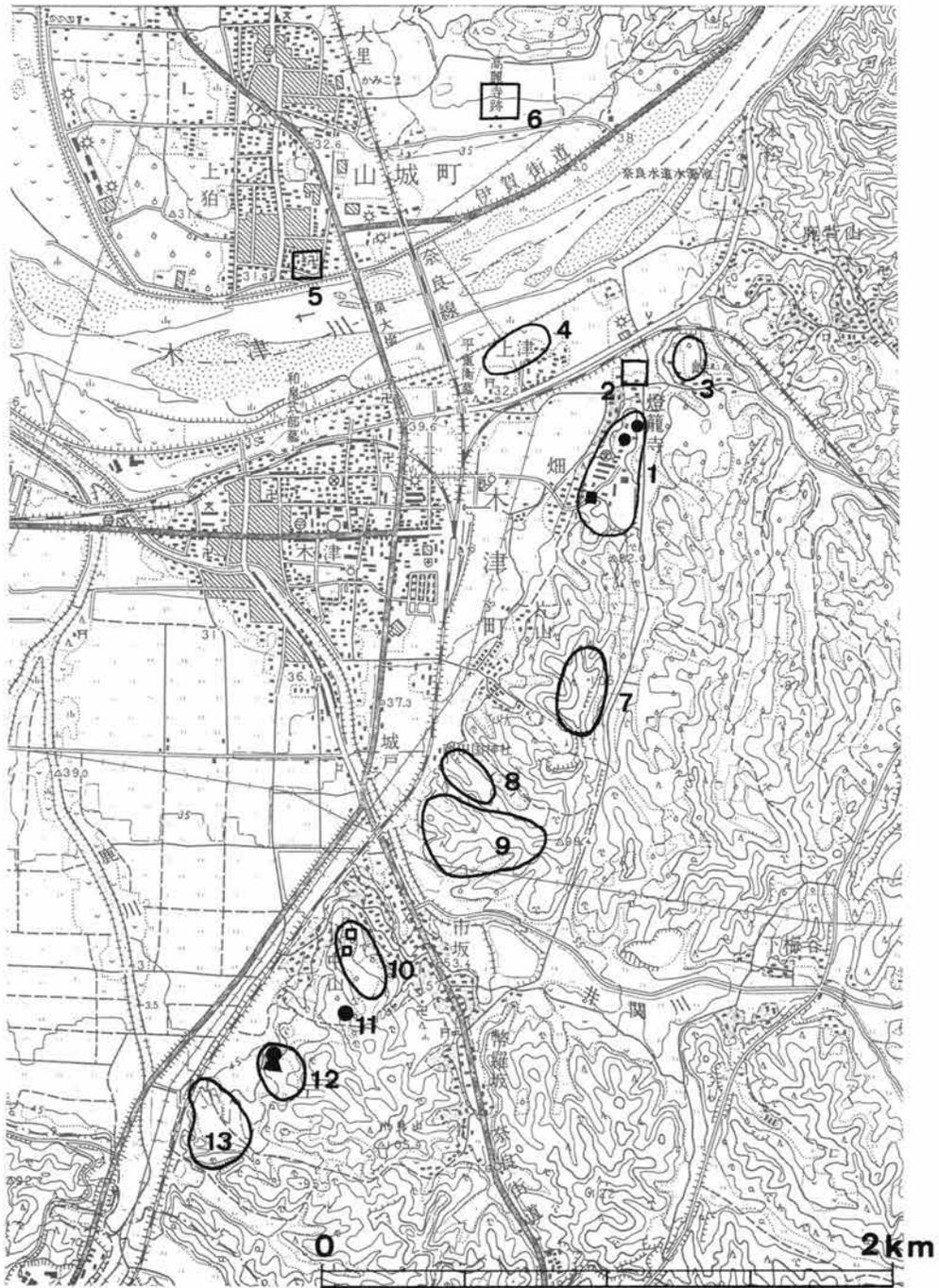
6. 燈籠寺遺跡第6次発掘調査概要

1. はじめに

京都府相楽郡木津町大字木津小字内田山に所在する燈籠寺遺跡の発掘調査も今年度で6回目を数える。燈籠寺遺跡は1958年(昭和33年)の京都府立木津高等学校の農場造成工事に弥生土器・土師器・須恵器・埴輪などが出土し、同校の敷地内に遺跡が所在することが明らかとなっていた(第79図)。第1次調査^(注1)は、昭和56年度に、正門付近(高校敷地内南端)の校舎改築に際して発掘調査が行われ、方墳に伴う周溝を検出した。この周溝からは、円筒埴輪・朝顔形埴輪、切妻造家形埴輪などの古墳に伴う遺物のほか、奈良時代の須恵器・土馬なども出土した。第2次調査^(注2)は、第1次調査の東に隣接した地点で昭和59年度に実施され、方墳に伴う周溝(SD11)の一部を確認した。第3次調査^(注3)は、校舎と体育館にまたがる渡り廊下部分の調査を実施したが、顕著な遺構はみつかっていない。第4次調査^(注4)は、第1・2次調査の南東で調査したもので、弥生時代前期の土坑と、弥生時代中期の方形周溝墓を1基確認した。第5次調査^(注5)では、第2次調査でみつかった周溝(SD11)の延長部を確認し、SD11が第1次調査でみつかった内田山A2号墳と同じ方墳であることが明らかとなった。このように第1～5次調査では、高校敷地内の南端に集中して発掘調査を実施し、弥生時代前期の土坑、中期の方形周溝墓、古墳時代中期の2基の方墳を確認したが、今回実施した第6次調査は、昭和33年にみつかった内田山A1号墳に近接した高校敷地内の北端であり、内田山A1号墳の実態が明らかにできるのではという期待がもたれた調査であった(第80図)。

調査は、平成4年6月3日から平成4年9月4日までの前半(A・Bトレンチ)を、当調査研究センター調査第2課調査第3係長小山雅人、同主任調査員石井清司、同調査員森正哲次が担当し、平成5年2月18日から平成5年3月9日までの後半(C～Gトレンチ)を調査第2課第2係長奥村清一郎、同調査員小池 寛が担当した。本文は、A・Bトレンチについて石井が、C～Gトレンチについては小池 寛が執筆した。調査に際しては京都府立木津高等学校・京都府教育委員会・木津町教育委員会・京都府立山城郷土資料館など関係諸機関から御協力・御教示をいただいた。また、現地作業には作業員・整理員の協力を^(注6)えた。

なお、本調査に係る経費は京都府教育委員会が負担した。



第79図 調査地位位置図

- | | | | | |
|-----------|-----------|------------|-----------|----------|
| 1. 燈籠寺遺跡 | 2. 燈籠寺廃寺跡 | 3. 白口遺跡 | 4. 上津遺跡 | 5. 泉橋寺 |
| 6. 高麗寺跡 | 7. 木津城跡 | 8. 大谷窯跡 | 9. 天神山古墳群 | 10. 西山遺跡 |
| 11. 西山塚古墳 | 12. 瓦谷古墳群 | 13. 上人ヶ平遺跡 | | |



第80図 年度別トレンチ配置図

2. 調査の経過

今回の調査は、授業実習棟(A・Bトレンチ)と体育館(C～Gトレンチ)の改築工事に伴う事前調査であり、高校敷地内の北端に、東西15m×南北37mの南北トレンチ(Aトレンチ)と、Aトレンチの南西で東西12m×南北45mの東西トレンチ(Bトレンチ)を、そしてBトレンチより南方120mの地点にC～Gトレンチを設定した。Aトレンチでは、表土直下40cmの浅い位置で黄褐色粘質土の地山土となる。このトレンチは調査前に牛舎・鶏舎などの木造建築物があり、遺構の遺存状態はよくなかった。東西方向に設定したBトレンチも、表土直下10～40cmで地山土があらわれ、特に東半分では地山土が露呈しており、西半部の丘陵斜面の一部にわずかに遺構を検出したのみであった。A・Bトレンチとも遺構の大半が後世に大きく削り取られており、一部の竪穴式住居跡を除いて遺構の遺存状態はあまりよくなかった。一方、C～Fトレンチは、すでに遺構面は削平されていたが、Gトレンチでは、造成土を80cm程度除去した段階で溝・土坑を検出した。

3. 検出遺構

第6次調査でみつかった遺構は、弥生時代後期の竪穴式住居跡3基と土坑、古墳時代中期後半の周溝状遺構と土坑であるが、前述のように大半が校舎造成あるいはそれ以前に大きく削平されており、遺存状態はよくなかった。

Aトレンチ(第81図) Aトレンチでは、竪穴式住居跡3基と土坑を検出した。

SH02(第82図) SH02は、Aトレンチの南端で検出した東西約7.1m・南北約6.3mの平面隅丸方形の竪穴式住居跡である。SH02は、他の2基の竪穴式住居跡に比べ遺存状態は悪く、遺構検出面から床面までの深さは約25cmを測るのみであった。周壁溝は各隅部で検出されたもので、上面幅10～30cm、床面からの深さ約15cmを測る。床面には4本柱と思われるピットを3か所検出し、その床面からの深さは約15cmを測る。遺物は北コーナーの周壁溝内にミニチュア土器1点と石鏃が1点出土したのみである。SH02では南コーナー付近から南西方向に向かって検出長約8.0m・上面幅約35cm・深さ約30cmの「┌」字溝があり、SH02に伴う排水溝(SD01)と思われる。排水溝内でSH02に近接した位置から土器(甕37)1点が出土した。

SH03(第83図) SH03は、Aトレンチ中央で検出した竪穴式住居跡で、床面の検出状況から建て替えが考えられる。これは、当初上面輪郭が隅丸方形であったが、床面での土器の除去及び精査をしていくと、新たに周溝を検出したため、当初は円形住居(SH03-a)であったのが、住居をわずかに拡張して平面隅丸方形に建て替えたものと思われる。

SH03-aは、周壁溝の状態から平面円形の住居跡で、直径約6.0mを測る。周壁溝は、東

側で上面幅約30cm・深さ約20cm、西側で上面幅約60cm・深さ約20cmを測る。SH03-bは、平面隅丸方形の竪穴式住居跡で、一辺約6.2mを測る。SH03-bは、SH03-aの周壁溝を埋め、各隅部のみ拡張して隅丸方形に建て替えたものである。周壁溝はSH03-aと一部重複しているが、明確なところでは上面幅約35cm・深さ約20cmを測る。床面では6か所の柱

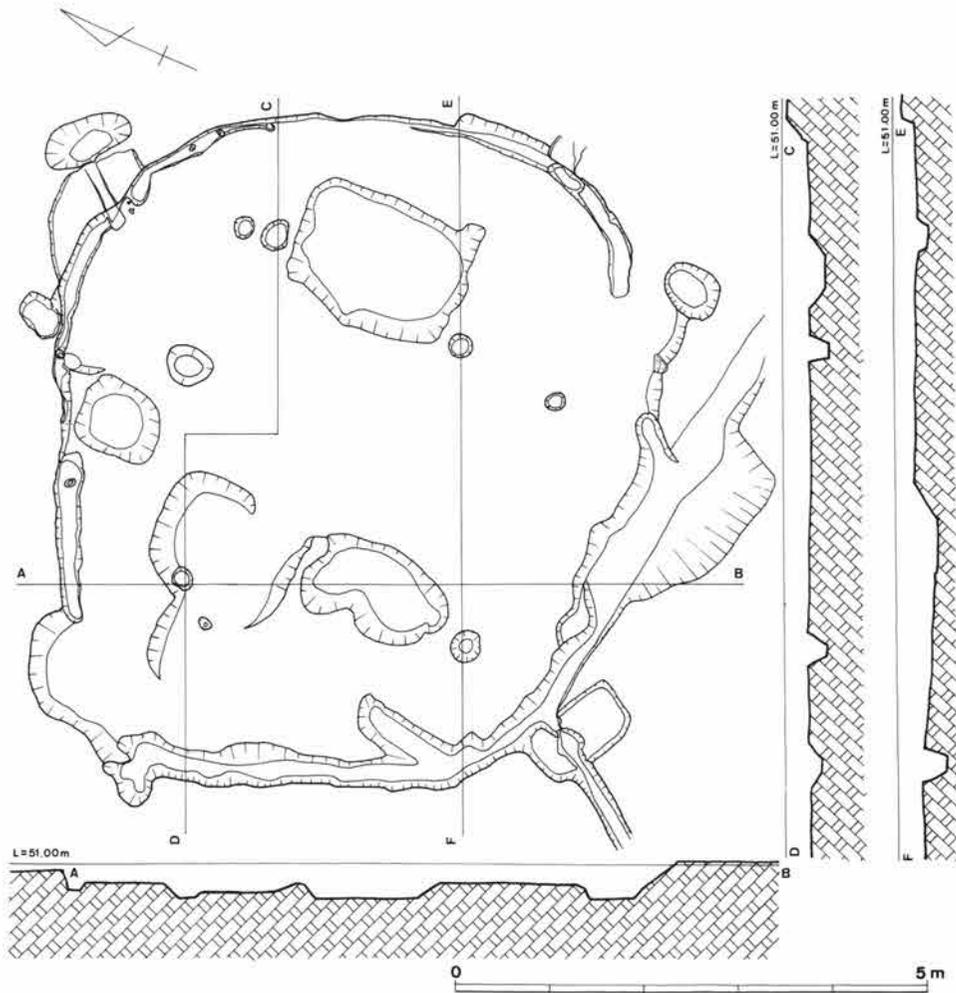


第81図 Aトレンチ遺構配置図

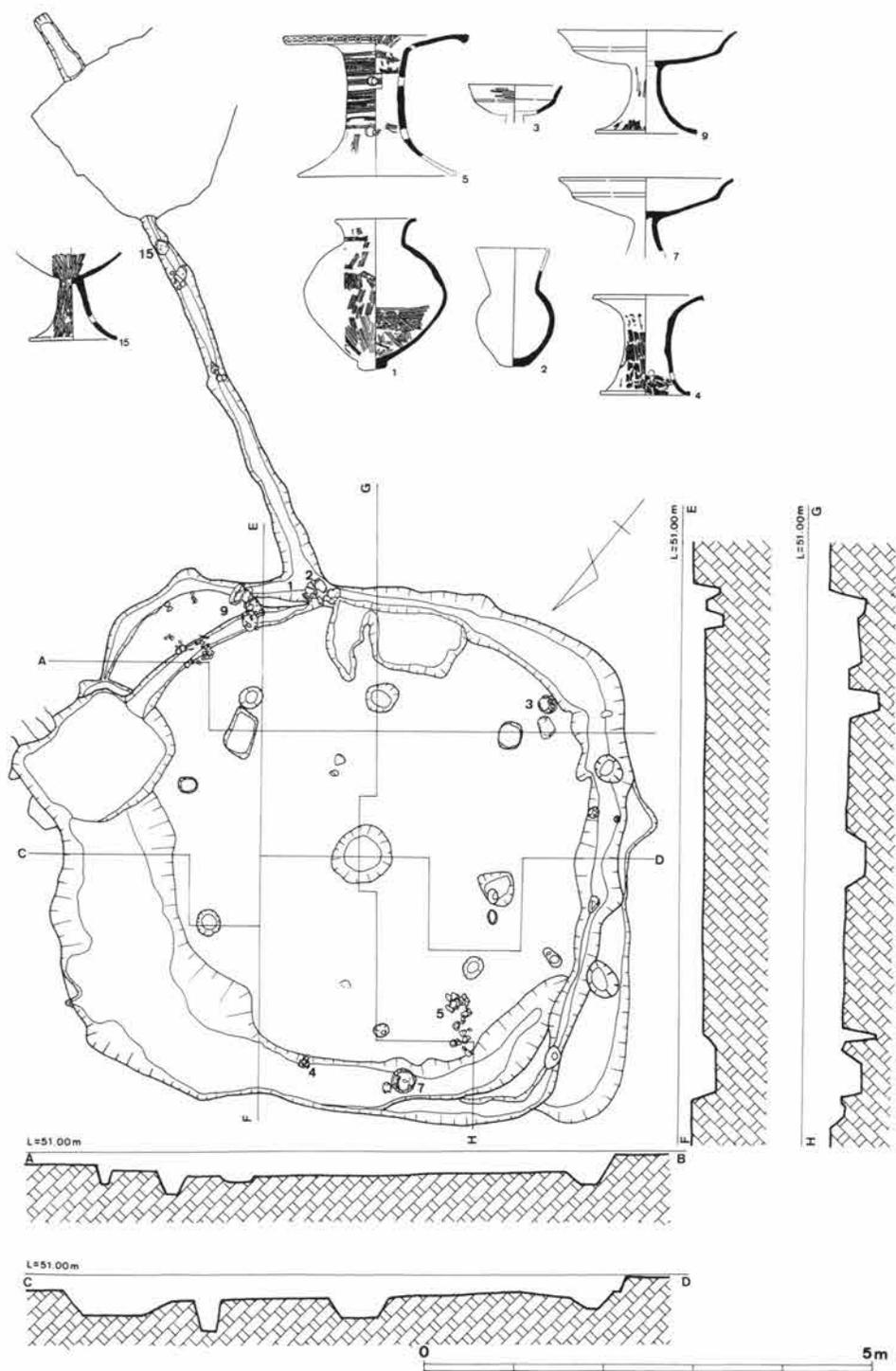
跡のピットを検出したが、S H03-aあるいはS H03-bのいずれに帰属するかどうかは明らかでない。床面中央には直径約60cm・深さ約20cmの皿状の落ち込みがあり、同土坑の埋土内からわずかに炭が出土した。遺物は南東コーナーで壺・高杯が北東コーナーで器台・高杯が比較的まとまって出土した。

S H03の東辺から東方向の谷部に向かって上面幅約40cm・深さ約30cm・検出長約7.1mの排水溝(S D05)がある。S D05からも土器が出土した。

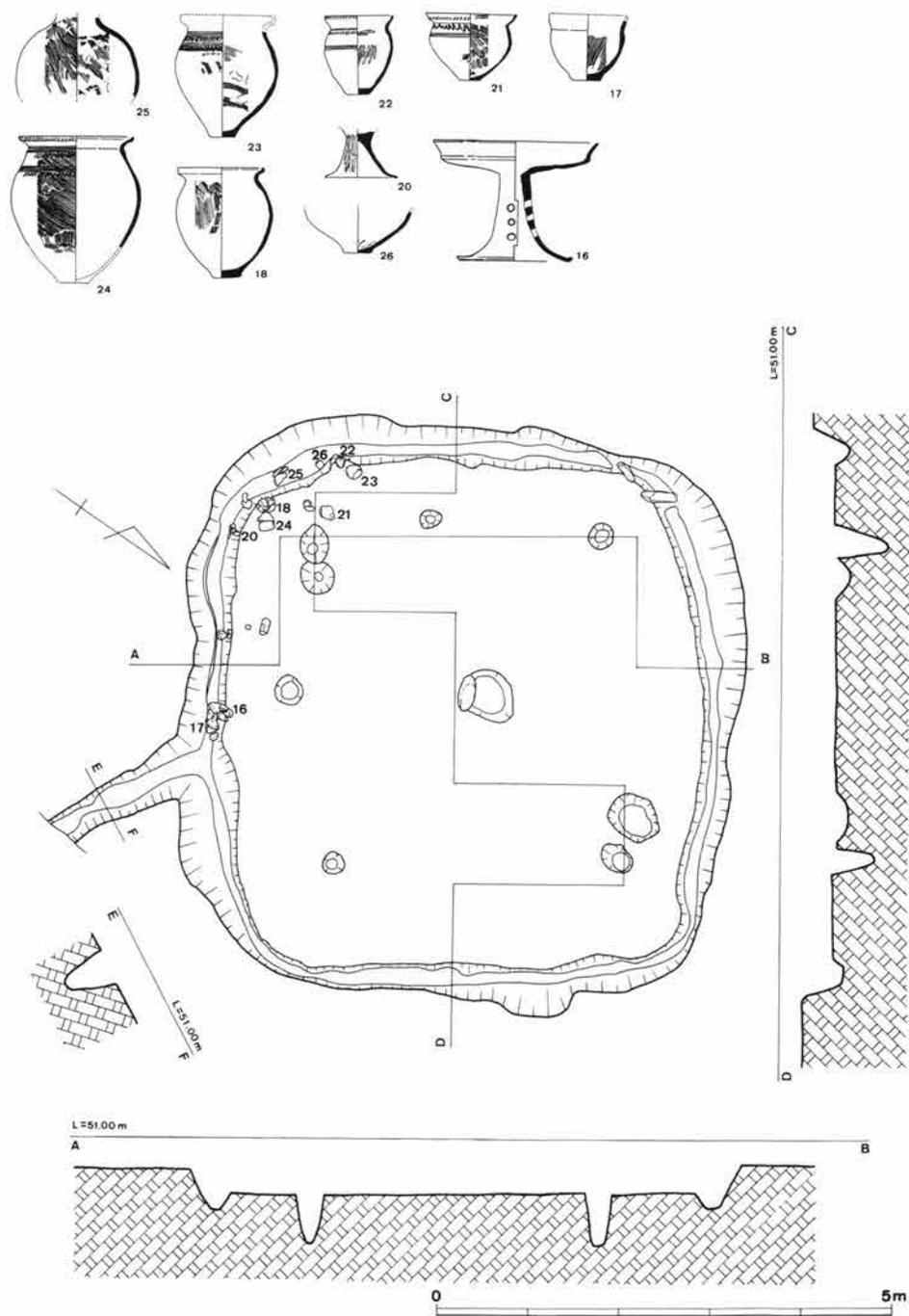
S H06(第84図) S H06は、Aトレンチ北端で検出した東西約6.3m・南北約6.3mを測る平面隅丸方形の竪穴式住居跡である。S H06は遺構検出面から床面まで約35cmと深く、S H02に比べ遺構の遺存状態は良好であった。周壁溝は上面幅約50cm、床面からの深さ約10cmを測る。床面には4本柱と思われるピットを4か所検出した。床面中央には直径



第82図 S H02遺構図

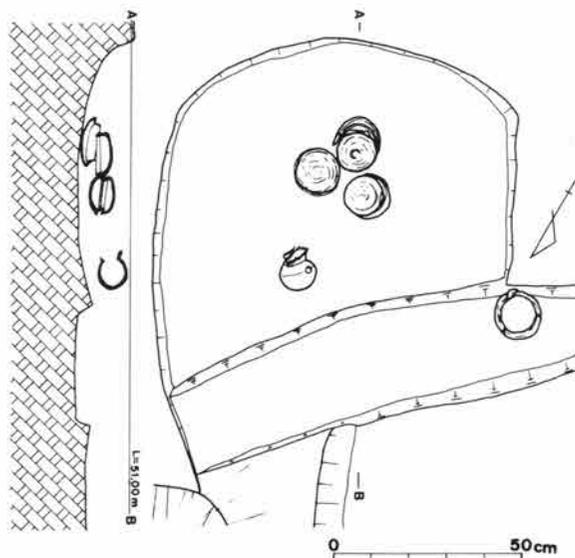


第83図 SH03遺構図



第84図 SH06遺構図

約50cm・深さ約15cmの皿状の土坑がある。同土坑内の埋土は炭が大半であり、長さ約40cmの石材もあった。土器は南コーナーに集中して壺・甕・器台などが出土した。また床面の西コーナーには石材が周壁溝の上面をまたぐ形で「ハ」の字状に据えられていた。SH03と同様、東方向にのびる上面幅約50cm・深さ約20cm・検出長約1.5mの排水溝を検出した。



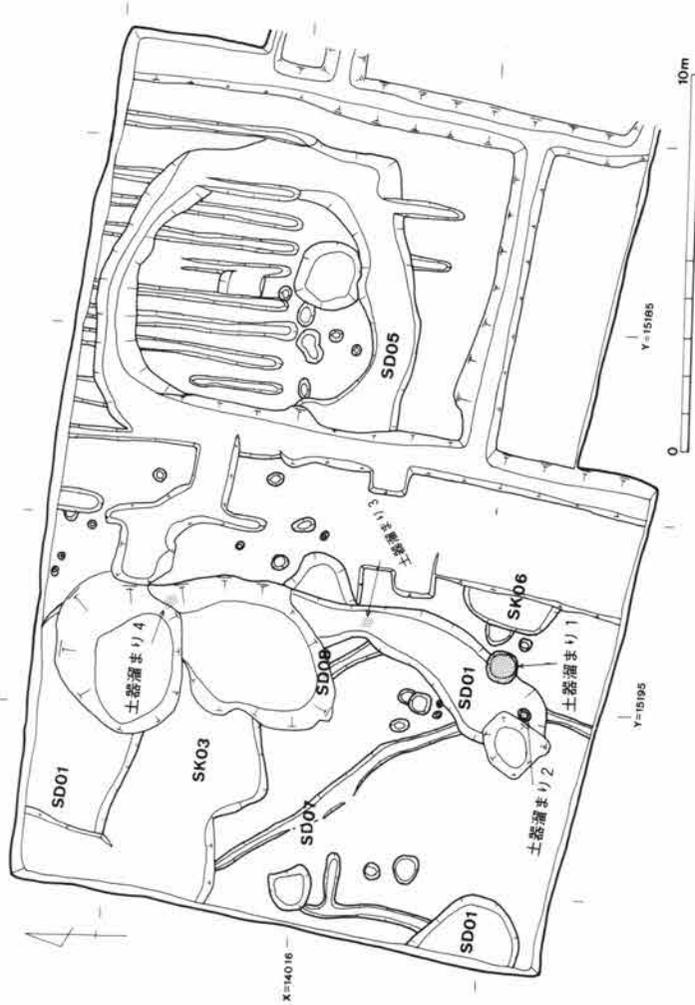
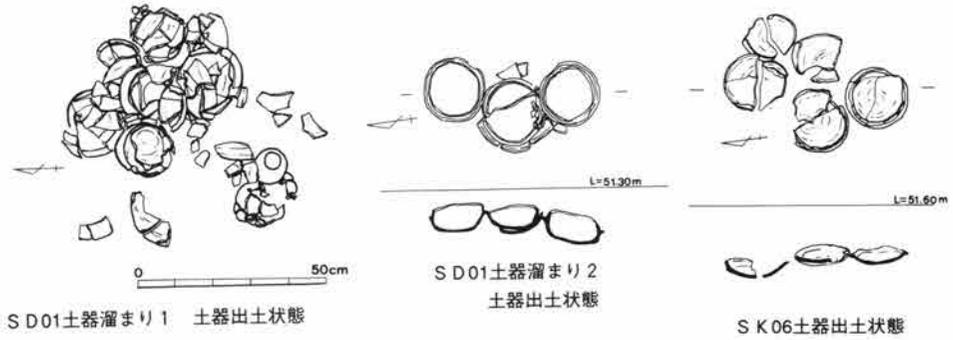
第85図 AトレンチSK09遺構図

SK09(第85図) SK09は、トレンチ北寄りのSH03とSH06の間で検出した検出長約1m・幅約0.95m、検出面からの深さ約10cmを測る隅丸長方形の土坑であるが、土坑の北半部は削平されていて遺存しない。この土坑からは須恵器杯身に同杯蓋をかぶせたものが3組と甕1点が据えられており、墓塚と思われる。SK09の周辺で墓塚に伴う周溝等の確認につとめたがみつからなかった。なお、杯身内には少量の土のほか、肉眼観察では遺物は出土しなかった。

SK11 SK09の東約7.5mで検出した土坑である。SK11は大半が後世に削平され、わずかに長径約2.2m・短径約1.0mの不整形土坑となっていたが、土坑内からSK09と同様、須恵器杯身に同杯蓋がセットで1組出土しており、SK09と同じ性格の墓塚と思われる。

Bトレンチ(第86図) Bトレンチは、トレンチの東半部が大きく削平されており、西半部の丘陵のわずかに傾斜した部分のみ遺構が確認できた。検出した遺構は円形にめぐる周溝2基(SD01・SD04)と、不整形土坑1基(SX03)である。

SD01 SD01はBトレンチ西端で検出した円形にめぐる溝で上面幅0.8~2.0m・復原直径約12mを測る。SD01は南端で一部途切れており、開口部(陸橋部)の可能性はある。SD01もその大半が後世に攪乱を受けており、遺存状態はよくなかったが、周溝の東側(周溝内)に4か所の土器溜まりがあった。土器溜まり1は、周溝をさらに掘りくぼめた直径約85cm・深さ約20cmの円形土坑で、土坑内から須恵器杯身・杯蓋・提瓶・壺、土師器のほか、土玉3点が集中してあった。土器溜まり2は、土器溜まり1の南西約1mで、SD01をさらに掘りくぼめた直径約30cm・深さ約10cmの円形土坑である。同土坑内には、須恵器杯身が正位の状態で3個体出土した。中央の杯身の下には杯蓋が逆位の状態で重な



第86図 Bトレンチ遺構配置図

っていた。土器溜まり3は、S D01の溝幅が狭くなった地点で、杯身2個体が正位の状態
で出土した。土器はS D01の底部より上層から出土しており、溝の埋まったのち、置かれ
たものと思われ、須恵器の形態も土器溜まり1・2より新しい様相を呈する。

土器溜まり4は、S D01の北東部分で、攪乱土坑の間に偶然残ったかのような状態で壺
口縁部・杯身などが細片で出土した。

S D05 S D05はS D01の東約5mで検出した円形の周溝で、上面幅約0.9~1.5m・深さ
約20~30cm・復原直径約7.5mを測る。S D05は木造校舎時の基礎及び畑地の畝により、
大きく攪乱を受けており、周溝の遺存状態はあまりよくない。周溝内からはS D01と相前
後した時期の須恵器のほか、周溝の北側で、底部近くから弥生時代後期の壺・甕などの底
部細片が出土した。S D05は弥生土器を含むが、溝内から古墳時代の須恵器を含むことか
ら、S D01と相前後した時期と古墳に伴う周溝と考える。

S K03 土坑S K03は後述する古墳の周溝(S D01)により一部削り取られた不整形土
坑である。土坑は検出面から、深さ約35cmを測る。土坑内には弥生時代後期の土器が少
量出土している。Aトレンチの遺構検出状況からS K03は竪穴式住居跡とも考えられる。

S K06 S D01の土器だまりから東へ約70cmで検出した長軸2.5m・短軸1m以上・深
さ15cmの不整形土坑である。土坑中央から、須恵器杯身5個体が正位の状態
で出土しており、AトレンチS K09・S K11と同様、土壙墓の可能性はある。

S D07 上面幅約40cm・深さ約5cm・検出長約10.5mの円弧をえがく溝である。S D07
はS D01に切られているが、溝内からは遺物がなく、時期決定の資料を欠く。

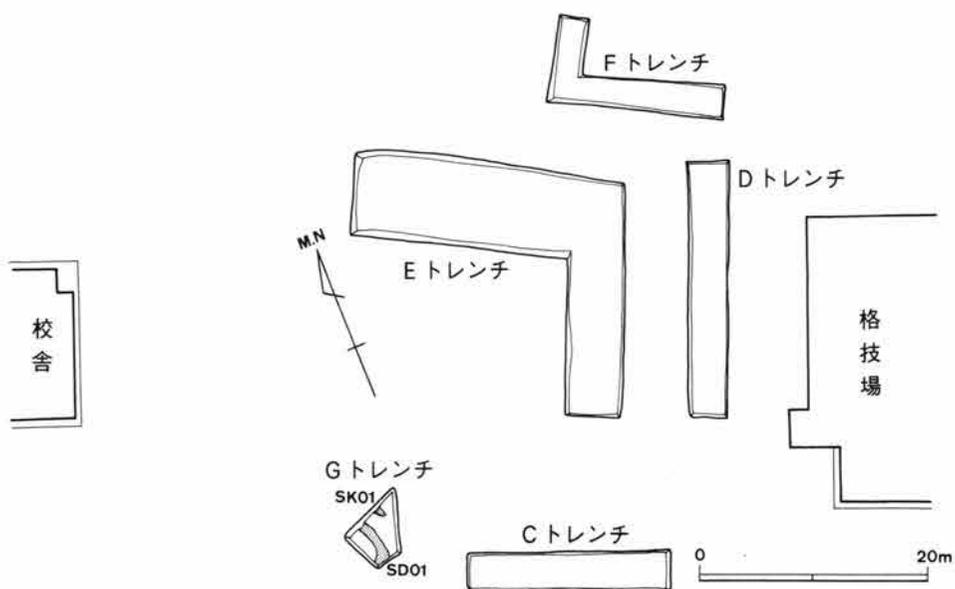
Bトレンチでは他に溝状遺構・円形土坑などがあるが、いずれも出土遺物がなく、時期
決定の資料を欠く。

C~Fトレンチ(第87図) 体育館予定地に設定したC・D・E・Fトレンチでは、すで
に遺構面は削平をうけており、大阪層群の基盤層である淡青灰色粘土層と明黄褐色粘土層
の互層が露頭しており、遺構・遺物は皆無であった。

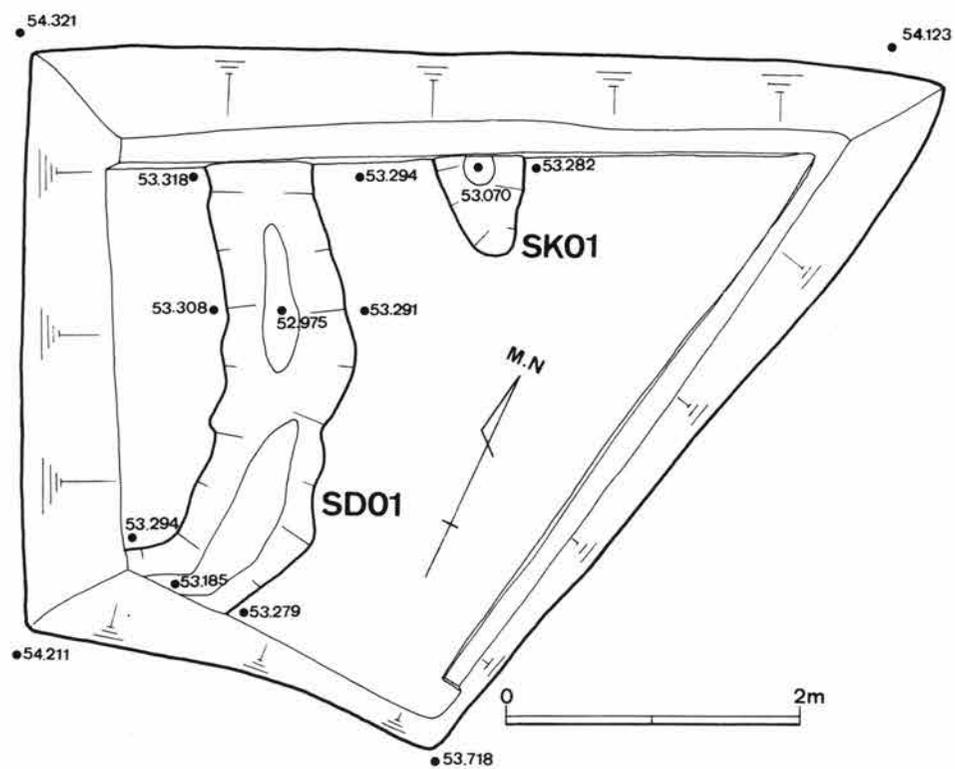
Gトレンチ(第88図) C~Fトレンチ群で最も西方に設定したトレンチで、グラウンドと
校舎群の間に堤状に残る敷地(旧管理棟)の一部にあたる。Gトレンチでは、80cmの整地
土層を除去した段階で遺物をわずかに含む包含層である暗黄褐色土を検出し、「L」字形
に屈曲する溝(S D01)と楕円形を呈する土坑(S K01)を確認した。包含層及び溝・土坑か
らはわずかではあるが、弥生時代の土器片が出土している。

4. 出土遺物

A・Bトレンチを含め、整理箱にして10箱以上の遺物が出土した。そのうち石製品(石



第87図 C～Gトレンチ配置図



第88図 Gトレンチ遺構配置図

鉢1点)を除き、大半は土器類で、Aトレンチでは弥生土器が、Bトレンチでは須恵器が比較的まとまって出土した。以下、各遺構ごとに出土した遺物の概要を記す。

なお、Gトレンチでは、S D01・S K01から弥生時代の土器片がわずかに出土しているが細片である。

AトレンチS H03出土の遺物(第89図・第90図1～14・19)

S H03の床面から弥生時代後期の壺・高杯・器台などが、比較的まとまって出土した。

広口壺(1)は、体部最大径が中位よりやや上方にあり、口頸部は短い筒状の頸部から外反する口縁部へ続く。底部は突出ぎみの平底である。体部外面は縦方向のハケ、体部内面下半にもハケ調整がある。口縁部内・外面はヨコナデ調整であるが、外面に一部ハケ調整がみられる。口径12.9cm・器高24.2cm・体部最大径22.6cm。

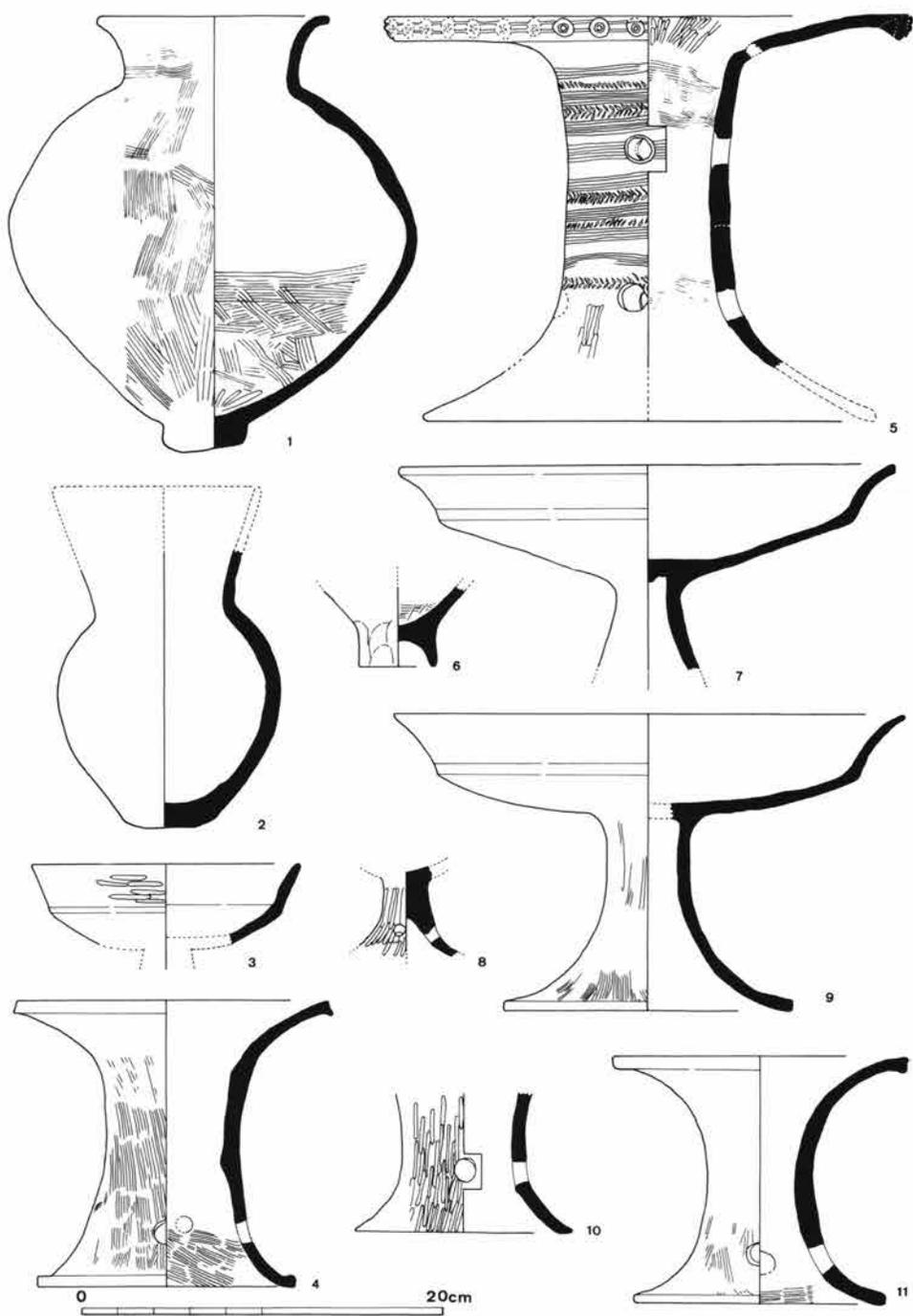
壺(2)は、長頸壺と思われる。倒卵形の体部で、頸部は斜め上方に立ち上がる。底部は丸底ぎみの平底。体部外面調整は摩滅により不明瞭であるがヘラミガキ調整と思われる。

高杯(3・7・8・9・19)は、中空の柱状部から外反する裾部へ続き、杯部は水平(9)あるいは斜め上方(3・7)に立ち上がったのち、外反ぎみに立ち上がる口縁部へ続く。9は、杯部に対して脚部が短い。3は、杯部外面に横方向のヘラミガキ、8は脚部外面に縦方向のヘラミガキ調整を施す。7・9・19は、器壁が摩滅しており調整は不明瞭であるが、一部脚部にハケ調整が認められる。3は口径14.9cm、7は口径27.5cm、9は口径27.4cm・器高16.5cmを測る。脚部と杯部の成形方向は、脚部から杯部をいっきに成形したのち、杯底部に粘土を貼りつけた円盤充填法による。

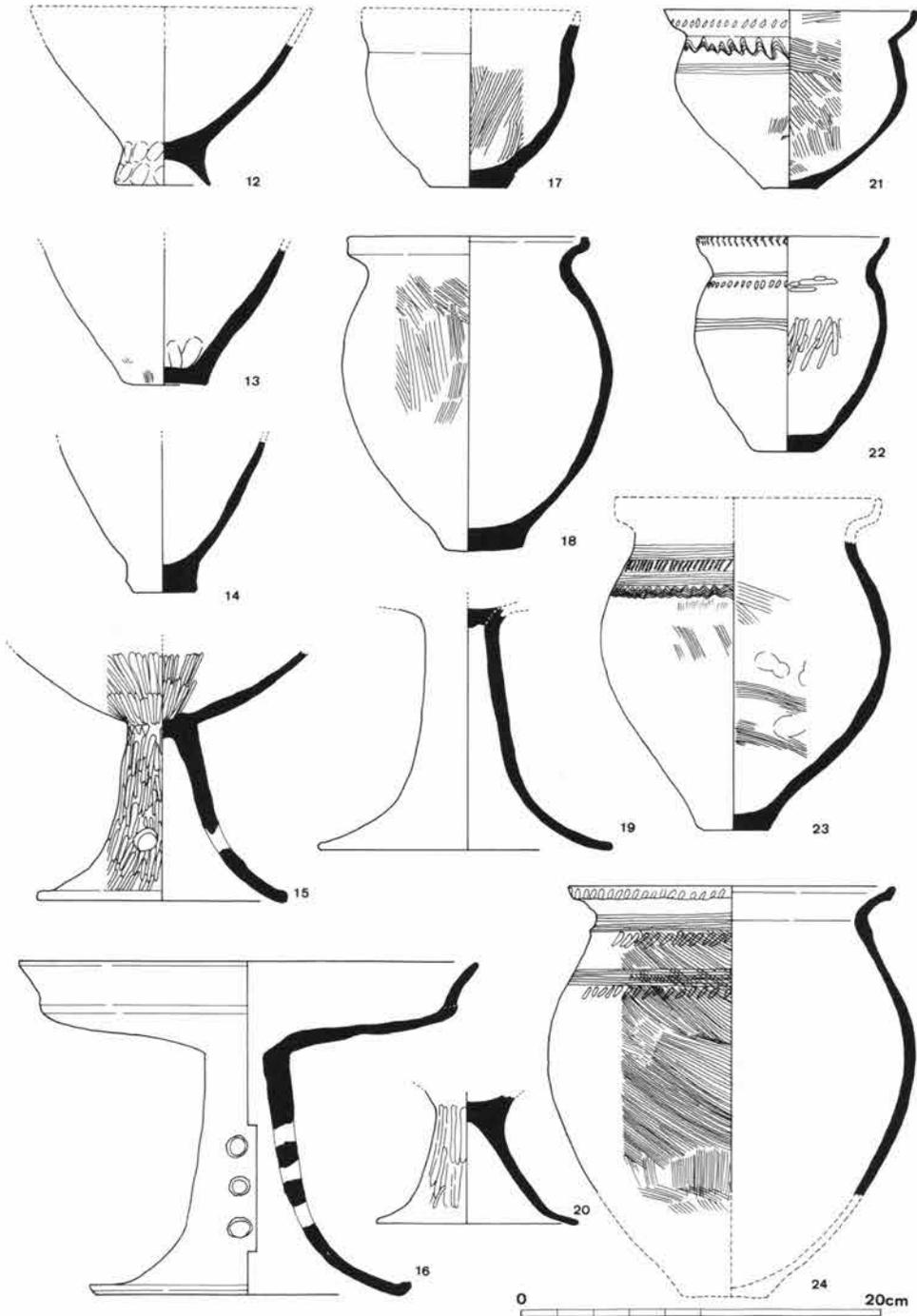
器台(4・5・10・11)は、中空の柱状部から外反(4・11)あるいは水平(5)に広がる受け部へ続く。口縁端部は、下方にわずかに肥厚して無文のもの(4・11)と、口縁部端に粘土帯を貼り付けて垂下させ、その外面には2条の凹線文と円形浮文を貼り付けたもの(5)がある。5の筒部外面には、5～6条の櫛描き直線文を8帯とその間にヘラ状工具による列点文あるいは羽状文を施している。5の筒部外面は櫛描き直線文、あるいは列点文を施した上から縦方向のヘラミガキ調整を施している。4・11の筒部外面には一部縦方向のハケ調整が認められる。10の脚部外面は、縦方向の細かいハケ調整を施す。4は口径17.3cm・器高21.0cm、5は口径29.4cm、10は底径2.0cm、11は口径16.4cm・底径14.0cm・器高13.9cmを測る。

鉢(6・12)は、斜め上方に立ち上がる体部で、口縁部は尖りぎみにおわるものと思われる。低部は裾開きとなる。

底部片(13・14)は、壺あるいは鉢の底部片と思われる。13は平底、14は突出ぎみの平底である。



第89図 出土遺物(1)



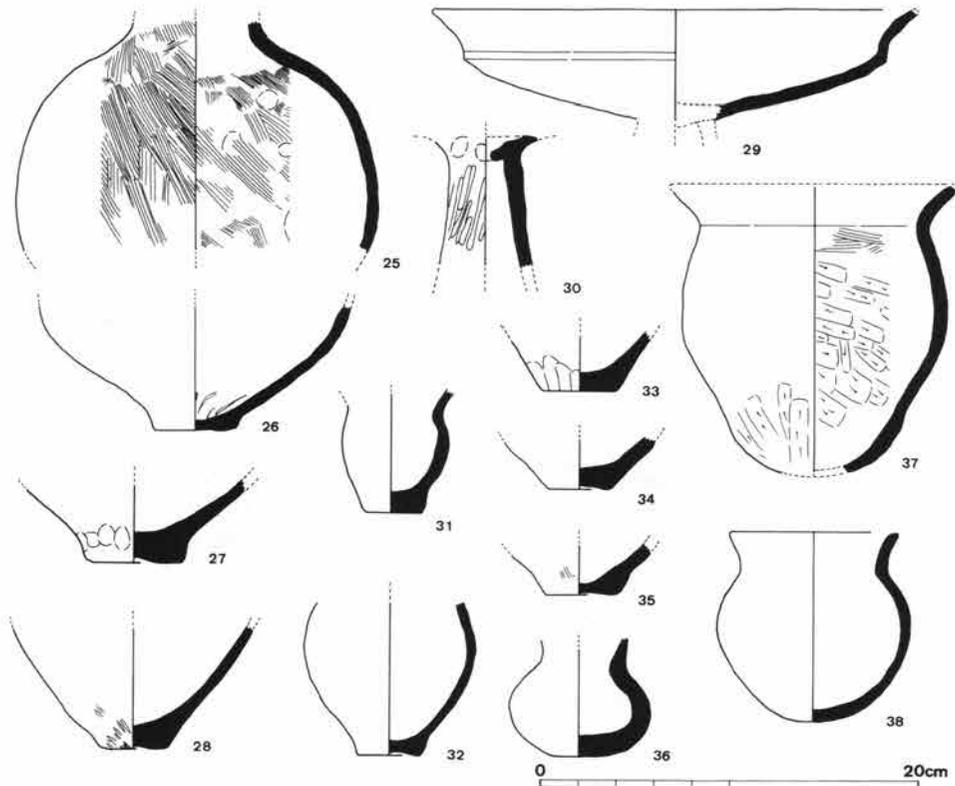
第90図 出土遺物(2)

AトレンチSH06出土の土器(第90図16~18・20・21~24・第91図25~29・32)

SH06もSH03と同様、住居跡床面から壺・甕・高杯などが比較的まとまって出土した。

壺(25・26・32)は体部及び底部片である。25は球形に近い体部から直立ぎみに立ち上がる細い頸部へ続く。体部内・外面は縦あるいは斜め方向のハケ調整を施す。26は突出ぎみの平底で、球形ぎみの体部へ続く。27は突出ぎみの平底である。32は倒卵形の体部で底部は突出ぎみの平底である。

甕(18・22・23・24)は、体部最大径が中位よりやや上方にある倒卵形で、口頸部は外反したのち、上方に立ち上がる受け口状口縁を呈する。体部外面肩部が無文のもの(18)のほか、櫛描き直線文+棒状刺突文で、口縁部には櫛描き列点文を施すもの(22)、櫛描き直線文+櫛描き列点文+櫛描き波状文を施すもの(23)、櫛描き直線文+列点文を施すもの(24)がある。24は口縁部外面にも列点文を施す。体部外面は縦方向のハケ、内面はハケあるいはナデ調整を施す。22の体部内面にはヘラミガキ調整がみられる。18・22・23・24は近江地方からの搬入品あるいは近江から影響を受けた土器と思われる。18は口径13.5cm・器高18.0cm、22は口径10.4cm・器高11.8cm、24は口径20.3cmを測る。



第91図 出土遺物(3)

鉢(17・21)は、半球形の体部で、口頸部は外反したのち斜め上方に立ち上がる受け口状口縁形を呈する。体部及び口縁部外面が無文のもの(17)と、体部外面の上半に櫛描き直線文+櫛描き波状文を、口縁部外面には列点文を施すもの(21)がある。17・21とも体部外面は摩滅により不明瞭、体部内面は縦方向のハケ調整を施す。21は口径13.4cm・器高10.1cmを測る。高杯(16・20・29)は、中空の柱状部から裾開きの脚部へ続く、杯部は皿状を呈し、水平あるいはやや斜め上方に長く立ち上がったのち、外反する口縁部へ続く。高杯の成形方向は杯部から脚部まで成形したのち、杯底部に粘土を貼りつけた円盤充填法による。16の脚部には縦に3個の円形透し穴を3方向にあけている。16・19・29は摩滅により調整不明。20の脚部外面は縦方向のヘラミガキ調整、内面はナデ調整を施す。16は口径5.6cm・底径18.0cm・器高は18.7cm、19は底径16.3cm、20は底径11.2cm、29は口径25.8cmを測る。

A トレンチ S H02出土遺物(第91図31)

S H02は後世の攪乱が著しく、住居跡の床面の遺存状態はよくなかった。出土遺物も北周壁溝内から小型甕1点と石鉢1点が出土したのみである。

小型甕(31)は、手捏ね土器で、平底の底部から倒卵形の体部へ続き、口縁部は外反ぎみに立ち上がる。

石鉢は、凹基無茎式で材質はサヌカイト。

A トレンチ S D01出土遺物(第90図15・第91図37)

S D01は、S H02に伴う排水溝で、S H02南周壁溝から30cmほど南へいった地点から甕(37)・高杯(15)が出土した。

高杯(15)は、中空の柱状部から裾開きの脚部へ続き、外反ぎみに立ち上がる椀状の杯部となる。杯部内・外面及び脚部外面はていねいなヘラミガキ調整を施す。

甕(37)は、倒卵形の体部で底部は丸底ぎみになる。口縁部は「く」の字形に外反する。体部外面の下半及び内面はヘラ削り調整を施す。口径15.6cm・器高15.2cm前後を測る。

B トレンチ S D04出土遺物(第91図33～35)

S D04は円形にめぐる溝で墓に伴う周溝であると思われる。土器は周溝の北側にやや集中してあったが細片が多く、図示できるものは少なかった。

底部片(33～35)は壺あるいは甕の底部片である。底部は平底で、外面にハケあるいはナデ調整が認められる。

A トレンチ S K09出土遺物(第92図39～44・47)

S K09からは、須恵器杯身・杯蓋・甕が7点出土した。そのうち杯身の上に杯蓋をふせたセットの状態が3組が出土した。

杯身・杯蓋(39～44)は、39と40、41と42、43と44がセットの状態が出土した。杯蓋39・

41・43は天井部と口縁部をわける稜が明瞭で、丸みをもった天井部となる。天井部の回転ヘラケズリは2/3以上と占有率が高い。口縁部は内傾ぎみで口縁端部はわずかに外方につまみ上げ、内側に沈線状の凹みがある。39は口径11.7cm・器高4.3cm、42は口径12.0cm・器高4.5cm、44は口径12.1cm・器高4.7cmを測る。杯身40・42・44はやや丸底ぎみの底部で口縁部は内傾ぎみの長い立ち上がりをもつ。受け部は水平あるいは上方にのびる。口縁端部は上方にわずかにつまみ上げ、内面には沈線状の凹みをもつ。底部のヘラケズリの範囲は2/3以上の範囲におよぶ。40は口径10.2cm・器高5.1cm、42は口径10.1cm・器高4.8cm、44は口径10.0cm・器高4.8cmを測る。

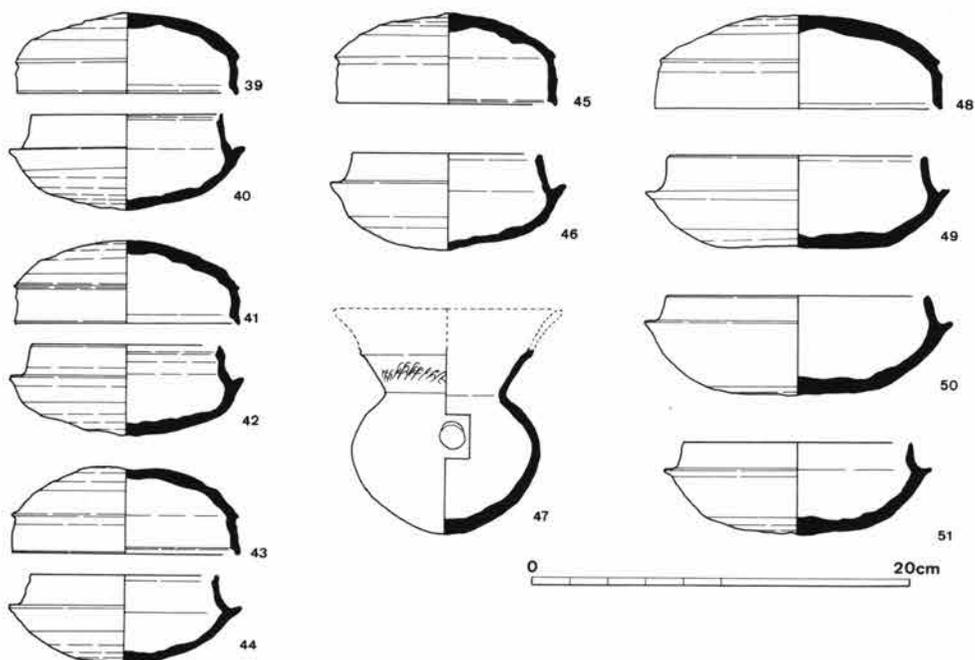
47は、球形の体部で頸部は外反ぎみに立ち上がる。頸部外面には櫛描き波状文を施す。

A トレンチ S K 11 出土遺物(第92図45・46)

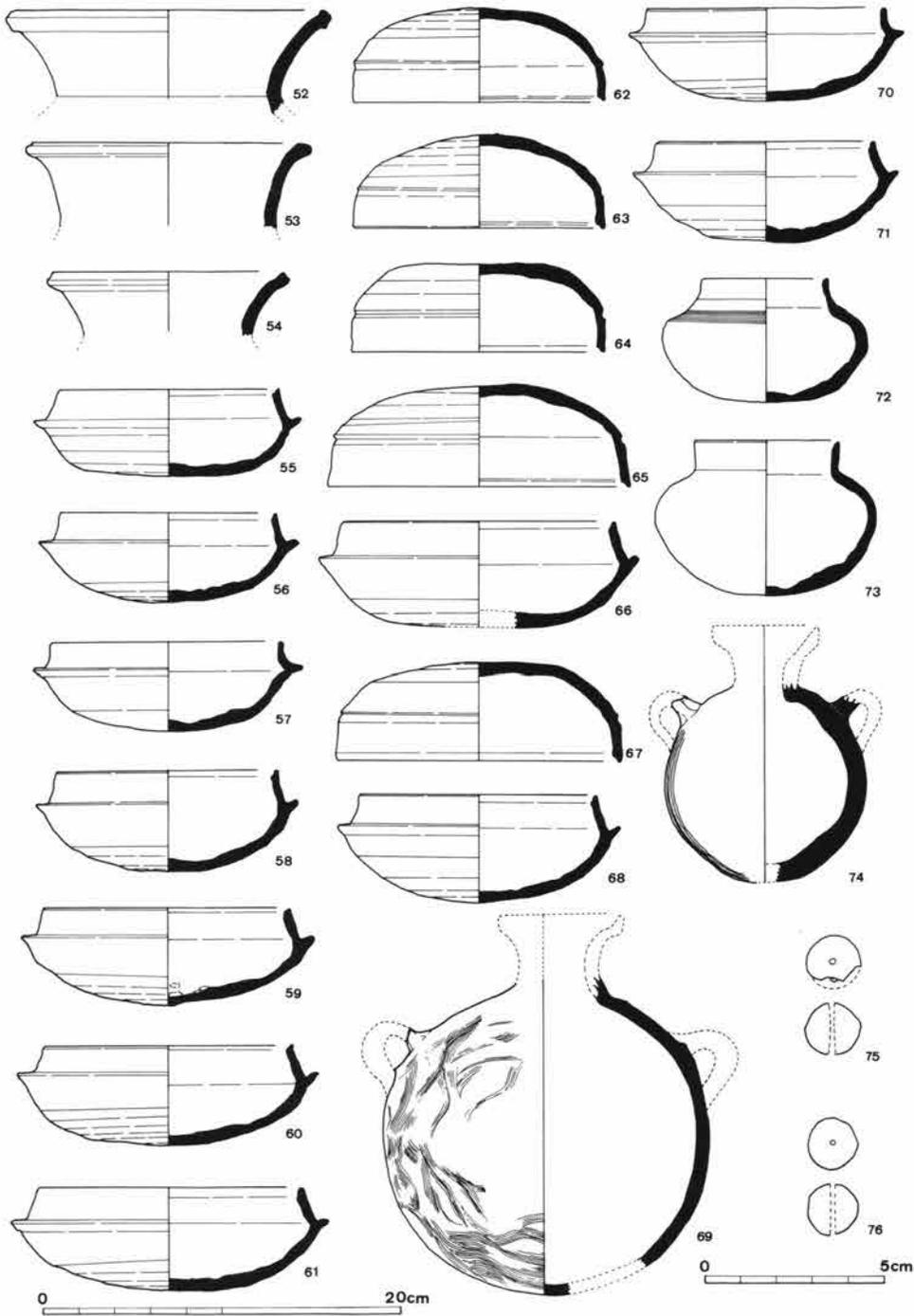
S K 11も S K 09と同様、杯身に杯蓋がかぶった状態で出土した。

杯蓋(45)は水平ぎみの天井部から明瞭な稜をもって口縁部へ続く。口縁部は外方にわずかにつまみだし、沈線状の凹みをもつ。天井部のヘラケズリの範囲は2/3以上と広い。口径11.8cm・器高4.8cmを測る。

杯身(46)は、やや丸みをもった底部で、口縁部は内傾ぎみに長い立ち上がりをもつ。口縁端部は上方にわずかにつまみ上げ、沈線状の凹みをもつ。受け部は上方にのびる。底部



第92図 出土遺物(4)



第93図 出土遺物(5)

のヘラケズリの範囲は2/3近くを占める。口径10.0cm・器高5.1cmを測る。

B トレンチ S K 06 出土遺物(第92図48～51)

S K 06からは須恵器杯身・杯蓋が出土した。

杯蓋(48)は、やや丸みをもった天井部で明瞭な稜をもって口縁部へ続き、口縁端部はわずかにつまみ出している。天井部のヘラケズリの範囲は1/2程度を占める。口径15.3cm・器高5.0cmを測る。

杯身(49～51)は、平らな底部と内傾ぎみに立ち上がる口縁部で、受け部は水平ぎみに短くのびる。底部のヘラケズリの範囲は狭い。49は口径13.9cm・器高4.8cm、50は口径14.0cm・器高5.3cm、51は口径12.3cm・器高4.9cmを測る。

B トレンチ S D 01 出土遺物(第91図30・38、第93図52～76)

S D 01からは、土師器・須恵器・土玉などが出土した。S D 01出土の土器はおおよそ4か所にまとまって出土しており、特に土器溜まり1・2は、S D 01をさらに掘り込んだ土坑状の落ち込みから出土した。

須恵器壺(52～54)は、外反する頸部から口縁端部はわずかに肥厚して面をつくる。52は口径17.2cm、53は口径14.5cm、54は口径13.6cmを測る。

須恵器杯身(55～61・66・68・70・71)は、平底あるいは丸底ぎみの底部から、口縁部は内傾ぎみに立ち上がる。受け部は水平あるいは上方に短くのびる。底部のヘラケズリの範囲は1/2程度と狭い。口径11～15.2cm・器高4.9～5.9cmを測る。

須恵器杯蓋(62～65・67)は、平坦あるいは丸みをもつ天井部から、不明瞭な稜をもって口縁部へ続く。口縁端部は外方につまみ出す。口径12.6～16.8cm・器高3.6～5.6cmを測る。

短頸壺(72・73)は、扁球形の体部で、直立あるいは内傾ぎみに短く立ち上がる。72の肩部外面には櫛状工具によるカキ目がある。72は口径7.0cm・器高6.7cm、73は口径8.0cm・器高8.5cmを測る。

須恵器提瓶(69・74)は、ややふくらみぎみの体部で、頸部は直立ぎみに立ち上がる。口縁部は69・70とも欠損している。69は体部背面にカキ目から退化したような櫛状工具による波状文を不整形方向に描く。肩部には耳の痕跡があり、その形状から環状のものと思われる。側面には一部タタキ目の痕跡がある。74は、小型の提瓶で、体部にはカキ目がある。

土師器小型壺(38)は、球形の体部で、口頸部は外反ぎみに短く立ち上がる。体部内・外面は摩滅により調整不明。38は口径8.8cm・器高10.0cmを測る。

土師器高杯(30)は、中空の柱状部で、柱状部外面には縦方向のヘラミガキ調整を施す。

土玉(75・76)は、直径1.5cm前後を測り、焼成前に直径約1.5mmの円孔が穿たれている。土玉の表面は黒灰色を呈している。

5. ま と め

京都府立木津高校に所在する燈籠寺遺跡の発掘調査も今年度で6回目を迎えた。「はじめに」で、記したように1～5回目の調査が校舎敷地内の南半部を中心に実施し、弥生時代中期の方形周溝墓、古墳時代前期の方形墓などを確認したが、燈籠寺跡の発見の契機となった内田山A1号墳の実態など、北側については、まだ未調査であった。

今回、校舎の改築計画に伴い北側の発掘調査を実施したところ、Aトレンチでは、弥生時代後期の竪穴式住居跡3基と古墳時代中期後半の土壙墓、Bトレンチでは弥生時代後期と古墳時代中期後半の円(あるいは方)形周溝遺構を確認した。

Aトレンチで見つかった3基の竪穴式住居跡は、平面隅丸方形で、床面積は約40㎡前後で3基ともほぼ同規模である。住居跡に伴う排水溝は、北側にあるSH03・SH06が東南方向に、南側にあるSH02は西南方向に掘られている。周辺の地形と考え合わせると、狭い尾根線に沿って南北方向に住居が築かれた可能性が高い。住居跡の立地する尾根部の標高は約51mで、南側の平野部の標高約32mとの比高差約19mであり、また木津川を見下ろす位置にあることから、高地性集落として位置づけすることができる遺跡である。平成5年に発掘調査された白口遺跡^(注7)も、燈籠寺遺跡の竪穴式住居跡とほぼ同時期の竪穴式住居跡が1基見つかっており、燈籠寺遺跡とよく似た性格の遺跡と思われる。

Aトレンチで見つかった古墳時代中期後半の土壙墓SK09・SK11は、須恵器杯身・杯蓋がセットで数個出土しており、墓に伴って須恵器を埋葬した可能性が高い。ただSK09・SK11とも遺構検出面が表土直下であり、かつ周辺を含め旧校舎あるいはそれ以前からの攪乱により遺構の遺存状態は非常に悪く、単独の土壙墓であるのか、あるいは周辺に周溝をめぐるしたものであるかは、明らかでないが、単独の土壙墓である可能性が高い。Aトレンチは昭和32年(1958年)の農場造成中に須恵器杯・杯蓋7個体と円筒埴輪が見つかった内田山A1号墳に近接あるいは重複する位置にある^(注8)。内田山A1号墳は遺物の発見以外、古墳の規模等について、その実態が明らかでない古墳であるが、内田山A1号墳も今回調査したSK09・SK11と同様、須恵器を伴った土壙墓である可能性も高い。SK09・SK11から出土した須恵器杯身は口縁部が長く立ち上がり、口縁部に内傾凹面をつくり、杯蓋は天井部が平坦で、ケズリの範囲も広いことから、田辺編年の^(注9)陶器TK216～208型式に相当し、内田山A1号墳出土の須恵器(TK23型式)より若干古くなるものと思われる。

Bトレンチは、トレンチの東半部で調査前から地山土が露出しており、トレンチの西半部を中心に調査を実施した。トレンチ西半分もAトレンチと同様、遺構の遺存状態はよくなかったが、方あるいは円形周溝状遺構2基と土壙墓1基を検出した。BトレンチSD01はとぎれながらも溝が円形にめぐり、溝内から溝をさらに掘り凹めた形で土坑状の落ち込

みを検出した。この土坑状の落ち込みからは須恵器・土師器などが出土し、その形態から円墳に伴う周溝の可能性が高い。S D01は南側で一部周溝を掘り残しており、陸橋部をもったものと思われる。周溝内の土器溜まりから出土する須恵器はAトレンチS K09・11より若干新しい型式の須恵器で、内田山A 1号墳(T K23型式)とほぼ同時期で、若干新しい型式の須恵器も含まれている。

BトレンチS D04も須恵器杯身などを含むが、S D04の北側周溝の底部近くから、弥生時代後期の壺あるいは甕の底部片が数点出土しており、弥生時代後期の円形周溝状遺構の可能性が高い。

今回、燈籠寺遺跡の北側を調査することにより、弥生時代後期の集落が遺跡の北側に広がり、また、古墳時代中期には、墓域が北側に広がったことが明らかとなった。

C～Fトレンチは、造成工事によってすでに遺構面が消失しているが、Gトレンチでは、弥生時代の土器を含む溝(S D01)・土坑(S K01)を検出した。このトレンチは、東側のグラウンドと西側の校舎群にはさまれた堤状に残る敷地(旧管理棟)の一角にあたることから、この堤状の高まりを呈する敷地内には造成時の削平を免れた遺構面が残存していると考えられる。今後の調査によってGトレンチでの関連遺構が検出されれば、燈籠寺遺跡の年代・性格がさらにくわしく明らかになるであろう。

(石井清司・小池 寛)

注1 大槻真純「内田山古墳発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第4冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1982

注2 戸原和人他「燈籠寺遺跡第2次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第16冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1985

注3 戸原和人他「燈籠寺遺跡第3次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第20冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1986

注4 黒坪一樹「燈籠寺遺跡第4次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第43冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1991

注5 竹井治雄「燈籠寺遺跡第5次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第48冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1991

注6 調査参加者(順不同・敬称略)

岩本 貴・五百磐頭一・平井千香子・森 光重・塚田 力・林 恵子・西村香代子・林 益美・有馬三喜子・鈴木みかる

注7 「白口遺跡現地説明会資料」 木津町教育委員会 1992

注8 平良泰久『木津町史』史料篇I 木津町史編さん委員会 1984

注9 田辺昭三「陶邑古窯址群I」(『研究論集』第10号 平安学園考古学クラブ) 1966

7. 丹後あじわいの郷関係遺跡 平成4年度発掘調査概要

1. はじめに

丹後半島では、広大な面積の国営農地造成工事が進行中である。京都府農林水産部園芸経済課は、この国営農地で生産された農産物の集荷・出荷場として、また体験型観光農業の提供など、生産から出荷・販売にいたって一元的に行う施設「丹後あじわいの郷」を、京都府竹野郡弥栄町字鳥取・木橋に計画した。予定地は、公園区域約37haと観光農園区域約63haからなる約100haの広大な面積である。

調査地は、古代製鉄遺跡として脚光を浴びた遠所遺跡群の東隣りにあたり、京都府教育委員会と弥栄町教育委員会が実施した分布調査によると丘陵尾根筋に約91基の古墳と、谷部からは土器片の散布を確認している。また、丘陵裾部で鉄滓や炭の堆積が露出しているか所もあり、その付近には製鉄炉や炭窯など製鉄関連遺構の存在が考えられ、遠所遺跡群と同じく製鉄遺跡であると想定された。この成果については、「分布調査の成果について」の項で後述する。

予定地は、大小さまざまな谷部と低丘陵部からなる。今年度は、予定地内を斜めにのびる谷地形一筋(ニゴレ遺跡)と13基の古墳状隆起(桐谷古墳群)の試掘及び本調査の依頼を受け、平成4年9月24日から平成5年2月26日まで実施した。しかし、谷部の試掘の状況から、丘陵斜面の試掘調査も必要となったため、数回にわたって協議を行った結果、谷部西側に限ってのみ実施することとなった。また、遺構が集中すると思われたところについては、一部拡張することによって遺構の密度を調べることにした。なお、拡張区内で検出した遺構の調査は、来年度に行うこととなった。調査面積は、7,300㎡となった。

上述したように、「丹後あじわいの郷」の計画地は、極めて広大な面積であるとともに、国営農地造成地に隣接している。したがって、国営農地の発掘調査の経験を生かし、たとえば山を切り開くことによって保水力が保てるかなど、山裾での営農に支障が出ないように配慮した。原因者において、地元調整を行っていただいた結果に基づき、調査は稲の収穫を待つて行うとともに、今回の調査範囲の谷部の端に原因者において堰堤を築いていただいている。今回は谷部と丘陵斜面の試掘調査と古墳2基の発掘調査の成果を報告し、検出した製鉄関連遺構の一部を紹介して、平成4年度の調査概要としたい。

現地調査は、当調査研究センター調査第2課調査第1係長伊野近富、同主任調査員増田孝彦、同調査員岡崎研一・田代 弘が担当し、概報執筆は岡崎研一が担当した。

調査を行うにあたっては、各区長やあじわいの郷推進委員をはじめ地元の方々には快く承諾していただき、調査期間中は、地元有志の方々には作業員・整理員として調査に従事していただいた。^(注1)また、調査にあたっては、京都府教育委員会、弥栄町教育委員会など関係諸機関のご協力をえた。ここに記してあらためて感謝の意を表したい。

なお、調査に係る経費は、全額京都府農林水産部が負担した。

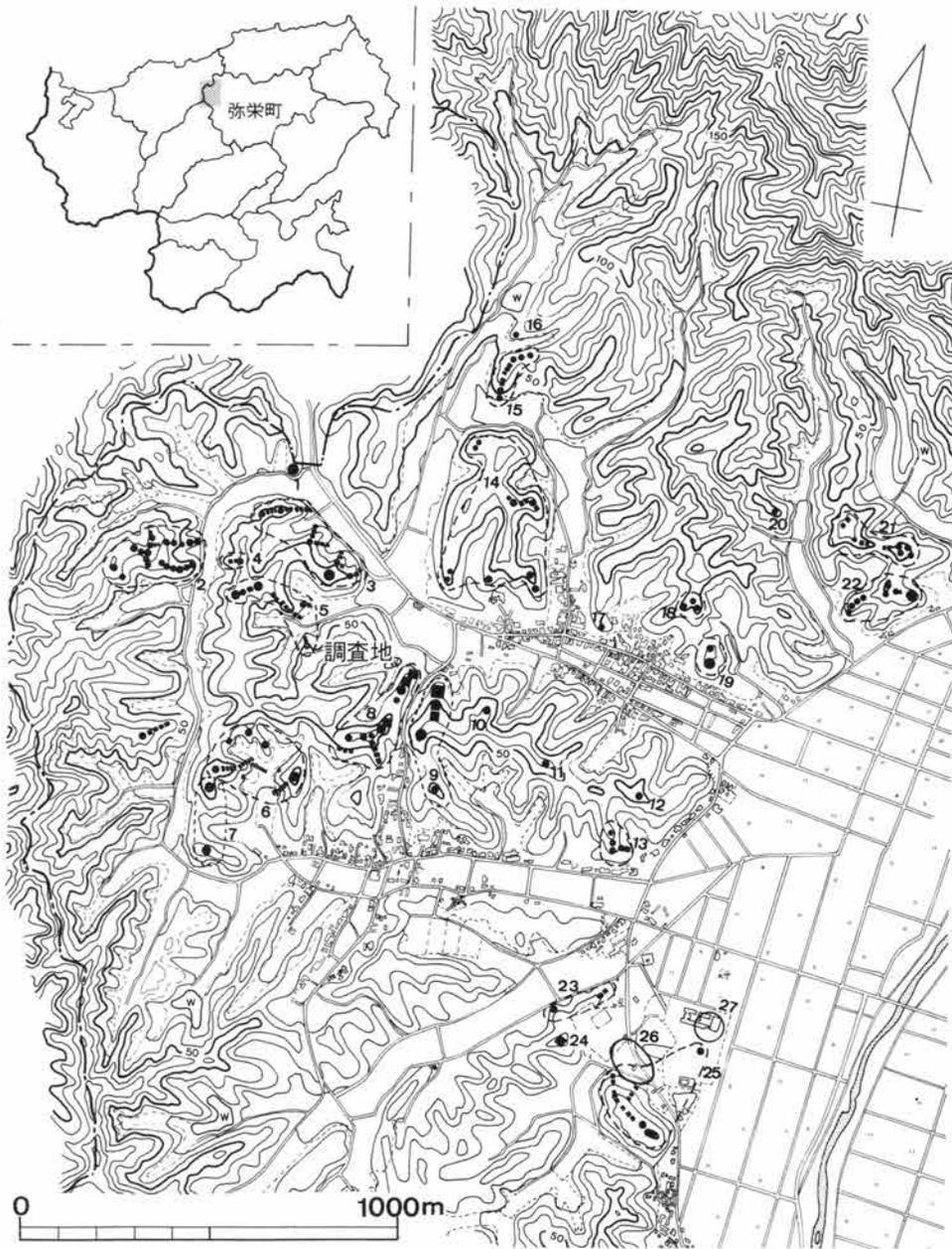
2. 位置と周辺の遺跡

弥栄町は、京都府北部の日本海に突き出した丹後半島の中央に位置する。半島を縦断し丹後最大の河川である竹野川が北流する。竹野川はいくつもの沖積地を形成しながら日本海に注ぐ。弥栄町は、その中流域にあり、最大幅約1.5km・長さ6kmの南北に長い沖積地と入り混む低丘陵地からなる。弥栄町の中心地である字溝谷は、この沖積地のほぼ中央に位置する。現在の幹線道路も北流する竹野川沿いにあり、峰山町から弥栄町の中心地付近を抜けて丹後町へと通じる。弥栄町でさらに低丘陵地を縫うようにして、東方と西方に分岐する道がある。東方に行くと大宮町・岩滝町に通じ、西方に曲がると網野町・久美浜町に通じる。今回の調査地は、弥栄町から西方に入った網野町との町境付近にあたり、府道網野・岩滝線に面している。近くには、5世紀中頃に築造されたニゴレ古墳や古墳時代から奈良時代にかけての製鉄遺跡である遠所遺跡群などがある。

「丹後あじわいの郷」予定地内には、丘陵端や尾根筋に周知の遺跡である鳥取古墳群・奥ノ院古墳群や各丘陵間の低地部から斜面にかけてのニゴレ遺跡などが存在する。

ここでは、これらの遺跡と関連すると思われる遺跡を取り上げて周辺の遺跡とする。

調査地北西隣りには、5世紀中頃に築造され、かつて日本海域に威をふるった海の豪族の系譜をひく者を葬ったと考えられているニゴレ古墳^(注2)がある。調査地北側には、4世紀後半から5世紀前半の木棺直葬墳と7世紀初頭の横穴式石室の計10基からなるゲンギョウの山古墳群^(注3)、4世紀後半から5世紀前半と6世紀前半の木棺直葬墳計13基からなる宮の森古墳群^(注4)がある。調査地西側には5世紀末から6世紀中頃にかけて築造された計22基からなる遠所古墳群^(注5)がある。調査地南側の木橋には5世紀前半から中頃に築造されたオテジ谷古墳^(注6)がある。また、古墳以外では調査地西隣りに広がる遠所遺跡群^(注7)がある。この遺跡は、6世紀後半と8世紀後半に操業していた製鉄遺跡であり、6世紀後半の製鉄炉の発見は、日本最古級であった。また、遺跡群内に5世紀末ないし6世紀初頭に炉に供給していたと思われる炭窯の発見は、製鉄開始時期がこの時期にまで遡る可能性があり、注目されていると



第94図 調査地位置図及び周辺遺跡分布図

- | | | | | |
|----------------|------------|------------|------------|----------|
| 1. ニゴレ古墳 | 2. 遠所遺跡群 | 3. 鳥取古墳群 | 4. 入道奥古墳群 | 5. 桐谷古墳群 |
| 6. 行者山古墳群 | 7. 奥ノ院古墳群 | 8. 鳥取峠古墳群 | 9. 谷奥古墳群 | 10. 黒国古墳 |
| 11. 留主田古墳 | 12. 赤井谷古墳 | 13. 堤谷古墳群 | 14. 宮の森古墳群 | |
| 15. ゲンギョウの山古墳群 | 16. 石穴古墳 | 17. 御殿口古墓 | | |
| 18. 鳥取愛宕山古墳群 | 19. 大將軍古墳群 | 20. 中山古墳 | 21. 小宮谷古墳群 | |
| 22. 桑田古墳群 | 23. 高岸古墳群 | 24. オテジ谷古墳 | 25. 坂野古墳群 | 26. 坂野遺跡 |
| 27. 坂野丘遺跡 | 28. 足洗古墳 | 29. 遠所遺跡群 | | |

ころである。いずれにせよ、遠所遺跡群には7世紀代と9世紀以降に関しては白紙の状態
で、付近にこの時期の製鉄遺跡の存在が考えられてきた。このようなことから、「丹後あ
じわいの郷」予定地内で分布調査時に採取された鉄滓・炭は、このいずれかの時期に該当
するものと考えられた。

(1) 分布調査の成果について

今年度から発掘調査を行うに先立ち、京都府教育委員会と弥栄町教育委員会が実施した
分布調査の成果を記す。

「丹後あじわいの郷」建設予定地には、すでに15基からなる鳥取古墳群が所在するが、
「丹後あじわいの郷」建設計画が具体化したため、周知の古墳の確認を行うとともに、新
たな遺跡の有無を調べることを目的として踏査を実施した。その結果、以下のことがわか
った。

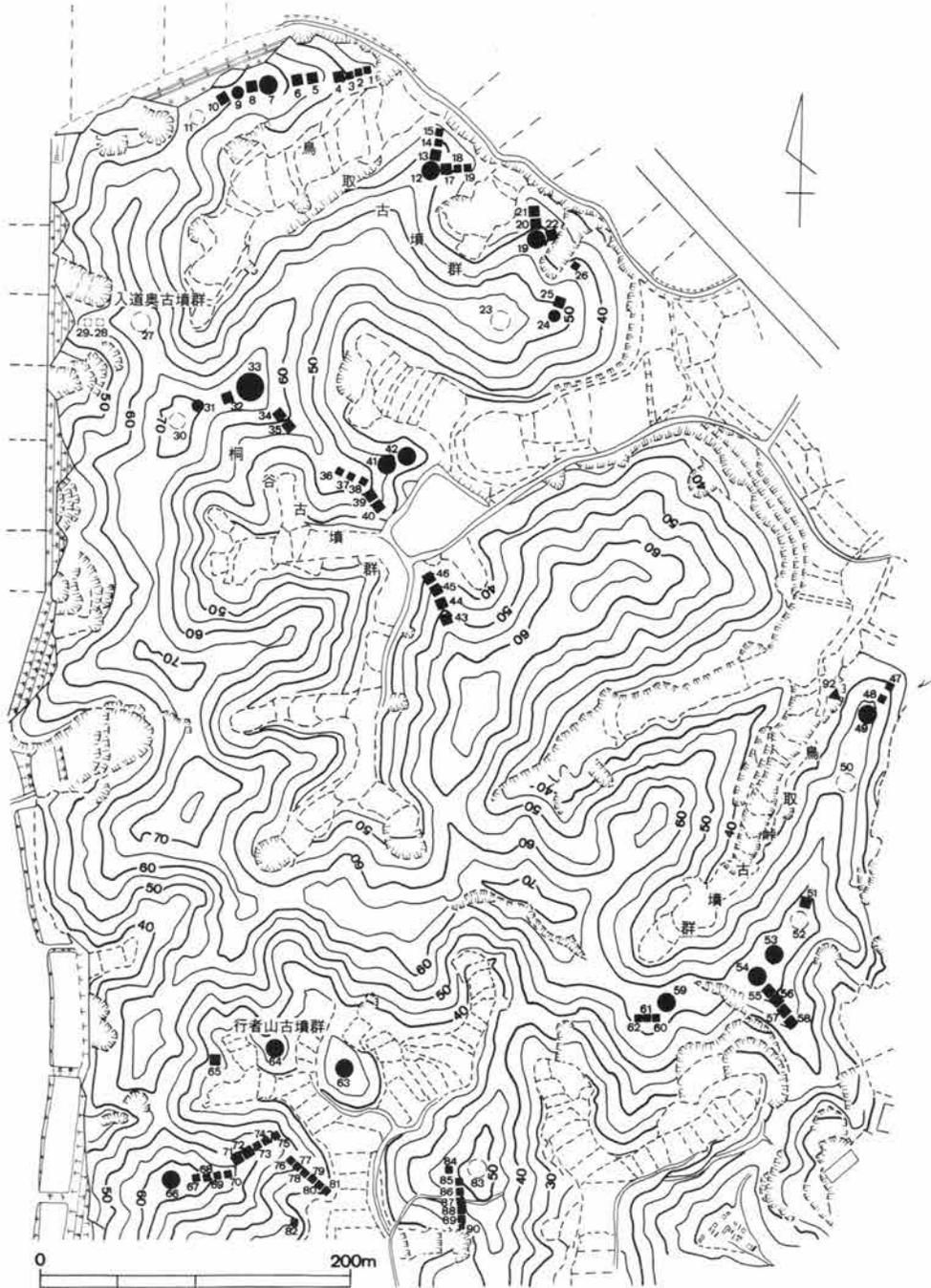
①古墳 周知の鳥取古墳群15基を含め91地点を確認した。形状の明確なものは、直径10
～12m・高さ1.5～2mの円墳であり、丘陵切断・盛り土が顕著であるが、その他の多くの
ものは、低丘陵の稜線を階段状に成形して墓としている。奥の院2号墳では、石室石材と
も考えられる石が認められるが、それ以外の古墳の主体部は、木棺直葬の可能性が高い。

なお、地点としては91か所を数えるが、これらの中には古墳状を呈するものの自然地形
の可能性が残るもの、人為的な改変を受けているが古墳である条件を満たしきれていない
ものなど、試掘結果により判定しなければならない地点も包括している。また、逆に発掘
調査の進展の結果、周辺から新たな古墳が発見される場合も考えられる。

②集落・窯跡など 今回の踏査においては、地面を直接観察できる部分が少なく、遺跡
内容を判断できる遺物などは限られた。92地点は、丘陵斜面に掘り込まれた穴で、炭灰を
多く含んだ土で埋まっており、そこから鉄滓が採集できた。

対象地の谷部は、西隣りで発掘調査が進められてきた遠所遺跡群(国営農地鴨谷団地)の
状況や、92地点から考えて、遺構の遺存状況は不明ながら古代の製鉄関連遺跡や集落跡の
立地する可能性が極めて高い。

③遺跡名 以上のような踏査成果から、新たな遺跡を確認することができた。このこと
から、鳥取古墳群をはじめとする周知の遺跡についても再検討し、付表5・第95図のよう
に遺跡名とその範囲を改めることとした。ただし、古墳については、今後の試掘調査によ
って明確に古墳とわかるものについてのみ、そのつど番号を付けることにする。



第95図 「丹後あじわいの郷」造成予定地内遺跡分布図

付表5 「丹後あじわいの郷」造成予定地内遺跡一覧表

地点	名称	種類	所在地		遺跡の概要	備考
			大字	小字		
1	鳥取古墳群	方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵端、一辺6m	1号墳に対応
2	鳥取古墳群	方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜、一辺4~10m	
3	鳥取古墳群	方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜、一辺4~10m	
4	鳥取古墳群	方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜、一辺4.5m、高さ1.5m	2号墳に対応
5	鳥取古墳群	方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜、一辺8.5m、高さ1.5m	3号墳に対応
6	鳥取古墳群	方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜、一辺4~10m	
7	鳥取古墳群	円墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜、径9m、高さ1.5m	4号墳に対応
8	鳥取古墳群	方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜、一辺4m、高さ0.3m	5号墳に対応
9	鳥取古墳群	円墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜、径2m、高さ0.3m	6号墳に対応
10	鳥取古墳群	方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜、一辺6~8m	
11	鳥取古墳群	円墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜、径12m	古墳状隆起か
12	鳥取古墳群	円墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜、径13m、高さ2m	7号墳に対応
13	鳥取古墳群	方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜、一辺4~8m	
14	鳥取古墳群	方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜、一辺4~8m	
15	鳥取古墳群	方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜、一辺4~8m	
16	鳥取古墳群	方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜、一辺4~8m	
17	鳥取古墳群	方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜、一辺4~8m	
18	鳥取古墳群	方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜、一辺4~8m	
19	鳥取古墳群	円墳	鳥取	ニゴレ	丘陵端、径8.6m、高さ1.8m	10号墳に対応
20	鳥取古墳群	円墳	鳥取	ニゴレ	丘陵端、径9.5m、高さ1.5m	9号墳に対応
21	鳥取古墳群	方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵端、一辺5.5m、高さ1.8m	8号墳に対応
22	鳥取古墳群	円墳	鳥取	ニゴレ	丘陵端、径8.5m、高さ2m	11号墳に対応
23	鳥取古墳群	円墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜、径20m	古墳状隆起か
24	鳥取古墳群	円墳	鳥取	ニゴレ	丘陵端、径10.8m、高さ2.3m	13号墳に対応
25	鳥取古墳群	方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵端、一辺9.8m、高さ1.5m	12号墳に対応
26	鳥取古墳群	方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵端、一辺5~7m	
27	入道奥古墳群	円墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜、径10m	古墳状隆起か
28	入道奥古墳群	方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜、一辺7m	古墳状隆起か
29	入道奥古墳群	方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜、一辺7m	古墳状隆起か
30	桐谷古墳群	円墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜、径12m	古墳状隆起か
31	桐谷古墳群	円墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜、径8m	
32	桐谷古墳群	方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜、一辺7m	残丘?
33	桐谷古墳群	円墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜、径18m	
34	桐谷古墳群	方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜、一辺3~8m	試掘調査実施
35	桐谷古墳群	方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜、一辺3~8m	試掘調査実施
36	桐谷古墳群	方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜、一辺3~8m	試掘調査実施
37	桐谷古墳群	方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜、一辺3~8m	試掘調査実施
38	桐谷古墳群	方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜、一辺3~8m	試掘調査実施
39	桐谷古墳群	方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜、一辺3~8m	試掘調査実施
40	桐谷古墳群	方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜、一辺3~8m	試掘調査実施
41	桐谷古墳群	方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜、一辺5m、高さ1.5m	鳥取15号墳に対応、調査了
42	桐谷古墳群	方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜、一辺8m、高さ2.5m	鳥取14号墳に対応、調査了
43	桐谷古墳群	方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜、一辺2~5m	試掘調査実施
44	桐谷古墳群	方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜、一辺2~5m	試掘調査実施

丹後あじわいの郷関係遺跡平成4年度発掘調査概要

45	桐谷古墳群	方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜、一辺2～5m	試掘調査実施
46	桐谷古墳群	方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜、一辺2～5m	試掘調査実施
47	鳥取峠古墳群	方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜、一辺3～6m	
48	鳥取峠古墳群	方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜、一辺3～6m	
49	鳥取峠古墳群	円墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜、径10m	
50	鳥取峠古墳群	円墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜、径8m	古墳状隆起
51	鳥取峠古墳群	方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜、一辺6m	
52	鳥取峠古墳群	円墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜、径10m	古墳状隆起か？
53	鳥取峠古墳群	円墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜、径8m	
54	鳥取峠古墳群	円墳	木橋	谷奥	丘陵稜、径12m	
55	鳥取峠古墳群	方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜、一辺2～5m	残丘か？
56	鳥取峠古墳群	方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜、一辺2～5m	
57	鳥取峠古墳群	方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜、一辺2～5m	
58	鳥取峠古墳群	方墳	鳥取	ニゴレ	丘陵稜、一辺2～5m	
59	鳥取峠古墳群	円墳	木橋	権谷	丘陵稜、径10m	
60	鳥取峠古墳群	墓地	木橋	権谷	丘陵稜、一辺5m	寛文～明治年間の墓あり。
61	鳥取峠古墳群	墓地	木橋	権谷	丘陵稜、一辺5m	寛文～明治年間の墓あり。
62	鳥取峠古墳群	墓地	木橋	権谷	丘陵稜、一辺5m	寛文～明治年間の墓あり。
63	行者山古墳群	円墳	木橋	西谷	丘陵稜、径12m	
64	行者山古墳群	円墳	木橋	西谷	丘陵稜、径10m	背後の切り離し不明確。
65	行者山古墳群	方墳	木橋	西谷	丘陵稜、10m×5m	同一稜線背後要注意
66	行者山古墳群	円墳	木橋	西谷	丘陵稜、径10m	送電線下、古墳状隆起か？
67	行者山古墳群	方墳	木橋	西谷	丘陵稜、一辺2～8m	小規模な階段状地形
68	行者山古墳群	方墳	木橋	西谷	丘陵稜、一辺2～8m	小規模な階段状地形
69	行者山古墳群	方墳	木橋	西谷	丘陵稜、一辺2～8m	小規模な階段状地形
70	行者山古墳群	方墳	木橋	西谷	丘陵稜、一辺2～8m	小規模な階段状地形
71	行者山古墳群	方墳	木橋	西谷	丘陵稜、一辺2～8m	小規模な階段状地形
72	行者山古墳群	方墳	木橋	西谷	丘陵稜、一辺2～8m	小規模な階段状地形
73	行者山古墳群	方墳	木橋	西谷	丘陵稜、一辺2～8m	小規模な階段状地形
74	行者山古墳群	方墳	木橋	西谷	丘陵稜、一辺2～8m	小規模な階段状地形
75	行者山古墳群	方墳	木橋	西谷	丘陵稜、一辺2～8m	小規模な階段状地形
76	行者山古墳群	方墳	木橋	西谷	丘陵稜、一辺2～8m	小規模な階段状地形
77	行者山古墳群	方墳	木橋	西谷	丘陵稜、一辺2～8m	小規模な階段状地形
78	行者山古墳群	方墳	木橋	西谷	丘陵稜、一辺2～8m	小規模な階段状地形
79	行者山古墳群	方墳	木橋	西谷	丘陵稜、一辺2～8m	小規模な階段状地形
80	行者山古墳群	方墳	木橋	西谷	丘陵稜、一辺2～8m	小規模な階段状地形
81	行者山古墳群	方墳	木橋	西谷	丘陵稜、一辺2～8m	小規模な階段状地形
82	行者山古墳群	方墳	木橋	西谷	丘陵稜、一辺2～8m	小規模な階段状地形
83	行者山古墳群	円墳	木橋	西谷	丘陵稜、径10m	古墳状隆起
84	行者山古墳群	方墳	木橋	西谷	丘陵稜、一辺2～6m	小規模な階段状地形
85	行者山古墳群	方墳	木橋	西谷	丘陵稜、一辺2～6m	小規模な階段状地形
86	行者山古墳群	方墳	木橋	西谷	丘陵稜、一辺2～6m	小規模な階段状地形
87	行者山古墳群	方墳	木橋	西谷	丘陵稜、一辺2～6m	小規模な階段状地形
88	行者山古墳群	方墳	木橋	西谷	丘陵稜、一辺2～6m	小規模な階段状地形
89	行者山古墳群	方墳	木橋	西谷	丘陵稜、一辺2～6m	小規模な階段状地形
90	行者山古墳群	方墳	木橋	西谷	丘陵稜、一辺2～6m	小規模な階段状地形
91	奥ノ院2号墳	円墳	木橋	宮内	丘陵頂、横穴式石室、石材露出	墳頂部に社殿あり。
92	ニゴレI地区	製鉄	鳥取	ニゴレ	丘陵裾、鉄滓露出	

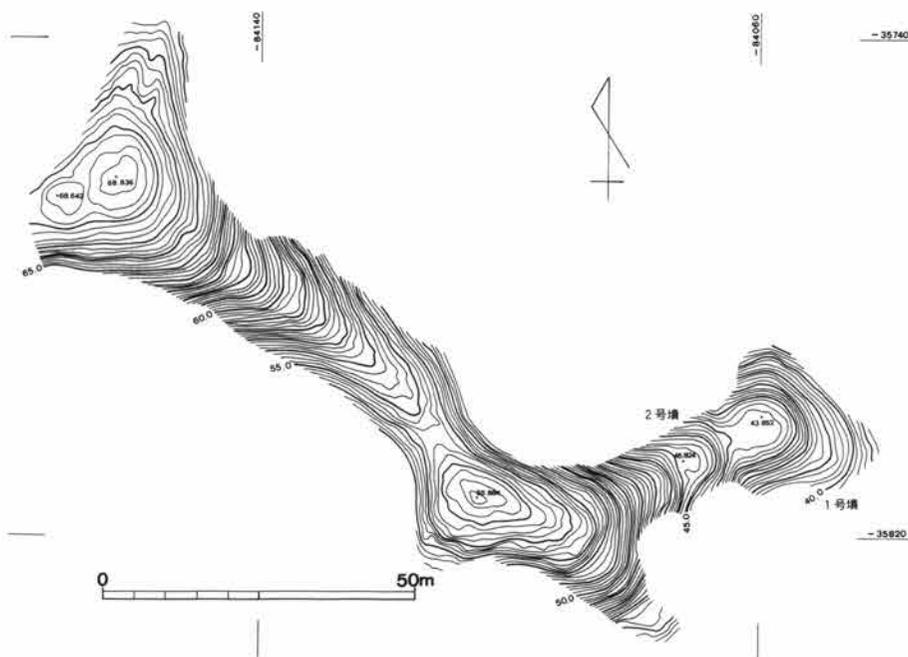
(2) 桐谷古墳群

①調査の概要

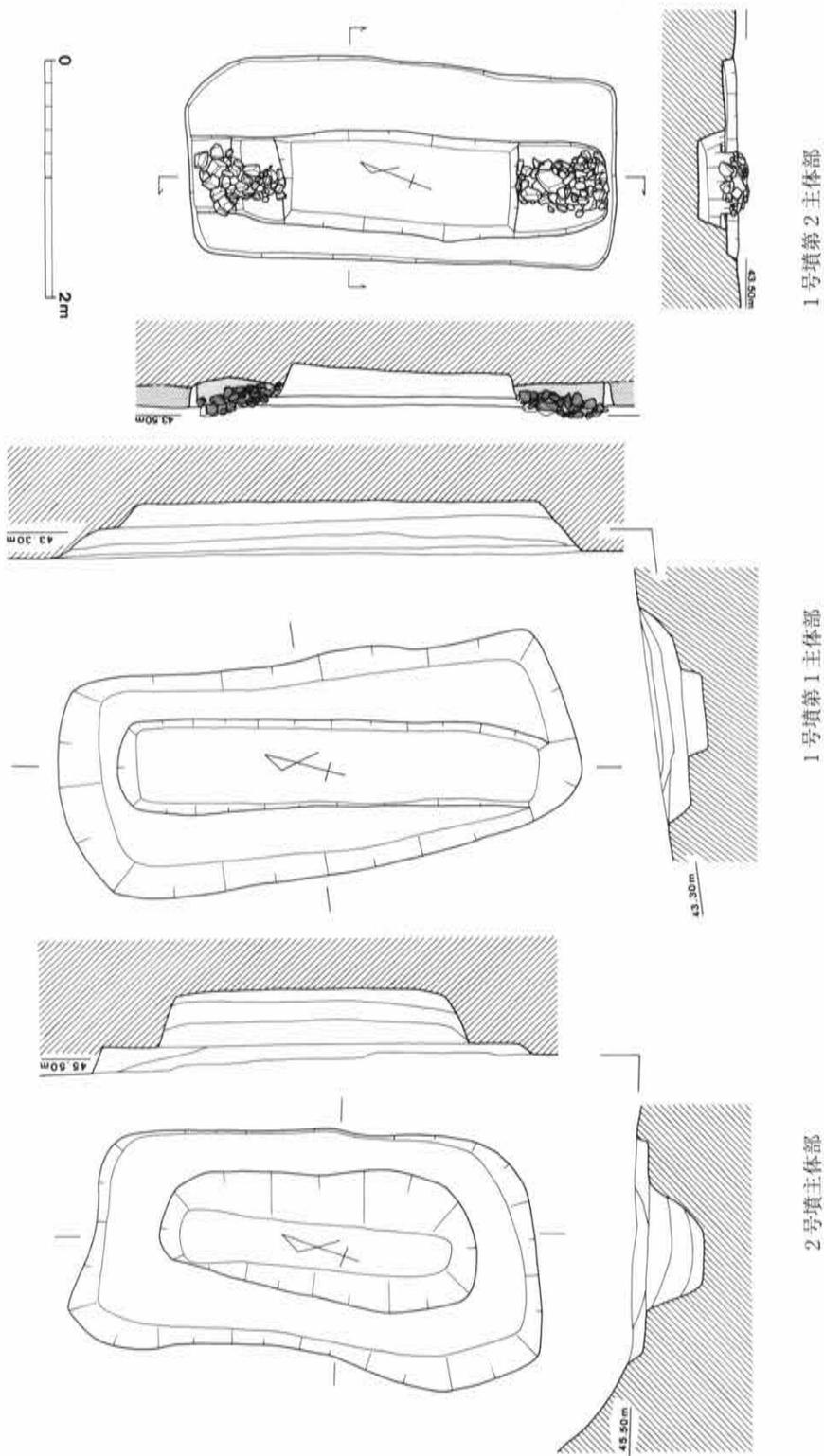
桐谷古墳群は、鳥取古墳群南側の尾根筋にのびる古墳群である。京都府教育委員会と弥栄町教育委員会が実施した分布調査によって、確認された古墳群である。17地点の古墳状隆起からなる桐谷古墳群は、丘陵先端の2基が鳥取14・15号墳として、『京都府遺跡地図』に登録されており、周知の遺跡である。^(註8)両遺跡の分布状況の結果、鳥取古墳群は計13基となり、桐谷古墳群は計17地点に改めることとなった。この内、今回の造成にかかる桐谷古墳群11地点の試掘調査と旧遺跡名称である鳥取14・15号墳の、計13か所の発掘・試掘調査を行った。調査を行うにあたって、鳥取14号墳を桐谷1号墳、鳥取15号墳を桐谷2号墳と命名して実施した。古墳の調査の最終段階において、積雪など悪天候が続いたため、いくつかの実測を残している。これらについては、来年度に補足したい。

a. 桐谷1号墳

墳丘 『京都府遺跡地図』には、方墳として登録されていたが、伐採を行った結果、やや不定形な円墳と思われる。発掘調査を行ったところ、径約15mの円墳で、高さは約2mを測った。



第96図 桐谷古墳群地形測量図



第97図 桐谷1・2号墳主体部実測図

主体部 墳丘ほぼ中央から、おおよそ南北方向の主体部1基(第1主体部)と、その東側から並行して築かれた主体部1基(第2主体部)を確認した。

〈第1主体部〉 この主体部は、1段目で長辺約4.2m・短辺約1.8mで、2段目では長辺約3.6m・短辺約70cmを測る二段墓壙であった。掘形の状況から、木棺直葬であったと考えられる。主体部からの遺物はなく、時期については不明である。しかし、墳丘の盛り土の断面観察及び主体部の位置などから、この古墳の築造時期と一致するものと思われる。

〈第2主体部〉 この主体部は、第1主体部と並行して築かれている。第1主体部との違いは、小口部を拳大の石でもって棺板を支えているところである。規模は、1段目で長辺約3.5m・短辺約1.7mで、2段目では長辺約3.4m・短辺約80cmを測る。小口石は、おおよそ50cm×70cmの範囲に積まれていた。棺の痕跡は、検出できなかった。掘形底部が平坦であることから、組合式木棺と推定した。しかし、主体部からの出土遺物はなく、時期は不明であるが、断面観察などから第1主体部より後に築かれたものであった。

b. 桐谷2号墳

墳丘 『京都府遺跡地図』には、方墳として登録されていたが、伐採を行った結果、やや不定形な円墳と思われた。発掘調査を行ったところ、径約10m、高さは約2mを測る円墳であることがわかった。

主体部 墳丘の丘陵側から、南北方向の主体部1基を検出した。主体部は、基本的には2段掘りと思われたが、1段目は非常に浅く、素掘りの墓壙に近い状態のものであった。掘形も不成形で、その規模は、長辺約3.7m・短辺約1.9mを測る。主体部からの遺物はなく、時期については不明である。しかし、調査を進めている際に、表土下より奈良時代中頃の杯身及び土器片が流れ込みの状態出土した。このことは、奈良時代中頃に古墳周辺で何らかの活動がなされていたと考えられ、その際に墳丘を削平している可能性もある。

c. 古墳状隆起の試掘調査

古墳状隆起の場所は、1・2号墳から北西にのびる丘陵尾根筋上に7か所(34~40地点)と、谷を挟んだ向かい側の丘陵尾根筋上に4か所(43~46地点)である。

尾根筋上とこれに直交するトレンチを設定し掘削したが、いずれも自然地形であり、古墳でないことがわかった。調査時に遺物は出土していない。

②まとめ

11か所の試掘調査と2基の発掘調査を行ったが、2基のみ古墳であることがわかった。いずれも出土遺物はなく、築造時期については不明である。周辺の遺跡であるゲンギョウの山古墳群や宮の森古墳群で見つかっている木棺直葬墳と同じ時代に築造されたと思われる

るが、その時期幅も広く、断定することはできない。谷を入った低丘陵先端に築かれた桐谷1・2号墳は、三方を山に囲まれ唯一府道網野岩滝線沿いの土器散布地付近を望むことができる。これは、調査した古墳の被葬者と関連する遺構がこの辺りに存在すると考えられる。

(3) ニゴレ遺跡

①調査の概要

調査前の分布調査によって、「丹後あじわいの郷」造成予定地北側で府道網野岩滝線までの田畑部、東西約450m・南北約200mの広範囲にわたって土器片の散布を確認している。時期を決定できるものは採取していないが、これらは古代のある時期の遺構がこの付近にあったことを示している。また、南西方向にのびる谷部からの流れ込みとも考えられることから、調査地北側の田畑部及び谷部、また谷に隣接する丘陵斜面・裾部を含めて、ニゴレ遺跡と称することとなった。ニゴレ遺跡については、分布調査の成果でも触れたように、丘陵裾部から鉄滓・炭を確認しているか所があり製鉄炉があるものと考えられることから、製鉄関連の遺構が入り込んだ谷筋にあるものと考えられている。

「丹後あじわいの郷」建設予定地には、大小の谷が5筋縦横している。字鳥取側からは大きな谷が2筋と小さな谷が1筋、南西方向にのびる。反対の字木橋側には小さな谷が2筋北方にのびる。今回の調査は、予定地中央を鳥取側から南西方向にのびる谷部の試掘調査を行った。調査を行うにあたって、谷筋ごとに地区名を設定することにした。鳥取側の3筋の谷筋の内、鳥取の集落寄りからⅠ地区・Ⅱ地区とし、その他は調査を行う順に付すこととした。分布調査時に確認した鉄滓の散布している谷筋をⅠ地区、今回試掘調査を行った谷筋はⅡ地区となる。

調査は、造成時に切り土・盛り土される範囲を、丘陵裾部から谷部にかけて、できるかぎり直行するように、重機掘削した(第98図)。85か所に試掘を入れたところ、いくつかの成果をえることができた。付表6は、各試掘トレンチの詳細であるが、ここでは各トレンチの試掘成果をもとに、谷全体の概要を記すこととする。

谷の口部に遺構が集中しているようで、流れ込みの遺物が、谷部の地表下約2mから多量に出土した。土器の摩滅具合から、すぐ近くからの流れ込みと考えられた。試掘は、丘陵裾部まで入れたにもかかわらず、微高地状の地形はないことや、遠所遺跡群や奈具岡遺跡など最近の調査例などから、丘陵斜面に住居跡や炭窯などの遺構があるものと考えられ



第98図 試掘トレンチ・拡張区配置図

付表6 試掘成果一覧表

トレンチ	検出遺構	出土遺物・掘削状況	T37	炭窯・住居跡	須恵器・土師器多量 炭混入 (調査範囲拡張・A拡張区)
T1	自然流路跡	土師器2点			
T2	自然流路跡	土師器少量・炭混入			
T3	自然流路跡	土師器少量・炭混入	T38	炭窯・柱穴	土師器少量・炭混入 (調査範囲拡張・A拡張区)
T4	自然流路跡	土師器(布留)多量 弥生土器(後期)少量 炭混入	T39	なし	炭混入
T5	自然流路跡	土師器(布留)多量 弥生土器(後期)少量 炭混入	T40	炭窯・柱穴	炭混入 (調査範囲拡張・A拡張区)
T6	自然流路跡	土師器(布留)多量 弥生土器(後期)少量 炭混入	T41	柱穴	炭混入
T7	自然流路跡	土師器少量	T42	なし	なし
T8	自然流路跡	木製品1点	T43	なし	なし
T9	なし	なし	T44	なし	なし
T10	自然流路跡	奈良前半の土器多量 平安後半の土器多量 炭混入	T45	炭窯・柱穴	炭混入 (調査範囲拡張・B拡張区)
T11	自然流路跡	奈良前半の土器多量 平安後半の土器多量 炭混入	T46	なし	なし
T12	自然流路跡	奈良前半の土器多量 平安後半の土器多量	T47	なし	なし
T13	なし	なし	T48	なし	なし
T14	なし	土師器片5・6点	T49	なし	なし
T15	なし	なし	T50	なし	炭混入
T16	なし	土師器片2点	T51	なし	炭混入
T17	自然流路跡	土師器少量	T52	なし	炭混入
T18	なし	奈良前半の土器少量 平安後半の土器少量 鉄滓1点	T53	なし	なし
T19	なし	なし	T54	なし	なし
T20	なし	炭混入	T55	なし	なし
T21	なし	なし	T56	なし	炭混入 (調査範囲拡張・C拡張区)
T22	なし	炭混入	T57	なし	炭混入 (調査範囲拡張・C拡張区)
T23	なし	炭混入	T58	なし	炭混入 (調査範囲拡張・C拡張区)
T24	谷地形	鉄滓1点	T59	なし	炭混入 (調査範囲拡張・C拡張区)
T25	なし	炭混入	T60	製鉄炉	鉄滓・炭多量 (調査範囲拡張・C拡張区)
T26	なし	なし	T61	なし	炭混入 (調査範囲拡張・C拡張区)
T27	なし	なし	T62	なし	なし
T28	なし	なし	T63	なし	なし
T29	なし	なし	T64	なし	なし
T30	なし	なし	T65	なし	なし
T31	なし	なし	T66	なし	なし
T32	なし	なし	T67	なし	なし
T33	なし	なし	T68	なし	なし
T34	なし	なし	T69	なし	なし
T35	なし	炭混入	T70	なし	なし
T36	なし	なし	T71	なし	なし
			T72	なし	なし
			T73	なし	なし
			T74	なし	なし
			T75	なし	なし

T76	なし	なし	T83	なし	炭混入
T77	なし	なし	T84	なし	なし
T78	なし	なし	T85	なし	なし
T79	なし	炭混入	T86	43～46地点は古墳でないことを確認	
T80	なし	炭混入	T87	41・42地点のみ古墳であることを確認	
T81	なし	なし		41地点を2号墳、42地点を1号墳とした	
T82	なし	なし		34～40地点は古墳でないことを確認	

た。出土した土器から、弥生時代後期(5様式)ならびに布留並行期の遺構が谷口部の丘陵斜面に、また、谷を入れて一筋目の北西にのびる小さな谷の北側丘陵斜面には、奈良時代中頃から平安時代後半にかけての遺構があるものと考えられた。これらのことや、T18より1点であるが鉄滓が出土したことから、この付近を拡張しA拡張区と称した。掘削した結果、住居跡や炭窯など計31基を確認することができた。その内訳は、住居跡10基と小型の炭窯7基、中型の炭窯10基である。以下、検出した遺構についての概略を説明する。

住居跡は、丘陵斜面を「L」字状に掘削して平坦面を作り、掘削した際の廃土をその前面に盛ることによって倍の平坦地を確保し、山手に簡単な溝をめぐらしていた。この溝の内側に支柱穴を設けていたと思われるが、調査時には盛り土部が流失しており、住居跡の山手側のみ確認した。したがって、その規模も一辺しか確認できなかった。確認したかざりで住居跡の規模を比較すると、一辺が7m前後のものと3m前後とかなり小規模なものに分かれる。さらに、これらの住居跡はごく限られた範囲に集中しており、また一定の標高に集中している傾向が見られた。この住居跡のうち3基からは、7世紀初頭の土器が床面より出土したことや、住居跡内の堆積状況から、住居跡10基の内3基については、この時期に築造されている。また、丘陵裾部から2基の住居跡と柱穴群を検出した。住居跡については、わずかな平坦地を利用して築いているためか、竪穴式住居跡の形態をしていた。柱穴群については、掘立柱建物跡になるようである。この住居跡や建物跡については、調査途中であるため、来年度に調査成果を報告する。

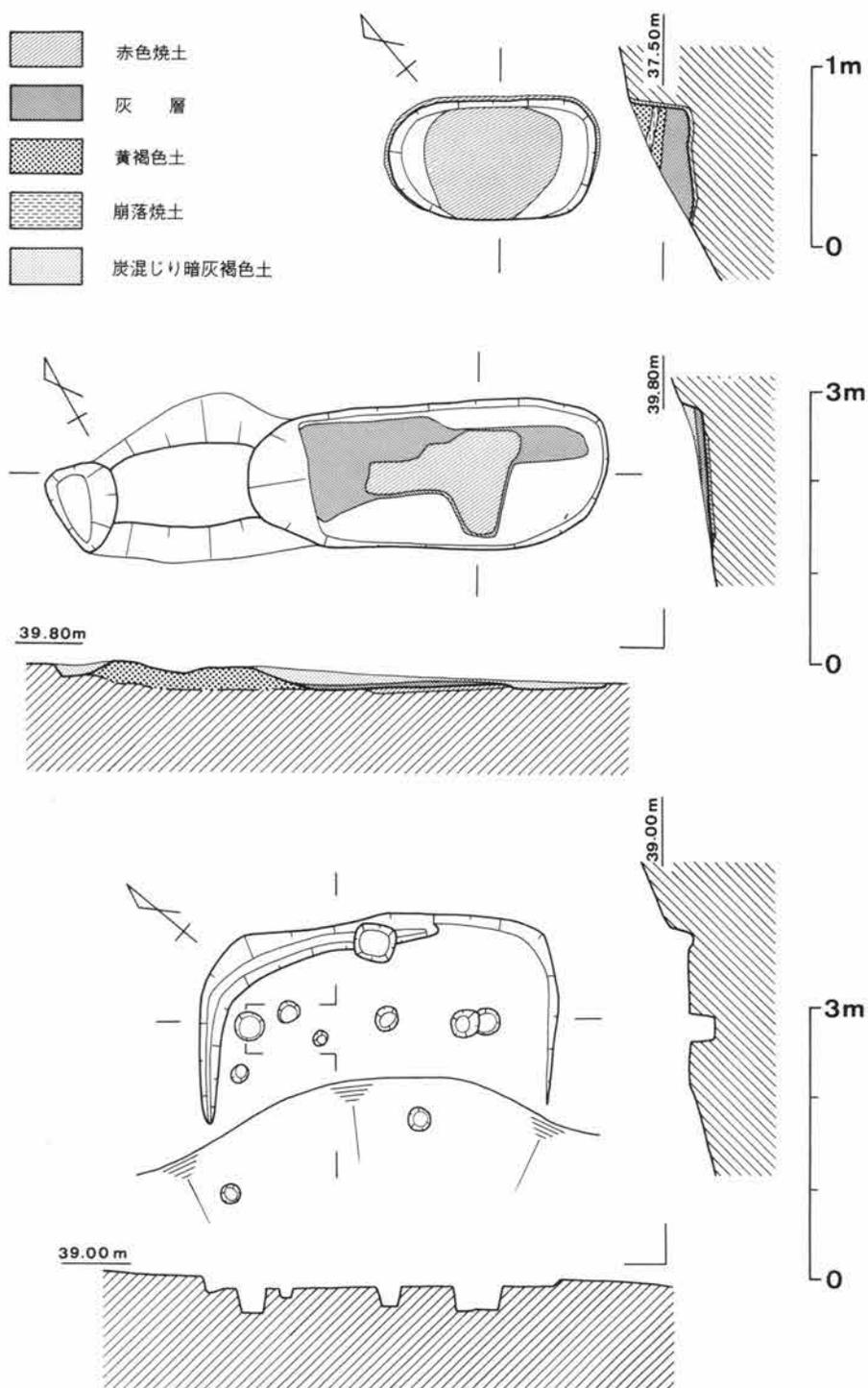
炭窯は、大きく分けて80cm前後の方形あるいは円形の小型の炭窯と、平面形が長方形の中型の炭窯に分かれる。後者の炭窯は、長辺を等高線に平行に築く窯と、直交に築く窯とに分かれるようである。これら炭窯は、どのようなことに原因して形態が異なるのかについては、今後の調査成果をもとに検討しなければならない。炭窯であるため出土遺物は炭のみで、操業時期は不明であるが、少なくとも遺構上面までの堆積状況や遠所遺跡群での炭窯の検出例などから、今回検出した炭窯の形態の違いについては、時期差が原因しているとは考えられない。また、平面形が長方形の炭窯は、2基上段・下段あるいは並びに構築している傾向が見られた。窯内の埋土状態から、2基の窯は同時に操業しておらず、わずかな時期差をもって構築したようである。これらの遺構は、拡張区北西部に集中して



第99図 A 拡張区遺構配置略図

付表7 拡張区検出遺構一覧表

拡張区名	遺構番号	遺構内容	規模
A 拡 張 区	1	住居跡	約4m×2m(第100図)
	2	炭窯	約4m×1.5m(第100図)
	3	住居跡	約7m×3.5m
	4	炭窯	径約70cm
	5	炭窯	約3.3m×1.5m
	6	炭窯	約6.3m×2.5m
	7	炭窯	一辺約90cm
	8	炭窯	約1.2m×0.7m(第100図)
	9	竪穴式住居跡	約5m×2.8m
	10	炭窯	径約1m
	11	竪穴式住居跡	一辺約5.7m
	12	炭窯	径約80cm
	13	炭窯	約2.4m×1.5m
	14	炭窯	径約1m
	15	炭窯	約4.2m×2.3m
	16	炭窯	約2m×3m
	17	炭窯	約2m×3m
	18	土坑	径約1.5m
	19	炭窯	約4m×1.5m
	20	土坑	径約1m
	21	掘立柱建物跡	柱穴の径約40cm
	22	掘立柱建物跡	柱穴の径約30cm
	23	炭窯	径約1m
	24	住居跡	一辺約2.5m
	25	炭窯	径約1m
	26	住居跡	一辺約3.5m
	27	住居跡	一辺約3.5m
	28	住居跡	一辺約3.5m
	29	炭窯	約2m×4m
	30	炭窯	約2m×4m
	31	土坑	径約1.5m
B 拡 張 区	32	炭窯	約2m×4m
	33	炭窯	約2m×4m
	34	炭窯	径約1m
C 拡 張 区	35	製鉄炉	箱型炉
	36	炭窯	径約1m
	37	炭窯	径約1m
	38	炭窯	約2m×4m
	39	炭窯	径約1m
	40	炭窯	径約1m



第100図 A 拡張区主要遺構実測図(上・中段：炭窯 下段：住居跡)

いた。このあたりは、住居跡の位置する南東部よりも日照条件は悪い。

また、丘陵斜面から裾部にかけて多くの柱穴を確認した。その大半は、径20cm前後のもので丘陵斜面で見つかった柱穴は、規則性がなく建物跡など明確な遺構になるものはなかった。現在のところ、これらの柱穴については、炭窯の覆いの施設の痕跡や、薪を積み上げた際の支柱痕が混じっているためと考えられる。丘陵裾部のわずかな平坦地からは、径約30~40cmと比較的大きな掘形の柱穴が並び、掘立柱建物跡になると思われた。その規模は、今後の調査によるところであるが、包含層の出土遺物から奈良時代中頃の建物跡になるものと考えられる。

第98図T45では、トレンチを設定し掘削したところ、小型の円形の炭窯を検出したためこの付近を一部拡張し、B拡張区とした。その結果、平面形が長方形の中型の炭窯2基と小型の炭窯1基を確認した。まだ完掘していないため、今後調査を行ってから報告する。さらに谷奥へ試掘調査を行っていったところ、桐谷1・2号墳から約150m南西方向に入り込んだ丘陵裾部から、多量の鉄滓と炭を検出した。鉄滓の表面は、流動状に波打っており、わずかではあるが焼土塊も出土した。検出状況からすぐ傍に製鉄炉があると考えられたため、その付近を拡張しC拡張区と称した。掘削した結果、製鉄炉1基と平面形が長方形の炭窯1基、小型の炭窯4基を検出した。その大半は丘陵裾部に構築されていた。

製鉄炉は、南方にのびる本谷筋と西方に入り込んだ小さな谷筋との合流地点にあたり、丘陵裾部のわずかな平坦地に築かれていた。今回新たに見つかったこの製鉄炉の西方約250mには、遠所遺跡群の調査時に6世紀後半の製鉄炉(O地区)が見つかっており、非常に近いところから見つかったことになる。丘陵裾部の平坦地にはほぼ東西方向の炉を築いており、炉の両側にはそれぞれ約10㎡の範囲に鉄滓が掻き出されたように堆積していた。平坦地端部は、約1mの段差があり、段差は製鉄炉を「コ」字状にめぐっていると思われる、この地形を利用して排滓しているようである。これらのことを考えると、段差は鉄滓を捨てるために、人為的にめぐらしたと思われる。製鉄炉は検出状況から箱型炉であったが、来年度に調査を行う予定であるため、規模等は今後の調査後報告する。この製鉄炉を精査していた際に9世紀後半の杯が出土しており、製鉄炉の操業時期を示唆する資料と考えられる。また、製鉄炉の近くから炭窯5基を確認している。この付近には住居跡や柱穴はなかった。これらの炭窯は、検出状況から製鉄炉とともに構築されたと考えられ、ここでできた炭は製鉄炉に運び、炉内の温度を上げて原料を溶かしていたものと考えられる。

②出土遺物

谷部からは、弥生時代後期から平安時代までの土器が出土した。中でも、7世紀初頭頃

と8世紀後半と9世紀後半の土器が多いようである。現在整理中であるため、来年度に報告する。

③まとめ

今回の調査の結果、ニゴレ遺跡が製鉄遺跡であることが判明した。しかし、ニゴレ遺跡の一部を調査したにすぎず、その範囲については今後の調査成果を待たざるをえない。遠所遺跡群とニゴレ遺跡の遺跡内容及び地理的条件などから、両遺跡を含めた範囲が古代における広大な製鉄遺跡であったと考えられ、6世紀後半から9世紀後半までの約300年間、この地で連綿と製鉄を行っていたと考えられる。丘陵斜面から裾部にかけては、製鉄関連遺構が点在するが、遺構の密度は遠所遺跡群ほどではない。しかし、遠所遺跡群での空白時期であった9世紀後半の製鉄炉の発見の意義は大きいもの^(注9)と考える。このように考えた場合、今後調査を予定しているI地区の分布調査時に多量の鉄滓が見つかったか所も、期待される場所である。

このような製鉄遺跡では、検出遺構は製鉄炉・炭窯・住居跡に限られるようで、中でも炭窯が大半を占める。一般に「製鉄段階で原料が砂鉄の場合、清小鉄(純度の高い砂鉄)90貫に炭85貫を使用する」と^(注10)されている。これについては、遠所遺跡群でも製鉄炉・鍛冶炉計40基に対し、200基近くの炭窯を確認していることからもうかがえる。しかし、製鉄炉や炭窯については、遺構内出土遺物が非常に少なく、遺構の時期を断定できないことが多い。これについては今後、年代測定に理科学的な分析も行っていき、ニゴレ遺跡の内容を考え、遠所遺跡群も含めて考えなければならないであろう。

(岡崎研一)

注1 調査に参加していただいた方々は、以下のとおりである。

小笠原彰・木全邦之・佐々木理・土田昌人・平林京美・今西茂満・上田忠志・尾崎二三代・河戸久夫・熊谷千代子・高原与作・谷口勝江・坪倉 仁・東宇虎次・菱川 實・平林秀夫・平林直美・藤原敏子・藤原義夫・松村 仁・森野美智代・山副武志・山副まつ江・由良里枝・吉岡茂・吉村 保・米田武志

注2 西谷真治・置田雅昭「ニゴレ古墳」(『弥栄町文化財発掘調査報告書』第5集 弥栄町教育委員会) 1988

注3 増田孝彦・三好博喜他「国営農地開発事業(丹後東部地区)関係遺跡昭和60・61年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第24冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987

注4 注3に同じ

注5 増田孝彦「国営農地開発事業(丹後東部地区)関係遺跡昭和62・63、平成3年度発掘調査概要」

- (『京都府遺跡調査概報』第50冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1992
- 注6 藤原敏見・高野陽子「オテジ谷遺跡・オテジ谷古墳発掘調査報告書」(『京都府弥栄町文化財調査報告書』第6集 弥栄町教育委員会) 1991
- 注7 増田孝彦「丹後の古代鉄生産」(『京都府埋蔵文化財論集』第2集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1991
- 増田孝彦「遠所遺跡群の発掘調査」(『京都府埋蔵文化財情報』第39号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1991
- 岡崎研一「遠所遺跡群」(『京都府埋蔵文化財情報』第44号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1992
- 土橋 誠「遠所遺跡出土木簡」(『京都府埋蔵文化財情報』第47号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1993
- 注5に同じ
- 注8 『京都府遺跡地図』第1分冊 [第2版] 京都府教育委員会 1988
- 注9 最近の調査で大宮町から奈良時代前半頃の製鉄炉が確認されている。
- 増田孝彦「芋谷遺跡」(『京都府埋蔵文化財情報』第47号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1993
- 注10 樋口清之「木炭」(『ものと人間の文化史』71 法政大学出版局) 1993

図

版



(1) 2・9号墳遠景（南から）



(2) 2号墳 墳丘西側列石検出状況（西から）



(1) 2号墳 墳丘西側列石検出状況（北西から）



(2) 2号墳 石室羨道部閉塞石検出状況（北から）



(1) 2号墳 石室全景 (南から)



(2) 7号墳 石室全景 (南から)



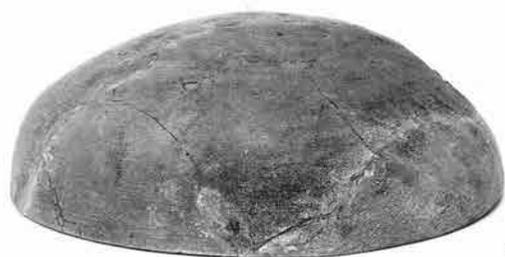
(1) 9号墳 墳丘西側列石検出状況（西から）



(2) 9号墳 石室・墳丘列石全景（南から）



出土遺物 (1) (2~6 : 2号墳、7~9・24 : 7号墳)



13



17



20



23



19



21



22

図版第7 算用田遺跡



(1) 調査前全景 (南から)



(2) 調査地周辺風景 (西から)



(2) トレンチ



(1) トレンチ (南から)



(1) トレンチ調査風景 (南から)

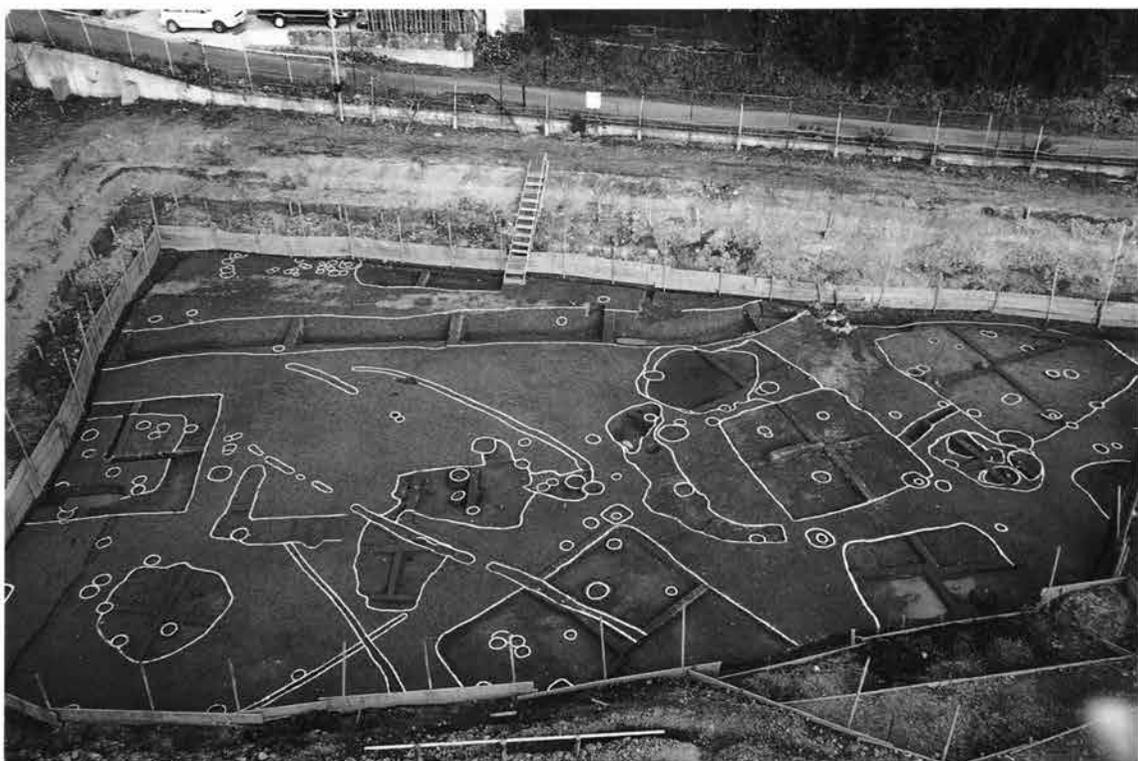


(2) トレンチ遺構検出状態 (北から)

図版第10 算用田遺跡



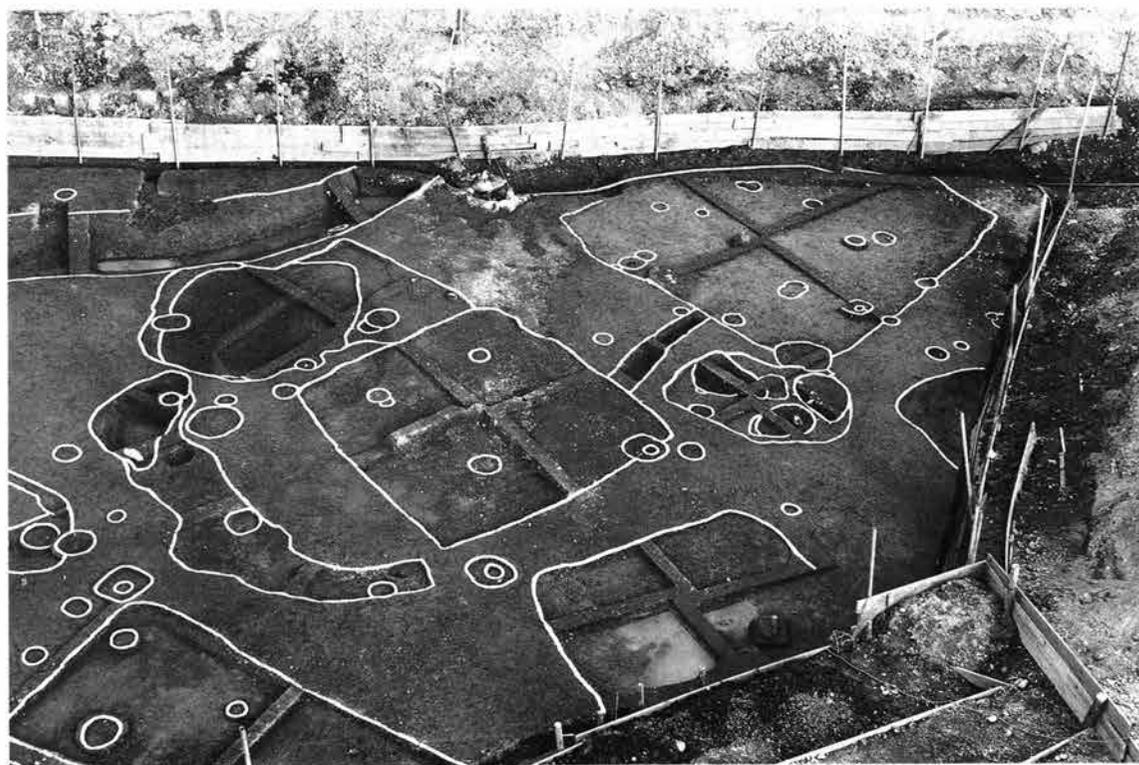
(1) 遺構検出状態全景 (西南から)



(2) 遺構検出状態 (西から)



(1) トレンチ北西部 (西南から)



(2) トレンチ南部 (西から)

図版第12 算用田遺跡



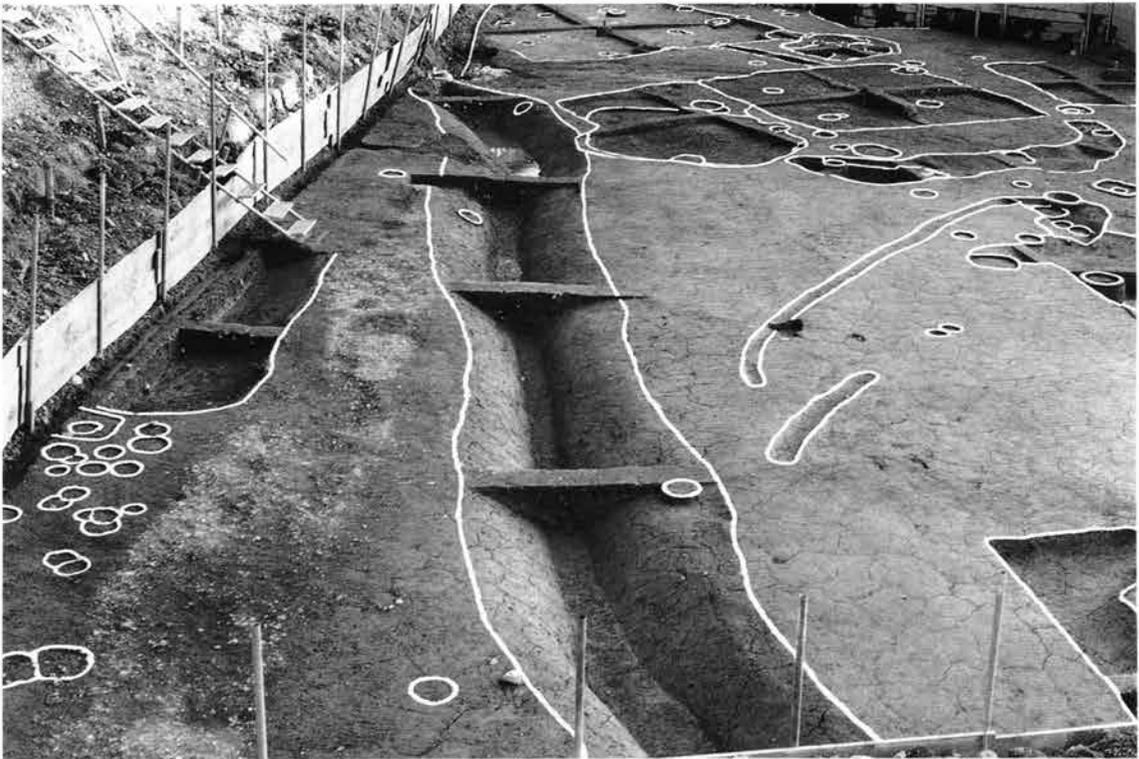
(1) トレンチ西部 (西から)



(2) SH02 (西から)



(1) SH02 (北から)



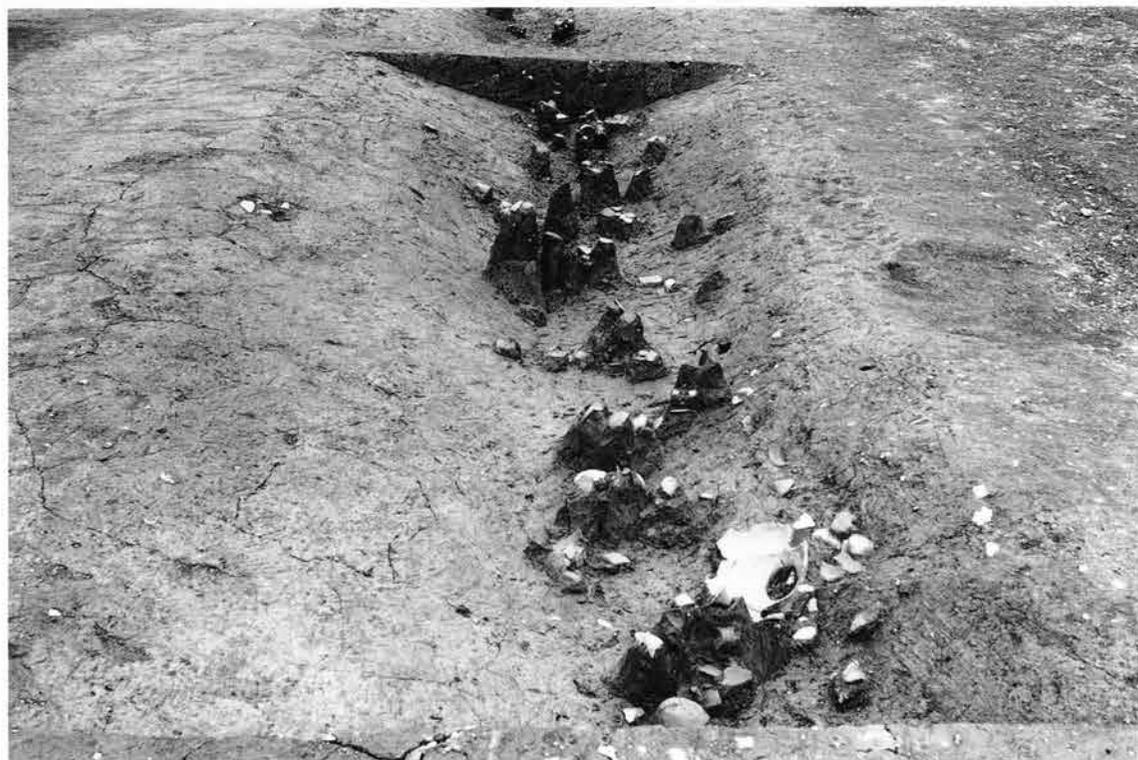
(2) SD12 (北から)



(1) SD12 1区遺物出土状態 (南西から)



(2) SD12 1区遺物出土状態 (西から)



(1) SD12 2区遺物出土状態（北から）



(2) SD12 4・5区遺物出土状態（北から）



(1) SK15 (北から)



(2) SH16、SK60 (西から)



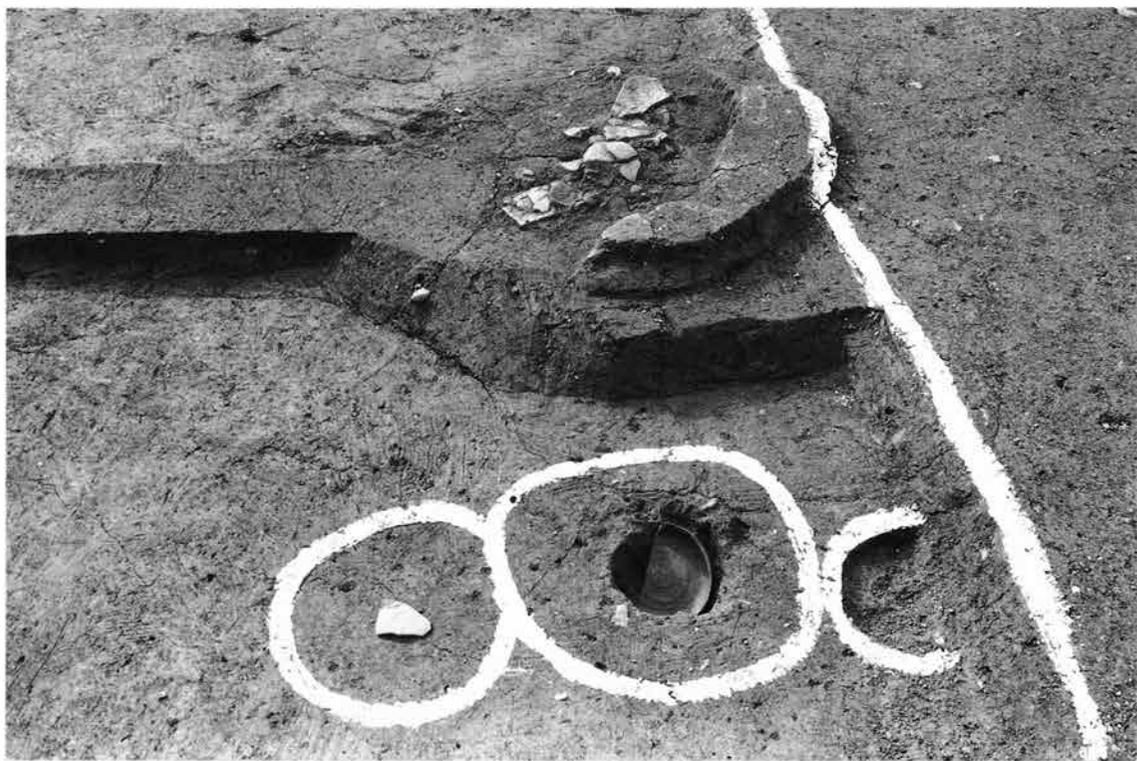
(1) SK60 (西から)



(2) SD22東端 (西から)



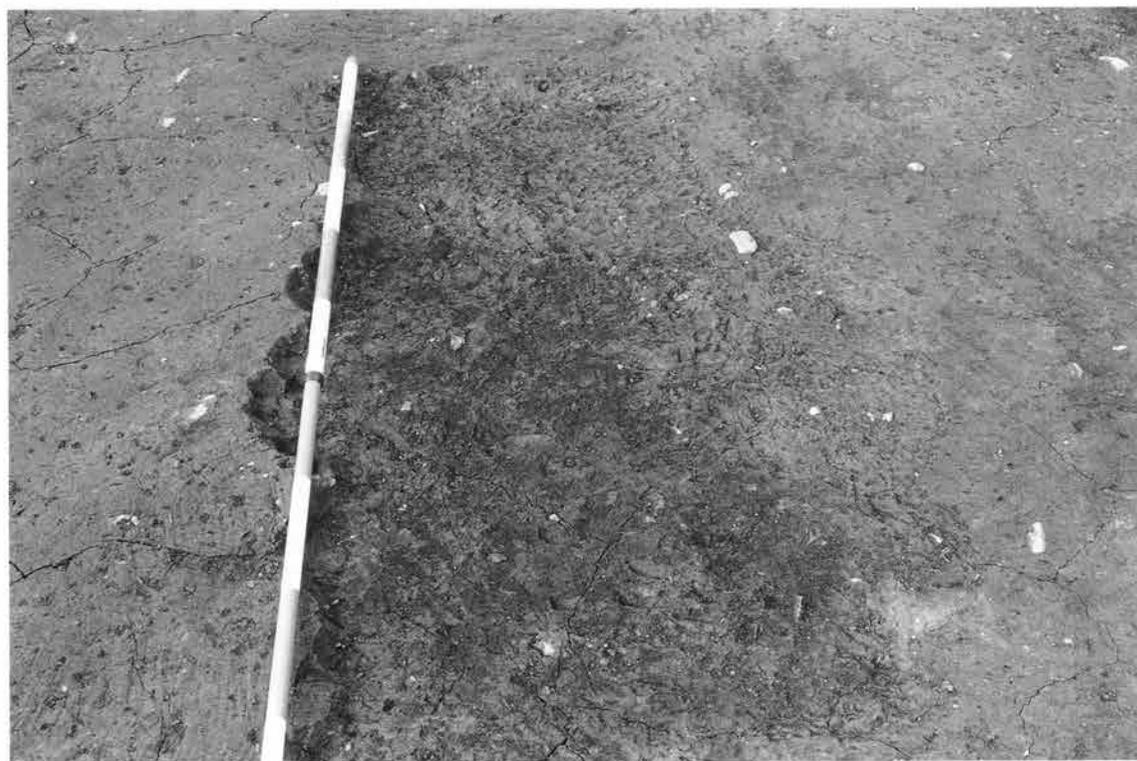
(1) SH18 (南西から)



(2) SH18竈周辺 (東から)



(1) SH10 (北から)



(2) SX26 (南から)



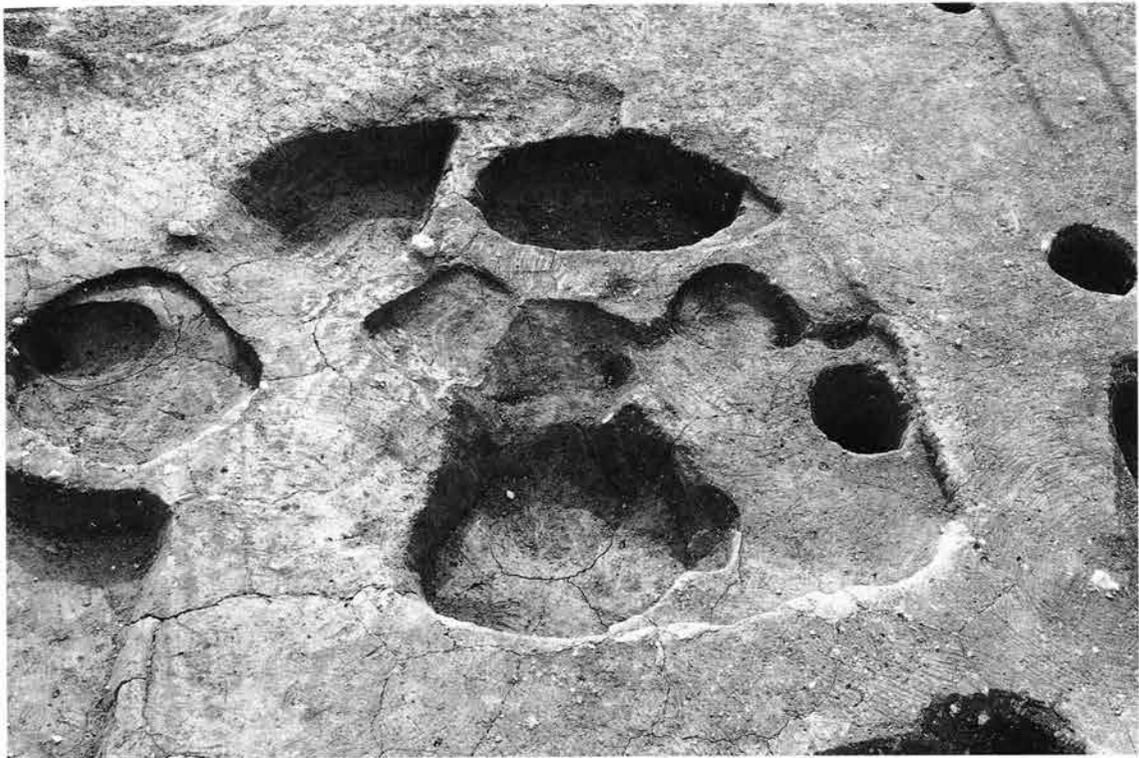
(1) SB82柱穴



(2) SB82柱穴



(1) SK11遺物出土状態（北から）



(2) SK19（東から）



(1) SK11・75・76 (東から)



(2) 拡張区全景 (東から)



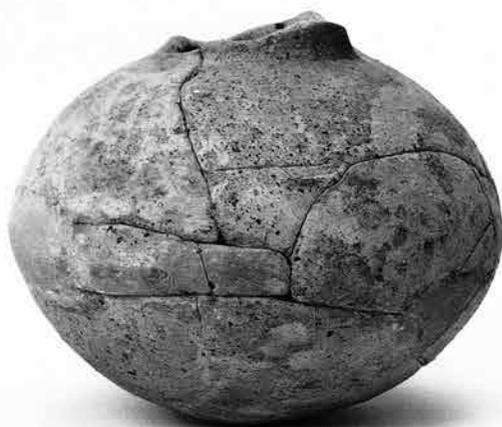
(1) 遺構完掘状態（北から）



(2) 深掘り（北から）



41-1



35-14



35-12



35-15



35-19



37-46



37-47



39-69



39-82



39-72



40-94



40-96



40-99



40-97



40-95



41-5



40-98



41-21



41-14



40-91



42-38



42-36



41-20



41-11



42-31



42-37



43-4



42-35



43-6



43-7



43-1



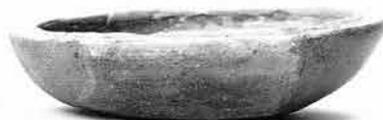
43-2



43-8



43-3



43-13



43-12



43-9



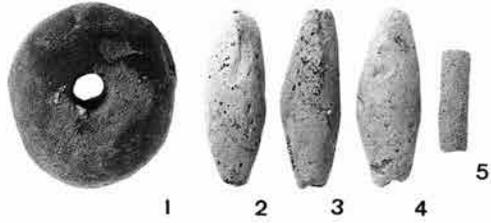
43-10



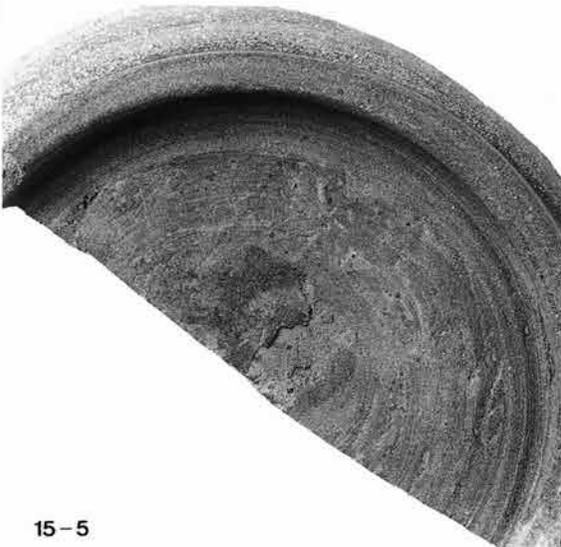
42-39



43-11



45



15-5



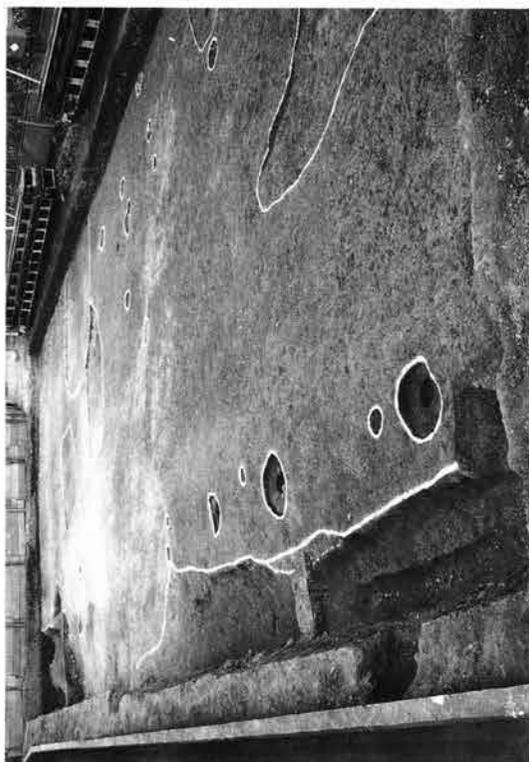
46



(1) Cトレンチ調査前風景（北から）



(2) Cトレンチ全景（北から）



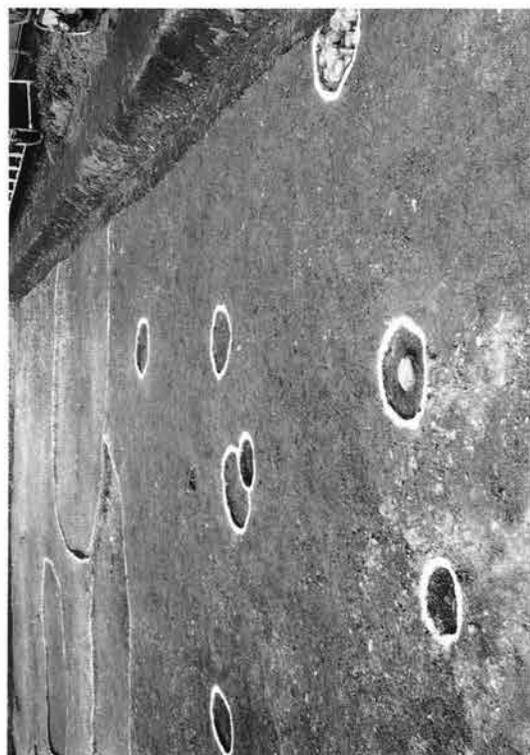
(3) 溝SD41108、柵列跡SA41113 (南方から)



(4) 柵列跡SA41113、溝SD41108 (北から)



(1) 土坑SK41101 (南から)



(2) Cトレンチ中央の柱跡群 (南から)



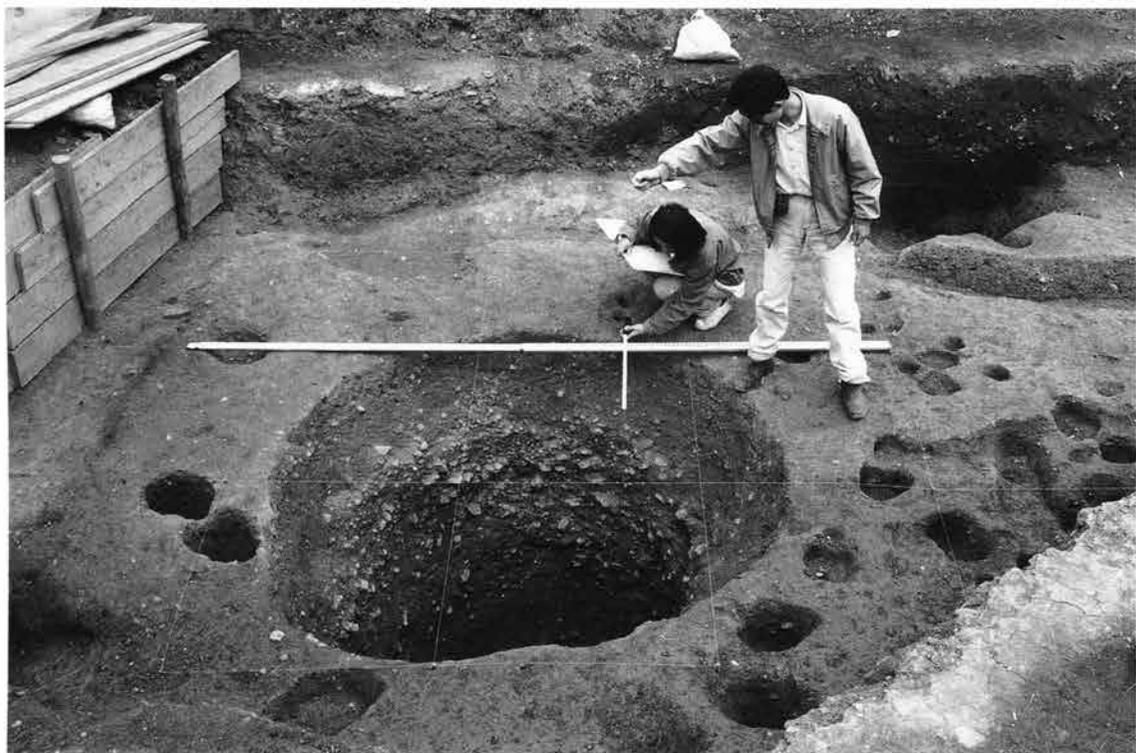
(1) A・Bトレンチ調査前風景（南から）



(2) Bトレンチ全景（南から）



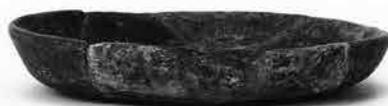
(1) Aトレンチ全景（東から）



(2) 井戸跡SE41110の実測風景（南から）



53-1



53-8



53-22



55-113



53-30



55-115



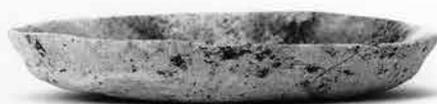
55-114



55-116



56-17



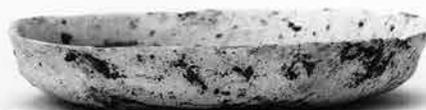
54-3



54-4



54-5



54-6



54-7



54-11



54-1



54-8



54-68



54-9



54-58



54-10



54-13



55-109



54-40



54-41



54-42



54-43



54-46



54-47



54-49



54-50



54-52



54-44



54-45



54-48



55-71



55-77



55-78



55-79



55-80



55-104



55-81



55-82



55-84



55-85



55-86



55-99



(1) 調査前風景 (西から)



(2) 調査地断面 (北壁)



(1) 調査風景 (SD01南側)



(2) 調査地全景 (南から)



(1) SD01 (南から)



(2) SD01遺物出土状況 (北側)



(1) SD01断面 (北から)



(2) SD56 (南から)



(1) SB07 (南から)



(2) SB31 (東から)



1



2



47



21



43



27



23



55



58



30



51



34



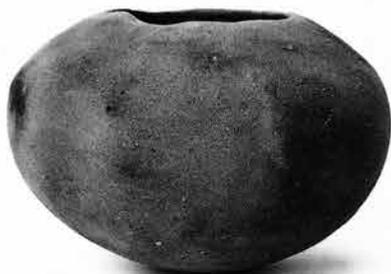
54



7



4



10



5



3



6



11



17



68



91



出土遺物 (3) SD01 (3・4・5・6・7・10・11・17)
SD04 (68) 表採 (91)



(1) 調査地全景（調査前 南から）



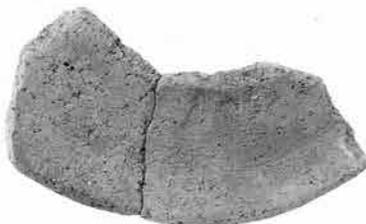
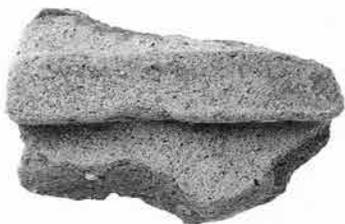
(2) Bトレンチ全景（南西から）

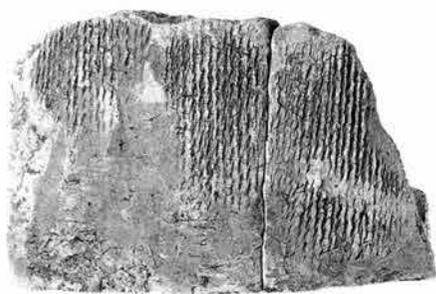


(1) Eトレンチ北壁



(2) Gトレンチ (北西から)







(1) 調査地全景（北西から）



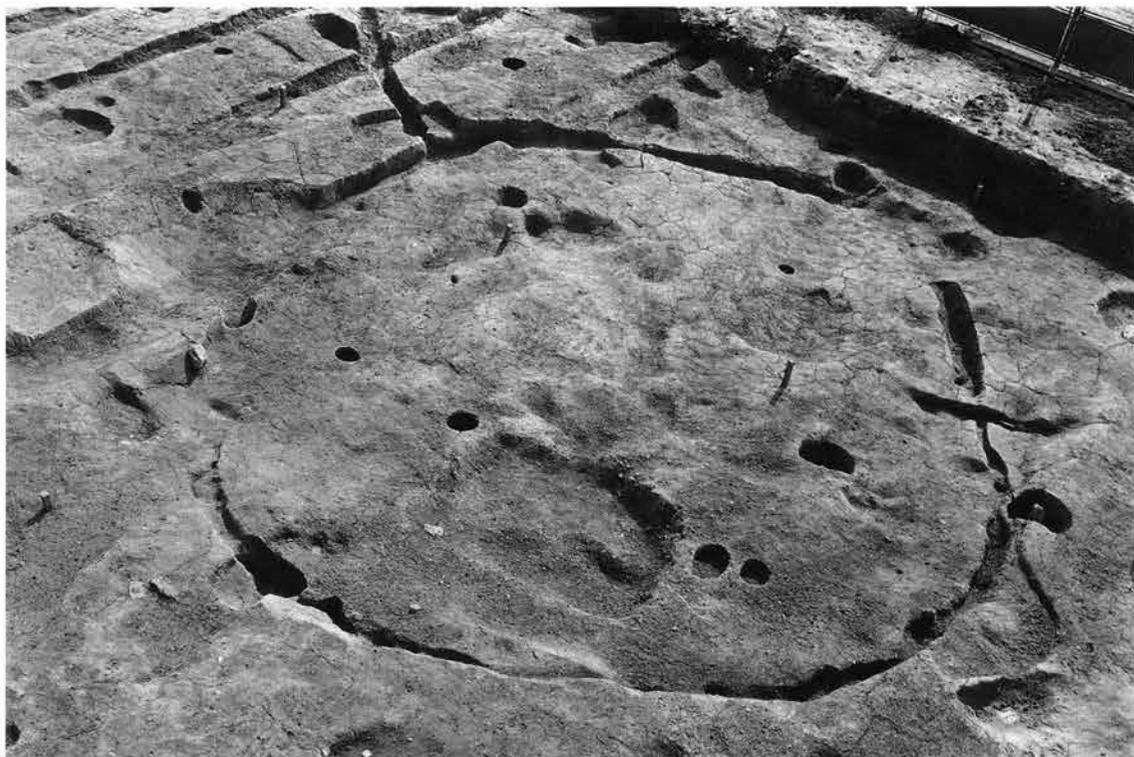
(2) 調査地全景



(1) Aトレンチ調査前（北西から）



(2) Aトレンチ全景（南西から）



(1) AトレンチSH02全景（北東から）



(2) AトレンチSH06全景（南西から）



(1) AトレンチSH03調査風景(北西から)



(2) AトレンチSH03全景(北西から)



(3) AトレンチSH06遺物出土状態 (3)



(4) AトレンチSH03遺物出土状態



(1) AトレンチSH06遺物出土状態 (1)



(2) AトレンチSH06遺物出土状態 (2)



(1) Bトレンチ全景（北から）



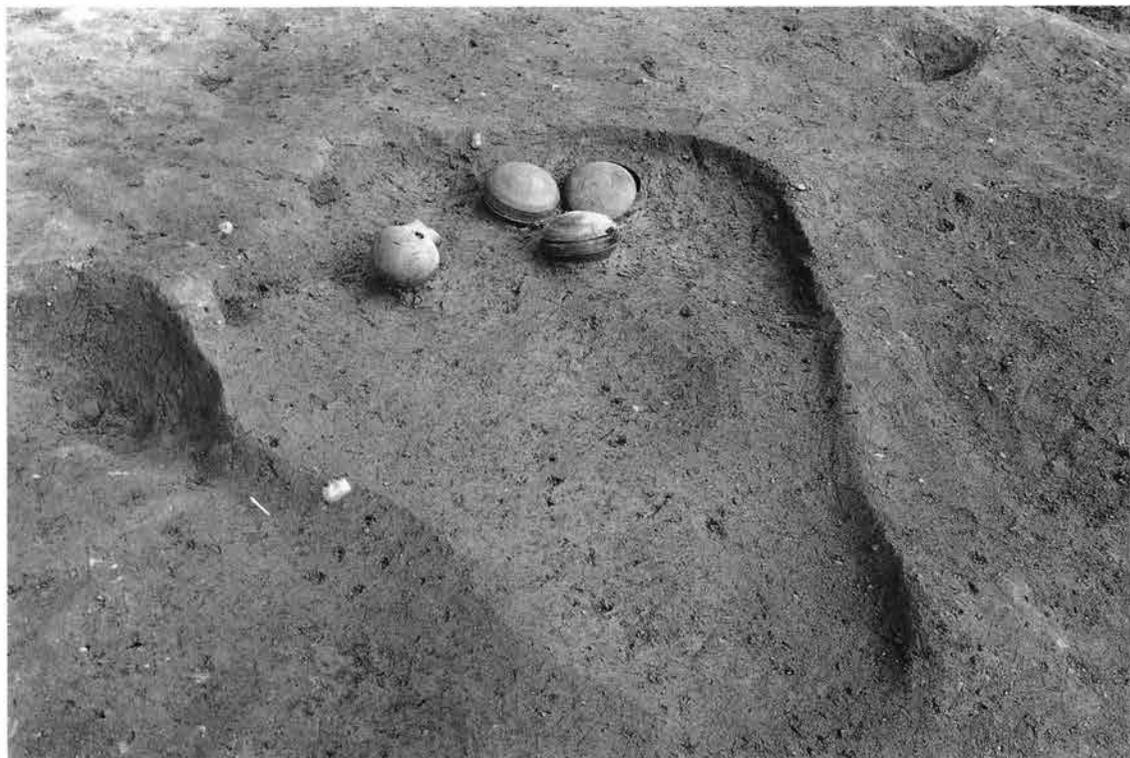
(2) Bトレンチ全景（東から）



(1) BトレンチSD01・SK06遺物出土状態（南から）



(2) Bトレンチ土器溜まり1、遺物出土状態（西から）



(1) AトレンチSK09遺物出土状態（北から）



(2) BトレンチSK06遺物出土状態（東から）



(1) D・Eトレンチ全景 (西から)



(2) Gトレンチ全景 (東から)



22



18



1



16



4



5



39



45



40



46



41



47



42



43



69



44



63



48



64



50



67



38



60



72



68



73



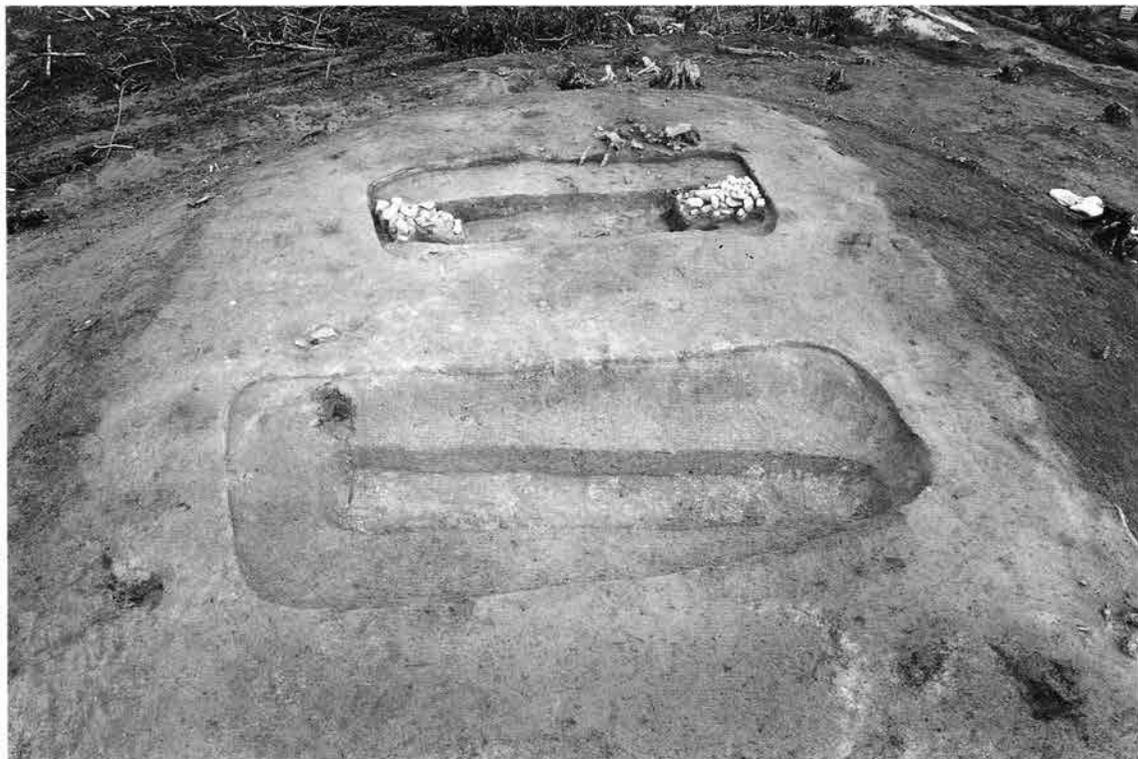
71



(1) 桐谷古墳群・ニゴレ遺跡空中写真



(2) 桐谷1・2号墳空中写真



(1) 桐谷1号墳近景（西から）



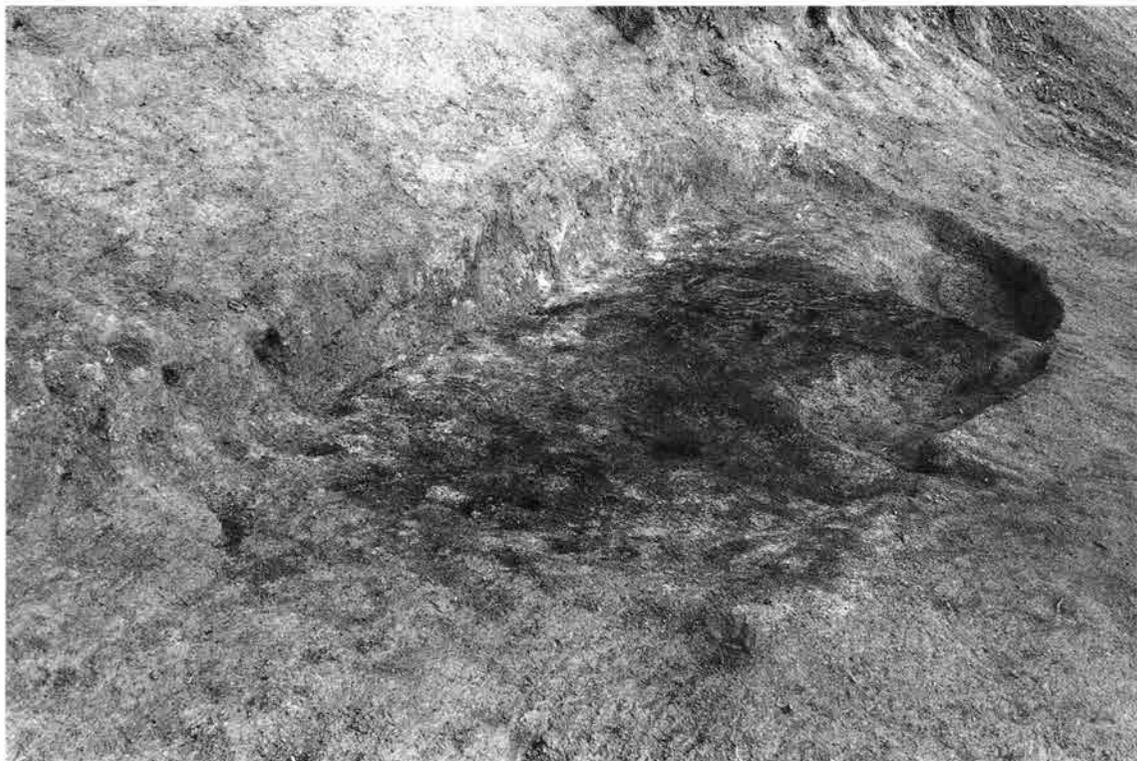
(2) 桐谷2号墳主体部近景（南から）



(1) ニゴレ遺跡A拡張区近景（南西から）



(2) ニゴレ遺跡住居跡近景（北西から）



(1) ニゴレ遺跡炭窯近景 (西から)



(2) ニゴレ遺跡製鉄炉近景 (南から)

京都府遺跡調査概報 第53冊

平成5年3月24日

発行 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40の3
Tel(075)933-3877 (代)

印刷 中西印刷株式会社

〒602 京都市上京区下立売通小川東入
Tel(075)441-3155 (代)